フレデリカとゼロ魔

神代ふみあき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
フレデリカとゼロ魔

【Ｎコード】
Ｎ２３００Ｒ

【作者名】
神代ふみあき

【あらすじ】
転生チートなオリ主が、なぜか「フレデリカ＝ベルンカステル（ひぐらし版）」の外装でハルケギニアへ転生してしまいます。ご都合主義で何ら目的もない行き当たりばったりな「フレデリカ」のハルケギニア生活をお楽しみくだされば幸いです。※ご都合主義のタグを追加しましたが、免罪符のつもりではありませんｗ

第一話　フレデリカに生まれて（前書き）

稚作「よこしまほら」外伝の「ゼロ魔系」を書いていたら、いつの間にか書けてしまいました。全く計算外なのですよ（＾＾；

第一話　フレデリカに生まれて

この世界に生まれてきて二年。
正直に言えば生き疲れているのですよ、ええ。
前世の記憶を持っている、これはいいでしょう。
ゼロの使い魔っぽい世界、これもいいでしょう。
両親健在、中流貴族、母親が水のスクエアであり風のスクエア、父親が土のスクエアであり火のライン、いいでしょういいでしょう。
領地経営が順調で借金がない、すばらしいですね。
で、なにが問題かというと、まず名前。

フレデリカ＝ベルンカステル＝ド＝リステナーデ

フレデリカ、ベルンカスレルですよ、大ベルンカステル！
さらに容姿、これがまたベルン様そっくりときたもんだ！！
・・・で、最後に、性別男。

どうしろと！？

正直に言いますとですね、この年になるまで何度誘拐されたか。
二週にイッペン誘拐されますし、侍女にも誘拐されたことがあるのです。
・・・いやらしい目的で。
世の中爛れているのです。

さすがに誘拐ばかりで切れた母上は、屋敷を要塞化して僕を引きこもらせようとしたのですよ。
もちろん、僕自身が泣いて勘弁してもらいましたが、傭兵もびっくりのブービートラップを周辺に配置して、不心得ものをとらえる

ことに熱中しているのです。

・・・あ、まずいまずい。

この容姿に引きずられて、内心までリカ喋りになってる。

口からでる言葉が、どうやってもリカ喋りになってしまうのは仕方ないかもしれないが、内心までは染められてたまるものか。

ええ、負けないのですよ!!

とりあえず、負けたのです。

あれから二年ほどの努力の結果、お母様とお父様による洗脳教育で、口調もなにも「リカ」まんまになってしまったのです。

これでも男の子なのですよ？　と涙ぐむと、「そうです、さすが我が子、わかってるわかってる！」と大興奮の両親だったりしますです。

悔しいですね。

とはいえ、いろいろとわがままも利くので差し引きプラスだと思うことにしているのです。

・・・クローゼットの中身の、およそ中性的から女性的に傾いた衣装の数々は忘れることにするのです。あれを計算にれると一気に赤字に・・・。

で、四歳になったということで、大々的な誕生日を祝うと張り切る両親ですが、あんまり派手なのは嫌いなのですよというと、両親

ともに涙を流してイヤイヤをします。

「ふーちゃんを自慢したいのに～」

「我が子を自慢したいのだぁ～」

いつまでも若々しい母上はおいておいて、カイゼル髭で樹木も切れるという父上までだだをこねないでください！

「わしだって、部下に我が子を自慢したいのだぁ～！」

トリステイン軍の親衛隊、マンティコア隊の隊長である父上は、結構部下に慕われているらしく、部下が家によく遊びに来る。

ただ、母上が病的に誘拐を警戒していたせいで、肖像画ぐらいしか見せたことがなかったのだ。

が、四歳にもなり、魔法もそろそろ習うと言うところでお披露目しようと言う話になったそうだ。

で、お披露目先が父上の部下、だというだけならまだいいのだけれども、母上の親族と魔法の師匠まで来るというのだ。

母上の師匠の名は「カリーヌ」。

ファミリーネームは「ラ・ヴァリエール」。

・・・烈風ですよ、烈風！！

やばいやばい、目を付けられたら死んじゃうのですよ！！

見た目は「リカ」でも、アウアウ無しのリカでは死んだらそれまで、チップは一枚のみなのですよ！！

ベット出来よう筈もありません！！

そんなわけで、見つかる前に風のように撤退するのです。それが戦略的撤退というものなのです！！

あー、運命？　信じるのですよ、ええ。
閉じた輪、あ、あるあるある、結構経験済みかもしれませんですね。
なにが起きたかわからないので、認識している事実だけを並べると、

・お誕生日の会場中、途中で逃げ出して、カリーヌ様とのフラグを回避。
・裏庭まで逃げたところで、なぜか幼女を折檻する女性を発見。
・ダッシュで幼女を助けつつ、屋敷に撤退すると、なぜかその女性が風の魔法をブイブイ言わせて追ってきました。
・昔、母上が屋敷の要塞化の際に仕掛けた罠を使いつつ、逃亡の上お誕生日会場に滑り込むと、なぜかウインドウカッターを発射し始めた折檻女性と合流。
・逃げられそうもなかったので、幼女をかばいつつ、魔法の直撃を食らって意識消失。

ここまでは覚えているのですが、屋敷の医務室で意識を取り戻すと、なぜか幼女が、ピンクブロンドの幼女が僕にすがりついて寝ていました。
どこかでみたようで、それでいてどこにもいなさそうな超美少女。
そんな美少女がよだれを垂らしつつ、僕に抱きついて寝ています。
なんというか、これだけだらしない顔なのに美少女と認識できるあたりレベルの高い娘です。

「起きましたね、フレデリカ＝ベルンカステル＝ド＝リステナーデ」

視線を向けた先には、こう、なんというか、角の立った美女、というか先ほどの折檻女性。

「魔法もなにも使えない身でありながら、己の命をも盾にする心意気、見事なものでした。」

笑っているんだろうな、とは思うんですが、どうみても活きの良い餌を見つけた肉食獣の笑顔にしか見えません。

「あなたの母親は確かの優秀でしたが、手抜きの天才で何度折檻しても直らない筋金の入った怠け者でしたが、その息子たる貴方が歯ごたえがありそうで実に喜ばしい限りです。」

やばい、かなりやばい。
やばやばです。
なんと言っても、思い当たる節がてんこ盛り山盛りなのですよ!!
この痩身の美女、もしかして・・・・

「もしかして、お母様の御師匠様、烈風様ですか?」

深い深い笑みを浮かべた女性は、杖を掲げてこうのたまわいました。

「貴方の母親の入り通りに、魔法学校入学までの間、当家で修行をつけてあげましょう。目指すはトライアングル、生き残ればスクエアも夢ではありませんよ?」

あ、あ、悪夢なのですぅ!!!

第一話　フレデリカに生まれて（後書き）

てな感じに実に短い長さですが、このぐらいの長さでポンポン書けている所まで徐々に投稿します。

二日に一話程度の勢いで投稿しますのでお楽しみに。

第二話　この世の地獄が生まれて（前書き）

さて、ガンガン行きますW

第二話　この世の地獄が生まれて

ああ、今日も生きて朝日が拝めました。

夜半から続き、日の出と共に終わる「終わる世界演習」と領民から呼ばれているシゴキを、どうにか今日も乗り越えました。

このシゴキに比べれば、軍事演習？　はっ、どこのお遊戯ですか？　というレベルなのです。

これが三日に一度行われるというのだから、ぜったい僕を殺したいに違いないとはじめの三日は思ったんですが、手を変え品を変えて防御や逃走をしていると、日に日に攻撃のレベルが上がってゆき、最近では山をも両断するようなカッタートルネードが襲ってくるようになりました。

ラ・ヴァリエールの長女など、はじめは観戦していましたが、日に日に過酷になるシゴキから視線を逸らし、最近ではシゴキが始まると自室にこもるようになったのです。

まぁ、僕が両手両足が変な方向に向いて血を吐きながら空中から落ちてきたのを目撃してから視線を逸らし始めたので、それなりにトラウマになっているはずですが。

それでもシゴキをやめないあたりが師匠の恐ろしいところで、無茶苦茶高い水の秘薬を大量に投与して特訓を続けさせるというのですから気が違っているのです。

ともあれ、魔法はガンガンレベルが上がって、現在、水トライアングル、風ライン、火ライン、土トライアングル、とかなりの万能になりつつあるのです。

正直、師匠は風をどうにかしてトライアングルに仕立てたいらしく、特訓に次ぐ特訓が続いていますが、防御と治癒に集中せざるえ

ないので、水と土がレベルアップしてしまうのです。
そんなわけで、ここは一つ座学でもと提案したのですが、演習時間が倍になっただけでした。
そろそろ死ぬのですよ？

見た目はお姫様、口調もお姫様。
だけど根性が王子様という、非常に変な男の子は、名前もお姫様のようだった。

フレデリカ＝ベルンカステル＝ド＝リステナーデ。

お母様の直弟子の息子さんを直接鍛えると聞いたとき、なにを血迷っているんだ、と正直に聞いてしまった。
確かに長女である私は母の才能を受け継いでいるとはいいがたいし、次女のカトレアは病弱で成人できないかもしれない。
三女も些か根性にかける性格であることはわかっているので、外部に期待をかけるのも理解できるけど、それでもルイズと同い年の子供に、まさかまさかの特訓が続いていた。
はじめはキャーキャーいって逃げるだけであったフレデリカ＝ベルンカステル＝ド＝リステナーデ。
しかし、日を追うごとに反撃したり罠を仕掛けたり、罠に見せかけて反撃したりと、実に命知らずに正面攻撃を仕掛け始めた。
それを実に嬉しそうに正面からつぶすお母様だったんだけど、ある日、表情を歪めさせられていた。

「・・・死んだかしら？」

見れば、四肢はあらゆる方向を向いており、愛らしい顔は血にまみれ、頭から庭に落ちてきてきた。
本気で死んだと私は思ったけど、奇跡的に水の魔法に目覚めたフレデリカ＝ベルンカステル＝ド＝リステナーデはとりあえず両足を治癒させて、信じられない速度で庭を走り抜け植木に隠れた。
そこで意識が途切れたらしく、血反吐を吐いて植木の中で半死半生になっていた。
まるで、宝石箱を見つめる乙女のような瞳でお母様はフレデリカ＝ベルンカステル＝ド＝リステナーデを見つめる。
どんなにいじっても壊れない玩具を与えられたようなものに違いない。
私はそれ以降、家の予算の許す限り水の秘薬を大量入荷しておくことにした。
さすがにあの愛らしい少年が死ぬのはいやだったから。

はじめは嫉妬した。
あれだけお母様に特訓されれば魔法も開花する、と。
で、間近であの特訓を見て、私は逆のことを思った。
魔法の才能がなくてよかった、と。

フレデリカ＝ベルンカステル＝ド＝リステナーデは魔法の才能の固まりなのだそうだ。
お母様との特訓のなかで、すべての属性のドットに目覚めたかと思いきや、今度はすべてラインになった。
うちにきて僅か一年ほどのことだった。
その才能に嫉妬するのが普通だけど、あの才能を生んだのがお母様との特訓なら、魔法など使えなくても良いとすら思った。

というか、偏在を使って山をも削るトルネードカッターを四本も叩き込まれて生きてる時点でフレデリカも規格外だと思う。
そんなことをこの前の休みの時に本人へいうと、実に清々しい笑顔でこんな事を言われた。

「ルイズ、あなたも絶対規格外なのです。今はまだ猶予期間なので、この時間を大切にするのですよ」

まるで予言者のようなせりふだったけど、この後に出されたフレデリカ作のバカウマケーキのせいで、私はこのことを忘れてしまう。

昨日、チートに目覚めたのです。
まぁ、この世界を「ゼロの使い魔」の世界として認識している時点でチートなのですが、とうとう転生者の醍醐味「チート」に目覚めたのです!!
なんと、水と風と土がスクエアになったのです!!
それもそれぞれがスクエアレベルで扱えるのです!!
おお、なんたるチート!!
・・・ごめんなさい、違うのです。
・・・純粋に死にそうな特訓の成果なのです。
ただ、この魔法の成果なのですが、カトレアねえ様（と呼ばないと起こられるのです）の病巣が分かりました。
いわゆるガンなのです。
そりゃ、表面的に水の魔法で治しても無駄なのです。
元々のガン細胞を倒しても転移しているせいでイタチごっこという状態なのですから。
色々と抱きしめられたりルイズと共にオママゴトに巻き込まれたりしながら調べたので時間がかかりましたが、なぜか大量に備蓄さ

れている水の秘薬を大量使用すればかなりの確率で直るはずなのです。

そんなわけで、御師匠様に相談したところ、深々と頭を下げられてしまいました。

「何でもします、だから娘を救ってください」と。

内心、特訓の中止を訴えようかと思いましたが、実のところ、その特訓のおかげで実力を上げた訳ですし、数々の最強ロボ練金ゴーレム部隊も師匠との特訓で磨かれた訳です。

だから、不祥の弟子に向かって頭を下げるなんて格好の悪いまねをしないでほしいのです。

「師匠、あなたはいつものようにこう言ってくだされればいいのですよ?『成し遂げなさい』と。」

それは夢のような光景。

次女カトレアは、たぶん成人するまで生きられないと言われていたし、生きていたとしても定期的に水の治療士の世話になり続けるほかないとまで言われていた。

何度完治させても何度もかかる病。

完治せず、そして延々に苦しみ続ける。

不憫すぎて何度涙を流したか分からなかった。

しかし、過去から今現在にかけてもっとも優秀な弟子であるフレデリカ＝ベルンカステル＝ド＝リステナーデは言う。

「これは、この病は、絶対的な力と強引なまでな治癒ですべての病

巣を活性化した上で、針の先ほどの病巣すら見逃さない集中力を数十人単位で投入すれば完治できるのです。」と。

娘の病気は、きわめて小さい単位の体の一部が反乱を起こし、次々と反旗を翻させる病気なのだとかたる。

だから、わざと反乱の予兆を持つ体の一部まで反乱を起こさせ、薙祓う必要がある、と。

初めて聞く話だったが、主治医を始め、アカデミーの治療士たちもその意見に賛成し、一大治療作戦まで立案された。

長女エレオノールとフレデリカ＝ベルンカステル＝ド＝リステナーデによる指揮により、治療士団は三日三晩の治療を終え、今は倒れ込むように眠っている。

指揮をしたエレノオールも疲労の極みにあるが、細々と行った解析の結果から、妹の健康を確認し、倒れ込むように床に伏した。

いや、それをゆっくりと受け止めたフレデリカ＝ベルンカステル＝ド＝リステナーデが、魔法でエレノオール受け止めて、あいているソファーに寝かせた。

我が弟子も魔法力の大半を使い果たしているはずなのに、ここ一番で踏ん張りがきくのは特訓のおかげであろうと自画自賛だ。

感謝を込めて、特訓のレベルをあげようかしら？

第二話　この世の地獄が生まれて（後書き）

結構なペースで時間と話が流れます。

こんな感じの自分読み用「小説」が好きな神代でした

第三話　「物語」が生まれて（前書き）

転生者による原作改変や歪曲は、二次創作の特権ともいえますが、
不快にならない程度に留めるのはエチケットかな、とか思いました。

第三話　「物語」が生まれて

私を健康にしてくれた人、その名はフレデリカ＝ベルンカステル＝ド＝リステナーデ。

少女のような声と容姿を持つお母様のお弟子さん。

ルイズと同い年でありながらスクエアの魔法使い。

貴族としては男爵と低い地位ながら、父親が母の後任であるマンティコア隊の隊長で、母親が水の治療士としては最高峰とまで言われるほどの実力者。

私の治療に何度も通ってくれていて、その上、水の資質があるからとフレデリカ＝ベルンカステル＝ド＝リステナーデをラ・ヴァリエールに送り出してくれた方。

嫡子であるというのに。

お母様のお弟子さんでもあるという事で、国内での評判も高かったのですが、実の息子をお母様の弟子に差し出したという事で「非常識女」とか「息子殺し」とか社交界でささやかれていましたが、魔法学校入学前の段階でスクエアにまでなった実力の影響か、今度は「無償の愛」とか「無心の愛」とか言われるようになっているのが悔しいです。

親がどうしたとかそういう事じゃないんです。

フレデリカ＝ベルンカステル＝ド＝リステナーデ、彼が命を懸けて努力し続けた結果なのに。

ああ、なんて、なんて愚かしい貴族社会・・・・。

「で、カトレアねえ様。どんな感じなのですか？」

私は今、フレデリカが趣味で書いたという物語を読んでいるところ。

「灰かむり姫物語」と題された物語は、私の琴線に直撃の内容で、

泣きに泣きました。
ええ、何度も読みかえして泣きました！
昨晩見せてもらってから、何度も読み返して、もう睡眠不足です。
そんなことを言うと、フレデリカは凄くうれしそうでありながら真っ赤になって照れて見せました。
・・・あああああ、なんて愛らしい！！
まずい、まずいわ。
このままベットに引き込みたい誘惑が・・・・

「フレデリカ！！　これ以外にも物語があるってほんとなのぉ！？」

突如私の部屋に現れたのはエレノオールお姉さま。
お姉さまの手には私の持っている原稿と同じぐらいの量の原稿とルイズが握られています。

「いやーん、まだ全部読んでいないのにー！」
「こういう知的な内容は、姉にまず譲るものです！！」
「ひどいひどいですわ、私は直接フレデリカに感想を求められたのにぃ！」
「なぜです、フレデリカ！！　このような知的な内容は、まず長女に意見を求めるべき気ではないですか！？」

ばんばんと叩かれた原稿には「白雪姫」と書かれています。
こちらも姫ですか、ちょっと興味がありますね。

「フレデリカ、フレデリカはここにいますか！？　続きはどうなるのですか！？　早く書きなさい、いいえ、早々に語るのです！！」

今度はお母様が現れました。
お母様の手にも原稿が握られていましたが、私たちよりも遙かに

厚い内容です。

「お母様、それ、私も読んでかまいませんか？」
「・・・貴女たちには少し早いにようですね。」
「でも、ルイズと同い年のフレデリカが書いたんですよ？」
「宮廷事情に明るくない貴女たちが読んでも意味不明な内容です。もう少し大人になってから読みなさい。」

そういって抱きしめた原稿には「風と共に去りぬ」と書かれていました。

これが以後、ド・リステナーデ家とラ・ヴァリエール家の基幹産業になり、演劇革命さえ起こしたという「物語産業」の始まりでした。

これより魔法学校入学まで、フレデリカの生活は「執筆７」：「修行３」に移行し、もっとも心休まらない日々とフレデリカが語った時期になるのでした。

この影響で、ラ・ヴァリエールの書庫は我が国でもっとも貴族子女が訪れたい場所になったのでした。

うる覚えの記憶で童話をルイズに語ったところ、本にまとめようと言う話になった。

使用人の女の子たちも巻き込んで、１０冊ほど簡単な製本でつくったところ、カトレアねえ様にばれてしまい、一冊召し上げられた上に新しい物語を作る旨指令が下った。

そこで、不幸物語であるシンデレラを、我が国の貴族っぽく作ったところ、大好評。

平行して「白雪姫」と「風と共に去りぬ」を途中まで書いたのがまずかった。

白雪姫は里帰りしていたエレノオール様に発見されるし、風と共に去りぬは御師匠様に発見されてしまった。

既存の童話と併せて貴族用の装丁にしたものを売らせろというか広めたい、と御師匠様に熱望されたので、致し方なく許可したところ、爆発的に広まってしまった。

童話は簡易装丁版で市政にあふれ、物語は貴族社会にはびこってしまった。

娯楽の少ないこの世界には劇薬だったみたいなのです。

そんなわけで、新たな物語を記憶の向こうから引っ張り出したり、古典をこの世界風に変換したりしてネタを出し続けているのですが、供給に対して好みが千差万別で対応しきるわけがないのです。

最近では父上の関係者から「男性向けの物語」の所望があったので、ザックリとソフトなハーレム系ギャルゲーっぽい内容を書いたところ、御師匠様がキレるほどファンレターが来て驚きすぎたのです。

実はその中に、「ギトー」とか「リッシュモンド」とか「ド・ワルド」なんてやばげな名前も混ざっていて、冷や冷やものなのですよ。

で、次はこのキャラクターを中心に、という要望を見ると彼らの性癖がしれます。

たとえば、「ギト〇」さんは、お色気むんむんのお姉さまタイプに弱い。

「リッシュモン〇」さんは、お色気よりも母性あふれるお姉さんタイプに翻弄されるのが好み。

「ド・ワルド」さんは、言わずとしれた「ロリコン」。

それも、ナイチチツンデレが好みという超強者。
最近成長著しいルイズはストライクからはずれているらしいいいのですが、幼い頃から洗脳して育てるという路線がばっちりらしく、抜粋した「若紫」を返事で送ったら、「神」扱いされたのです。
とりあえず、この手紙を持っていれば、最悪「ド・ワルド」を異端認定できるので切り札にばっちりなのですよ、ニパー。

と、そろそろ原稿をあげないと殺されてしまうので、サクサク書きましょう。
えーっと、そうそう、「マイフェアレディー」。
これでも読んで、股間の煮えたぎった殿方が反省してくれればいいんですがねぇ？

どれだけの想像力があるのか分からない。
はじめは私とフレデリカのお遊びだったんだけど、いつの間にか簡単な本まで作って、最近では物語の出版でフレデリカの実家やうちまで潤ってしまっている。
初めからのつき合いで、私はまるでフレデリカの秘書みたいな事をしているけど、どちらかというと一番初めの読者みたいな感じだと思ってる。
色々と貴族社会を風刺した内容や、過去の事件を引っ張りだして脚色している場合が多いので、家柄や風評にならないようにかなり気を使って読んでいる。
でも、「ツェルプストーとラ・ヴァリエール物語」は、かなりまずい。
というか、完全にダメだ。

この、過去に名前で存在しない「ロミオとジュリエット」という架空の名前は良いけど、事件や騒動、そしてあたかも本当にあったかのような話の展開は不味すぎる。
明らかにラ・ヴァリエールの評判を落とすものだって事で、かなり不味い。
こんな原稿をお母様に見せられない。
そう思って頭を抱えていたところ、ひょいっと原稿を奪う手。
それは絶対に見せて引けない相手、お母様だった。
じっくりと内容を読んだ後、お母様は杖を構えてフレデリカに向かいました。

「辞世の句を詠むことを許可します」
「とりあえず、これは必要なことなのですよ」

フレデリカ曰く、彼の実家はまぁいいとして、王位継承権をもつようなラ・ヴァリエールが他人のゴシップを揶揄するような話ばかり出版しているのは不味い。自分たちの話も出さないと、そろそろまずい、という。
それをきいた瞬間、色々と思い当たるところがあるのか、顔をしかめて杖をおろすお母様。

「内容をよく読んでもらえば分かると思うのですが、基本、１２～１３歳の子供が愛だ恋だと大騒ぎして自殺騒動まで起こして大人を困らせるというのが真実なのです。こんな話を悲恋とかもてはやすとなると、よっぽど頭が暖かい連中なのです」

予言するわよ、フレデリカ。
この話は売れるわよ？
それも、年頃の乙女のいる貴族にバカ売れ。
間違いないわ。

ゲルマニアにも絶対売れるわ。
ツェルプストーが売って回るに違いないもの。
あー、なんというか、未来が暗いわ。
懐は暖かくなるでしょうけど。
あーあ。

第三話　「物語」が生まれて（後書き）

さてさて、隔日刊「フレデリカとゼロ魔」第三話でした。

とりあえず１０話程度まで書けているので、さくさくアップする予定です。

※　今回の元ネタ

うるおぼえの童話　・・・　不思議の国のアリス

灰かむり姫物語　・・・　シンデレラ

白雪姫物語　・・・　白雪姫

若紫　・・・　源氏物語

風と友の去りぬ　・・・　風と共に去りぬ

ツェルプストーとラ・ヴァリエール物語　・・・　ロミオとジュリエット

第四話　少女歌劇団が生まれて（前書き）

女性に対して大きな偏見を持つ神代が描く女性像は歪んでいます。

実際の女性から見たヒロイン達はどんなものでしょうか？

第四話　少女歌劇団が生まれて

えー、我が国は余程頭が暖かい国らしいです。
「ツェルプストーとラ・ヴァリエール物語」を国立劇場で演劇化するので協力するように「王宮」から指示がきました。
王妃ではなく王女のアンリエッタからの直接指示だそうです。
あー、もー、ほんとにー。
アンリエッタはいつまでたっても「お姫様」で困るのです。
やれと言われればやるのですよ？
でもそれなりに出すもん出せ、なのです。
そんな内容を修飾語溢れる文章で出したところ、

・開催費用は王宮持ち
・売り上げは折半でどうや？

という関西風の内容がきたのです。
とはいえ、必要経費は抜かれるのですから、こっちは結構丸損になりかねないのです。
もちろん、ここで断ることは不可能なので、致し方なく了解したら、即日で迎えがきて拉致されたのです。
面白そうだと言うことでルイズとカトレアねえ様がついてきたのですが、これが運命の切り替えポイントだとは思いもしなかったのですよ。

脚本として演出やせりふの書き込みをしていたフレデリカが叫び声をあげた。

「あー、もう、この大根ども、なのです！！」

演劇ってこういうものなんでしょ？　と私が聞くと、ルイズとフレデリカが舞台に立って、身振り手振りで演技を始めました。

「ああ、ロミオ、貴方はなぜロミオなの！？　ラ・ヴァリエールの名など捨ててくれれば、私たちは幸せになれるのに！」
「おお、ジュリエット！　君のためならば名を捨てよう、家も捨てよう、おお、ジュリエット！！」

ひっしと抱き合うルイズとフレデリカを見て、女優は真っ赤になっているけれど、男優の反応が薄い。

「・・・というわけで、男優全員首！」
「「「「えええええ！！」」」」」

では男性役はどうするの？

「ちょっと格好いい、すらっとした女性をそれっぽくするのです」
「えー、男のカッコウするの？」
「違うのです。男性の格好をするのではないのです。格好いい夢の男子の格好をさせるのです。乙女の夢の具現化なのです」
「「「「「きゃーーーー！」」」」」

さらには歌や踊りを脚本に加えて、まるっきり別物に仕立ててしまったため、男役者や脚本家達は抗議を直接アンリエッタ姫自身がぶつけにきたのですが、練習上映していた内容を見てメロメロになってしまいました。

「フレデリカ、これはいつ完成するのですか？」
「あと一月も練習すれば、お金を取れるレベルになるのですよ」
「分かりました、この王立「少女」歌劇団は、私が全面的にバックアップします！」

そんなわけで王立劇場付き劇団人員の大半が「王立少女歌劇団」へ移行し、実にブリリアントな転身をしたのでした。
ほぼ完成というプレビュー開演の際、王宮からや大貴族の子女が大量に招待された結果、貴族子女が恐ろしいまでのファンになり、社交界での話題を一手に集める結果になったのでした。
貴族ばかりしかみれない値段なのかと思いきや、実は民草にも会場の一部が解放されており、安い値段で見に来れるようにされているせいか、奥様がたや少女たちが夢のような世界に溺れることができる場として親しまれるようになったのです。
これにより、王立劇場周辺の商業は盛り上がり、国外からの客相手の宿なども大いににぎわった。

一から十まで計算したわけではないのだろうけど、フレデリカの突飛な発想から生まれた少女歌劇団という新しい名物は、我が国の国庫を地道に潤し始めているのでありました。
ただ惜しむらくは、私の年ではすでに少女歌劇団向きではないと言うこと。
ちょっと参加したかったわ・・・。
カトレアお姉ちゃんは少し寂しいです。

私は、正直に言ってトリステインなんて目じゃないと思っていた。
文化だとか伝統だとかいって何も考えずに朽ち果てていくバカどもだって思ってた。

でも、これを見て、なんというか、懐の深さを思いやられた。
題材にしているのはウチとラ・ヴァリエールの関係のこと。
うちの先祖がラ・ヴァリエールから男を寝取ったというふつうの話を、ここまで情熱的に、ここまで過激に、ここまで盲信的に描けるような人間がいるとは思いもしなかった。
さらに、それを出版しているのが「ラ・ヴァリエール」だというのだから、もう、この手の話で二度とからかえないと思わされた。
そういう意味では、この話を歌劇という全く新しい形の演劇にまでしてしまうトリステインという国の懐の深さに頭が下がる。
さらにいえば、ハルキゲニア中の「物語」好きを熱狂させている作家「フレデリカ」が、あの「フレデリカ」だと知った私は、両親を説得しトリステインの魔法学校に留学することにした。
何しろあの「フレデリカ」だ。
再び会うこともできるだろうし、今度は・・・・

「この本にサインがもらえるかもしれないわ」

自分の胸に抱きしめるのは「ツェルプストーとラ・ヴァリエール物語」。

王立少女歌劇団用に脚本も書かなくてはならなくなってしまった昨今、修行どころではなくなってしまったので、御師匠様の薦めもあって実家に一時帰ってみました。

で、見慣れた実家が、三倍ぐらいの大きさになっていました。

さらには、家の周りにお土産物やさんとか宿屋が乱立してるんですよ、なぜか。

店先を見てみると「フレデリカ印のソーサー」とかペナントとか。

商魂たくましいですね、我が家の領民たちは。

「お、これはこれはフレデリカぼっちゃま！」

「フレデリカ様じゃ、フレデリカ様が降臨なさったのじゃ！！」

「おお、リカしゃま、リカしゃま、リカしゃま」

わらわらと領民達が寄ってくる風景が、結構怖いのです。

「じーさま、ばーさま、ちょっとまてって！」

「リカちゃん怖がってんだろ！？」

割って入ってくれたのは、わりと昔遊んでくれた平民友達。

今はV&

たりするのです。
ところで・・・・。

「このドコかで見覚えのある女性は何で家人服をきているのですか？」
「あら、こういう服が好みじゃないの？」

さすがに年齢的に無理があるのですよ、エレノオールねえ様。

「フレデリカ、いま何か不穏なことを考えなかったかしら？」

まぁ、そのへんはよしなに。
で、なにしにきたのかと聞くと、なんでも「年間パスポート」をよこせ、とのことなのです。
なにの、って、そりゃ・・・・。

「私、あの少女歌劇団って、私のためにあるといっても過言じゃないと思ってるのよ。そう、あれって、ほら、女の夢が詰まった宝箱じゃない？　それも実の弟とも言って過言じゃないフレデリカが作ったとなると、やっぱりあれは私のための劇団よ。」

だから、僕の持っている年間パスポートをよこせ、という訳らしいのです。
実は既に僕のパスポートは御師匠様に奪われていたりするのですから、親子の因果は怖いのです。
まぁ、僕自身は顔パスなので関係ないのですが、やっぱりパスポートは便利なので返してほしいかなーとはおもいますが、代わりにトルネードカッターが偏在プラスでやってくることを考えると口に出すことができません。
そんなことを説明すると、エレノオールねえ様は「ちっ、遅かっ

たか」と苦々しく舌打ちです。

「じゃ、回数券とかないの？」

「とりあえず、親族招待用のチケットは何組かあるのですが、父上と母上にアゲる分を横取りするのですか？」

「・・・うっ、さすがにそれは・・・。」

思わずひるんだエレノオールねえ様に、三枚ほど入場券を渡しました。

「お友達と見に行くのですよ。三度通おうとか考えたらダメなのですよ？」

「・・・わかったわ。つまり宣伝用のチケットなのね？」

「そうなのですよ～。」

ありがと、と苦笑いのエレノオールねえ様。

なんだかラ・ヴァリエールと家族つき合いになってるなぁ、なんて思う僕なのでした。

第四話　少女歌劇団が生まれて（後書き）

３／２１ちょっと改修しました。本格改修はちょっとあとｗ

※今回の元ネタ
更新なし

第五話　「誰得」世界が生まれて（前書き）

異なる社会観や一見理解できない世界観に染まってしまうと抜け出せなくなってしまうものです、ええ。

これはそんなはなしW

第五話　「誰得」世界が生まれて

我が隊、マンティコアの鉄の規律を越えて、半泣き状態で部下が私に頼むこと、それは娘や妻の誕生祝いに何とか「王立少女歌劇団」のチケットを手に入れたいので何とかしてほしいと言うものであった。

本来、頭の先から足の先まで武人である私に何かできるはずもないのだが、一番強力なコネがあるために、何とか手に入れられるのではないかと思ってしまうようだ。

その一番のコネというのが「我が子」フレデリカ。

生まれたときより才気溢れる姿もさることながら、魔法に優れ容姿に優れ、そして文才まであるというのだからさすが我が子である。

そんな我が子が書き下ろしたという「ツェルプストーとラ・ヴァリエール物語」が劇場化するという話になったとき、脚本家として召還された息子であったが、あまりに非凡な才能は、新しい劇団というか達を生んでしまった。

男役も女役も娘役も何もかも、少女達で行う。

演技も歌も踊りも、洗練された夢の空間。

「トリステイン王立少女歌劇団」

国の内外を問わず、少女という少女、どころか未だ夢見がちな貴婦人まで取り込んだ大人気演劇集団を作り上げてしまったのだ。

我が国の夢見がち少女のトップであるアンリエッタ王女を劇団トップにしつらえた時点で、貴族が見に来なければならない義務が生じたわけだが、初めの一回を義務でみた後は、何度でも何度でも通ってしまうという事態になっている。

第何回目の公演の演技よりも第何回目の方がよかった。
いえい、あのアドリブと本編のつなぎが、ああ、姫様が来ると内容がちょっと変わりますものねとかなんとか。
で、一度も見たこともない人間には冷たい視線が交差したり。
そんなこんなで「フレデリカ」の父親である私に、下級貴族出身の父親達が泣きついてくるわけだ。
全員に配れるほどの度量はないので、功績があった者や努力している者に勲章代わりに配ったところ、恩給をもらうより妻に尊敬されたとか、娘に大サービスを受けて、もう死んでもいいと思ったなどの感想が集まり、あまりのことに泣けてきた。
そんなふうに盛り上がる妻子をみて嫉妬したある隊員が「伝統も何もない、お遊び演劇を見て何を喜んでいるのだ」と発言したところ、即日に妻子が実家に戻り、離縁状まで突きつけられたという。
さすがに不味いと思った隊員が私にチケットを頼んで、どうにか手に入れたことを伝えると、今度は見たこともないような笑顔で帰ってきて、チケットをうばった上でダッシュで家を出たとか。
もう自分には居場所がないと泣きながら寄宿舎になだれ込んで来た姿を今も忘れない。
我が息子よ、なんと罪深い男だ。

一時帰郷という建前だけど、実は入学準備でもあるのです。
今度の春に僕はやっとこさ、魔法学校に入学できるのですよ。
学校に入れば勉強もあるのです。
だから原稿も遅れがちになるに決まっているのですよ。
理論武装は完璧なのです。

と、そう思っていた時期もあったのです。

が、現実はさほど甘くなく、フクロウ便できたアンリエッタからの手紙には、年間新作スケジュールがびっちりかいたったのです。
もう一便で来た手紙には、ルイズから物語の新作依頼が山のように来ている旨が書いてあり、学院の部屋に転送しておくと書いてあったのです。
くそ、無駄に優秀なのです。
致し方無く、新作脚本と執筆活動をせざる得ない僕なのでした。

「ふーちゃん、ふーちゃん。ちょっとおしえて～」

御師匠様に預けられた当初は、結構恨んでいた母上ですが、実は母上も結構辛かったのを知った後は蟠りを捨てることができたのですが、捨てる前は割と母上と隔意があったのです。
だから、隔意の無くなった僕に母上はべったり状態になってしまいました。

「母上、なんですか～？」
「これこれ、これなんだけど～」

ちょっと前まで母上は社交界で「鬼母」とか「人でなし母」とか言われていたそうです。
まぁ、あの特訓魔神師匠に自分の息子を預けたと広まれば、そんな噂が出てもおかしくないのですが、それ自体は自分のしたことだからと諦めていたそうです。が、少女歌劇団台頭後は周囲に集まる貴族子女によるオベッカの海に叩き込まれ、人間不信になりつつあるそうです。
ここらで調子に乗って天狗にならないのが母上の良いところなのですが、このまま引きこもってしまうのも困りますよね？
最悪、ラ・ヴァリエールの人たちと共に、社交の世界に戻ってもらうのもありでしょうか？

少なくともカトレアねえ様は絶賛売り出し中の次女ですし、エレノオールねえ様もガンガン売り出し中なのですから。
母上が餌になって人を集めて、お二人の今を売ってしまうのがいいですね。
あ、そうか。
男性向け作品でエレノオールねえ様系の女性最高みたいな話を書けば、少しは婚姻お話も増えるでしょう？
・・・破談の話が増えたら洒落がききませんね。

実家に一度帰ったフレデリカがラ・ヴァリエールに戻ってきたのは、私たちが学院に向かう前日だった。
荷物は事前に寮に送ったそうで、こちらに持ってきたのは原稿だけだったんだけど、その量が尋常じゃなかった。
新作４、続編５、脚本に至っては８。
既に私と姫様が共謀して打ち立てた年間スケジュールを越えていた。
ふつうの女の子が裸足で逃げ出すような可愛い顔をやつれさせて「これで一年は自由のはずなのです」とにっこり微笑むフレデリカ。
わかってない、わかってないわよ、フレデリカ。
とりあえず読むけど、あなたが書く新作がつまらないワケないでしょ？
だったら続編を望まれるし、望まれたら逃げきれない。
この迷宮が、一年も待ってくれるワケないじゃない。
それに新作脚本をこんなに書いたら、姫様が毎月新作公演をするとか言い出すわよ？
もちろん、劇団員は募集すればするほど集まる現状だもの。練習三月体制で「エトワール」「ラッセール」「エンデミニオン」の三組をフル回転させるつもり満々に決まってるじゃない。
あー、「計算が狂ったのです」と涙を流すあなたの顔を思い浮か

べられるわ。

「ところで、フレデリカ。」

「なんですか？」

「この、女子学園って、どんな利点があるのよ。折角の学校なのに男女を分けて入学させて、全く良いことないじゃない」

魔法学校なんて言うのは、いわば方便だ。

三年間の猶予期間（モラトリアム）中に友人の輪を広げ、交際の輪を広げ、そして婚約や友誼をつなぐ。

加えて言うなら婚約済みの子女の火遊びの場でもある。

それなのに男女を分けて学校に行かせるなんて何て意味のないことを。

そんな私の意見を聞いて、フレデリカは邪悪な笑みを浮かべた。

「それは自信作なのです。お年頃の子女に直撃なのですよ？　ニパー」

あー、はいはい、泣きましたわよ、ええ。

フレデリカの手の上で踊らされているのがわかってるけど、このなんというか、新感覚に泣けた、泣いたわよ！

なんなのかしら、この、血も繋がらない女子どおしが「お姉さま」「妹」と呼び合う風習は。

何なのかしら、このもどかしいまでにお互いを求めつつすれ違う展開は。

なんなのかしら、この、女子しかいないはずなのに優美にして優

雅な空間は！！
フレデリカ、恨むわよ。
なんで私が学院にいるときにこれを流行らせなかったの！？
こんな、優雅で優美な学園生活を送りたかったわよ！！

と、そんなことを考えていた時期もあったわ。

先日、新作としてアカデミーに送りつけられた「始祖さまがみてる」は、アカデミー女性局員が全員で回し読んでいる。
今までの男女の恋愛物語を鼻で笑っていた局員達が、切ない切ないと泣きながら読んでいたりする。
最近では私のことを「お姉さま」とか呼び始めたのが怖すぎる。
がさつと効率だけしか意識していなかった彼女たちが、スカートにはきかえたり、裾を気にしたり、髪型や髪飾りが「始祖みて」してるし！！

・・・フレデリカ、前言を撤回するわ。

私が学院にいる頃に「始祖みて」を流行らせないでくれたことを感謝するわ。
こんな状況が少女時代に起きてたら、絶対、絶対あなたを殺さなくちゃいけなかったから。

「おねえさま、そろそろ会議の時間です」

「・・・わかったわ。」

私専用の「始祖みて」から視線をあげて、助手、いいえ妹の一人に微笑む私。

これも「お姉さま」の役目か、とほほ。

第五話　「誰得」世界が生まれて（後書き）

本作のエレノオール様は、妹の救命のための研究に没頭していないので、結構気楽です。
その辺が魅力となるといいのですがW

※今回の元ネタ
始祖さまがみてる　・・・　マリア様がみてる

第六話　学院新世界が生まれて（前書き）

当作の主人公「フレデリカ」の中の人は、勿論現代のオタですが、外枠に影響されて記憶程度しか持ち越していません。それがよかったのか悪かったのか？

第六話　学院新世界が生まれて

ルイズと共に学院に到着すると、どうやら寮に入るべく集まった人たちで一杯になっていたのです。

さすがに全員一緒にと言うわけにはいかないので、貴族の位階の高い順だとか喚いている頭の悪い新入生を後目に、僕とルイズはその場を離れました。

本当にその意見が通ると、貴族としての地位の自己紹介大会が始まり、じつに面倒くさいことになるからなのです。

ルイズは「ラ・ヴァルエール」ですから、たぶん無茶苦茶注目されて彼女自身がイヤな気分を味合わされるでしょうし、ボクはボクであまり地位が高くないので、ルイズの腰巾着扱いされて、ルイズが気分を悪くするのでしょうし。

だったら、夕食前までに部屋に入れれば問題ない、と中庭をプラプラしていたら、一人の少女に捕まったのです。

「・・・貴方がフレデリカ＝ベルンカステル＝ド＝リステナーデ？」

青髪の少女の名前は「タバサ」。

家名も何も名乗りませんが、あの国で青髪の意味を知らないわけではない僕は、一応スルーしておきました。

だって、無表情っぽい彼女が、目をきらきらさせてるのですから。

「・・・貴方の新作を毎回楽しみにしてる。寝食を削って読んでる」

とてもうれしかったので握手をすると、逆にすごい力で握り返されてしまいましたのです。

とりあえず無視すると後が怖いのでルイズも紹介すると、タバサ

は目を再びきらきらさせた。

「貴女が、「はじめの物語の人」」

物語を作り始めたきっかけが、ルイズと共に童話を書いたことだと知っているらしく、尊敬の視線をタバサはルイズに送った。

「あー、その呼ばれ方は好きじゃないの。だからルイズって呼んでくださる？　ミスタバサ」

「・・・私もタバサでいい」

なんだか女友達ができたルイズなのでした。

そろそろ人混みも消えたかなっと、先ほどの場所に戻ると、ほとんどの人が消えていたのです。

これで寮の部屋を探せる、と思ってみたら、壁に部屋と名前が細かく書かれているのです。

どうやらこれを見せて自分で行かせたみたいです。

結構貴族の扱いが乱暴なのですね。

割と好みなのですが。

で、その表をみて、奇妙なことに気づいたのです。

ルイズの部屋はすぐに見つかり、タバサの部屋もその近くでした。

で、なぜかボクの部屋がタバサとルイズの部屋に挟まれているのです。

・・・とりあえず、僕は男の子ですよ？

そうその場でつぶやいてみましたが、何の意味もないので、とり

あえず学校の教師に話を聞いてみると・・・。

「おお、貴方が「フレデリカ」ですか！！　いやー、貴方の作品はすべて読ませていただいておりますぞ！！風サイコー！！」

なんというか突き抜けた男性です。

「失礼ですが、お名前を聞いてもいいのですか？」

「オオ、これは失礼。私は学院で「風」を教えているギトーともうします、風サイコー！」

「・・・お姉さま好きの？」

「・・・ふふふ、物語の中だけの話ですよ。」

脂汗をかいて視線を逸らしても無駄なのです。

僕のプロファイルは間違いないのです。

ギトー先生の案内で学院長部屋に通された僕、ルイズ、そして何故かついてきたタバサは、老人の前に立ったのです。

肩にネズミを乗せた老人は、オスマン学院長。

とりあえず・・・・

「何で僕が女子寮の名簿に載っているか答えるのです」

「では逆にお聞きしましょう。男子寮で男子に襲われるのと女子寮で女子に襲われるのと、どちらがお好みですかな？」

「・・・うぐ・・・。」

襲われること前提なのですかぁ！？

「フレデリカ、諦めて。貴方が男子に襲われても大丈夫なのは知っ

てるけど、そんな生臭い青春を送ってもらうわけにはいかないわ」
「・・・フレデリカ、私は歓迎」
「お嬢様方もこういっておるし、見た目も違和感がない。せめてもう少し雄々しくなってから抗議しに来てくだされ」

何とも納得がいかない話なのです。

仕方なしに女子寮内の僕の部屋に行ってみると、実に広々としたものでした。
が、その壁全体に本が押し込まれているのは、まぁ、仕様です。
その部屋を見た瞬間、タバサの目は鷹の目となり、そしてトロケたのです。

「・・・ここは桃源郷？」
「とりあえず、僕の部屋なのです」
「・・・フレデリカ、わたしもここに住む」
「一応、僕は男なので良くないと思うのですよ」
「ここに住めるならどうなってもかまわない」

実に情熱的な言葉ですが、視線が本から離れないのです。

「無駄よ、フレデリカ。うちにもフレデリカの実家にも、そういう観光客が一杯来るでしょ？」
「ええ、実家にかえって実感しました」

いるんですよ、物語ファンで、実家やラ・ヴァリエールの屋敷のそばに家を建ててしまう人たちが。
そんなことをしても新作を読めるわけではないのですが、そうい

う空気を共有したいとかなんだとか。
でもタバサの場合は、読み切れないほどの本を前にして我を失っているだけかと。

「ま、しばらくすればタバサだって慣れるわよ。」
「慣れるのが僕らの方にならないことを祈るのですよ」

苦笑いの僕らの背後でノックの音がしました。

「はーい、なのですよ」

扉を開くとそこには赤毛の女性。
原作ではスゴく露出が多いはずですが、目の前にいるのは慎ましやかな程度のファッションの人です。

「・・・お久しぶりね、フレデリカ」
「キュルケ、お久しぶりなのです」

きゅっと握手すると、背後にいるルイズにも小さく手を振るキュルケ。

「わざわざトリステインに留学しなくても、いいじゃない、ツェルプストー」
「ばかねぇ、「物語」のフレデリカが入学するのよ？　タイミング合わせるに決まってるじゃない」

この手の英語表現は、僕の物語で広まっているせいか、貴族子女に完全定着してるのです。
逆にこういう「リカ語」を自在に扱えることがステータスだといわれているのがくすぐったいのですが。

「で、また、サインをネダリに？」
「・・・ほら、学院でも配って歩くのよ」
「とりあえず、女子寮に入った女子はみんな持ってるわよ？　たぶん」
「・・・そうかしら？」
「あなた、何冊配り歩いたと思ってるのよ。」
「あはははは。」

苦笑いのキュルケに、ルイズは一冊の本を渡す。

「一応、試作装丁版だけど読んでみなさいよ。いつまでも「ロミオとジュリエット」じゃ時代に乗り遅れるわよ？」
「えぇ～、最高じゃない、これ」
「あのねぇ、貴族社会の醜聞をネタにした作品でトキメいているなんて、お年を召した女性だけで十分なのよ。いまは、これ。」

ぱらぱらと流し読んだキュルケは、げんなりした顔をしました。
ルイズと全く同じ反応なのです。

「ねぇ、ルイズ。いくら男にモテないからって、女に走るのはどうかと思うんだけど」
「・・・文句を言わず、始めから終わりまで読む！　途中で読む気が無くなったっていうなら、私とフレデリカで「ロミオとジュリエット」演じてあげるから！」
「ふふふ、それは楽しみかもしれないわ」

久しぶりに泣いたわ、泣かされた。
何なのこの切なさと優しさとやるせなさは！
ああ、この、モジモジとして気持ち悪いまでに内向的な展開のくせに、燃え上がるような情熱とそれに共感してしまう展開は！
くそぉ、確かにロミオとジュリエットだけを語っているんじゃ時代遅れ必至だわ、認める、認めざる得ないわ。
この「始祖さまがみてる」は、おもしろすぎる。
夕食前に一気に読み切ってしまった私は、続編がないかを聞きに行ったところで、装丁前のものを三冊分渡された。
よっぴきで読み切った私は、泣いたわ。
泣きぬれたわ。
今までこんなにおもしろいものを知らなかった自分に絶望したわ。
そんなことを朝食の席で語った私に、ルイズは「さもありなん」と苦笑い。

「私もね、初めて「始祖みて」見たとき、女子だけの学校？誰得？とか考えたもの」
「そうよね、絶対始めそう思うわよね！？」
「でも、スワティーカやセイにとっては必要な環境だしねぇ。」
「やっぱり、そういう娘は学院に来ないのかしら？」
「一応入学はするけど、家の都合とかで途中退学するみたいよ。」
「そうよね、うん、わかるわ。」

そういいながら、何かとガヤガヤうるさい男共を見て、視線を冷たくした。

「あれがフレデリカと同じ男だと思うと、信じられないわ」

私の一言にルイズは違う違うと首を振る。

「フレデリカって、性別「男」じゃなくて性別「フレデリカ」なのよ。私はそう確信してるわ」
「さすがルイズ。」

ルイズの隣の青髪少女タバサは、口一杯のハシバミを飲み込んで、ぐっと親指を立ててみせる。
あ、これは「グットサイン」。

「グッジョブ、ってやつね」
「「ふふふ」」

そんな乙女の会話をしていると、話の通じる女子が集まってくる。
作品の話や新作の展開などの話で盛り上がり、まるで「始祖みて」の中の女学院のような雰囲気に思えた。

「ね、ルイズ、あれ、絶対にヒットするわ。」
「ふふふ、私もそう思うわ。」
「・・・（こくこく）」

なんだろう、私とルイズとタバサ。
まるで「始祖みて」の三人みたいね。

第六話　学院新世界が生まれて（後書き）

作中に出てくる「始祖様がみてる」は、ロザリオでスールな「あれ」です。
あれの汚染力は皆さんご存知のとおりかと・・・W

※今回の元ネタ
更新なし

第七話　伝説の始まりが生まれて（前書き）

えー、見た目「男の娘」状態のフレデリカですが、身体の一部が「神」です。
そのへんは、幼い頃から年上のお姉さんにもてあそばれた経験によるものです。

第七話　伝説の始まりが生まれて

朝食の席が男子と女子にくっきり別れましたのです。
僕は一応男なので、男子側で食事をしていたら、新入生の男子に絡まれました。
麗しいとか可憐だとか薔薇をくわえながらいうので、冷たくあしらうと、なぜか不満そうな顔になります。

「あのですね、君はなんで男の僕を誘っているんですか？」
「え？　男？」
「そうなのですよ。男なのです。」
「で、でも、君、男子寮にいないだろ？」
「男と知っても僕を襲おうとする馬鹿がいるだろうから、という学院長の配慮なのです」
「・・・たしかに、君が男と聞いても確かめるまで信じない、というか無視するかも・・・」
「そ、そうだな、これだけ可愛ければ別に男でも・・・。」
「こんなに可愛い子が、男なわけがない！！」
「そうだ、そうだ！！」
「男ぶってんじゃねーぞ！！」
「どうせ女のみたいな小っさいだろうなぁ！！」
「「げはははははは」」

新入生の話に被さってきた上級生は、僕に覆い被さるように肩を組んできました。

「どうだよ、おれに穴を貸せば、守ってやるぜ？」
「穴がしまってるあいだだけだけどなぁ！」
「「「「ぎゃはははははは」」」」

実に下品な手で、僕のズボンをおろしにかかります。

「そら、どうした、怖いのか？　縮みあがったのをみんなに見せて・・・Ｏｈ，ｍｙ、ＧＯＤ・・・。」

おろされたズボンの中を見て、上級生が二歩三歩と下がってひざまつきました。

「許してくだせぇ、許してくだせぇ、神がそこにいたとはしらなかったのでございます。」

べったり五体倒地する上級生とその仲間たち。

そういえば、一緒にお風呂に入ったエレオノールねえ様たちに色々とされていたせいか、見た目がスゴいことになってるんですよね「これ」。

「もうズボンを上げてもいいのですか？」

「あたりまえでさぁ。あっし如きが恐れ多くて触れないのでござぇます」

まぁ、降り懸かる火の粉がなくなったと思っていたのですが、スゴい早さで広がった噂の影響で、かげながら男子生徒から手を合わせて祈られることになったのでした。

我が友、フレデリカ。

彼は魔法に優れ、知勇に優れた真なる貴族である。

彼の執筆した物語は男足る者が歩くべき道を指し示すものであり、貴族たるものの在り方を示す者がおおい。

中でも、かの著作「三従姉」は見事な内容だ。

かの王国につかえし三人の娘たち、「マティー」「ヒルダ」「グリエダ」が織りなす宮廷内の騒動を知恵と勇気と愛と友情で乗り越えるという物語であった。

これは一見すると女性中心の子女向けの作品に思えるが、実はこの三人は「マンティコア」「ヒポグリフ」「グリフォン」の三親衛隊を表したもので、宮廷風刺と正常な政治運営への渇望が絞り込まれた「政治的に正しい国家運営」の物語なのだ。

これを見た父上は、実に苦々しくほほえんで見せたほどであった。

母上はいまいち理解なさっていないようであったものの、本が嫌いな兄上たちも興味津々に読み下し、私と同じ感想を持ったようだ。

つまり、我が友の書物は、読んだ人間によって理解できる内容が変わるというわけだろう。

まるで読んだ人間を映す鏡のようだとも言える。

とはいえ、これはなかろう?

「なにが無いのですか? ギーシュ」

「いや、だから、ほら・・・。」

年頃の娘さんたちが男と隔絶された環境で三年間も生活するなんて、信じられないもったいなさ。

「読む前はみんなそう言うのですよ。」

にっこり微笑む友。

そう誘われてアランと一緒に読み進めたところ、まずいことになった。

なんというか、この世界観を認めてしまうと気持ちいいのだ。

今まで男の誉れとか武勇とかを競っていた自分が恥ずかしいとすら思えるのだから怖い。
どうにかしないといけないとガタガタ震えていた私たちに友から新しい書物が与えられた。

「始祖様がみている～ボーイズエディション」

男子だけが集められた学院で起きる、男の友情の物語。
それは短いながらも感動的で、共感できる、そんな物語だった。
さらに、主役の少年が、「始祖みて」の主人公の少女と双子という設定が生きていて、どこかで物語がつながっているという作りも嬉しいものだった。
双子というものは、どこか忌避されるものだったのに、初めてうらやましいとか思ってしまった。

「友よ、この物語は続くのかい？」
「君たちがそう望み、心に描く限り、つづくのですよ。」

最近、男子は男子で集まり、女子は女子で集まっているという。
もちろん、男女で仲が悪いというわけではなく、男子は女子同士仲良くしている姿をあこがれを持って見つめ、女子は男子同士で仲良くしている姿を憧憬をもって見つめているという。
まぁ、在学中に出産なんていう事態がないだけでも助かるのだが、これが実に興味深い影響を与え散ることがわかった。
毎年、数人の自主退学者がでる新入生が、今年は一人も自主退学者がでていないのだ。
寄付金的にも助かるのだが、実際は教育者として今まで気づかなかった事態に気づかされた。

つまり、男性に対する嫌悪や恐怖を持っている子女が退学者の一部を占めていたという事実と、色狂いの上級生による暴行がさらに一部を占めていたという事実だ。

今年は、ある新入生が「神」とあがめられるほどの武威を示した影響で女子に対する胡乱な行動はなく、さらに校内で蔓延している「始祖みて」なる書物の影響で、実に上品な生活になったため、男性に嫌悪感を持つ女子も馴染めるようになったようだった。

もちろん、新入生にいいようにされた上級生の一部が黙っているはずもなく、新入生「フレデリカ＝ベルンカステル＝ド＝リステナーデ」に対する決闘が行われた。

結果は、無惨であった。

少しでも噂を信じるならば、あの「烈風」の直弟子であるフレデリカ＝ベルンカステル＝ド＝リステナーデに喧嘩を売るなんて命知らずなことをするはずもないだろう。

加えて言うならば、彼はその日、自分にとってもっとも力の劣る系統で勝負していたはずであった。

しかし、そこに生まれたのは焦土。

彼が繰り出した「火の矢」は、数十にも別れて決闘に現れた本人と、風の魔法で姿を隠した上級生たちを薙払った。

さらには「炎の玉」と称された改良魔法は、未だ杖をおろさない上級生たちの中心で弾けて吹き飛ばす。

すでにボロボロとなった彼らは、杖を置き、膝を折った。

信じられないほどの力の差を感じて、一人がどうやったらそこまで強くなったのかを聞いた。

それが一番してはいけないことだったことに気づいたのは、フレデリカ＝ベルンカステル＝ド＝リステナーデが幼い頃から繰り返された特訓という名の死亡遊技を連日受けていた話を聞き始めてからだろう。

臨場感ある話しぶりに引き込まれつつも、その凄惨な特訓の内容に背筋を凍らせ、そして「烈風」恐ろしさに肝を冷やさせられた。

誰かが言う、「よく死ななかったな」。

それに対してフレデリカ＝ベルンカステル＝ド＝リステナーデは笑顔で言う。

「水の系統に目覚めなかったら、三桁程度は死んでましたのですよ」

その虚ろな笑顔をみて、絶対に勝てないと彼らは悟ったらしい。

以降、上級生の一部では、彼のことを「凄惨なるフレデリカ」と呼ぶようになったらしい。

できれば私は「風」で彼らを圧倒してほしかったのだが。

風サイコー。

第七話　伝説の始まりが生まれて（後書き）

風サイコーｗ
隔日更新「リカちゃま」は、結構御好評いただいているようで、嬉しいのですｗ
原作キャラの剥離やリカちゃま暴走にこれからもお付き合いいただけると幸いです

※今回の元ネタ
三従姉　・・・　三銃士ｗ
始祖様がみている～ボーイズエディション　・・・　お釈迦様がみてる

第八話　「館」と「現実」が生まれて（前書き）

展開が無理やりな「フレデリカとゼロ魔」ですが、まだまだ続きますw

第八話　「館」と「現実」が生まれて

えー、最近僕の部屋が談話室になっているのですよ。
基本、定員は5名。
テーブルに寄り添い、本の話や新作の話をしています。
で、これがルイズやタバサだけならまだしも、ほとんど名前も知らない上級生や顔しかしらにような同級生が親しそうに現れるのはどうかと思うわけです。
とはいえ、社交性は必須だと両親に言われているので、積極的にお迎えしてお話させてもらっているのです。

「ねぇ、フレデリカ様。この部屋はまるで「薔薇の館」のようでございますね。」
「そうね、その通りだわ。他愛のない会話でも輝く時間に昇華してしまう不思議な時間ですものね。」

ラ・ロート卿次女、エディミシア様の言葉にド・ルブランシェ卿三女、レイディナーレ様が嬉しそうに同意する。
話を振られた僕はにこやかに微笑んで、今の会話をちょこっとメモする。
こういう小さな会話を作品に生かすと、これがまた評判になったりするのが馬鹿にできない。
自分の会話が盛り込まれるのが嬉しいのかと思いきや、実は自分と同じようなことを考えて会話する人たちが物語にいるという共時性が快感らしいのです。
実に難しい感覚です。

「でも、この空間があるのはみなさんのご協力のおかげなのですよ？」

「まぁ、ご謙遜を。」「フレデリカ様あっての「薔薇の館」ですわ」

「「おほほほほ」」

聞くところによると、以前自主退学した生徒が復学すること希望しているとか。

年齢的に可能であれば一年から入り直すとか言う話が盛り上がっているそうです。

その話をするとレイディナーレ様がにこやかに微笑む。

「男性に絶望なさった方々でも、今の学院ならば希望が見いだせますわ」

「ええ、わたくしも「始祖みて」と薔薇の館がなかったらと思いますと、もう、学院にいなくてもおかしくありませんのよ？」

あわせるようにエディミシア様が言う言葉を聞いて首をひねる。

「とりあえず、僕も男なのですよ？」

「いいえ、フレデリカ様は「性別：フレデリカ」ですわ！」

「そうです、ルレデリカ様の性別は「フレデリカ」、これは事実です！！」

「「「そのとおりですわ！！」」」

どかりと飛び込んできた女子軍団。

すでに僕の性別は「フレデリカ」で決定のようなのです。

とかく理不尽な世の中なのですよ。

宮廷の一室で、私はフレデリカから提出された脚本をチェックしていました。
王立少女歌劇団における決定権は私にあり、全ての少女の夢を司るのは私の役目。
ハルキゲニアの乙女の夢を、私が護る！
そんな思いで新作脚本をみて、わたくしは吹き出してしまいました。

「リボンの騎士～烈風姫カリン物語」

まずいでしょまずいでしょ、これまずいわよ！！
ラ・ヴァリエール婦人に喧嘩売ってるのかしら、あの暗黒脚本家は！！
ダッシュで宮廷を飛び出し、お忍びで暗黒脚本家の寮へ飛び込むと、そこにはラ・ヴァリエール卿一行がいました。
当主ラ・ヴァリエール卿および婦人。
長女、エレノオール殿。
次女、カトレア殿。
三女、にして我が友ルイズ。
全員が杖を構えて暗黒脚本家であるフレデリカに杖を構えています。

「まず、杖をおろしなさい！」

私のその言葉に不承不承杖をおろした全員でしたが、フレデリカは余裕の笑みです。
なんだか面白くないですね？

「で、フレデリカ、この脚本の真意は？」
「女性の地位向上です。」

打てば響くような速度で返された真意は、今のところ女性であると言うだけで低い立場に追いやられている人々の活躍の場を設けたいという、そんな考えに基づいているらしいのですが・・・。

「では、なぜ、「カリン」が道化のように扱われているのですか？」

震える声を抑えつつ、上げたくなる杖を押さえて言葉を発する婦人。

「僕の物語の多くは過去の記憶や記録に基づいているのです。そして御師匠様から聞いた過去のトリステインや軍の話は僕の作品に多くの影響を与えているのです。」

そういえば、軍の話や王宮内の話など、まるで直接見ているかのような臨場感に溢れていると、侍女たちがはなしているのを聞いたことがあります。

なるほど、これが情報の元だったのですね。

「御師匠様がお話くださった過去の「カリン」は、多くの魔法使いにとっての教訓と貴族にとってとるべき道が示されています。たとえ導入が道化であっても、その成長こそが貴族の道だと信じるのです。だから敢えて、道を間違えていた頃の御師匠様を導入に使わせていただきました。」

無い胸を張るフレデリカを、深いため息で見つめるカリーヌ婦人。

そう、「烈風姫」と表された本人にとって、暴いてほしくない黒歴史を暴かれるのだから、冷静ではいられないだろう。

加えて、実は娘たちも実の母親を道化にされて怒ってきたのだが、真意を聞いては黙っていられなかった。

で、ルイズは、実のところ実の母親のことではなく、役者の容姿指定で怒りを燃やしているのだ。
役者の容姿指定がなんと、まるまるルイズそのままだったから。
明らかにルイズを劇団に引っ張り込もうとしているのが理解できる内容だったため、撤回させるためにきたというわけだ。
で、ラ・ヴァリエール卿は、何年も共に過ごした息子同然の少年を守るためにやってきたという。
実に家族愛に溢れる話だと言える。

「いいでしょう、多少の内容の変更を要求しますが、基本的に演劇化を認めます。」

ラ・ヴァリエール婦人カリーヌ様は、実に苦々しく了解したのでした。

「で、姫様はなにをなさりに？」
「さすがにこんな脚本を発表したら、ラ・ヴァリエールが独立とか言い出すやもしれないじゃないですか。」
「あー、まぁ、うん、そんな可能性もありましたか。」

どうやらなにも考えていなかたらしいです。
恐ろしい話でした。
とにかく、新作脚本を本人から許可をもらったので、早々に演出家と話さなければなりませんね。
ところで・・・・。

「これもまずいと思うのですが？」

その題名も「トリステインのバラ」。
男子として育てられた女性貴族が、成長する中で恋を知り愛を告

白され、そして男性貴族として女性自身としての心の動きに翻弄されるという、実に恐ろしい内容でした。
なにが恐ろしいかというと、大人向けの「烈風姫カリン物語」なのですから。
私から恭しく脚本を奪い取ったラ・ヴァリエール婦人でしたが、鼻息荒く読み切って、実にすがすがしい笑顔をつみせました。

「フレデリカ、よく書けている脚本です。貴族としての立場と女としての想いの行く先が、みずみずしく描かれた良作です。物語にすることも許可しましょう」

鼻歌まで歌ってフレデリカの部屋を出た母親を追って、長女と次女も部屋を出てゆきましたが、大人版の原稿用紙を奪ってゆくのを忘れませんでした。

「フレデリカ、自分のみを守る手段があるのなら、早々に出しておきなさい。」
「はっ。了解いたしました、閣下」

ぴしっと敬礼するフレデリカを嬉しそうに撫でた後、ラ・ヴァリエール卿も部屋を出てゆきました。
私はなんだか気が抜けてしまい、ルイズの座るイスの隣に座り込んでしまった。

「もう、私も策動の一部に組み込むのは止めてちょうだい」
「姫様、無理ですよ。フレデリカに何かを頼んだら、その文だけ苦労という取り立てを食らうのが道理です」
「・・・一応、私、王族なのよ？」
「そのことは気にしない、心からの友達になってほしいとお願いされたのですよ？　今更撤回するのですか？」

「もう、フレデリカの意地悪」
「僕ほど姫様に心優しく接している人間はいないと思うのですよ。」
「そうでもないわよ？　最近枢機卿もお母様もイヤになるほど優しいわ。まるで何かの罠を仕掛けているフレデリカみたいに・・・って、まさか！？」
「はぁ、何で今まで気づかないか不思議で仕方ないのですよ」

第八話　「館」と「現実」が生まれて（後書き）

という引き、つまり「あれ」ですｗ

※今回の元ネタ

リボンの騎士～烈風姫カリン物語　・・・　原作のあれ

トリステインのバラ　・・・　ベルサイユのバラ

第九話　ハルキゲニアを走る「謀略」が生まれて（前書き）

皆様お元気でしょうか？
心安らかな夜のタメに、前倒しアップです！

ちなみに、情報とか、そういう話の大半は原作知識ですｗ

第九話　ハルキゲニアを走る「謀略」が生まれて

僕が知っている情報からすると、姫様はゲルマニアあたりに嫁に出されるはずなのです。

「わたくしにはウエールズ様という方が・・・！」

「そろそろ真実が明かされて、身辺整理が始められるはずなのです。少女歌劇団の管理が女王に移されたり、ウエールズ様に婚約解消の代わりに戦争資金の借款が行われたり・・・。」

「なによそれ、全く聞いてないわよ！！」

「だから、今のところ好きそうなことに熱中させて、引くに引けないところまで追いやるのですね。可哀想可哀想なのです。」

がー、とか姫にあるまじき叫び声をあげたアンリエッタでしたが、急に瞳を輝かせて僕をのぞき込みました。

「そこまで考えているんなら、がつんと逆転できる手段、あるのよね、そうよね！？」

「とりあえず、落ち着くのですよ。」

ほとんど激突寸前まで近づいたアンリエッタを引きがはし、僕は一通りの解説を始めるのです。

実行は今すぐか、一年後。

今すぐ行えばアルビオン救済と国内不正の一掃が可能だけど、一年後になると国力が上がり国内一掃後も安定できるけどアルビオンが落ち、姫は嫁にいかざる得ない。

「今すぐよ！」

そうなると、非常に危険な賭だけど、最少人数の最大戦力を投入して、アスビオンに敵対している勢力の切り崩しをしつつ、資金面も切り崩し、さらには背後関係にいる収容とも切り離さなければならないのです。

これを二ヶ月以内に完了しなければ、姫はゲルマニアの花嫁決定なのです。

「・・・私は聞いてるの。出来るの、出来ないの？」

「姫。姫はＧＯと言ってくれればいいのです。さすれば黒猫が夢を見せるのですよ？」

「悪夢はいやよ。見せてくれる夢ならば、生涯続くものにしてちょうだい」

「あいあい、なのですよ～」

そうなると、本当に商会の金庫が空になるかもしれないのです。

「姫、無茶を言うからには、それなりの無理は通してもらうのですよ？」

「私とウエールズ様の未来のため、身を削る覚悟よ！」

それを聞いて安心したのです。

彼は、オリバー＝クロムウエルは困惑していた。

東方奪還の趣旨と王族は妥当の暁に生まれる利益により結びつい

ていた筈の貴族派貴族たちが、徐々に離れて行っていたからだ。
春からの一月で、支持者がすでに2／3が離れ、勧誘予定であった貴族からも敬遠されていたのであった。
利益と名誉と金まで差し出しているのに、貴族の多くは迷惑そうに眉をひそめた。
どうにか、本当にどうにか面会のかなった貴族からこう聞かれた。

「アルビオンの後、トリステインに向かうのであろう？　それでは貴族はついてゆかんぞ？」

何事なのか解らず、彼は、オリバー＝クロムウエルは困惑しきっていた。

現在、トリステインとゲルマニア社交界にはこんな噂が流れていた。

「アルビオン反乱の背後には、ロマリア司教あり。」と。

もちろん、アルビオン王宮が異端審問されていればその事実も強い背後関係になるはずだが、そんな事実も存在しない。
ならば、それはなにか？

始祖から続く血脈を、宗教が駆逐しようとしているのではないか！？

いわば、始祖殺しをロマリアがしようとしている！！

もう蜂の巣をつついたかのような騒ぎで王宮雀たちが騒ぎ一般信

者たちも恐ろしいことだと背筋を寒くした。
そう、ロマリアの首都においても！

「こまるなー、フレデリカ殿ぉ。」
「なにがですか？　おじさま。」

一瞬でれっとした老人は、拭っても消えないほどの脂汗を拭い続けていた。

「うちのさー、司教が、反乱の背後にいるだなんて噂流されちゃうとさー、うちも本当に困って、本当に困ってだよ？　異端審問官とかの腰が軽くなっちゃうかもしれないんだよね～」
「それは困ったのです。僕なんか異端審問官さんに、異端宣言されて殺されちゃうのです」
「こ、殺しはしないよ、ただ、ちょっと罰を受けてしまうだけで・・・。」
「あああ、そうやって僕の心が壊れてしまうのですね。そして僕は二度と作品が作れなくなって、発注を受けている「聖歌」も完成せぬままに・・・。」
「いやいやいや、困る困る困るよぉ～、フレデリカ殿、何とかしてくだされ、ね？」

詰まるところ、落としどころを提案せよ、と。

「だったら、そんな背後の人間なんていないし、居たとしてもロマリアには何の関係もない人間であると一筆かいてもらえると、噂の収拾が楽ですねぇ・・・。」

瞬間、空気が凍る。
つまり、オリバー＝クロムウエルを破門せよ、と言っているのだから。
しばし無言で見つめあった二人であったけど、老人が苦笑いで表情を崩した。

「わかったよ、フレデリカ殿。そのように一筆書かせよう。で、発行は？」
「今僕の懐に、「あの」新作の装丁版があるのですよ」
「わかった、明日の朝一番に渡せるように処理しよう。」

にっこりほほえんで、「あの」新作を手渡すと、老人はマタタビを与えられた猫のように頬をすり寄せているのです。

「では、聖歌は来月ぐらいに送れると思いますので、楽しみにしていてください」
「・・ああ、ああ、やっと新刊が、新作が、私の新作ぅ・・・。」

もしかして文化侵略をして居るのでしょうか、僕は。

第九話　ハルキゲニアを走る「謀略」が生まれて（後書き）

もしかしなくても文化侵略中のフレデリカなのでした。w

※今回の元ネタ
更新なし

第十話　「狙撃」のルイズが生まれてたｗ（前書き）

二次創作で色々と書かれているルイズですが、路線の大半が「脳筋」に傾きつつあるのは気のせいでしょうか？ｗ

第十話　「狙撃」のルイズが生まれてたｗ

姫様の指示からフレデリカは精力的に動き回り、学園内では良家の子女にお願いして宮廷内の噂の操作や社交界での情報操作を依頼し、アルビオンの貴族社会への牽制を徹底的に行った。

これにより、アルビオン貴族派のところにはフレデリカの新作が届かなくなり、アルビオン王族派貴族に集中することになった。

加えてトリステイン王立少女歌劇団の貴族チケットが優先的にアルビオン王族派に供給されるようになると、内助の強い貴族は雪崩をうって王族派に流れていった。

で、裏切った貴族にも優先的に書籍やチケットが行くものだから、もう、その流れは止まらなかった。

妻や娘に強くても、愛を維持しなければならない愛人に唆されれば動かざる得ないのがモテると盲信している男の性であり、遊び女たちにも浸透しているフレデリカの本が貴族派と付き合っていては手に入らないという噂は急激に広がってゆき、傭兵たちも一夜の遊びであっても王族派を宣言しないと付き合ってもくれなくなってしまっているほどであった。

加えて、ロマリア首脳陣からの発注を優先的に受けるという名目で出向いた先で、首脳陣を各個撃破し、様々な取引を飲ませた。

一人に、アリバー＝クロムウエルの破門。

一人に、ロマリア神聖騎士団の参戦。

一人に、アルビオン王国が始祖の直系であることへの認定。

つまり、全部あわせると、アルビオンはロマニア認定の聖王国であり、それに弓引く存在が如何にすばらしいことを言っていても悪である。

ゆえに、その背後にいるオリバー＝クロムウエルは破門とし、神敵として忠殺する事を認める、となるわけだ。

恐ろしい話よね。
というか、こんな話に私を巻き込まないでちょうだい、フレデリカ！！
私は真面目な普通の学生でいいんだから！！
「えー、「狙撃」のルイズなのに～？」
豪華な馬車の中で不満そうに口をとがらせるフレデリカ。
「その二つ名だって、フレデリカの「望遠」があってこそじゃない」
「見えたって普通はそんな離れた存在を狙撃できないのです。」
まぁ、そうかもしれない。
あの地獄の特訓の影響か、魔法成功率ゼロだった私は、こと爆発させることだけは完全に成功するようになった。
いわば、爆破魔法のプロとなったわけだけど、見える範囲しかできないと嘆いていたら、おもしろいことをフレデリカが始めた。
そう、見えると仮定した存在が爆破できるか、という実験。
壁で隔てた部屋の壁に、まるでそこに存在しているかのような絵をかいて、その絵に描かれたテーブルの上の果物を爆破してみよう、といい始めた。
何度か失敗したけど、よくよくかかれた絵だったので、その先に本当に果物があるものだと思いこんだら、なんと成功してしまったのだ。
これに気をよくしたフレデリカとお母様は、様々な道具を組み合わせて「望遠鏡」というものを作り出した。
元になったのは闇市で売っていた「場違いな工芸品」だったのだけれども、フレデリカの練金で修理して使えるようになったのが「それ」だった。
使ってみると、それはすごいもので、１０００メイルは離れてい

る先にある本のタイトルが見えるものだった。
試しにあれを「練金」してみてよ、とフレデリカがささやいたので、反射的に練金したところ、その本が爆発した。

「成功です、成功なのです！」
「すばらしいわ、我が娘ながら恐ろしい！」

きゃっきゃと喜ぶフレデリカとお母様のせいで、なぜか私の特殊魔法が知れ渡り「狙撃」なんて二つ名までついて回るようになってしまった。
この成功以降の訓練で４０００メイル先まで狙撃できるようになってしまった。
本当に特訓地獄だったのよ。

まぁ、そんなこんなで学院でも有名になってしまった二つ名だけど、ロマリアでも有名らしく、私が秘書よろしくにフレデリカについて回るだけで最敬礼で迎えてくれるのが痛すぎる。

ああ、普通の学生にいつになったら戻れるのかしら。

「無理なのですよ～、ルイズには波瀾万丈な人生が約束されているのですよ～」
「まぁ、フレデリカの友達で居る間は、波瀾万丈でしょうねぇ。」
「違うのですよ、ルイズがラ・ヴァリエールであるかぎり仕方ないのですよ？」
「私はただの貴族の三女じゃない！」
「ラ・ヴァリエールの名前を背負ってて普通の貴族だなんてうそぶける時点で普通なわけがないのです」
「くぅ、さすが口じゃ勝てないわ」
「事実なのですよ」

そんなバカな会話をしているところで宿に着いたんだけど、入り口にちょっと美形の男が立っていた。
金髪で左右の瞳の色が違う神秘的な感じで。
「やぁ、お嬢様方、お話をさせてくれないかな？」
「消えろ、くされ坊主」
聞いたこともないような重々しい口調でフレデリカは拒絶した。
「これはひどいな、こんなかわいらしいお嬢さんにヒドいことを言われると、悲しいはずなのに少しうれしいのは何でだろうね？」
「消えろ、変態クソ坊主」
「へ、変態はヒドいんじゃないかな、お嬢さん」
「変態で言われ足りないなら「ド変態」。お帰りくださいなのですよ。」
なぜか胸を押さえて片膝をついて見せた美形は、なんだかうれしそうな表情でフレデリカを見上げていた。
「・・・初めての感覚だよ。こんな麗しいお嬢様に罵倒されるのが、こんなににも気持ちいいだなんて。」
とはいえ、このままだとみっともないので、ちょっとフォローすることにした。
「とりあえず、フレデリカが怒ってるのは、フレデリカを女扱いしてるからよ。これでも男なんだから」
「ん、な、な、なんだってぇーーーー！！！！」

雷に打たれたかのような反応の残念美形はフラフラとフレデリカに近づいてあらゆる角度でのぞき込んだ後で、ヒドく明るい表情に切り替えた。

「うん、これならアリだ！　さぁ、雄姫様、僕とともに夢の世界に旅立とう！」

「三千世界の彼方に消えてゆけっ、なのです！！」

フレデリカのオリジナル魔法、土と火の魔法を駆使したフレイム＝ゲイザーが残念美形を吹っ飛ばしたのでした。

その後もつきまとう残念美形の名は「マルコ」。
何でもロマリアのトップの従者だそうです。
つまり、ロマリアのトップは残念なのですね。
取引の相手として意識してはいけないタイプなのですよ。

「なんで？　今トップってことは、かなりの権謀術数に長けてるんでしょ？」

「あのですね。あんな下っ端の司教の動きすら押さえられないようなトップが、相手に出来るのですか？　逆にあんなバカを謀略のトップに据えているのだとしたら、さらにおつきあいできないのですよ」

「それはヒドいな、我が愛しの黒猫姫」

「消えろ、そしてシネ！」

フレイム＝ゲイザー三連発で吹っ飛ばしたのに、次の瞬間には復活しているのです。

変態の恒常性が恐ろしいのです。
いたしかたなく氷結魔法で封印したところ、これは即時復活できないらしく、二日ほど顔を出さなくなって安心していたのですが、トリステインに帰るというその日に再び現れたのです。

さすがに全身包帯を巻いた姿で。

霜焼け程度ですんでいるのがおかしいのですよ。
指や「あれ」の一つでもモゲてた方が、世界の為なのですが。

「く、黒猫姫、いま、非常に不穏なことを考えなかったかい？」
「男に向かって姫呼ばわりとは、どこまで腐ってやがるのですか？
あなたたちはどこかの軍士官ですか？」

女っ気のない軍隊内で「姫」という人物を決めて、勝手に萌えるというルールはいいですが、そんなものを持ち出さないでほしいのです！

「さすが、黒猫姫。わがロマリア正規軍のお遊びまでご存じとは。
その博学に頭が下がる思いです。」

とりあえず、僕への呼びかけ以外は変態性が少ないので実力行使を控えていたら、変態の上司である大変態、ロマリア教皇が面会したいと言ってきているそうです。
そんなもの、早く言ってこいなのです、と言うと、なぜか怒りに燃えた視線で「誘いに行く度に僕を殺そうとしたのがきみだ！」と叫びやがります。
とはいえ、こんな変態を連れてくる時点で誘わない気満点なのですよ？
こんな視線だけで婦女子を妊娠させそうなエロジャンキーを使者

にたてるなんて、気が知れないのです。

「あー、フレデリカ。一応言っておくけど、この残念美形が誘いにきたら、ボロが出る前に婦女子の大半がホイホイついていくわよ？」

「・・・趣味が悪いのです」

ルイズの一言に、僕は少し機嫌が悪くなりました。

確かに、王子様っぽい感じですが、この背後から染み出る変態オーラを感じないのでしょうか？

感受性の高い女子なら感じておかしくないんですよ？

「もう僕が変態でも何でもいいから、頼むから教皇様にあってください、お願いします」

「「何で最初からそうやって頼まないのよ？（のですか？）」」

「え、まさかの非難集中？　僕間違ってた？」

「だって、初対面でナンパを始めて、さらにいじられて喜ぶなんて用件で毎日来てれば、ついていこうなんて気無くなるわよ。」

「そうなのです。こんな怪しい人間について行くのは、恋に恋する常識知らずだけなのですよ。」

「・・・がーん」

まさかあれで正解だったと考えているとは思わなかった僕とルイズの方こそ「ガーン」なのですよ。

第十話　「狙撃」のルイズが生まれてたｗ（後書き）

もちろん、うちのルイズも脳筋ですｗ

※今回の元ネタ
フレイム＝ゲイザー　・・・　パワーゲイザー　・・・ＫＯＦ
女っ気のない軍隊内で「姫」という人物を決めて　・・・　旧海軍で実際にあった風習。現在もあるかは知らんｗ

第十一話「野心」生まれて消えるとき（前書き）

ちょっと題名が変化球ですが、それっぽいのでよしとしました。

第十一話「野心」生まれて消えるとき

教皇の用件というのは結構実りのあるものだったのです。
まず、最高位の司教の名で出されていた「クロムウエル文章」を教皇の名で出し直してくれたこと、そしてこの意志決定はロマリア全体によるものだと示してくれたのです。
つまり、裏技ではなく、本格的にロマリアをとりまとめることができたともいえる訳なのです。
とはいえ、

「結局、あなたはなにがしたいのですか？」

献上した新刊を麗しそうにほおずりしている男に冷たい視線を送ると、一瞬我に返る教皇。

「い、いやぁ、なんだかフレデリカ殿の新刊の入りが悪いのでね。新刊が手に入った喜びが勝ってしまったのだよ。」
「あの、ヴィットーリオさま。私にも読ませていただけますか？」
「おお、マリオ。私とともに後で読もうじゃないか。」
「・・・はい、ヴィットーリオさま。」

実にバラ臭いのです。ギーシュ的ではない意味で。
それも、鳥肌がたつ系の。
長い時間、ここにはいたくないので、早々に撤退を決めたのですが、作品の話をしたいとか色々と会話をさせろと言うので、さくっと切り換えしました。

「それは何らかの遅延工作なのですか？」

もちろんそんな意志はないと言うことで、即日で撤収撤退が始まったのです。

そろそろオリバー君にも破門の話が行っている頃合、焦って本国との連絡をし始める頃合いなのです。

絶望間に打ちひしがれた勘違い男を、叩き潰すには。

驚きの連続の年になった。

はじめは、かの有名作家「フレデリカ」が、我が王家の支持表明をしてくれた事に始まる。

愛しのアンリエッタによる援護らしく、彼女の運営する少女歌劇団の演目原作や脚本などが送られてきて、王族派の貴族子女の安らぎになっていた。

さらにさらに鞭が入ったのは、トリステイン王立少女歌劇団への招待チケットが舞い込み始めてからだろう。

娘のつきあいで見に行ったという貴族や部下たちが、いい娘孝行が出来たと鼻を膨らませているのだ。

それを聞いて欲しがらぬ貴族などいないわけで、無理を言ってアンリエッタに頼んだところ、公演回数を増やしてまで対応してくれるという事までしてくれた。

そのおかげか、王族派の結束は堅くなり、さらには貴族派からの寝返りも続出した。

寝返った貴族にも分け隔て無くチケットは振りまかれ、書籍も送られてきた。

つまり寝返れば戦功アリと認められるという流れが外から付けられたというわけだ。

逆に、我が王家は認めていない戦功なので、後々反乱が収まった後での判断基準にも出来るというおまけ付きであった。

何とも恐ろしいまでの配慮に頭が下がる。

そんな感謝を込めて愛しのアンリエッタへ愛の手紙を送ると、彼女は実に恐縮しきっていた。

この筋道は、彼女の幼なじみであり友である「フレデリカ」によるものだというのだ。

アンリエッタとあった際に、よくよく腹黒だの魔女だのと苦笑いではなしていた相手が、あの「フレデリカ」だとは思いもしなかった。

曰く、あの「カリン」の猛特訓に耐えきった少年。
曰く、四系統の魔法全てに等しく開花した才能。
曰く、無限の文才を持つ頭脳。
曰く、少女のような可憐さを持つ少年。
曰く、漆黒の闇を背負った謀略家。

全てはアンリエッタから聞いた話だが、話半分でも一人のこととは思えない。

なんというか、理不尽な人間だ。

そんな彼の布石により、反乱軍は瓦解寸前だという。

協力していた貴族たちの大半が離反し、背後にいたロマリアからも見放され、自称「レコンキスタ」は陰に隠れていた男、オリバー＝クロムウエルが丸裸の状態といえた。

頑迷に彼に従う貴族や兵もいるが、今の兵力差で見れば１０対１。

歯牙にもかけず押しつぶせるほどの差になっている。

だが、ここで慢心しては今までの繰り返しだろう。

士気をあげ、そして叩き伏せなければならない。

これだけの兵力差でも逃げない兵士となれば、それは死兵だろうから。

すでに死んでいると覚悟した勇兵はかなり手強いはずだ。

その事実を胸に、私は前線で指揮を執る。

自称「レコンキスタ」という反乱軍戦滅の為に。

ふはははは、見るのです、人がゴミのようなのです。

「フレデリカ、笑いが黒いわよ」

「失礼なのです。こんなに天真爛漫な笑顔を」

「フレデリカ、とりあえず、口元をゆるめる笑いはやめて。本当に怖いから」

「・・・ごめんなさいなのです」

船という兵力を全て失った自称「レコンキスタ」は、地理自利に逃げるかと思いきや、降伏を示し、坊主を張り付けにして差し出してきたのです。

ボコボコの状態で絶命した坊主の指を探ると、原作通りのアドバリンの指輪が出てきました。

そんなわけで、指輪の力で復活させ、今回の反乱の首謀者から裏切り者名簿を作らせたところ、王子からその名簿の公表はしないでほしいという申し出があったのです。

無論、執筆にも加えないでほしいと言い出したので、それなりの条件をたたきつけたところ、王も王子も絶句していたのです。

何しろ断絶されたモード公家とサウスゴータ家の復活というあり得ない条件を突きつけたのですから。

少し時間がほしいといい始めた王に、「サウスゴータの血脈とモードの血脈は絶えていないのです」と言ったところ、王も王子も真っ青。

すったもんだの末、本人たちが望めば、という前提で2家の復活の布石がおかれたのです。

そんな土産話を持って学院に戻ると、即座にスケベ爺に召集され細かな報告をさせられたのです。

無論、色々と話せないことも多いのですが。

で、王宮の御花畑王女を訪ねると、アンリエッタは一人カーニバル状態になっていたのです。

王女や枢機卿からは「よけいなことをしやがって」って目で睨まれていますが、御花畑からは大絶賛。

騎士に推挙するとか親衛隊の設立だとか領地を与えるとか大騒ぎしている王女を拳で黙らせて王妃に直接面談したのです。

基本、我が国も膿を出さないことには婚姻もくそもないのです。

故に、このレコンキスタに通じていたリスト「トリスタニア版」を有効に使ってほしいのです。

それを渡したところ、枢機卿は輝く瞳で笑い始めました。

王妃も「こいつ、こいつらだったのねぇ！」とか高笑いを始める始末。

一時的に気絶させたアンリエッタに活を入れて確認すると、どうやらゲルマニア婚姻推進派の大半がレコンキスタとつながっていたようなのです。

そりゃ、どうも、頭の暖かい連中です。

「どういうこと？」

「つまりですね、ルイズ。国の情報をレコンキスタに売りつつ王族は聖王家でないゲルマニアに売り飛ばし、金と実益だけ得ようとした筆頭が坊主という訳なのです。ああ、徴税官なんかも多いのが特徴的なのですね」

「・・・うわー、この国つぶれててもおかしくないじゃない」

「それを支えていたのが枢機卿なのです」
「すごいですねぇ、こんな御花畑王族を支え続けるなんて」
「ルイズ、ルイズ、それは言い過ぎでなくて！？」
「初恋成就のために、悪魔に魂を売った姫様には言われたくないですよ」
「あ、悪魔だなんて。フレデリカは古くからの友人。そう、性別を越えた親友ですのよ！？」
「とりあえず、色々と要求されると思いますので、覚悟してください」
「・・・フレデリカ？」
「にぱ～」

まぁぼったくるつもりはないけど、それなりに対価は求めるのですよ？
とりあえず、アンリエッタは早いこと片づけることとして、アルビオンと我が国の王位継承をどうするか、ですね。

「・・・あ」

祭り状態の解けたアンリエッタは、正直考えていなかったわ、という顔になったです。

「とりあえず、アンリエッタと王子の第一子をゲルマニアに婚姻で売りつければゲルマニア問題は解決なのです。」
「・・・なっ」
「さすが、フレデリカ殿」

息を詰まらせた王妃と関心の枢機卿。

「そうでもしないと、ゲルマニアだけ丸損でまずいのですよ」

「そうですな、それしかないでしょう。」
「アルビオンにアンリエッタを嫁がせると、我が国の王朝が一度途絶えるのです。この隙に動き出して政治を我がものにしようとしたバカとレコンキスタに通じたバカを一掃すれば、少しはきれいな国になるのですよ。」

深いため息とともにアンリエッタは僕を見つめます。

「それが、他国と我が国を一掃する企みなのですね」
「もちろん、これをやるかどうかはアンリエッタの気持ち一つなのですよ」
「・・・その身を削る行為、まさにそれを求められていますよ、姫様」
「そのようね、ルイズ」

だけどこの御花畑女は、ためらわないのです。
自分の幸せだけを考えているあたりが、恐ろしいのですよ。

第十一話「野心」生まれて消えるとき（後書き）

扱いの悪いアンリエッタですが、表面的に考えれば仕方ないっすよね？ｗ

とはいえ、王族よりも酷い扱いなのは宗教。
すでに仇敵状態ですが、これはひとつの思想に凝り固まって権力を振るう組織を嫌っているから、という理由もあります。
「東京」は難敵でしたからｗ

誤字脱字は追々追ってますが、シュツエーションと展開には異論が少なく、結構嬉しい思いです。

なお、ひぐらしメンバーの参入は、一年目以降になりますので、ご理解ください

※今回の元ネタ
更新なし

第十二話「コネ」が生まれて（前書き）

娯楽というものは麻薬のようなもので、徐々に刺激を欲しくなる、見たいな？

勿論わたしはやってませんｗ

第十二話「コネ」が生まれて

本当なら、政治と恋の板挟みで色々と考えてもらおうと思っていたのに、花畑は速攻で恋を選びやがったです。

その決断の早さに驚いたですが、それ以上に驚いたのが、自らの即位と王子の即位を決め、共同統治という形にすることを決めたのです。

どっちもとろうという魂胆が恐ろしいのですよ。

「本当ならルイズに我が国を預けたかったんだけど、最近ルイズって脳筋だから・・・。」

「姫様、ひどっ！」

「確かに、ルイズは最近考えることを放棄しているのです」

「そりゃ、フレデリカと付き合ってれば、考えるのがばからしくなるし」

「ひどいのです、ひどいのです。ルイズが脳筋なのはぼくのせいではないのに・・・。」

「ええ、ええ、フレデリカはなにも悪くありませんわ」

「姫様～」「フレデリカ～」

「って、何であたしだけ悪者!?」

まぁ、僕たち若者だけで遊んでいるバックボーンで王妃や枢機卿が部下を集めていろいろと指示をしていますです。

裏切り者狩りが始まったのですよ。

大箱入りの金貨なんて始めてみた。
このたびの働きに応じた恩賞ということで、どっかり金貨が振るまわれた。
私二箱、フレデリカ三箱。
全部、金貨で。新金貨じゃなくて。

やばい、どこかの領地が買える。
ゲルマニアじゃなくて、トリステインで。

「こ、こんなにもらって大丈夫なの？」
「ガンガン血祭りに上げられている裏切り者の懐が暖かいお陰なのですよ」

あー、そういうこと？
つまり、裏切り者は処刑、金は国庫で没収、その分け前がきた、と？

「そのうち実家の領地が増えるはずです。ルイズもなにかしら役職と勲章が来るですね。」
「うわ、面倒」
「嫁にいかなければ、男爵夫人程度にはなっておかないと面倒なのですよ？」
「えー？　フレデリカ貰ってよ。」

というか、なんであたしら婚約してないのかしら？

「そんなことをしたら、師匠に殺されるのです」

「そう？　結構歓迎してくれると思うけど？」

これは結構本気。

フレデリカが嫡子じゃなければ、絶対にお母様はリステナーデから強奪してる。

「ルイズには、もっと男らしい騎士っぽい男の子の方が似合うと思うのですよ？」

よく、フレデリカにはそんなことを言われるけど、私としては、隣のたっている男の子ってフレデリカ以外に思いつかないのよねぇ。

そう、昔ちょっと家にきたワルドさまも、実はヤバイ趣味の人だってフレデリカ経由で解ったし。

というか、最近まともな男って見たことないのよ。

いつも隣にいるのはフレデリカ。

で、寄ってくるのはフレデリカファンか変態ばかり。

なんか、まともな出会いって幻想かと思うほど。

あー、なんで魔法学校が共学なのに出会いがないかな？

私みたいな一般的貴族には、肩身が狭いほど濃いのよね、この学校って。

やだ、ちょっと泣けてきた。

「ルイズ。」

「フレデリカ」

「・・・ちゃんとルイズも濃いメンバーの中心だから安心するのですよ」

「（・・・ばた）」

すでにぼくの部屋の調度品レベルになじんでいるタバサは「来るたびに新しい発見がある。やはりここは桃源郷」とかいって簡単な寝具まで持ち込んでいる。

そのくせ寝食を削って読書をするという発言自体に嘘はなく、ぼくの部屋で栄養失調や睡眠不足で気絶などで倒れているのを発見されたのはお約束。

いつもならぼくやルイズが気をつけているんだけど、長期に外遊工作をしてきたので手をかけられなかったのが敗因なのでした。

とはいえ、本人は至ってご満足で、「倒れるときは前のめり」とか嘯いてるあたり反省の色はないのです。

原作では実家から無茶振りされた任務をちょくちょくこなしていたはずなのですが、このタバサは完全に学院に居着いているのはなぜなのでしょう?。

大丈夫なのか、と思っていたのですが、そんなタバサから突然お願いがきた。

「・・・フレデリカ、お願いがある」

「なんですか?」

ぼく考案マルトー制作のハシバミチップスをハミハミしながら、就寝前の読書&執筆時間の時、タバサは真剣な顔でこちらを見て切り出した。

「・・・この部屋の本を貸してほしい。」

「? いつもみたいに、ここで読むのはダメなのですか?」

「・・・学院に来れない、とても忙しい人にも見せてあげたい。で

も、全部を買うだけのお金もない」

さて、誰だろう？

タバサが「タバサ」と名乗ってる時点で、母親は人形「シャルロット」を抱いている状態だと思うのです。

つまり、最愛の母親に見せるためではありません。

では、だれ？

「・・・従姉妹の、お姉さん」

うわ、つまりイザベラ姫？

どうしよう、一歩踏み込むべきなのですか？

「持ち出すのはいいですけど、ここの本はワンオフが多いので、複写は困るのですよ？」

「・・・販売はしないので、複写は許可してほしい」

「だったら、流通はだめですよ？」

「絶対に守らせる。」

「なら・・・。」

そういいながら、僕は一枚の固紙、色紙を再現したものにサラサラとサインと追記をする。

「これを従姉妹のお姉さんに渡してくださいなのです」

「・・・・！！」

そこに書いたのは、僕の名前と「イザベラちゃんへ」と書いた追記。

「・・・なぜ？」

「実家の諜報活動は国家を越えてるのです。だからタバサの本名も知ってるのですけど、友達同士にあまり意味のない情報なのですよ？」

原作知識ですが、当たっていたみたいなのですよ。

「・・・ありがとう」

そういいながら、ぎゅっと色紙を抱きしめるタバサ。

「あ、あとこれを渡してあげてください」

渡したのは少女歌劇団の「貴人席」チケット数枚。

タバサは目を丸くした。

「・・・いいの？」

「僕の本を喜んでくれたら、これも興味を持ってくれると思うのです。僕の本の虜になっているようだったら、タバサから渡してあげてほしいのです。そうすれば、ハートをがっちりキャッチなのですよ。」

「・・・フレデリカ、ソナタに感謝を。」

さすがコアな読者。

部屋留めの「貴界の紋章」もガンガン対応中なのです。

あらゆる任務から解いて、特別任務に専従させていた人形から報告書と共に大量の書物が送られてきた。
木箱数箱で梱包されていたそれは、世間に流通していない一品ものばかりだそうで、当然返却の必要性があるが、流通をしなければ写本を取る許可を得ているという。

ああ、どれだけの成果を示すんだい！

さらに、人形のいや、シャルロットの正体も掴んでいたというのだから驚くしかない。
さすがお父様の趣味の謀略を僅か数ヶ月ほどでつぶしただけのことはある！
さらにさらに、シャルロットの背後にアタシが居ることを察知してか・・・

「こんな、こんなものまで・・・。」

色紙、と呼ばれる紙製の大型カードに、あの方の「フレデリカ＝ベルンカステル＝ド＝リスティナーデ」のサインと「イザベラちゃんへ」と書かれた追記まで！！
ああ、こんなことまでフレデリカにさせる事が出来るほど友誼を結んだのか、よくやったロッテ！！
シュバリエ程度じゃすませられない、絶対に何か報酬のでっかいのを掴ませないときがすまない！！

「イザベラ様、このようなものまで入っておりました」

封蝋で封印された封筒。
その封は見覚えのある紋章だった。

それは、シャルロット、ロッテの紋章、ではなかった。
ロッテの報告書の中にあった一品ものの作品の一つ、「貴界の紋章」におけるヒロイン、パリューニュ子爵の紋章。
くっ、そこまで、そこまでやるのか、ロッテ。
あたしも政務がなけりゃ、学院（そっち）に行きたいぐらいだよ！！
そんな想いと共に封を開けると、そこにあるものをみて膝から崩れ落ちた。

「イザベラ様！！」

私を抱き起こす侍女の一人が、封筒の中身を確認して同じように崩れ落ちた。
やばい、これを直接見せると全滅だ！
とっさに封筒を服の内側に滑り込ませて周囲をみるが、開梱という名を借りて貪るように読書会を開始していた侍女たちにには気づかれていないようだった。
セーフ、というやつだね。今の段階では守りきらなければならない秘密だね、「これ」は。

「いいかい、あんたら。読むのは「館」に運び込んでからだ。そうしたら、あんたらの休み時間なら「そこ」に詰めることを許可するよ。」
「「「「「はい、わかりました、イザベラ様！！」」」」」

さて、侍女たちは「館」からしばらく出てこないだろうから、倒れている侍女「エタニア」を執務室に連れ込まないとね。
こんな楽しい秘密は知る者が少ないほうが楽しいに決まってるからね。

第十二話「コネ」が生まれて（後書き）

うーん、ルイズの脳筋化は楽しいですねー

これでイザベラフラグが立ちましたw

※今回の元ネタ

貴界の紋章　・・・　星界の紋章

第十三話「持ち出し禁止書庫」が生まれて（前書き）

タイトルに一定方向を持たせたら、アップするのが苦しくなってしまったｗ

本末転倒ｗ

第十三話「持ち出し禁止書庫」が生まれて

ボクの部屋にきっちり詰まっていた本が一切なくなったのは、タバサが「実家」に一度送ったからだ。

さすがにその状態だとナンだったので、僕の実家の部屋から同量の本を運び込むと、再び目を輝かせるタバサ。

「まるで、リザレクション」

とはいえ、これは別の意味で部屋留めの本なので、ガリア送付は禁止です。

「・・・だめ？」

読んでみればわかります。

「・・・・」

無言で数冊読み始めたタバサだったけど、さすがにドンヨリした顔で「送付は見送る」と頷いてくれた。

あははは、だってほら、女装異性愛とか男装異性愛とか、けっこうギリギリなＬＯＶＥものばかりなのですよ。

ただ、この系統は学園内ならＯＫなので、広めないように厳重注意しながら閲覧しているのです。

逆に、男子に閲覧させているギャルゲー系文章は、絶対に外に出てこないのです。

この辺は男子と女子との差が出ているといえるのです。

男子は陰々滅々に向かう性根があるのですよ。

というわけで、かるい倒錯した人間関係が広がりそうな気もしますが、まぁ、良いのではないかというふうに考えているのでした。

で、イザベラ姫の元へ竜数匹分の本を送ったのですが、その結果が手元にあった。

ガリアの第一王女「イザベラ」様からの書状で、今回部屋留めにしていた本の精査結果が送られてきたのだ。

僕の部屋にある本は、なにも意地悪で蔓延さえないわけではなくて、読む人間を選ばないと速攻で「異端審問」されてしまうような内容だと思ったからなのです。

もちろん、ロマニアにはカードが何枚もあるで一度や二度はいいのですが、「異端」のイメージがつきまとうと、小金欲しさに審問官が付きまとうことになるので面倒なのですよ。

そんなわけで部屋留めにしていたのですが、その内容を精査してやるというのがイザベラ様からの申し出で、その結果の一部が来たのです。

「「貴界の紋章」は、仮想的を異端宗教っぽくすればバカ売れ、ロマリアにも販路を広げられる、ですか」

「「始祖様がみてる」は逆に、宗教の扱いが軽いので、横槍の危険がある、って言ってきてる」

「でも、あれって、最高司教への取引材料になるぐらい人気なのですよ？」

んー、と首をひねる僕たちだったけど、その思索は一時中断されたのです。

「フレデリカ、朝御飯食べにいきましょ」

「了解なのです、ルイズ。タバサ行くのですよ」

「・・・今日は食べない。授業まで「読む」」

「そんなの許す訳ないでしょ」「そうなのです」
「あら、あんたたち、まだ行ってなかったの？」
「タバサがまたゴネてるのです」
「・・・また、ミイラになったアンタを回復させるのはイヤよ！？」
「・・・わかった」

今までタバサは二度のミイラ化をしていて、そのたびにキュルケに助けてもらっているのです。

「タバサ、持ち出し禁止なのですよ」
「・・・せめてブックカバーをつけるから許してほしい」
「簡易製本しかしていない本なんか、だれも気にしないわ」

うん、最近頭を使い出したのですね、ルイズ。
脳筋発言は結構効いたみたいです。

「そうでもないわよ？　タバサが読んでいる本の大半は、フレデリカの最新作の試作品だって噂になってるし」
「・・・わちゃー、なのです」
「なおさら、持ち出し禁止ね」
「・・・がびーん」

とりあえず、小型装丁版「今日から「勇」のつく自由業」を渡し、朝食に急ぐのでした。

貴族様の中でも特異的に平民に優しい方、フレデリカ＝ベルンカステル＝ド＝リスティナーデ様は、学園の侍女や厨房の職員に気を使ってくださいます。

侍女には気遣いの言葉や「例のもの」とか、食堂には新考案したという料理の試作や研究の協力。そして貴族様とのもめ事の仲立ちもしていただき、頭を下げるだけでは済まないほどです。

何度この体を、と思ったかわかりませんし、侍女仲間もみんなそんな想いです。

口にすればフレデリカ様から怒られるので黙っていますが、いつかフレデリカ様のお手つきになりたいというのも本音だったりします。

「シエスタ、おはようなのです」
「シエスタ、おはよ～」
「おはよー、シエスタ」
「・・・おはよう。」

フレデリカ様にもっとも近いところにいるご友人たち、ラ・ヴァリエール御息女ルイズ様、ゲルマニアのツェルプストー家御息女キュルケ様、そして一般的には謎の貴族となっているタバサさま。（正体はバレバレですが。）

この御三人はまるで「始祖みて」の三人のようだと評判です。

貴族様たちから伝え聞く「始祖みて」に憧れて、侍女でも文字を習いたいという娘が増えたのでフレデリカ様に相談すると、

「では、僕が教えるのですよ。」

と言ってくださった。

その後はフレデリカ様に加えてタバサ様、ルイズ様が指導してくださったおかげで、侍女は全員文字を読み書きできるようになった。

おかげで、フレデリカ様の部屋に入って帰ってこない子が増えたんだけど。

「おお、リカ嬢ちゃんか。」
「おやじ、いつものやつ、なのです！」
「おっし、わかったぜ」

ふつうの貴族様たちと違って、フレデリカ様たちは朝食や夕食を軽くすませる。
なぜかと聞いてみれば、

「シエスタ、暴飲暴食は「風上」の元なのですよ？」

ひぃ、と聞こえる範囲の侍女全員が青くなりました。
速攻で理解した侍女たちは、賄いの範囲で健康的な食事という話をしていただき、実践したところ、ミルミル体が絞れてきてしまい、驚きと感謝の大爆発。
その話を聞きつけたルイズ様たちも実践し、信じられないほど美しくなられました。
ただ、貴族様の席で賄いを食べていると周囲との軋轢も生まれるので、こうやってバックヤードまでいらっしゃる様になられました。

で、この賄いもフレデリカ様の考案が随所に生かされており、正直、普段の食事が色あせます。
なにしろ、マルトーさんも負けたといって、郷里に帰ろうとしたぐらいなのですから。
でも、もっと驚いたのは、うちの村の特産品である「ミソ」と「ショーユゥ」を使った見事な料理を作り上げたことでした。
「メン」という料理は様々な種類が生み出され、マルトーさんも触発されて新開発に余念がありません。
フレデリカ様が教えてくれたもの以外にも、様々に作り出し、様々にアレンジしてゆきます。
そのたびに試食があるものだから、生活が、体型が！！

「おう、りかちゃん。このまえの「ハシバミチップ」。ダチの店で大好評だぜ。」
「さすが酒飲みはわかっているのです！」
「おいおい、酒場だなんて言ってねぇぜ？」
「あの味を好むのは、酒飲みと趣味人だけなのです。」
「はは、ちげーねえ。」

こんな観察力にも驚かされます。

「フレデリカ、そろそろいくわよ。」
「了解なのですよ、ルイズ」

ぴ、と敬礼してフレデリカ様たちは立ち去った。

「ありゃー、いい領主になるな。」
「そうですね、タルブを出てフレデリカ様の領地にでも行こうかな？」
「そりゃいいや！」

第十三話「持ち出し禁止書庫」が生まれて（後書き）

ハシバミチップは、ゴーヤチップスが元ねたです。
今回生まれた禁書棚に、「おとボク」だの「トリカエバヤ」だのがごろごろしています。ｗ

※今回の元ネタ
女装異性愛とか男装異性愛　・・・　「おとボク」だの「トリカエバヤ」だのｗ
ギャルゲー系文章　・・・　泣きゲー系。男子生徒の認識では、既にエルフはエロフになりつつあるｗ
今日から「勇」のつく自由業　・・・　今日から「マ」のつく自由業

第十四話「外交手札」が生まれて

実家からの手紙で、ロマニアからの接触が多いという苦情が来ているのです。
異端審問官ではなく、純粋にファンとして接触してきて感動して帰って行くそうなのです。
で、その際に「お土産」を置いて行くそうです。
その内容が、その、痛々しいもので。
たとえば、始祖みての自作絵画とか、始祖みての自作詩集とか。
まぁ、学院でもその傾向がありますし、僕の部屋の一角を「そういうの」が占めているのは事実ですけど、坊主が同じ様な行動にでるのはどうかと・・・。
最近では教皇様からも「そういうの」が届いて、感想を求めてくるのが困るのです。
やっぱりファンと対象が近すぎるのでしょうか？

コンコン、とと、誰か来ましたね。

「我が友、少し良いかね？」

現れたのはバラバカ。

「友よ、いま、ひどいことを考えなかったかい？」
「まさか、いつもどおりの僕ですよ？」
「ならいいのだが。」

とりあえず、共用カップでお茶を出すと、少し感動したようなの

です。

「・・・ふむ、この茶器で、乙女たちが・・・。」

「しね。」

バカな話はそこそこに、とりあえず話を進めると、男子寮の相談だとか。

いま、女子寮には自治組織が何となくあるのです。

これは学校側が準備したものではなくて、「始祖みて」ファンによる「山百合会」なる組織が出来ていて、スールなシステムによる緩やかな自治が行き届いているのです。

だから、バカみたいな規則を作らなくても、ゆるい規制を加えれば自浄作用が発揮される流れなのです。

つまり、このシステムを男子寮にも導入できないか、と言う相談なのです。

バラ、いや、ギーシュの相談はわかるけど、男子寮には難しいのですよ?

「やはり難しいかね?」

「・・・男子は御山の大将が「強い」か「すごい」かしないと纏められない原始人の集まりですから」

「ひどいね、どうも。」

「事実は客観的にとらえるべきなのです」

まぁ、外の権力とかもあるので難しいとは思うのですよ。

「つまり、世間的な権力と評判、そして学院内での権勢を誇る人間が祭り上げられた途端に変質しないか、そういうことだね?」

「最近頭を使っているようで、えらいえらい、なのですよ?」

「・・・我が友に後れをとってるからな。いろいろと考えざるえん

よ」

そう、いろいろと本を読ませているうちに、ギーシュの学力がガンガン上がり、いつもルイズに追いつかないまでも学年一桁を必ずキープするほどになったのです。

逆に、女子に接そうなくアプローチする言動が無くなったせいで、こいつ本当にギーシュ？的な魔改造状態なのです。

原作と大差なく感じるのは「豚」ぐらいなものなのですよ。

あと「香水」かな？　いやいや、貧乏なのが変わらないだけで、逆に僕の部屋の住人の一人になりつつあるのでした。

なにしろ、平民用の簡易装丁版を買うのも惜しむほどの状況らしいですから。

「始祖みて」は簡易装丁版で一気読みして、商売になりそうな部分をリストアップしてダッシュで香水を作り、学園内の独占専売件をもぎ取って行くようなモサなのです。

強者ではなく「モサ」。

限りなく本物に近いけど、どこか偽物臭が消えないと言いますか、なんといいうのですか。

まぁ、彼女には大金を与えてはいけないことを知っている僕は、もちろんのこと「著者」としてのマージンをとって、泣かせてしまいましたが。

「で、誰がいいかな？」

「僕は男子寮に詳しくないのですよ？」

「そういうと思って、各学年からピックアップしてきたよ」

並べられた名前をみると、まるで宮廷序列に爵位順列を付け加えたかのようなリスト。

その上なぜか、「アンドレ希望」とか「サンレイズ（日光）希望」とか「ムーンレイズ（月光）希望」とか書いてあるし。

思いの外、洗脳が充実していたみたいです。

あれ？　光の君がいないな？
ムー、さすがに乙女の夢を具現化しすぎましたかね？

「ギューシュ、光の君希望がいませんね？」
「それは無理だ。」
「・・・やっぱり、敷居値が高いですか。」
「そうじゃない。学院で最も光の君に似合っている存在がいるのに、自薦できるはずもないだろう？」
「・・・だれなのですか？」

僕の言葉に、さも呆れたという表情で肩をすくめるギーシュ。
むむ、ギーシュのくせに生意気な。ギーシュのくせに生意気な！！
大切なことなので二回言いました。

「・・・我が友、とりあえず、こちらが推薦状だ。」

そこには、

『フレデリカ＝ベルンカステル＝ド＝リステナーデ　を寮自治組織「生徒会」の会長「光の君」へ推薦する』

というもので、寮生２／３の署名が並んでいます。
あと１／３は「アリス」への推薦。
・・・泣かす、泣かすのですよ。

「つまりだ、空位に出来ない最高責任者を君に押しつけることにより、内外の意見を押しつぶし、楽しく「始祖みて」ごっこをしたい、というわけさ。」

有り体にぶっちゃけたギーシュ。
僕はとりあえず了解をすることにした。

「というわけで、男子寮にも部屋を作ったから、たまには来たまえ。そうそう、男子のロマン本は君の部屋のみの閲覧に切り替えたから、その辺もよろしく頼むよ」
「はぁ、つまり男子寮版の「館」なのですね？」
「そういうことだ。とりあえず、君の親交厚い次女に任せているので、こっちと同じ様な内装になる予定だが、気に入らないところがあったら言ってくれ。予算は組もう」
「いいのですよ。これでも色々と小銭を稼いでいるのです。自分の部屋ぐらい自分で何とかするのですけど・・・」
「ですけど？」
「寝るのはこっちなのです。」
「・・・ま、順当だね」

そんなわけで、男子寮に住んでいないのに男子寮長を拝命した僕なのでした。
もちろん、今回の資料をそろえたギーシュと愉快な仲間たちは、漏れなく「生徒会」に接収したのでした。
さぁ、働いてもらうのですよ。

そんな男子寮と女子寮を行き来する生活の中、女子寮で執筆しているときにノックがあった。
この時間は比較的に執筆していることが多いので、館に出入りし

ている女子も「黄金の時間」ということで入室を控えることに成っているらしいのですが、緊急時や休養があると色々と現れます。
今日は誰だろう、って、タバサ。
あれ？　いつもなら問答無用ですよね？

「いつもこの部屋にはフレデリカ以外がいる。そんなときにノックはいらないけど、一人の時にはちゃんと気を使う」
「・・・風の魔法で部屋を調べるのは、マナーに引っかかるのではないのですか？」
「フレデリカは気にしないし私も気にしない」

まぁ、いいか、とタバサを招き入れると、背後にはルイズとキュルケもいるのです。

「なんだか、ワンセットなのです。」
「あら、それは光栄ね」
「なら、フレデリカも一緒でしょ？」

まぁ、確かに。

そんな感心とともにミンナに試作品を出します。
片方はグラスに刺された野菜棒。
人参っぽいものやセロリっぽいものが乱雑に刺さってます。
で、ボウルには、新作試作品が、輝いているのです。

「えっと、これは？」
「この野菜の棒を「この」ソースにつけて食べてみてほしいのです」
「・・・ごく」

はじめにタバサが、続いてルイズとキュルケが試し、目を輝かせ

た。

「な、なに！　このソース、おいしい！」
「す、すごいわ、フレデリカ！！　ゲルマニアでもトリステインでも食べたことのない、新感覚！！」
「・・・（もしゃもしゃもしゃ）」
「タバサ！　私たちもまだ食べる！！」
「そうよ、私たちの分も残しなさい！」
「・・・・（もしゃもしゃもしゃ）」

うんうん、大好評ですね「マヨネーズ」。
あの世界では「マヨラー」なる人種まで生み出した程のソースです。この世界でも一大旋風を生み出すでしょう！
とりあえず、学院内で中毒者を増やし、ド・リステナーデから大々的に販売と簡単なレシピの公表、そして独自改良されたリステナーデ版を売り出して、「マヨネーズ」ならリステナーデと言わせるのです！！

そんな僕の未来設計は、目の前で野菜とマヨネーズを奪い合う少女たちによって支えられているのです。
ああ、たのしいですねぇ。

しばらくの混乱の後、マヨネーズの残りまで嘗めきったタバサが本題を切り出した。

「従姉妹が、少女歌劇団を見に来たいけど、お忍びにしたい。協力してほしい」

視線で問う、みなまで話しているか、と。

微かにうなずくルイズとキュルケ。
ふぅ、と溜息を漏らす僕は、背を伸ばした。
「タバサの従姉妹の話、知ってるのですね？」
「ええ、わかってるわ」
とルイズ。
「さっき、直接聞いた」
そしてキュルケ。
何となく解っていたルイズは別にして、結構不機嫌そうなのはキュルケ。
まぁ、キュルケだけ知らなかっただけみたいなものだし。
とはいえ話を聞いてみると、歓迎すべき点が満載立ったのです。
たとえば、タバサの母親の「病気」は、イザベラ嬢の政治力で王を動かし、そして「薬」を入手。
すでに投与が始まっており、自分が抱いている人形が「シャルロット」で無い気がしてきているという。
加え、オルレアン公爵家に押された不名誉印は後数年で撤回され、王家への復帰や継承順位復帰も視野に入っているとか。
もちろん、巻き込まれる形で不名誉を受けた貴族にも復帰の機会が与えられることになり、ガリア王の懐の深さを見せつけることになりそうだそうです。
「すべては、従姉妹が、イザベラお姉さまが、解ってくれたから・・・。」
ぼろぼろと涙を流すタバサ。
原作みたいに険悪な関係じゃないようだし、結構いい感じ？　な

のですよ。

「何度も世話になってるフレデリカ、あなたに頼むしか思いつかなかった。」

「・・・本当にお忍びで良いのですか？」

「どういうこと？」

「たとえばですね、「タバサ」を世話してくれている「トリスタニア」に表敬訪問し、名誉復帰とその報償を与える公開の場にしてしまうとか？」

「・・・！！」

「フレデリカ、それ、いい！」

「さすが「物語」のフレデリカね。」

「・・・でも、イザベラお姉さまが・・・。」

「今後の仕事が減る上に、トリスタニアの御花畑王女に少女歌劇団を観劇する時間も売れる。この外交カードを逃すのは第一王女としてモッタイナいのですよ？」

「あー、姫様なら泣いて悔しがるかも」

「フレデリカ、もう一枚ぐらい裏がありそうね。」

もちろんあるのですが、手品の種はあかさないものなのですよ、にぱ～。

第十四話「外交手札」が生まれて（後書き）

※今回の元ネタ

アンドレ・サンレイズ（日光）・ムーンレイズ（月光）・アリス・光の君　・・・　お釈迦様も見てる参照

第十五話「ぬこ」が生まれて・・・ｗ（前書き）

調子にのりましたっ！

第十五話「ぬこ」が生まれて・・・w

「物語」のフレデリカからの書状を読んで、自分がいかに舞い上がっていたかを思い知った。
これだけの外交カードを得られるのに、みすみすお忍びだなんてバカな真似をしなくてよかったと本気で思った。
さらに、

「これで貴人席チケットを「記念」にとっておけるのですよ」

なんて追記が書いてある。
さすがに苦笑いだよ、「物語」。
あたしや侍女たちの葛藤をものの見事に読み切ってやがる。
悔しいけど何枚も上だね。

「ききな。あんた達も大好きな「物語」からの招待状は、むざむざ使わずに済みそうだし、あんた等全員引き連れて「あそこ」にいけるよ、喜びな！」
「「「「「きゃーーーーー！！！」」」」」

まったく、各国の間者だって混ざってるんだろうけど、この瞬間だけは誰も足をひっぱりゃしない、そんな一体感がある。
たまらないね、「物語」。
あたしも学院に行きたいよ、ほんとに。

フレデリカ会長からの発表は、それは驚愕するものだった。
なにしろ、学院内に「騎士団」を作るというのだから。

もちろん、正式なものではないけれど。
しかし、
「子猫（キティ）騎士団は無かろう！」
「かわいいのですよ？」
「せめて幻獣の名前を付けようじゃないか」
私の言葉を全く意に介さないフレデリカ会長だったが、ギーシュの提案をきいて首をひねる。
「じゃぁ、ケットシー」
「それ、猫妖精だよな、あの「ベニシアのゴンドラ少女」の！！」
「むぅ、じゃぁ「ペロ」。」
「それは「長靴を履いた猫」だったよね、そうだよね！？」
「何でそこまで猫がいいんだ！」
その一言にニヤリと笑うフレデリカ。
「これをミンナに着せたいからなのです！！」
あらわれた「それ」をみて、私とギーシュは固まった。
きれいな騎士隊帽とマント、そして杖カバー。
それぞれに「猫耳」「猫尻尾」「肉球ハンド」がついているのだ。
「「どんな羞恥プレイだ！！」」
「ぼくだけ「会長服」とかいうヒラヒラの制服を準備するのがいけないのです」
たしかに！　先ほどの「ベニシアのゴンドラ娘」っぽい白を基調とした服と帽子をプレゼントしたところ、女子寮でも好評で、普段

着でも着るように強く要望されていることの復讐だろう。
くそぉ、騎士団には入りたいけど、猫は・・・つらい。

「一度は爆笑を受けますが、絶対、絶対、時間がたつと耳や尻尾をさわらせてほしいという婦女子に溢れるのですよ?」
「くっ、さすが「物語」のフレデリカ！　私たちの達の琴線を心得てやがる！」
「マリコルヌが聞けば、進んでこの格好になるだろう・・・。」
「デブ猫は人気、かもしれないのですよ?」

「のったーーー！！！　その話のったーーーー！！！」

現れたのは「かぜっぴき」。

「マリコルヌ、きさま、たかがモテたいだけのために、今のプライドを売るのか!?」

原作のギーシュなら絶対に言わない台詞ですね。

「プライドごときでちやほやしてもらえるのならば、このプライドなど売り払うわい！」
「おまえの必死ながっつきが女子を遠ざけているのがなぜ解らん！？」

アラン、それが解らないからマリコルヌなのですよ。

「モテたいでござる、モテたいでござる、女子の冷たい視線も、近づいただけで泣きそうになる顔も、ゴメンなのでござる・・・・！」

「・・・マリコルヌ。女子は色々なのです。集団生活をしていると、周りにあわせなければならないときがいっぱいなのです。だから、多くの人に避けられている男子に近づくことができないのです。」

「ふ、フレデリカ会長・・・。」

目を潤ませるマリコルヌ。・・・きもいのです。

「でも、目先が変われば、タイミングさえ合えば、あなたに一歩近づくことができるのです」

「・・・・かいちょ・・・・」

ふっ、千里の道も一歩からなのです。

「だから、きみは、これを身につけるのです」

きらきらした瞳ですべてを身につけたマリコルヌは胸を張った。

「僕は、新世界の「ぬこ」に、なる！！」

その猛々しいまでの決意は、ちょっとだけ格好よかったです。

それはさておき・・・・

「受け入れるですか？　受け入れないですか？」

「・・・結構この格好、いいかんじだよ？」

「くぅ、不覚にも男に似合うことをマリコルヌで実証されてしまった・・・。」

「くそっ、プライドさえない貴族だと？　新種め！」
「今受け入れれば、団の金庫は僕のポケットから出すのですよ？」
「「喜んで受け入れます」」

・・・君らも同類、なのです。

なんなんだい、あの強烈なまでの同期した動きは！？

トリステインからの招待という形で招かれたせいか、アンリエッタ姫と共に国賓歓迎のパレードを見ていたのだが、騎士団最後に現れた集団を見て目をむいた。
騎士帽に猫耳がつき、マント中央には尻尾がゆらゆらしている。
掲げられた杖の先には猫の手っぽいカバーがついていり、それでいてにこやかな笑み一つない、軍隊にだってこんなに統率された動きをする隊は無いって程の統率された部隊だった。
その先頭に立つのは、真っ白な帽子とドレスのよう内服をまとった少女、いや、少女のような少年だった。

彼が杖を振り号令をかけると、それにあわせた彼らが「サーイエッサーっ」と返答して動きをあわせる。
その動きにブレはなく、その動きは切れがあった。
まるで機械人形のような同期した動きに声を失っていた観客だったが、まるで劇場かのような歓声と拍手に包まれていった。

「どうですか、イザベラさま。」
「・・・正直に言うとね、あの格好で笑った自分を絞め殺してやり

たい気持ちだよ」
「いえいえ、それは仕方のない話ですわ。なにせ、あの「ケトッシー学生騎士団」の主催はフレデリカですから。」

聞いた瞬間、なるほど、と思わされた。
あの「物語」なら、これぐらいのイタズラを仕込むだろう。
とかいえ、あの動きは一朝一夕にできるものではない。

「・・・何ヶ月前から仕込んでたんだい？」
「二週間ですわ」
「なっ、なんだって・・・？」

あの動きを、あの統率を二週間で！？
そんな驚きの中、杖をしまった「ケトッシー学生騎士団」は、一斉に右手を掲げる。
すると観客席から一斉に長い何か、いや「猫の手」がついた擬杖が投げ込まれ、全員の手に吸い込まれた。
瞬間、隊員達は素早い動きと連携という「演舞」を見せ、観客席を再び沸き上がらせた。

「・・・あの見た目で、この統率力。軍の常識を塗り変えたようなもんだね」
「いえいえ、フレデリカの狙いはもっと別のところですわ」

そういいながら会場の端を指さすアンリエッタ王女。
そちらの方を見てみれば、なぜか人だかり。

「あそこでは「猫耳」「尻尾」「猫の手」が売ってますの。」
「・・・は？」
「かっこカワイイアクセサリーを自分の彼氏に付けるもよし、彼女

が付けるもよし、子供にねだられて買うのもよし、なかなか国庫が潤いますわ」

「・・・なんつう腹黒さ」

「それがフレデリカ、ですわ」

ついでに猫耳・尻尾・猫の手のセットが、お土産に渡されたのだった。

第十五話「ぬこ」が生まれて・・・ｗ（後書き）

話の主軸マリコルヌ。
実は重要なキーマン、の出汁ｗ

※今回の元ネタ
ベニシアのゴンドラ少女　・・・　ＡＱＵＡ
長靴を履いた猫　・・・　長靴を履いた猫

第十六話「乾杯」が生まれて（前書き）

乾杯ときいて、ナニを思い出すかは世代によります。

わたしは・・・・

第十六話「乾杯」が生まれて

やり遂げたのです・・・。

パレードが始まる前は不満で一杯だった団員達は、パレードが終わった後にあの猫耳が一般にも売られていると聞いてさらに不満に思ったというのだから大笑いなのです。

まぁ、僕持ちで「魅惑の妖精亭」打ち上げを決定したら、不満なんか吹っ飛んだみたいなのですが。

「・・・でもな、この一体感は、俺達だけのものだよな！！」

「「「「「おおおお！！！！」」」」」

もう何度目になるか解らない乾杯が響くのです。

みんな格好は「団員」のままなもので、店の女の子も大騒ぎ。

露店で買った猫耳や尻尾とは材質が違うので、さわりごごちに差があり、女の子達に大好評。

隊の紋章でもある「太めの猫が剣を掲げて飛び上がろうとしている図」に最もにているマリコルヌなど、男女かまわずチヤホヤされて、さぞヤニが下がっているかと思いきや、結構紳士的に振る舞っているのが驚きなのです。

小首をかしげたボクに、レイナール。

「ああ、あれか？　あれは今まで夢にまで見た光景が現実になって、パニックになってるだけだな。」

レイナールの解説は、たぶん的を射ているのでしょう。　彼の背後にいつもはいる「淫獣」の気配が消えていますし。

「しっかし、いいのか、団長？　ここの払いだって団の金庫だって結構な金かかってるだろ？」
「大丈夫なのですよ、レイナール。露天の猫耳収入はこの程度では揺るがないのです」
「・・・抜け目ねぇ。どうりで露天の反応が早すぎると思ってたら、団長の仕業かよ」
「もうけられる時を知っているのに何もしない者は、馬鹿者と官僚だけなのですよ？」
「・・・うわぁ、頼もしいなぁおい、うちの団長は。」
「その力を、うちにも貸してほしいわ・・・。」

突如現れたのは「香水」ことモンモランシー。
タダ酒に誘われての登場なのです。

「人聞き悪いわね！！　そりゃタダ、ラッキー！とはおもったわよ！　わるい！？」
「いいえ～、モンモランシーの可愛いところが丸見えなだけなのです」
「／／／・・・そういうことは、ちゃんとした場所でいうべきでしょ！？」
「そうなのです、だから酒の場所で・・・」
「はじめっからウヤムヤにするつもりなの！？　なんてたちの悪い！！」
「誉めないでくださいなのです。」
「ほめてないわよ！！」

いやー、打てば響くようなツッコミに全団員号泣です。

「まぁまぁ、モンモランシー。せっかくきたんだから、一杯どうだい？」

「・・・うん、ちょっともらうわ、ギーシュ」

そういいながら、空いてるジョッキにガンガン高そうなお酒をツぐのが良い根性なのです。

そのまま一気に飲んで見せ、周囲をわかせた。

「「「「「おおおおおお！」」」」」

「水属性は蟒蛇（うわばみ）と聞いていましたが、本当のようなのですね」

「ああ、その雄々しいのみ方、きれいだよ、モンモランシー」

「・・・ありがと、ギーシュ」

なんだか勝手にやってろ、バカップル、というわけで、二人を別の席にパージして盛り上がっていると、またまた乱入者あり、なのです。

「おじゃましますわ」「じゃまするよ」

あらわれたのは・・・

「何してるですか、この王族達は！？」

劇を見終えて歓談中のはずのアンリエッタとイザベラ様。

「あらやだ、ちゃんと護衛も店を囲ってるわよ？」

「店を入るまでフェイスチェンジで顔を変えてたしな」

「・・・マティーたちが直に護衛している対象を、誰も間違えないのですよ？」

マティーとはマンティコア隊の愛称。

「・・・ああ、そういえば。」
「そういや、マンチコアの隊長って、あんたのおやじなんだって？」
スルーなのですよスルー！　さすが王族！！
そのスルー能力は必ず手に入れてみせるのです！
「ええ、鉄の規律と忠誠心に支えられた騎士団の最高峰ですわ」
「ますます、ほしいね。・・・どうだい、アン、フレデリカをしばらくウチの軍事顧問に貸さないかい？」
「ベル、それは勘弁してほしいわ。代わりにルイズじゃだめかしら？」
だめ、アンリエッタだめ！　ルイズは虚無、虚無だからぁ！らめぇぇ！！
「「狙撃」かい、そっちも魅力だけどね。やっぱりトリスタニア式軍歩は取り入れたいね。」
どうやらあの行進はそういう名前になったらしいのです。
「あー、本当にあたしも学院にいきたいもんだよ」
「・・・イザベラお姉さま、それは国民が困る」
さらにご来訪。タバサ、ルイズ、キュルケ。
「おお、ロッテじゃないか。」
笑顔でかいぐりするイザベラと、それをうれしそうに受け入れるタバサ。本当に歴史は変わったんだなぁと思わされた。

「・・・？　ミスタバサ。それはミドルネームですか？」

小首を傾げたアンリエッタをみて、ちょっとひきつるイザベラ様。
じつは計画していたシャーロット名誉回復はガリア国内での進捗が今一なため、今回は見送られていたのです。
どう説明しようか真っ白になっている彼女の横に立ち僕は援護射撃。

「アン、「真名」なのですよ。」
「・・・まぁ、すてき！！」

それを聞いて明らかに安心した風のイザベラ&タバサ。
真名、つまり、肉親や親族にのみ開かされる名前という設定はアンリエッタには納得できたようです。
じつに脳味噌が暖かい。
うちの王族は本当に・・・・ＴＴ

「まぁまぁ、すてきなお話ですね。私も真名がほしいですわ・・・。」

いやんいやんと身を震わせる御花畑姫。

「なにいってるんだい、アン。あんたにゃ、誰も得られなかった宝があるんだろ？」
「・・・、なんです？」
「お空の上の王子様、だろ？」

さすがイザベラ様！！　そこに痺れて憧れるのです！！

「♪」

そこからの甘甘話がすごかった。
苦肉の策で振った本人も後悔しただろうけど、周辺も大事故状態。
ぼくは思わずサイレントで閉め出してしまったのです。

これでおおかたの処理が終わったと思ったのですが・・・・。

「それにしてもフレデリカ、ひどいじゃない。私たちにないしょで宴会なんて！」

がー、と一気のみのキュルケ。

「あたしだって、落とし頃なんだから、ちっとは機会を作ってほしいもんだねぇ？」

微妙にシナを作るイザベラ様。
というか、発音が微妙ですよ？

「ちょっと、フレデリカは私の嫁よ！」

誰が決めたんですか、ルイズ。

「あんたにゃ、髭の婚約者がいるでしょ？」

思わず眉をしかめたキュルケのつっこみに、不快そうな顔のルイズ。

「ワルド様？　ああ、だめよ。あの方、タバサみたいな体型が好みらしくて、急成長中の私には興味がないんですって・・・モゲロ。」
「うわっ、それほんと？　結構な美形だと思ってたのに」

「だめだめよ、だめ。貴族で幼女趣味ってどんだけ病気なのよ。まだオッパイ礼拝者の方がましだわ。」
「でもそれって別の意味の礼拝者じゃないの？」
「・・・そうだね、つまり・・・・」
「「「貧乳礼拝者！」」」

いつの間にかイザベラ様とルイズとキュルケが、十年来の親友のように話しているのです。
その光景をまるで姉のようにうれしそうにタバサが見ていて、その光景を肴に団員が感激の涙を流しているのです。

「なんか「始祖みて」みたい・・・。」
「うんうん、だって学院がモデルだっていうじゃない？」
「いいな～いいな～、貴族様は「始祖みて」出来て～」

お店の女の子も感化されてますですね。
これは貴族の生活を開示する「オープンキャンパス」も企画した方がいいですかね？
名目は「文化祭」ということで。
あ、そろそろアンが正気に戻りそうです。
サイレントキャンセル。

「・・・というわけで・・・。もう、またフレデリカね！」

自分をのぞいてみんなが仲良くなっているのをみて怒るアンリエッタ。

「わかってるよ、アン。あんたの愛は偉大だ。」
「わかってくださいましたのね！！」

がっちり「ハグ」するアンリエッタとイザベラ様。
ともあれ「ハブ」にしていたのもイザベラ様なのですが。

「団長！　もういっかい演説かましてくれ！！」
「「「「「おおおおおおおお！！！」」」」」

「じゃぁ、せっかくきてくれたイザベラ様に一言お願いするのです」
「「「「「おおおおお！！！！」」」」」

他国とはいえ王族、それもたぐいまれなる美形のお姫様からの一言があると聞けば盛り上がる盛り上がるのです。
いつの間にか他のお客さんも大盛り上がりです。

「・・・ったく、しかたないね。じゃ・・・」

こほん、と咳払いした後、王族オーラを全開にしたイザベラ様が言葉を発する。

「・・・ソナタたちの軍歩、まことに見事であった。その一体感、その同期性、そして平民ですらわかるほどの練度。どれを取っても胸を張れるものであった。アンリエッタ殿に我が国での教導を頼んだほどだ。」

それを聞いた「ケトッシー学生騎士団」は熱狂に近い盛り上がりを見せた。
他国の騎士が他国の軍で教導するなど、本来あり得ないはずなのにそれを求めるほどスゴかったといって誉めてくれているのだから。

「・・・ソナタたちに感謝を。いま、軍のあり方の一部を塗り帰ることが出来た「ケトッシー学生騎士団」に出会えたという幸運を運

んできてくれたことを・・・・。」

盛大な拍手が巻き起こり、感動の渦は最高潮になったところでイザベラ様は高々と拳を振りあげた。

「ジーク、トリステイン!!」

もちろん、団員が全力で答えたのです!!
なにしろ団員は重度の「読者」なのですから!!

「「「「「ジーク、トリステイン!!」」」」」

ジーク・トリステインの唱和は、今後乾杯の席の定番になったとか。
あな、恐ろしい話なのです。

第十六話「乾杯」が生まれて（後書き）

「プロージット」でもいいかもしれないと思っていましたｗ

※今回の元ネタ

「真名」　・・・　恋姫無双

ジーク、トリステイン　・・・　初代ガン〇ム

プロージット　・・・　銀河英雄物語

第十七話「おともだち」が生まれ（前書き）

前話に引き続き宴会中～

第十七話「おともだち」が生まれ

打ち上げはいつの間にかいろんな人が混じりあい、大騒ぎになっていった。
マンティコア隊隊長が現れたとき、もうお開きかと思ったら、

「我が子フレデリカのおかげで、交代で参加できるようになりましたので」

と、結構柔らかい対応に驚いた。
トリステインといえば、伝統と格式と頭の固さが抜けない国家というイメージが抜けなかったけど、やっぱり最近はスゴく緩くていい感じだ。
ケルマニアには負けるけど、トリステインも最近は良い国かもしれないと思っている。

「ほぉ、では、あなたが「あの」ツェルプストーのご息女ですか。」
「はい。フレデリカには幼い頃からよくしていただいています」
「いやいや、ヴァリエール領からカッタートルネードで叩き出されたフレデリカをよく助けてくれたと聞き及んでおりますよ？」
「それこそ当たり前のことですわ。彼、あう度にぼろ雑巾のようになって倒れてるんですもの。」

そう、絶対に死んでると思わされるほどのけがをしているくせに、一晩たつとケロっとして帰ってゆくのだ。

「・・・その話、聞かせてもらって良いかい？」

ガリアの第一王女は、タバサの話だと熱狂的なフレデリカファンなのだそうだ。
こういう幼い頃の話を聞きたいのだろう。
そんなわけで、私が知っているだけのフレデリカの修行をはなすと、第一王女は真っ青になった。

「なるほど、それが烈風カリンの虐待疑惑かい。」
「虐待なんて陰湿なものじゃないわ、あれ。」
「・・・じゃぁ何だっていうんだい？」
「地元じゃ『災害』って呼んでるわ」

なにしろヴァリエール側の山だけで三つは消えてるんだから。

「・・・本当かい？」
「この国じゃ結構有名だけど、ゲルマニアじゃぁもっと有名よ。トリステインの魔法兵器の実験が行われてるって」

そのじつは、一人の男の子への特訓だというのだから正気を疑った。
まぁ、そのおかげか、驚異の大天才が生まれたけど。

「その、その特訓をすれば、誰でも開花するのかねぇ？　才能、とか。」
「お勧めしませんわ。才能か、死かなんて選択は王族に向きませんもの」
「・・・そりゃ、結構重い判断だね」
「才能ゼロといわれて、やさぐれていたルイズも、はじめは嫉妬したらしいですけど、フレデリカの特訓を間近でみて「才能がなくてよかった」と胸をなで下ろしたっていってましたもの。」
「・・・うわぁ、結構重すぎるじゃないか。」

「とはいえ、四系統全魔法を「スクエア」レベルで同期使用できるという時点で、フレデリカも十分異常なんですけどね。」
「そういえば、フレデリカの魔法の話は聞かないね？」
「一度、学園内で決闘したという噂を聞いたんですよ。」
「ほ～、で？」
「・・・学院裏の森の奥地、未だ回復しない空き地があるんです。」
「・・・どこの怪談だよ。」
「どんな魔法を使っても回復しない空き地。」
「・・・つまり、奴を怒らせるな、という話かい？」

硬い笑顔でうなずく私。
イザベラさまも、少しだけ青い顔でうなずいた。

「そんなに警戒しないでやってください、お嬢さん達」

苦笑いの男性、マンティコア隊隊長は言う。

「我が子はあれで寂しがり屋で、その上で博愛主義なのですよ。自分の手の届く範囲の全員に笑っていてほしいっていう風な強欲さももっておりましてな。そこまでの状況になると、たぶん、仲の良いお友達の誰かを侮辱されたのでしょう。」

いわれて思い出した。
あれはたぶん、ルイズを公爵家の落ちこぼれ、出涸らしと呼びからかった生徒がいた後のことだったはずだ。
つまり、そういうことなのだ。

「まぁ、あの子も男ですから。守りたい女性の一人や二人いてもいいのですがね。」
「それもそうだね。ところで男爵閣下。ガリアの爵位に興味ないか

い？」
「実に直線的な勧誘ですな。お父上に絡め手を習うがよろしいでしょう」
「・・・ふふ、結構辛辣だね。でも嫌いじゃないよ」

あ、大人の会話だ。
こういう大人の会話に参加できないのが私の弱点だ。
これからがんばろう、うん。

「ところでアン、なんでここにいるって判ったですか？」
「もちろん、愛よ。友人愛がピピッときたの」

もちろん信じませんので、背後にいるであろう店長を指パッチンで呼び出すです。

「・・・ご用ですか、フレデリカ様」
「真実を」

そういいながら、金貨を指ではじくと、優雅に礼をした店長はゆったりとした口調で語りますです。

「アンは週三で働きにきているので、店の子と情報がつながっておりますゆえ」

おいおい、王女様。

あんたなに考えてるんだよ!?
思わずにらむと、頬を赤らめてそっぽを向くアン。
仕方ないので肉体的な会話をしたところ、涙目で白状した。

「だって・・・。だって！　ウエールズさまにプレゼントを贈りたいけど、国民の税金じゃいやだったの！　私が作ったお金で贈り物をしたかったの!!」

その絶叫は、店の女の子全員受け入れられ、胴上げまで始まった。
アンリエッタ様万歳、アンリエッタ様万歳の唱和は店の外まで響きわたる。

「この、バカ姫!!　あんたが抜け出した後の仕事は誰がやってるの!?　こっそり抜け出したアンタを誰が警護してるの!?　そんな仕事の経費は誰が払ってるの!?」

ビシビシとアンにチョップを決めるルイズ。
とはいえ、マンティコア隊員とケットシー隊員がルイズを止める。

「気持ちは大切、心も大切！　だけど、周りが見えてないんじゃ国が転ぶわ！　もっと見て考えて!!」

うるうると瞳を潤ませたアンが、ルイズに抱きつき、「ありがとう、いつもありがとう、本当の親友ルイズ大好き～」とか叫んでいるのを見て、各団員はがんがん乾杯です。

「姫様もえー」「うぉー、百合百合でジョッキ三杯いける!!」「つうか萌え尽きた・・・。」「ルイズ様、さすが！　そこに痺れる憧れる!!」

なんかやばい奴らが多いのです。

今回の外交外遊は得る物が多すぎた。

外交カードを得られるとかそういう問題は抜きさ。

国家間や損得勘定抜きで、そういう思いを抜きにして友人と話す時間が出来た。

正直に言えば、王族に生まれた瞬間からそんな物は縁がなかったし、フレデリカの本で読んだような人間関係は構築できないものとあきらめていた。

が、ロッテが繋いでくれた縁は、私にあきらめていた時間を提供してくれた。

気楽な関係、趣味の話、過去や未来の話、夢の話、妄想の話、もう、いろいろだ。

王族である限り、心から自分を許せるともはいないけど、それは貴族でも平民でも一緒だと言うことを知ることが出来た。

その関係の中で、あの時間を過ごせたのは暁光だったと言い切れる。

私の常識、世界の常識、そして私の非常識、世界の非常識。

話せば話すほど深くなるし、話せば話すほど広くなる。

執務室の中だけでは理解できない世界という物が、この世界には大量にあるのだと感じさせられた。

一国に行っただけでコレだけの情報が入るのだから、各国に巡ればどれだけの情報があるのだろう?

これは一度腹を決める必要があるかもしれないね。

第十七話「おともだち」が生まれ（後書き）

※今回の元ネタ
更新なし

第十八話「チート魔法」が生まれ（前書き）

やりたい放題ですねｗ

第十八話「チート魔法」が生まれ

タバサの案内で、ガリアに向かった私たち。

病状が安定し、記憶や会話がふつうに出来るようになったというので、母親にあって欲しいと彼女が言ったからだ。

ちょど湖の反対側がモンモランシーの実家があるということで、同乗してきた根性には敬服するけど。

で、コレだけの「美少女」軍団ともなれば、それを警護するとか言い出すバカも多い。

もちろん、バカ筆頭は「豚」は「デブ猫」に名を変えて鼻息も荒いマルコリヌ。

フレデリカ人選で外されたけど「隊の象徴なのですから、不動の心構えなのですよ」とか言われて丸め込まれている。

同行を許されたギーシュ・アラン・レイナールは、じつに可哀想なものを見る視線で「デブ猫」を見ていたりする。

ともあれ、不意打ちがない限り、フレデリカで十分だし、たぶんお披露目の意味もあるんだろうと思う。

あのパレード以来「ケットシー学生騎士団」の人気は天井知らずだ。

その上、グリフォン隊と模擬戦をして勝ってしまったものだから、その噂も相まってもの凄いことになっていた。

学院はおろか市井にもファンがあふれ、町娘達にちやほやされていた。

もちろん、進んでそれを甘受していたのは「デブ猫」と数名らしいが、訓練が結構厳しいので、甘受すること自体の時間をとるほどの余裕がなくなっているという見方もある。

そんな中でも学院を抜け出して町に繰り出すマルコリヌは一部で「勇者」とか「勇者王」とか囁かれているが、もちろんのこと「リスペクト」されているわけではない。

「・・・ん、敵襲なのです。」
「・・・もう、また？」

豪華な馬車で女の子が何人も乗ってるんだから、ウハウハとかバカが思うのは当然。

そんなわけで、襲ってくる山賊を返り討ちにして、さらに本拠地まで襲撃して、資金引き上げするという繰り返しをしているうちに、馬車がお宝で一杯になり二台になってしまった。

そこそこ高そうなものだけ選別しているんだけど、それでもけっこな量になったものだ。

で、その荷物を狙う山賊が現れて、返り討ちにして・・・。

「このままモンモランシーの実家の山賊を全部つぶすことになりそうね。」

キュルケの言葉に目を輝かせるモンモランシー。

「それはそれでありがたいけど、依頼できないわよ？」
「じゃ、分け前なしね」
「・・・そっちは欲しいかも・・・」

まぁ、こんなもの持ち歩くわけには行かないので、適当に分けて、あとはモンモランシ領に置いていくけどね。

「ルイズ、ルイズ！　あなたは聖女の様だわ！」

まぁ、この程度はどうでもいいし、とは思っていても言わない。
逆に正当な分け前とプラスアルファがあった方が感謝と信頼が得られるってもの。
フレデリカの本は役立つことが書いてあるわ～。

「ギーシュ、ゴーレムで牽制なのです。アラン、障壁なのです。レイナールは反対側の警戒なのです！」
「「「サーイエッサー！」」」

きびきびと動く三人は、結構格好よく見える。
たしかに軍人三割り増しって、こういう姿のせいだろうなって判る。
モンモランシーなんか、本格的にメロってるもの。

「団長、敵影８確認。武装は剣。」
「団長、逆側に3確認。武装、弓。」

ばっとマントを翻したフレデリカはわらう。

「諸君、敵は我々を侮っているのです。」
「我々をつぶすには、この十倍をつれてこいって言わないとな」
「そうです、そのとおりです。ならば彼らに何をするのですか？」
「「「教育を、彼らに教育を！！」」」
「よろしいのです、我らによる教育を！」
「「「サーイエッサー！」」」

ばっと散る三人。
そのすぐ後にフレデリカが私に囁く。

「ルイズ、狙撃の準備です」

「・・・判った」

地上の剣、弓は各個撃破された上に、騎馬は練金された壁に阻まれて進撃できないと言う。

しかし、そこまでは予定通りだ。

山賊ギルドの情報通りなら、このタイミングで飛竜には対応できないはず。

一番はじめの山賊がその方法で一撃を加えていると聞く。

ならば！

瞬間、なぜか目の前が真っ暗になった。

なぜか判らない・・・・。

「・・・作戦完了」

ニヤリと笑うルイズ。

わりと怖いのでやめて欲しいのです。

とはいえ、あとは正面方向を中央突破しつつ人質を取って拷問してアジトを聞き出して強奪するだけなのです。
もちろん、薙払い焼き払い、塵一つ残さないのです。

まぁ、そんなことをしているから狙われるのですが。

馬車に集まった全員で、今後の方針を確認するために、バラした山賊の装備を見てみたのですが、何となくちぐはぐなのです。
なんでだろう、と首を傾げると、モンモランシーが一言。

「なんか、山賊と言うよりも賞金稼ぎっぽくない？」

なるほど、ということで死んでいる山賊の肩とかを切り裂くと、そこには骨とは違うものが見えました。

「フレデリカ、それは？」
「体の速度を上げたりする魔法具なのです。」
「・・・つまりメイジ殺し？」
「その下っ端なのです」

こんな金がバカみたいにかかる手術をすると言うことは、バカか、心底バカか、本当のバカか、メイジ殺しだけなのです。

「うっわ～、山賊ギルドに懸賞金をかけられた？」
「確かめれば判ると思うのですが、今のところ確かめようがないのです」
「え、じゃぁ、今回は貯金箱なし？」

モンモランシー、山賊のアジトを貯金箱扱いは流石にどうかとお

もうのですよ？

「逆に速度を上げた方がいいのですよ。」

「そっか、うん、じゃぁ早々に移動しましょ。」

あ、その前に・・・。

前方方面で立ち尽くしているバカを一掃しないといけないのです。

そんなわけで、オリジナル魔法の炸裂なのです。

「あ、また新魔法？」

「そうなのです。御師匠さまに負けないように、大出力＆高範囲の対軍魔法なのです！」

イメージするのは光。

あまたにあふれ、そして絶望的な光。

じゅーと集まってくるイメージをそのままに、両手を突き出すと、そこには視覚できないほど細かな紋章が浮かんでいる。

「さぁ、光よ。我と我らを邪魔するすべてを薙払うのです！！」

まるで太陽が目の前に現れたかのような力を正面方向にときはなった。

「いけ、プラネットブレイカーーーー！！」

進行方向の練金した壁ごと「ジュッ」と音を立てていろんなものが消えたのです。

・・・やばい、これはかなりやばい威力なのです。

対軍でも使うのは考えた方がいいのです。

「フレデリカ、これ対軍じゃなくて攻城魔法よ」
「納得の意見なのですよ、ルイズ」
「・・・ルイズの狙撃も怖いけど、フレデリカの「衝撃」はもっと怖いわ」
「・・・隣の村は無事？」
「ああ、基本、僕が地面に対してまっすぐ打てば、見えない村には当たりませんよ？」
「・・・どういうこと？」
「んー、今晩にでも講義しましょう」

第十八話「チート魔法」が生まれ（後書き）

今回は魔法チートですが、次回は知識のチートです

※今回の元ネタ

プラネットブレイカー　・・・　スターライトブレイカー　・・・

なのは

第十九話「最強チート魔法軍団」が生まれて（前書き）

科学的なアプローチは、なにも自分の利益のためだけとはかぎりません。

自衛のためでもあるのですよ？

第十九話「最強チート魔法軍団」が生まれて

フレデリカの知識にはいつも驚かされる。
フレデリカの言った意味、それは「地面が球体だから」という訳と理論、そして翌日に行ったフライによる実験とその結果。
私たちが信じざるえなかった。
さらに、その知識が一端であり、その先にある「物事の理を研究する」学問の話は、実に興味深かった。
専門的すぎて解らないことが多かったけど、それでも興味深かった。
今度、初歩から教えて欲しいと願うと、フレデリカは嬉しそうに微笑んでくれた。

「・・・ねぇ、フレデリカ。こういう知識ってどこで覚えるのよ？」
「実家の隠し書庫ですよ」
「・・・もしかして・・・」
「代々の当主が匿った異端審問された者の執筆した異端知識の集大成なのです♪」
「やっぱりぃ！」

思わず頭を抱えたルイズ。
まぁ気持ちは分かる。
しかし、ばれなければいい。
それだけ。
解らないように応用して、ばれないようにオリジナルにしてしまえばいいだけなのだから。

その後現れた山賊たちに実験と称していろんな魔法を見せてもらった。

風のラインと火のドットを組み合わせた「粉塵爆発」。

錬金であらかじめ作った燃えやすい粉を一定空間に浮遊させて、火種を放り込む。その瞬間、空気と混ざった燃えやすい粉は一気に燃える。

いや、これは「爆発」だった。

密室で使えば風のドットと火のドットで再現可能だという。

火と風を適正に持つキュルケは、次々と山賊を爆破してゆき、「微熱」ならぬ「爆破」のキュルケとなりそうだった。

同じく、土のラインになっているギーシュは、水と土の魔法により「土石流」というおそろしい魔法を教えられ、あまりの威力に膝から落ちた。これに火を加えると「破砕流」なのですよーとか語るフレデリカの神経を一時疑う。

アランやレイナールも同様に恐ろしい「物理」魔法を教わって、感動と言うよりも恐ろしさを覚えたようだ。

というか、

「コレだけできて、カリーヌ様に勝てないの？」

「無理なのです」

「無駄ね」

その恐ろしさを感じた私たちだった。

とりあえず、モンモランシーの実家によって、荷物の大半を寄付したところ、モンモランシーに泣いて感動された。

秘薬の調合も「物理」的な指導をしたため「師匠」呼ばわりされているのです。

ご両親からも感謝されましたが、山賊盗賊がこぞって領内から消えたことには疑問を持っているようなのです。

まぁ知らぬが仏と言うことなのです。

ともあれ、荷馬車一台分の分け前を受けたモンモランシーは貰いすぎなので働いて差分を埋めると言い出して、ガリアへも同行することになったのです。

義理堅いというか、何というか。

まぁ、絶対に返さないからと言う意思表示でもあると思うのですが。

「そんなことないわよ！　もうちょっと友人を信じなさいよ！」

「うん、もちろん信じているのですよ？　にぱ～」

「くそぉ、あたしの扱いは「オチ」なのね！！」

「いいえ、実に有能なつっこみでもありますよ？」

「あーん、ギーシュ～、フレデリカがいじめるぅ～」

「団長、そろそろ勘弁してくれ」

「む～、もう一歩楽しみたかったのです」

とはいえ、あんまりいじってもテンプレ化してしまうので、その辺のさじ加減が難しいのです。

そんな娯楽を楽しんでいる間も、キュルケによる「爆破」とルイズによる「狙撃」、そしてレイナールによる「昏倒」（急激に気圧を半分程度にする）が続々決まり、バカみたいに山賊が消えてゆくのです。

もちろん、賞金稼ぎもガンガン消えているのですが、この調子で倒しきることには、みんなレベルあがってるですよね？

ほら、スライムだって倒せば経験値あがるのですよ。

「フレデリカ〜、結構緊急事態。」

キュルケ曰く、山賊のアジトに平民女性が多数。
もちろん、うちの「男前」集団は、助ける気満々。
タバサですら鼻息が荒い。

「とりあえず、バカは騙して外におびき出すのです。」

その上で戦力分断し、人質にしようと女を引っ張りだしたところで山賊の狙撃開始。
わはは、跳ねろ跳ねろ跳ねろ、的にやっちまう作戦でした。
が、どうやら賞金首には似顔絵がついていたらしく、おとり役のキュルケを見た途端、山賊が叫びながら逃げていったのでした。
半泣きで「魔女が、魔女がきたぁ〜」と叫びながら逃げる姿は見物なのです。
そのうえ、何となくやさぐれたキュルケなのでした。

山賊のアジトにいた女性たちは、汚される前であった。
それだけでも救いだろう。
そして彼女たちはガリア側の平民だったので、僕たちの旅に加えて移送することにした。
フクロウによって既にこの事が王宮に知らされており、タバサの実家につく頃には官吏が引継にくるだろうということだった。
しかし、フレデリカの魔法知識は恐ろしかった。
まさかドットの組み合わせであれだけの魔法が使えるようになるとは思わなかった。
流石に「昏倒」があれば、いかにカリン様でも、と聞いてみたが、

沈痛な面もちで首を振るフレデリカとルイズ。
つまり、僕たちの常識を越えた存在だということらしい。
それでも、最近戦えば負けない程度になったというのだから、フレデリカも規格外なんだろう。
が、そんな実力と外見は結びつかないらしく、救われた平民女性たちはフレデリカの少女っぽい外見にメロメロになっていた。
加え、「物語」のフレデリカだと知って、さらに熱狂。
まるで自分が物語の中にいるような気分を味わっているだろう。
というか、平民ってフレデリカのことを「リカさま」って呼ぶけど何でだろう？

タバサの実家、というかシャルロットの実家に到着すると、すでに役人たちが到着していて、各の村へ送ってくれることになっていたのです。
さすがに有能な姫は違うのです。
うちの御花畑姫に見習わせたいものです。

タバサの母上殿の病状はずいぶんと良くなっているようなのですが、長いこと心神喪失状態だったので、記憶がいまいちつながらない様なのです。
その話を聞いて、まぁ、招待の理由の一端は理解したのです。
もちろん、意地悪するつもりはないので、母上様の治療を申し出ると、執事の人とタバサは半泣きで頭を下げました。
進んでがんばるけど、彼女の記憶を一通りかいま見ることになるので、それは許可してほしいと申し出ると、かまわない、と強くタバサは頷くのでした。

ならば、やるしかないのです。

こっちとら、四大魔法をきわめてさらなるチートに目覚めたのですから！！

目の前の光景をどう表現していいのかがわからなかった。
初め、フレデリカは「偏在」によって８人に分かれた。
その段階ですでに風のスクエアの常識を覆していた。
自分の母親も風のスクエアだが、偏在を八人も出すところを見たことはない。
ふつうは三人、多くとも四人だ。

続いて、偏在の四人が詠唱を始める。
それは「火」「風」「水」「土」の呪文。
その詠唱が続く中で、残りの本人を含めた四人も腕を振るう。
こりちらは何故か詠唱無しなのに「火」「風」「水」「土」の力が渦巻いている。

「「「「古の四の四の力と精霊よ、わが望みのままに力を揮い、そして「癒せ」！！」」」」

八人にフレデリカの叫びと共に、視界は光で埋め尽くされていた。
それは輝かしいまでの明るく、希望に満ちた光だった。

私のふたつ名を「微熱」から「爆破」に変えたようなヤツだもの。
すでにフレデリカのすることは理解できるとは思っていない。

フレデリカ風にいうなら「チート（ズル）」なのだから。

もちろん、フレデリカが自嘲するような話ではなくて、私たちの感じている「チート（ズル）」とはフレデリカの努力の内容だ。

なんというか、ヴァリエールも無茶苦茶だ。

幼い子供を言葉巧みに実家から拐かし、ほぼ即死するかのような特訓を毎日のように仕掛けていたというのだから。

が、我らがフレデリカは試練を越えた。

そしてその努力の結果が目の前にある光景だ。

自らの意識と記憶を同調させたタバサ、シャルロットの母親は、意志のある表情と視線で娘を抱きしめていた。

さすがのフレデリカも精神力の大半を使ったらしく、部屋の端で眠っているが、従者たちが甲斐甲斐しく世話をしている。

それはまるで、勇者を迎える人々のようであり、姫を迎える従者（サーバント）のようであり。

とりあえず、感動の光景のはじっこで起きている事実であっても、けっして邪魔ではない光景だった。

しばらくの感動の後、目を覚ましたフレデリカに気づいた「タバサ」はボロボロに泣きぬれた顔で抱きつき、そして感謝し続けている。

「いいのですよ、友達は助けたいと思うのがふつうなのです」

「・・・だったら、私はあなたの助けになる。あなたを守る盾となり、あなたを助ける矛になる」

「・・・一歩も引く気はないみたいなのですね。」

苦笑いと共にフレデリカはタバサを抱きしめた。

「もぉ、フレデリカは甘いなぁ。」

そう言いながらルイズもタバサを抱きしめる。
ここで引いては女の名折れ。
私も全員を抱きしめる。
この旅で噛みしめたわ。
女の友情、最高。

「とりあえず、ボクは男なのですよ?」

ああ、女の友情ってさいこ～～

第十九話「最強チート魔法軍団」が生まれて（後書き）

これだけ人間の特性に訴える様な攻撃も通らない烈風。
どんだけ最強なんだと身震いの筆者です。

多分、マスターアジアと打ち合える人材だと考えると納得なのです。
・・・つまり、うちのリカちゃまは、ドモン？

※今回の元ネタ
マスターアジア・ドモン　・・・　機動武闘伝〇ガンダム

第二十話　「死亡フラグ」が生まれて

おどろいた、というか、信じられない思いだ。
四大魔法をスクエアレベルで使えるという噂は聞いていたけど、さらに別のアプローチをしていたとは信じられなかった。
そう、我々の世界にあって我々が関わることのない魔法、「エルフの魔法」。
正直に言えば、はじめは恐怖したが、それを扱うことができる人間が貴族であるということを考えると、心強いばかりであるという認識に変わった。
教会に知られれば只ではすまないだろうけど、知られれば、というだけにすぎない。
逆に「フレデリカならアリかも」とかいう評価になる可能性も少なくない。

「もちろん、今日のことは秘密なのですよ？」
「そりゃ、こんなこと知られたら、国や教会が黙っていないだろ？」
「ちがうのですよ、アラン。」
「どうちがうんだい？」
「御師匠様に対抗手段を採られないために、秘密にしなければならないのです。」
「ああ、お母様なら、エルフの魔法ぐらい打ち勝つし、逆に「やりこめた」って話も聞いたことがあったわ」
「カウンターなんて反則を、どうやって破ったのか疑問なのです。」

あー、国よりも教会よりも怖い「烈風」。
本当に怖いみたいだな。

「ああ、そういえば・・・・」

今思いついたかのようにフレデリカは微笑む。

「・・・かの御師匠様が、僕たちの騎士団を視察にくるそうです。」

・・・死んだ、神は死んだ、そして絶望した!!

あー、フレデリカにつきあうと、疾風怒濤というか、毎日が戦争だっていうか、恐ろしいまでにレベルがあがるわ。

アラン、レイナールは共にトライアングルまで後一歩というところにきてるし、ギーシュはトライアングルに到達した。

キュルケ、タバサはスクエアまであと一歩まできている。

私は、まぁ、「狙撃」がヤバくなった。

精度が上がったのと爆破の範囲を限定することが。

いまなら、あると仮定した相手の心臓だけを爆破できるし、髪の毛一本単位で爆破できる。

昨日、メイジ崩れの山賊をとらえたときに、毛根の一本一本を「狙撃」していったら、十本目で泣きを入れてきて、二十本目で「殺してください」と土下座を始めた。

たかが髪の毛で、と鼻で笑ったけど、フレデリカの一言で私がどれだけ残酷なことをしていたかを知った。

「・・・ルイズ、胸を0．1サントス毎に小さくなる魔法をかけられたらどう思うです?」

絶望したわ、自分の残酷さと非情さと非常識さに。

とはいえ、男相手に十二分な拷問だと解ったので、これからも拷問用に使い続けることを宣言すると、ケトッシー組が微かに震えて一歩離れた。

なによ、あんた等にするとは言ってないでしょ？

「ルイズ、胴回りを魔法で自由自在に増やせるから、拷問に使うって宣言したようなものなのです」

くぅ・・・・、さすがに目の前が真っ暗になったわ。

その説明でキュルケやモンモランシーまで一歩離れた。

「い、いいのよ、私の魔法は、悪を懲らしめる刑罰の鞭なんだから！」

「・・・無知からくる発言なのです」

「フレデリカ、あなたまで私を避けるの？」

「避けませんが、怖いと思ったのは事実です。」

「フレデリカも男ね～」

「何度も言いますが、僕は男なのですよ？」

ま、男だものね、フレデリカは。

でも、それが一番の絶望なのよ、たぶん。

だって、フレデリカが大浴場を使うとき、上級生はみんな避けるもの。

これって、キュルケなんかが入浴するときに上級生が避けるのと同じ理由だと思うし。

というか、ねえ様たちからこっそりと「それ」の話を聞いている。

だからこそ、「あの」神扱いなんだろう。

そんなこんなで、学院まで戻った私たちは、帰りの分の収入を山

分けにして、訳ありっぽいものは国庫に進呈、そしてフレデリカ曰く「ヤバイ」ものは学院の宝物庫に放り込んだ。

というか、あのきれいな指輪は欲しかったかも。

あはははは、やばいやばいやばい。

炎の指輪なのですよ、炎の指輪！

なんでコルベール先生が持っていないのか不明ですが、こうやって回収できたことだけは良しとするです。

そういえば、最後に襲ってきた傭兵、人が焼ける臭いが大好きとか言っていたので、ジリジリと自分の皮膚の表面だけ焼いてあげたら、ほんきで狂喜乱舞して、もっともっと、と要求してくるのが怖かったです。

とりあえず王宮に引き渡したのですが、牢屋の向こうで「フレデリカ様もっと！」と叫んでいるそうなのです。

・・・ルイズのことはいえないのですね。

それはさておき、炎の指輪。

これはさすがに王宮にも宝物庫にもまずいので、それっぽいものにすり替えてぼくが保管することにしたのです。

一応、属性強化のアーティファクト効果もあるので、それなりに便利でしょうし。

で、問題は・・・虚無。

ルイズにこの指輪プラス虚無を教えるかどうか、なのです。

少なくとも進級するときには「人間」を召還してばれてしまうのですが、それまでは「お気楽」な生活をさせてあげたいと思うのは考え過ぎなのですかねぇ？

そういえば・・・、ぼくが使い魔を召還したら「なに」がくるでしょうか？

さすがに思い当たる幻獣はいませんし・・・。

じつは「アカサカ」あたりが召還に応じてくれると面白いのかもしれないです。

～リカちゃん、君を、助けにきた！！～

とか言われたら、男ですが惚れるかもしれないです。

まぁ、バカな妄想はそこまでにして、ぼくもお仕事なのですよ。

我が心の友にして魂の師匠、フレデリカによる秘密講義が始まって五日が経った。

僕やアラン、そしてレイナールが実証の先達として技を見せて、そして騎士団全体でレベルアップを図るうちに、全員がライン以上になっていた。

そんあると教師も気になってくるらしいが、さすがに内容が内容なので参加は断っていたのだけれども、唯一団長にコルベール先生だけが参加を許された。

なぜか？

それは既にコルベール先生の研究が「異端」で、今更情報を規制

しても遅いから、だそうだ。
聖なる魔法の力を「道具」に貶める、というだけで異端審問官は舌なめずりで踊りかかってくると言うが、土の魔法による河川整備や道の整備はどうなるのか、と首を傾げたくなる。
まぁ、奴らは奴らの常識があって、それを飛び越えると飛んでくる、というのが真実だろう。

だいたい、あいつ等はおかしいのだ。

自分たちに正義があるとか、自分たちに正しさがあるとか言うのはかまわないけど、その主張が通れば自分たちが「偉い」と本気で思っているのだ。
主義主張が通ることと正義や地位が直結するなんてあり得ないことなのに。

その点で言えばコルベール先生は希有のメイジで、研究と倫理と実践がかみ合っている人だった。
一緒に火や土に関する魔法を研究実践しているうちに、火に関わるスペルが追加され、団員の多くがレベルアップしていった。

中でも「デブ猫」の魔法は邪悪に進化した。
風＋火だったけど、火の威力がいまいちで、消えないけれど燃え上がらない程度の「いまいち」だったんだが、フレデリカが余計なことを言った。

「決して消えない種火が、風で運ばれて周囲を覆う。乾燥してたら信じられないほどの火事が起こるのです。まるで「野火」のように。」

火の力の低さに嘆いていた「デブ猫」だったけど、その利用法を

聞いて胸を張る。「野火」のマルコリヌ、と。
まぁ、メイジが直接戦闘にでなければならない時点で戦争は半分負けているというフレデリカの話を聞けば、逆に放火や焼き討ちで初戦の勢いをつけるのはメイジ向きかもしれないと思う。
もちろん、初戦失敗は責任多いだろうけど。
そういえば、粉塵爆発の種火にもなるし、練金＋水のメイジと組めば、結構なことになるかもしれない。
ふむ？　アランとレイナールに相談だな。

第二十話　「死亡フラグ」が生まれて（後書き）

捻った方がいいのではないかということで、物理的にひねってみましたｗ

おもに、運命とか生命とか・・・・

※今回の元ネタ
更新なし

４／４　色々修正なのです

第二十一話「死線」が生まれて（前書き）

筆者の勘違いで、きゅっと捻られる事になってしまった猫の騎士団。

生きててくださいｗ

第二十一話「死線」が生まれて

さぁ、団員全員真っ青の模擬戦（サバイバル）が始まるのですよ～

明るく言ってみたけれど、全く盛り上がらないケットシー学生騎士団の諸兄。

まぁ、仕方ないとは思うのですよ。

現代の生きる伝説にしてトリステイン最強最凶のメイジ。

もう、このチートなんとかして！！　という最高峰。

王宮でもこの人が出てくるとジャンピング土下座で迎えるという唯我独尊状態。

そんな伝説と、たかが学生メイジのサークルが模擬戦って、どんな無理ゲー？

とかなんとか。

そんな今なで始まる前に、いきなり御師匠様が偏在を使用。

周囲の地形を変えるようなカッタートルネードを連発します。

舞い上がる土、芝、石、いろいろ。

そう、いろいろ。

「ケットシー学生騎士団のみなさん。これより行われる模擬戦は「試合（しあい）」ではなく「死合（しあい）」です。」

にやりとわらう偏在と本人の御師匠様。

「なー、これって生き残ったら勲章ものだよな？」
「もちろんなのです。生き残ったら、再び肩を組み、妖精の元に旅立つのです！！」
「「「「「おおおおお！！！！！」」」」」

気合いは十分、「こうか　は　ばつぐんだ」なのです。

「フレデリカ、あなたは未だ罠に頼りすぎですね。」

魔法の実力が十分に高まったでしょう？　と小首をかしげる御師匠様。

「当然なのです。実力差が何桁もあるような相手と対戦するのに、策を巡らせないのは「バカ」か「官僚」だけなのです。」
「よい答えですが、あなたたちの仕掛けた稚拙な罠は、全て中に巻き上げましたよ？」
「御師匠様、当然全て気づいてくれると信じていました。」
「・・・なんですって？」

ちょっとだけ表情を変える御師匠様。

「マリコルヌ！」「おう！！」

巻き上げられた罠と、罠周辺で練金されていた火薬と、仕掛けられていた「野火」が、一気に反応するのです！！
瞬間、カッタートルネードは、全く意図されない炎の柱となり、制御不能の烈風を引き起こしたのです。

「くぅ、やりましたね、フレデリカ！！」
「やったのは、マリコルヌなのデス」
「「「「「そうでーす」」」」」
「はかったな、貴様等、計ったな！！」

ふぁっふぁっふぁ～、これでとどめが刺せるわけではないので、一気に行くのですよ！！

「土を基本に練金で吹っ飛ばすのです！」
「「「「「おお！！」」」」」
「御師匠様に体勢を立て直されたら、勝ち目はないですよ！！」
「「「「「おお！！」」」」」
「ここが我らの死線なのです、生きて妖精境へいくのですよ！！」
「「「「「おおおおお！！！！！」」」」」

とりあえず、誰も死んでない。
奇跡に近い。
お母様が半分以上本気で切れて暴れたのに、全く死者がいなかった。
これだけで「ケットシー学生騎士団」の団結力が知れる。
最後まで地面に立っていたのはフレデリカだけだったけど、お母様も余裕なく汗を流していらしたぐらいだった。

「フレデリカ、よくぞここまで「調教」しましたね」
「・・・御師匠様、「訓練」なのです」
「どちらも同じでしょ？　厳しくつらく当たりつつも飴を準備する・・・」
「心構えが違うのですよ、御師匠様」

なんていう心温まる会話があったんだけど、見学にきていた学院の生徒は絶句していた。

「ね、ねぇ、ルイズ。きいていいかしら？」
「なに？　キュルケ」
「これが、その、毎日だったの？」
「・・・？　ああ、これは手加減版よ？　だって、お母様、半分ぐらいしか本気じゃないし」
「・・・え？」
「最初のカッタートルネード、騎士団に打たなかったし」
「・・・・」
「全員生きてるじゃない？　魔力切れで倒れてるのに、追い打ちもないし。」
「・・・・」

そう、追い打ちはないし、トドメもない。
じつに健康的な「試合」だと思う。

「ルイズ、その感覚、忘れた方がいいわよ？」
「え？」

何かおかしいこと言ったかしら？
私は小首をひねった。

風の魔法を使うものとして、これほどまでに実力が隔絶していると何もする気が起きないものだ。
しかし、彼らは、「ケットシー学生騎士団」はそのフザケた格好

は別にして「真」なる貴族のあり方を示してくれた。
けして背を向けず、倒れるときは前のめりに。
己の守るものの為に、仲間のために、一歩でも全員が前に出るために協力しあうその姿は、最凶と言われたメイジに迫るものがあったのだ。
いまだ学生である彼らが。
正直に言おう、この試合をバカにしていた。
ドットやラインのメイジがスクエアに勝てるものか、と。
しかし彼らはやり抜いた。
隠された武器、隠された罠とおよそ貴族らしくはない行為だったが、彼の言葉が胸を打つ。
～「当然なのです。実力差が何桁もあるような相手と対戦するのに、策を巡らせないのは「バカ」か「官僚」だけなのです。」～
貴族としては頷けないが、軍人としての自分はうなずいてしまった。
確かにその通りなのだ。
ゆえに、その後の戦いも、数に任せた攻撃も、背後からの攻撃も、死角からの攻撃も、すべて弱者の努力の範囲といえたものばかりだった。
そのことがわかってか、女子生徒たちも固唾をのんで見守り、力つきた団員たちを魔法で引き寄せて介抱した。
それは奇跡の光景だったし、それは未来の可能性もあっただろう。
私たち教師では教えることの出来に光景が、彼らによって開かれ、教えられていくのだ。

とはいえ・・・・・

風サイコー

第二十一話「死線」が生まれて（後書き）

えー、十分捻れましたでしょうか？
きゅっっとなってます。多分ｗ

※今回の元ネタ
更新なし

第二十二話「嫁」がうまれてw（前書き）

何かというと「妖精」通いのフレデリカ。
じつはスケベ？

第二十二話「嫁」がうまれてｗ

模擬戦の翌日、うちの団員と友人知人、あとは御師匠様と関係者まで集まった打ち上げが、魅惑の妖精亭で開かれることになったのです。

最初は「ふしだらな」と眉をひそめていた御師匠様も、酒をあおるたびに砕けてゆき、隣に座るラ・ヴァリエール公爵を肩に抱いてご機嫌になっていた。

そんな最中に爆弾が落とされたのです。

「フレデリカ、そろそろエレオノールを娶る準備はできましたか？」

ぶばっと思わず吹いてしまいましたのですよ。

「はぁ！？　聞いてませんよ、そんなこと！！」

「言ってませんでしたか？　まぁいいでしょう。　あの子もすでに何年もあなたからの申し出を・・・。」

あ、なるほど、そういう搦め手で来ましたか。

とはいえ、何度も振られたネタなので引っかかりませんよ？

「はいはい、で、何人目の破談なんですか？　保険にとっておいたぼくは別計算で。」

「・・・・六人目よ」

「・・・・うっわー。」

ご愁傷様なのです。

思わず周辺も目を逸らしたのです。

「同情するなら婿にきて！！　主にエレオノールの！！」

とんだぶっちゃけ発言に引く周囲。
誰でもいいのですか、ほんとに。

「ぼくも当家の次期当主なのですよ？」

一応、ボクも嫡男なので、嫁はとっても婿には行かないのです。

「・・・くぅ、ならば、我が家にフレデリカが入り、ルイズに婿をとらせて・・・。」
「まったくうちの家の血脈が途絶えるのですよ！」
「・・・どうしてもエレオノールはイヤだと？」

暗い瞳の御師匠様。
やばい、話の通じない酔っぱらいモードなのです。
お師匠様がヤンデレ？　怖すぎなのです。
背後から天を突くようなカッタートルネード。
ある意味即死ですね。

「エレねえ様が嫌いだと言っている訳ではないのですよ。ただ、そんな無茶振りで進める話じゃないって言ってるのです」
「そうです、お母様。フレデリカは私の嫁です！」
「あああああ！　なんでそこでルイズは・・・」

なんという鉄板突っ込み、ルイズ、きみは怖い娘なのです

「そうですか、さすがにやりますね、ルイズ。そのまま上手いこと誑かし、エレオノールごと娶らせなさい」
「サー、イエッサー！」

「って、恐ろしい話をしないでくださいなのです！！」

ルイズには何れ訪れる騎士様がいるのですから！！

多分、きっと、めいびぃ・・・。

「それはそれとして、カトレアは娶るのは決定です」

「はぁ！？」

「これは既に王宮でも布告していることです」

「何を勝手に！」

最近、カトレア姉さまとの接点も少なくなって、結構安心していたのに！！

「違いますよ？　あなたとの婚儀を布告しているのではなく、「カトレアを治療できた者に、カトレアを娶らせる」と数年前に布告しているのです。」

そういえば、そんな噂を聞いていましたし、水の王国トリスティインらしい布告だと思った記憶があるのです。

・・・やばい、これは逃げられそうもないのです。

「公爵家の布告をあなたの個人的感情で反故にさせる、そんな権限はありませんよ？」

「そ、そんな、お母様！　私もフレデリカと結婚したい！！」

血を吐くような叫びに、瞳を輝かせる御師匠様。

「ルイズ、まずは学校を卒業なさい。カトレアは既に去年から王宮で国内貴族を説得し始めていますよ？」

「・・・わかりました。私も学内世論をまとめます」

「よい答えですね。」

・・・気づかぬ間に外堀が埋まってゆくのです。

がぁ、さすがに午後のお茶と一緒に「死合」は勘弁してほしいのですよ！！

フレデリカがラ・ヴァリエールに捕まっているのを肴に酒をあおる。

さすがに彼処までされているのに、よくもまぁ恐怖もなく怒りもなく酒が飲めるものだ、と。

「正直に言うけどさ、僕はカリン様を嘗めてた」

「ああ、おれも、団長（フレデリカ）の話を半分で聞いてたよ」

「・・・今までさ、死ぬかと思ったって単語を簡単に使いすぎてたって気づいたよ」

「生きてるってそれだけで幸せなんだってわかったのが最高の報酬だな」

男どもの雰囲気はまるで戦場から帰った兵士のようで、妖精たちも近づけない雰囲気だった。

「「「いやー、いきててよかった」」」

涙を流して肩をたたきあう騎士団を、なんとなく桃色の視線で女子がみている気がする。

あれ、もしかして「腐(ふ)」？

・・・だめだめ、あっちの趣味とは関わらないって決めてるんだから。

危ない危ない。

「・・・このままだと、フレデリカ、ヴァリエールにもっていかれる・・・。」

「あら、タバサ。フレデリカにご執心？」

「・・・フレデリカを嫁にするなら、私もついでに持っていってほしい・・・わたしはフレデリカの家具だから。」

「ちょ、ちょっと。タバサ、発言がやばいわよ？」

「・・・私は二番目以降でいい。」

「やばいわ、ちょっと萌えたかも。」

思わずタバサを抱きしめてしまった。

「・・・キュルケも？」

「あたしは、妾はいやかな？　というかラ・ヴァリエールにもって行かれるぐらいなら、略奪愛も・・・・」

あ・・・、なんかラ・ヴァリエール方面からすごい視線が・・・・。

くぅ、負けないわよ！　ね！？　タバサ！！

「私は二番目以降でも・・・。」

だめよ！　タバサは私の嫁なんだから！！

第二十二話「嫁」がうまれてｗ（後書き）

タバ子のキャラがブレまくっている気がしますが、これは近々でタバ子が読んだ本の影響ですｗ
微妙に二番目に拘っているのは、美味しいと思っているからっぽいです。

※今回の元ネタ
わたしはフレデリカの家具だから　・・・　うみねこのなく頃に

４／８　コメント追記

挿話０１　古手梨花と恋姫０１（前書き）

毎度ご贔屓いただき、ありがとうございます！
フレデリカとゼロ魔もガンガンアクセスいただいた御蔭か、５０万ＰＶ超えしましたー！

そんな皆様に感謝を込めて、溢れる気持ちを形にしようと挿話を書きました。
お楽しみいただければ幸いです。

お喜びいただければ、続きを次の区切りあたりで書きたいと思います。

挿話０１　古手梨花と恋姫０１

フレデリカとゼロ魔　５０万ＰＶ超え記念！！

古手梨花と恋姫！！

・・・やりたい放題だねぇ、私（＾＾；

「ここはどこなのですかーーーーー！！！」

黄砂吹き荒む荒野って、どこなのですかぁ・・・・

というか、候補としてはサハラ向こうという感じなのですが、なんとなく感じが違うのです。

こう、なんというか、精霊の感触が違うのです。

「それは当たり前なのレス！」

振り向けばそこにいるのは真っ白な髪の毛の猫耳少女。

「虎なのれすよ！」

「白いとら、白虎？」

「あたりなのれす、さすが精霊王の契約者なのレス！！」

白虎、曰く。

ここは異世界で、僕がこうしてここにいるのは精霊王との契約の結果だそうなのです。

僕自身、あの精霊魔法をどこでも使えるように契約しただけのはずなのでしたが、ちょこっとつきあってくれや、という軽々しい誘いとともに引っ張られて此処にやってきてしまったのです。

「契約なので仕方ないのレス」

「・・・くされ精霊王め・・・。」

生き残れたのなら、こき使ってやるのです。

というか、今の段階で滅殺なのですよ。

「で、僕になにをさせたいのですか？」

「この世界で虐げられている精霊の地位向上に協力してほしいのです！！」

「興味ないのです」

「・・・お願いなのレス」

くぅ、うるうる瞳で見上げてきやがったのです。これは強力な・・・。

「だが、断るのです！」

そう、フレデリカ＝ベルンカステル＝ド＝リステナーデは、ノーと言える貴族なのです。
王族にすらノーといえる貴族なのですから！

「・・・とりあえず、聞いてくれないと帰れませんのレスよ」

人質はボクなのです・・・。
悔しいけれど、父上や母上に心配もかけられないので引き受けるほかなさそうなのです。

「で、現実的になにをすればいいのですか？」
「精霊に導かれた救世主として、この荒廃した世界を救うのレス！！」
「バカは休み休み言え、なのです！！」

救世主？　荒廃した世界？
一人でなにをしろというのですか！？

「もちろん、一人ではないのレス！　白虎のほかにもお得な使い魔がついてくるのレスよ！」

とりあえず、頭痛のする会話を切り上げて、自分のたっている場所のことを聞き取ろうとしたけれど、精霊、人間世界の名称とか全く知らないでやがるのです。
どうしたものかと首を傾げていると、第一村人発見なのです。

「おい、じょうちゃん」

「はい、なんですか？」

じょうちゃんではありませんが、自分の見た目ぐらいは理解しているのですよ。

「身ぐるみおいて行けや、命ばかりは助けてやる」

「アニキ！　こいつ、結構かわいいですぜ。こいつごと売りましょうや」

「・・・か、かわいいんだな、かわいがってからでもいいんだな・・・」

んー、と色々と考えたところで対応を決めたのです。

「とりあえず、この白いので我慢するのです」

何となく沈黙がいたいのです。

「え・・・えええええ！　白虎を差し出すのレスか！？」

「・・・え？」

「なんでそんなに不思議そうな顔をするレスか！？」

「だって、ほら、従者は主人を守るものなのですよ？」

「槍働きぐらいはするのレスよ！！」

どこから取り出したのか、大人の男の倍ほどもあるような槍を取り出して、横凪に振ると、三人の男がすごい勢いで吹き飛んでゆくのです。

おお、いい感じなのですね。

「はじめから説明していれば、汚されることもなかったのに、残念

なのです」
「・・・汚れていないのレスよ！！」
「いやいや、ヨゴレけっていなのですｗ」

バカな会話をしているところで、この荒野を逃げる老婆と子供達を発見したのです。
逃げると言うからには当然追う対象が居るわけで。
逃げているのは「老婆」「幼女」＊2。
追っているのは「オヤジ」「チビ」「デブ」。
男はさっきの三人と同じ構成なのに、微妙に別人だとわかるのは何故なのでしょう？

「契約者様、助けるのレス。ずばばばんと助けて、精霊の名をあげるのレスよ！」
「あー、はいはい」

これもそれも、あの懐かしい大地に帰る為なのです。

ああ、無情を感じるのですよ。

山賊におそわれていた商隊から離れたのは正解だったけど、私たちとお婆さんの足の遅さが計算外だった。
商隊が全滅する前に逃げきれるはずだったのに、手勢の一部に見つかってしまった。

「しゅ、朱里ちゃん、どうしよう、もう走れないよ・・・。」
「雛里ちゃん、がんばって・・・・」

でも、もう策はない。
力の限り逃げるほかない。
人事は尽くした。
あとは天命に縋るほかない。

「ひゃっひゃっひゃ～、そろそろ追いかけっこもおしまいだぜっブゲラ！」

まるで、黒い塊のような何かが、大きな男性を吹き飛ばしました。

「そこまでなのです。」

その人は、みたこともないような、風に舞うかのような黒の衣装を身につけた少女。
荒野の風が彼女の周りだけ、黒を引き立てるかのように輝く。

「この、老女と幼女を追い立てる変態どもめ！！」

・・・発言は、その、アレですけど。

「ま、まてぇい！　俺たちは泣く子も黙る黄キン・・・・」

まるで夢のような武術でした。
三人に分かれたかのような分身で、同時に三人を攻撃して黙らせました。

・・・攻撃した場所が、アレ、でしたか。

「キンだかチンだか知らないのですが、老女幼女に欲情する変態どもに用はないのです！」

「・・・あ、、いや、、老女・幼女にゃ欲情していなくて・・・」

「そのみぐるみを・・・・」

黒い人は、さらに驚いた顔になりました。

「・・・つまり、中身よりもその衣服に欲情すると・・・この変態どもめ！！」

「「「ちげーーーー！！！」」」

なんでしょう、この人は。

一気に始末してもおかしくないのに。

「朱里ちゃん、朱里ちゃん、す、す、すごい趣味の世界だね。」

「う、うん、ちょっとドキドキしてきたね」

そう、中身よりも衣服に欲情する。

すごい趣味の世界だ。

「そ、そこ、そこの子供！！　そんな目で俺たちを見るな！！」

「そ、そ、そこまで落ちていないんだな！！」

「そ、そうだ、おれらは、おまえ達の衣類を売って・・・・」

「衣服欲情仲間とともに楽しむ、そういうことなのですね！！！」

「「「きゃーーーーー、へんたーーーい！！」」」

何気にお婆さんも叫んでいます。

結構ノリがいいですね。

「う、う、う、うわーーーーーーん」
「あ、アニキ！　ちきしょう、この屈辱はいつかはらすからな！！」
「く、くそぉ、かくれた趣味をみやぶられたんだな！！」

「「「「「「おまえ、本物かよ！！」」」」」」

混乱した場を使って三人の男達を撃退したボクと白虎は、近くの町まで幼女二人と老婆を送っていったのです。

そんな中の会話で、ちょっと困ったことがわかったのです。
ここが古代の中国で、三国志のまっただ中、というか序盤だったのです。
目の前の幼女二人からして、違和感満載。

「諸葛亮」「鳳統士元」

三国志の二大軍師なのです。
この、台詞かみがちな幼女、が。
それも、三国志序盤で、なのです。
混乱必至なのですよ。

「あ、あの、古様（クーしゃま）。」「立身のご予定はないのでしゅか？」

とりあえず、ボクは自分のことを「古手（クーディ）」と名乗りました。

なんのひねりも無いですが、結構通じているのです。
送った町の茶屋でお茶をご馳走になっているのですが、幼女二人が離れないのです。

で、さらに困ったことに、この二人、どうやらボクを王としてたてて、この乱世を治めようとか考え出しているようなのですよ。
白虎もその気十分で、やる気満々なのです。

・・・やらないのですよ?

「「「ええーーー!?」」」

実に不満そうな二人と一匹。
というか、白虎までそっちなのですか!?

「だって、契約者様が立ち上がってくれれば、目的も早期達成なのレスよ?」
「あのですね、三人とも。もう少し考えるのです」

立つにしろ立たないにしろ、今の時期は最悪なのです。
王朝は衰退し、官僚は享楽に走り、領主は暴走、民に至っては耳目をふさいで逃げまどう。
誰もなにもしないくせに文句ばかりの民草を、何の権利もない暴力だけが支配する。
こんな世の中で、志だけの立ち上げなど無意味なのです。
現状の権力を禅譲されつつ実権を手に入れ、民草の意識改革をしつつ、それでも平和を望むように導かなくちゃ行けないのですよ?
そんな曲芸、ボクには無理なのです。

そんなボクの言葉に唖然とする三人だったのですが、軽やかな拍

手が聞こえてきたのです。

「・・・素晴らしい見解だな」

現れたのは、実に幸薄そうな女性。
系統でいえば「モンモランシー」。
なにか、こう、自分だけではどうにもならない部分で致命的な欠陥があるタイプなのです。

「・・・知に優れ、それを判断することができる。なかなか出来ることじゃないぞ」
「お褒めいただき恐悦至極なのですが、どちら様で？」
「ん？　ああ、おまえたちが助けてくれた老婆は私の部下の縁者でな。礼を言おうと思って出向いてきたんだ。」

すっと右手を出してきたので、ボクもそれを握りました。

「公孫賛、一応、このへんの領主をしてる。」
「古手（クーディ）、旅人なのです」

ぶんぶんと勢いよくシェイクハンドのあと、彼女はボクをのぞき込むようにしていうのです。

「・・・話は変わるが、仕官のつもりはないか？」

いやはや、いい拾いものだった。

古手一味を此処一月ほど雇っていて驚いたのは、これほどの人材が遊んでいたのか、という事実だった。

客将という立場ではあれども、うちの文官筆頭でも太刀打ちできない「諸葛亮」「鳳統士元」は是非とも正式に仕官してほしいし、「白虎」は南蛮風の格好だが、その武は恐ろしいまでに高く、雑兵であれば数十を一合の元に叩き伏せてしまう。

が、一番ほしいのは「古手」だ。

政務事務には向かないが、政策方策に明るく、知略謀略に優れていた。

先日なども、頭の固い村長集団の会合で月琴片手に歌を歌ってその場を治め、さらには次の会合までに新曲を仕込んでおくとか約束して、増税の話を押し切りやがった。

・・・いや、正確には税制改革なのだが、圧倒的少数が、金持ちが増税になり、大多数、貧乏人が減税になるという不公平きわまる政策なのに、何故か反対もなくすり抜けてしまった。

思わず本当にいいのか、と商人の一人に聞いたところ、

「ああ、南皮に比べりゃ安すぎる税金でさ。そのうえ、税金に上限がある。つまり、上限を越えて稼げりゃ、その分全部自分のもの。こりゃ燃えるでしょ？」

つまり、そう言って乗せられた、と。

ほかの商人たちも、自分が払うであろう税金の上限を語って、そうそうに上限に行ってやると息巻いている。

なぜ此処まで息巻くかと言えば、上限税金に達した商人から先着で、橋の欄干や堤防の定礎に上限達成者の名前を入れるという約束があるからだ。

ただの、いち民草である自分たちの名前が、悠久の時を越える碑に刻まれる。
この魅力に逆らえる者など居ない、ということで、提案してきた「古手」の意見を採用した結果がこれだった。
名誉欲と巧妙心を擽る恐ろしい手腕だと言える。
「諸葛亮」も「鳳統士元」も軍略や政略には詳しいが、こういう詐欺っぽい手法には詳しくなく、関心ばかりしていた。
「古手」曰く、

「詐欺とは酷いのです。こういう誰もが嬉しい関係を結ぶことこそが政治の基本なのですよ？」

とか言っていたが、絶対嘘だ。
あれは、人知れず穴を掘って、はまった相手を助け出すときに天使の笑顔で迎える奴の顔に違いない。
私にはわかる、うん。
が、「あいつ」と違って「古手」は私の味方をしてくれる。
この点だけでも感謝できるというものだ。

「おや、伯珪殿ではありませぬか」

現れたのは、もう一人の客将、趙雲子龍。
こいつも「穴を掘る」やつだ。
で、こいつは落ちた相手が泣くまで見てる奴。
これはこれで知り合いに多い感じなので絶対に間違えない。
・・・つうか、私の周りはこんな奴ばかりなんだよな。

「どうした、子龍。」
「いやいや、我らが伯珪殿が、考えごとをしているようなのでな、ちと心配になりまして」

「私が思い悩むような話ならば面白そうだから聞かせろ、の間違いではないのか？」
「ふむ、間違ってはおりませんが、表現に雅さが足りませんな」
「否定しろよ、おい」

こう、なんつうか、扱いにくいんだよ、「子龍」も「古手」も！！いざ使うと絶妙に使えるのが腹立つけど。

「とりあえず、税を全体的にあげつつ不満が最小という離れ業をかました古手のことを考えていた」
「ふむ、あのカミカミ少女隊の隊長ですな」
「べつに古手は噛んでなかろう？」
「伯珪殿、ここは「少女隊」にツッコんで欲しいところでしたな」
「あ、ああ。でも、ほら、自称だろ？」

そう、古手。
あいつは、あんな姿格好見た目のくせに「男」を自称しやがる。
あり得ないだろ？　と言ってやったら、「花を散らす覚悟があるなら見せて確かめさせてあげるのですよ？　ニパー」とか言いやがった・・・・。
結構恐い顔してたよな、あいつ。

「あー、伯珪殿。とりあえず、男、でしたぞ？」
「・・・確かめたのか？」
「・・・華を散らされましたが、な」

なんて無謀な。

「そんなわけで、カミカミ少女隊隊長を「主」とせねばならなくなりました。」

うっわ・・・・・。
その、幸せに、な？

「うむ、ややこが出来たら見せますからな」

結構幸せそうに笑われたのが悔しかった。
つうか、職場恋愛禁止！！

「なんと、恋愛ではございませぬぞ？　これはいわば主従の契り、と契約更新」

あー、もう、聞きたくねーってばよ！

「残念ですなぁ、三刻にわたる戦績を克明に語れると思ったのですが・・・。」
「・・・おまえ、そんなに・・・」
「ええ、死ぬかと思いました」

すげぇ、古手すげぇ。
思わず感心して聞き入ってしまった。
こいつが「穴を掘る」奴だと言うことを忘れて。
忘れて・・・・・。

なぜでしょう。
朝チュンなのです。

「・・・・・・」
「・・・・・・」

なぜでしょう、両手に花、なのです。

右手には大変満足そうな趙雲子龍「星」。
左手には満足と疲労の色濃い公孫賛伯珪「白蓮」。
・・・双方共に全裸なのです。

いやいや、記憶はしているのですよ？
いろいろと制御は出来ていませんでしたが、自分の意志だったのです。
とはいえ、酒の勢いにかられて・・・。
は、無理ですね。
こんな弱い度数では我を失うほどにはなれないのです。

「リカ、その、はずかしいけど、おまえならいいよ」

そういって寝ぼけながら抱きついてきた「白蓮」を、いいこいいこと撫でたのですが、反対側から「星」も抱きついてきたのです。

「主は多情多恨ですな」
「僕を恨んでいるのですか？」
「恨む日が来るやもしれないと、今感じております」
「そんなときは、今この瞬間を思い出して欲しいのです。この瞬間だけは間違いないのですから」
「・・・存外、女誑しでしたな、主は」

「そうかもしれないのです」

そんなわけで、この日から星と僕たちは公孫賛軍に正式に組み入れられてしまったのです。

だって、白蓮が「捨てないでくれ」って泣きついてくるのです。

さすがに切って捨てられないのですよ。

梨花様と共に公孫賛軍へ正式に組み入れられて一年が経とうとしています。

一応立場としては公孫賛様こと「白蓮」さんの部下と言うことになっていますが、私も雛里ちゃんも梨花さまと共に立つことは諦めていません。

それ以前に、星さんも白虎さんも梨花様が白蓮さんを捨てられないから、この場に残っていることを理解しています。

白蓮さんもそれ自体を理解しているから、ベロベロに頼っていたりするのですが。

なんというか、きまじめな官僚が女遊びを覚えて身持ちを崩す、そんな感じに見えなくもないですよね。

もちろん、梨花様が襟を正す度に姿勢は直るんですけど、心がデレているので、形にしかならないのが心苦しい限りです。

ここ一年で支配地域は5倍、税収は12倍、収穫穀物は24倍にもなり、遼西郡を治めていた支配地域は、幽州の半分を治めるほどになりました。

商人達のやる気と農民達のやる気を巧みに操った梨花様の手腕と、

白蓮さんの政治的に裏のない誠意が実を結んだともいえる結果です。
ただ、逆に、自分達が得るはずだった成果を横取りされたと怒りを露わにする人たちもおり、着々とその「成果」を「取り戻そう」としている情報が入ってきています。

「・・・では、引き続き。」
「にゃお、なのです」

物陰にいた人の気配はそのやりとりで消えました。
顔も姿も知らない人達ですが、梨花様の配下「黒猫」の人達。
あらゆる組織の下働きに潜り込む、「情報」の戦士。

「やっぱり、袁の家は頭が悪いのですね」
「頭が悪いのは本初さんですね」
「というか、頭を悪くされてしまっているというのが真実かと」

梨花様と私と雛里ちゃんは、集まった情報を吟味しています。

「この、家臣団がガンなのです」
「でもですね、あの家を切り回すにはそれなりに・・・」
「この、ほら、荀？という軍師も、そろそろ切れて辞めるのですよ」
「・・そうでしゅね、優雅じゃない地味な意見だから受け入れられない、って、こんな理由で却下されたなんて、ふつう信じませんよね？」
「それでも、信じられさせられてしまう、それが本初さんですか。」

私たちの調べでは、荀？さんの意見自体はすばらしいのですが、特権階級の既存権益に大打撃なので却下されただけでした。
それをあたかも本初さんの意見のようにして突っぱねたというわけです。

越権もいいところですが、これがまかり通るのが今の袁家というわけです。

「・・・引っ張りますですか？」
「よろしいかと」
「賛成でしゅ」

そんなわけで、軍師荀？籠絡作戦が始まったのでした。
が、実は速攻で切れていて、黒猫さん達が接触したら二つ返事でこちらに来るとは思いませんでした・・・。

味方の秘密は敵が知る。
本当だと確信した。

私の施政改善案の大半が「地味」の一言で却下されていたという話、大半が謀略であったと説明された。
揃えられた資料は、袁家における既存権益を確保したい手勢と癒着した商家。
そして罪人ども、すべてに関して網羅されていた。
一つ一つ説明され、その上で献策の殿部分が彼らの不具合だった

かまで説明されてしまった。
声もないとはこのことだ。

「で、私になにをしろっていうの？」
「いえいえ、工作の類ではありませんのです。簡単に言えば移籍交渉なのです」

十分工作だと思うわよ。

「ですが、袁家の扱いを考えますと、寧ろ向こうも大喜びで・・・」
「わかってるわよ！　私が辞めるっていったら、給金三倍出してきたもの、わかりきってるじゃない！！　誰にも引き留められなかったんだから当たり前じゃない！！」

くそー、泣くものか。

「そんな荀？様を、我が勢は、心から喜んで引き入れたいと・・・。」
「でもあれでしょ？　公孫賛っていえば、「ふつう」でしょ？」
「普通を嘗めてはいけないのですよ。」

黒髪の少女は朗々と歌いあげるように語る。
何でも普通にできるというのはスゴいことなのだと。
剣・槍・格闘・政務・雑務どころか、細かな技に至るまで何でも普通にできるという。
一番驚いたのは乗馬しての武技だった。
剣・槍・弓を、乗馬したままに「普通」に行えるというのだ。

「なによ、その何でも超人」
「そう、すべて普通というのは、何でもできると言うことなのです。

こんな図を書いてみるとわかるのですよ」

そういって、円に近い多数角形の絵を画く。

そして、ぴぴっと一本だけ突き抜けたいびつな三角や線を書き入れる。

「普通は、武や知だけがこんな風に突き抜けているのです。ですが白蓮は、それ以外も満遍なく出来るのですよ」

視覚的に理解したわ、全体的な能力値は飛び抜けていないけど、何でも出来る、誰にでも代われる能力者。

・・・スゴいじゃない。

「ね、もしかして、周辺の平均値が上がると・・・」

「よく気づいてくれたのです。そのとおり、周辺の能力値の平均値が押しあがると、いつの間にか本人の能力値も押しあがるのです」

うわ、面白そう。

本気で私はそう思った。

逆の意味で、全体的な能力値が高い支配者の元で、知の部分を摺り合わせようと思っていた私にとっては、ひどく興味深い存在だった。

この正面の黒猫少女と私が組めば、知の方面の平均値は恐ろしく上がる。

その影響がどれだけになるのかが見たい気がした。

「・・・客将としてなら行ってあげてもいいかもしれないわ」

「感謝感激なのです！！」

きゅっと私の両手を握る黒猫、古手（クーディ）の手を、私も握りかえしていた。

城に戻ると将が増えていたのです。
関羽雲長、張飛翼徳。二人とも女の子なのですが、張飛も幼女なのです。

どこまで幼女ですか、この世界。

で、武の平均値がつり上がった影響か、白蓮がかなり強くなっているのです。

「・・・本当だったのね」
「本当だったのです」

関羽こと愛紗（アイシャ）は、その事実に事のほか喜んだ。
自分の考える世の中を、人材を集めることによって成し得る可能性を見いだしたからだ。
張飛、鈴々（リンリン）は愛紗の機嫌が良くて嬉しいらしいけど。
荀？、桂花（ケイファ）も組み入れた公孫賛軍は、拡充の期間を越えて、迎え打つ力の蓄えを完了したのです。

武将、関羽　張飛　趙雲
知将、古手　諸葛亮　鳳統　荀？
総大将　公孫賛

１０万の常備兵力を集め、訓練することが出来る勢力なのです。
何気に押さえるところを押さえきった、まるで一大勢力なのですよ。
これは周辺がおびえるのは当たり前なのですね。
基本、袁家は戦々恐々しているのですが、本初さんと白蓮が割と近い知り合いらしくお互いの実力を舐め合っているのです。
そのへんが理解の妥協点だと思っていたのですが、向こうさんが現実に気づいたようなのです。
そりゃそうでしょう。
実働資産が倍半分まで引き離されているんですから。
もちろん、向こうの名家・歴史なんて流れは模倣できませんが、今動かせる資金や資材という点で見れば、はっきり言って勝負する意味すらないレベルなのです。
とはいえ、向こうでチロチロ見えていた「得るべき資産」を「取り戻せ」というバカな手勢が勢いを増し始めたのです。
そろそろ農業も一区切りつく頃なので、動員を開始するつもりなのでしょうけど・・・・。
「はぁ、袁家の動向を、なんでここまで細かくわかるのよ、「ここ」は！？」
桂花は、僕の仕事部屋、情報分析室で頭を抱えていました。
「袁ばかりじゃないのですよ？」
洛陽や曹家、呉なんかもありますし・・・。
周辺豪族のところには、ほぼウチの黒猫がいるのです。

「うわぁ・・・、あんた、これで大陸締められるわよ・・・」
「そんな事無いのですよ？　必要な情報があっても、白蓮では大陸の王になることは出来ないのです。せめて三分の一がいいところなのですね」
「それで、この「天下三分計画」になるわけね？」
「そうでしゅ！　優秀な手勢を育て成長させ、よりよい支配体制を三つ組み合わせ、恒久的なセメギ合いを続けさせることで、大乱を小乱で納めるという計画でしゅ！」
「すばらしいです、すばらしいのでしゅ！！」
「「梨花しゃま～」」

一大勢力になっている公孫賛軍がいるからこそ打ち出せたプランなのです。

「で、なんで袁家がこの三分計画にはいっていないの？」
「それが理解できないなら、この部屋で見たことを忘れるのです」
「・・・冗談よ。私だって、この先あの袁家が残るとは思っていないわ」

桂花が苦笑い。
まぁ、一番内情に詳しいのだから当たり前なのですよ。

予想より一月遅く袁家は戦端を開いてきました。
当然の事ながら、侵略経路計画なんてダダモレだったので、個別分断して兵糧を絶って行ったのですが、逃げ出した敵兵が悪夢のごとくに山賊化しやがったのです。

村をおそう、町をおそう。
ルール無用の残虐ファイトにマジ鶏冠にきたっというわけで、阿呆な山賊を本気でマジ刈る為の将兵の増員をしたところ、驚く人材がガンガン集まってきたのです。

武将　馬超　馬岱　許緒　典韋
知将　程立　郭嘉

・・・まずいのです、まず過ぎなのです。

曹操の陣営をあらかた引っこ抜いている気がするのです。
いま、曹操の手元には「夏」姉妹しかいないんじゃないでしょうか・・・？

「馬」一族は、曹操に滅亡されたわけではなく、武者修行中にこの挙兵を受けて仕官を決めたとか。
で、許緒・典韋の幼女コンビは、旅の中で世の乱れを憂いで、平和を望む気持ちが高まったところで聞いた挙兵に参加する気になったという。
程立・郭嘉は以前、趙雲子龍と旅をしていた縁で訪ねてきたという。
で、面白そうなので仕官。
いいんだろうか、と思ったのですが、人の流れというのはそう言うものかも知れないのです。

「聞いてくれ。」

軍議の場で白蓮は今わかっていることを整理しました。
未だ常備軍を送ってくる袁家。
しかし、国境を越えたあたりでチリジリになる弱弱軍。
ところがどっこい、生きてたバカが１００％山賊になるという悪質さ。

「我々は、山賊化したバカの掃除と、袁家の軍の迎撃という二面作戦を行わなければならなくなってしまった」

実際は二面どころではないのですが。
進軍は三面、山賊は多面。
正直に言うと山賊におそわれている村村を見捨てるのが一番楽な方針なのです。
しかし、白蓮はそれをしない。
すべては無理だとしても、手も届く範囲は助けたい。
それが出来る力があるからそれを実行する。
愚かしくも愛おしいまでの想い。
これがいつか足を引っ張ることだとわかっていても、僕たちはそれを止められないのです。

「愛紗、鈴々、翠、蒲公英は、それぞれの部隊を率いて、袁家侵攻をくい止めてくれ。軍師は引き続き、朱里、雛里、荀？」

「「「「「御意」」」」」

「梨花は、風　稟と共に山賊化したバカどもの探査と内政に従事。
バカ退治は即応で星・季衣・流琉・白虎の部隊が対応。即応は進軍対応もしてもらう。詳しくは梨花が指示してくれ」

「「「「「御意」」」」」

では、と周囲を見渡す白蓮。

「死ぬな、名を惜しむな、命を惜しめ。・・・出立！」

「「「「「御意！！」」」」」

さーて、僕らはバカ退治なのですよ～。

私たちはこの村で育ち、そして大きくなった。
飢饉もあったし増税で苦しくなったこともあったけど、最近、周辺を治める領主様の治世が良いお陰か、ずいぶんと楽になった気がする。
が、それも、あの恥知らず達が来るまでの話だ。

あいつらは敗残兵だった。
隣国から攻め込んできたはいいが、負けてチリジリに逃げてきた男達だった。
とはいえ、元々は無理矢理集められた農民だという事で、食事や飲み水を分けてやったのが間違いだった。
居直りタカリ、最後には武器で村人を傷つけるまでになった。
近くの山を自分達の山だと言い張って、上納金を寄越せだなどといいだした時点で徹底抗戦の意志を決めた。
が、私たちのように戦う意志のあるものばかりではないし、戦えるものばかりではない。

だから、無駄と知りつつも助けを呼んだ。
領主様のところで、現状を、窮状を訴えるために人を走らせたのだ。
評判がいい領主のことだ、もしかすれば中央や周辺軍に声をかけてくれるかも知れない。
本人の兵が来るかも知れないが、あまり期待もできない。
何しろ今は隣国の侵攻に対抗中なのだから。

「凪ちゃん、どれだけ持たせればいいとおもう？」
「そうだな、二ヶ月は持たせたいな」
「むりやろ、それ」
「解ってる。だから、できるだけ長く、だ。」

あいつらだって、ここの領主の軍に負けたのだ。いつまでもここに居座ることなどできまい。

「・・・まぁ、そんなに長く待つ必要はないのですよ？」

「「「え？」」」

私と、真桜・沙和は、不意に現れた少女を驚いて見つめた。
黒色直毛の、風に舞う髪の毛。
黒一色でありながら艶やかな艶を見せる衣服。
少女はそんな格好で微笑んでいた。

「公孫賛軍、軍師、古手（クーディ）なのです」

一礼と共にされた説明では、すでに二つの軍が派遣されてきているという。
しかし、対象が間違っていると問題があるので、ウチの村から何

人か派遣してほしいというのが古手殿の申し入れだった。
私たちは全く問題ないと引き受けた。

それは正に蹂躙だった。
正規の兵力というものが如何にスゴいものなのかを、自分自身の目で見ることができた。
確かに一人一人の力は私たちに劣るものなのかも知れない。
しかし、一人が二人と連なり、二人が四人と連なり、四人が、十人が、百人が大きな波になって押し流す様は、天災かと思えるほどの力になっていた。

「こ、これが軍」
「そうなのです。訓練された兵を訓練した将が率い、そして軍師が軍略を考える。一人一人の人間では無し得ない活動限界を超えた先にある「人間以上」こそが本当の軍の姿なのですよ」

人間以上、その言葉は私に明確な道を見せた。
私もまた、一人の人間としての限界を考えつつ、それ以上を模索していたから。

「な、なな、古手はん。それって、うちらもできるんか？」
「もちろんですよ」
「さ、沙和たちも「人間以上」になれる？」
「当たり前なのです」

「・・・私たちを、導いてくれませんか？」
「それが軍師の仕事なのです」
「「「！！」」」

それは当たり前のように私たちは古手殿の元に集うことを決めた。
まるで運命に従うかのように感じた私たちだった。

まーた、やっちまったのですよ。
今度は三人、楽進、李典、于禁、なのです。
・・・やべぇ、曹操丸裸。
主な武将、全部横取りしてるかも。
つうか、野心の一つでもあれば、白蓮、曹操の立場に立てるのですよねぇ・・・。
朱里や雛里は、そっちのほうに白蓮を動かしたいらしいけど、愛紗がそれを許さないという感じ。
正面から衝突してはいないけど、いずれ方向性の違いで爆発する気がするのです。
部下がそんな事を考えてしまうほど無色な上司、白蓮。
おもしろ過ぎなのです。

「なー、梨花。」
「んー？」
「あのおまえが連れてきた三人」
「うん、面白い子達なのですよ」
「ありゃ、いい感じだな」
「それが解る白蓮も大した奴なのです」

楽進、李典、于禁、は、一人一人は将としての実力に届かないけれど、三人一体と考えると将を越えるのです。

もちろん、評価とか実力はまだまだですが、得意な分野や能力が偏っていて、それが高いのです。

実に、非平均的でいいのです。

というわけで、白蓮の平均化能力にも良い影響がでていると愛紗も星も大喜びなのですが、朱里雛里の野望は遠のいていますです。

少なくとも、曹操系に白蓮を高めたいなら、知力系の軍師を増やすほか無いのですが、そうなると、袁家のような騒ぎにならないようにバランスが必要なのです。

実際、白蓮の公孫家は実にバランスがとりやすいので崩したくないでしょうし。

野望をとるか、バランスをとるか、このへんが幼児達の悩み所なのでしょう。

とか何とかいっていましたが、実のところ、幼児達が僕をたてることを忘れていなかったことを忘れていた僕が、後々追いつめられることになるとはこのとき解っていなかったのでした。

最近、梨花様は風格を増された。

公孫賛軍内でも、梨花様に個人的な忠誠を誓っている人も多い。

もちろん、乗っ取りなんかを梨花様が望んでいるわけではないの

で、そんな行動はとらないけど、朱里ちゃんはそんな風になるように軍略を進めている気がする。
少なくとも、山賊化することが解っているような敗残兵を量産している時点でおかしいのだから。
穿った見方をすれば、梨花様を個人崇拝している武将達には経験を、すでに梨花様の配下ともいえる人たちには伝説を、そんな割り振りをしているのではないだろうか？

「雛里殿、そろそろですぞ」

梨花様が旅先で助けたという少女、陳宮公台、真名を「音々音」。
かなり朱里ちゃん好みの軍師志望。
助けてくれた梨花様に傾倒しているのも好みらしい。

「わかりました。では、さっさと即応部隊をまとめて黄巾バカをたたきまショウ」
「了解なのです。」

にこやかに微笑んで、指示を始めました。
かなり的確ですが、裏表のない戦略が多いので、知将のいる軍には通じない可能性が高いので、私は背後の「黒猫」さん達に情報収集をお願いしました。

・・・・・・

心配はとりあえず杞憂。
知将らしい人物も、背後からその指示を与える様子もない、との事なのですが、何となく不気味な集団だとのことです。
私も何となく不気味な気配を感じるので、警戒をあげていきます。

そろそろ音を上げてくれても良い頃なのに散発的な進軍が続いています。
計算ではすでに兵糧はつきているはずですし、集合できる兵力は既に無いはずなのですが。

「諸葛亮様、大黒猫からの書状です」
「ご苦労様です」

受け取ってみて、そして納得した。
この連続した兵力は、どうやら山賊化しないで戻った兵らしい。
そして士気が低いのは、領地で一族が人質に取られているからという理由でした。
なんとも効率の悪いことをするものです。
さらには、再生部隊には兵糧が渡されず、死ぬまで時間を稼ぐことが至上命題とか。
だったら、こっちに取り込めるようにすればいいのでしゅね？
梨花様。

「部隊長以上をすべて召集してください。早急に方針転換をします！！」
「「「はい！」」」

ではでは、勝てるかも知れない気持ちで地獄行き作戦に切り替えましょう。
ふふふ。

はじめ、朱里から一時撤退、支城への各部隊立てこもり案を聞いたとき、気でもふれたかと思ったが、すべてを聞けば理解できた。

まず、散発的に送られてくる部隊全部を公孫賛量に引き込むことで、その補給線を延ばしきること。

引き入れられた部隊規模や、後続部隊の質をみれれば、以後の展開も予想範囲か確認できること。

そして、財政上破綻一歩手前の袁家にとって、勝てるかも知れない戦は、勝っておかなければならないという現実であることを、こちらで理解するための布石とのこと。

最後に、現在背後で行われている「反董卓連合」結成妨害への布石だった。

財政が傾き、自領内での不満が高まっている今、何とかしなければならない意識を、洛陽の悪「董卓」退治で大活躍という飴を舐めさせる方向で慰撫しようというのだから呆れてモノも言えない。

先日直接見聞きしてきた洛陽の様子を見れば、全くの嘘と解るのに、暴政だの暴税だの、そりゃお前の領地のことだろ？　と返答したい内容だった。

とりあえず、馬騰・曹操・袁術・劉障あたりに声をかける心積もりだったらしいのだが、劉障を呼ぶためには私たちの領地がじゃま、さらにいえば規模として公孫賛を呼ばないのはまずい。

だったら、下して配下にしてしまおう、という思考が透けて見える。

余りに現実不可能な絵空事が方針として動くのだから、元々軍師であの場にいた桂花も苦労したのだろうと同情を禁じ得ない。

「愛紗、少なくとも袁には感謝してるわ」

「ん？　そうなのか？」
「だって、ここの仲間に会えたんですもの。袁にいなければ、勧誘もこなかったでしょ？」

苦笑いで強がりを言う桂花。
血の涙を流すほど悔しかったはずなのに、今の幸せを甘受するというのだ。
どれだけ今が嬉しいかを知れる話だ。

「で、また梨花ってば幼女拾ったんだって？」
「ああ、今度は軍師志望だな」
「ふーん、じゃ、今度適正みましょうか？」
「ああ、基本、軍師志望と「黒猫」が認めたからには適正はあるのだろうしな」
「へぇ、「黒猫」が認めたんだ。じゃぁ、本物かぁ・・・・。よっし、「軍略将棋」を教え込んで模擬戦仲間を増やすわ」

軍略将棋というのは、梨花様が持ち込んだ盤上遊技の一種で、正直に言うと私には決まり事すべてを理解できない。
が、軍師達には異常に好評で、まさに軍略や戦略を研ぎ澄ますのに最適だとか。
現状、最強は梨花様、続いて雛里、で、他は勝ったり負けたりという状態だ。
朱里が飛び出ないのが不思議だが、雛里曰く盤上を通して現実の戦略をみているため、遊技自体をしている間に仕事を思いついてしまい集中できなくなるそうだ。
なんともはや、遊んでいるときぐらい、心から楽しめばいいのに。

「そこが筆頭軍師と言うところでしょ？」

誰もが認める筆頭軍師、諸葛亮孔明。
少女の見つめる先に存在する、そんな世界をみてみたい気がした。

あはははは、今度は陳宮なのですよ。
思い出したのですが、この世界、恋姫無双ですね、うん、理解できたのです。
さすがにＴＳもの、ほとんどの武将がＴＳ美少女なのです。
実に男の妄想に適した姿なのです。
つうか、白虎、ほかのお得な使い魔はどうしたですか？

「・・・みんな、戦々恐々してるのレス」
「なんでなのです？」
「梨花が、次々と女や幼女を喰ってくので、自分も食べられてしまうのではないかと警戒してるのです」

自分を省みて、結構絶望したのです。
貞操観念が結構進んでいるつもりでしたが、バリバリやりチンだったのです。
指折り数えると、結構、反省なのです。

白蓮が大様に許してくれるので、自由にし過ぎました。

「まぁ、折を見て呼び込んでほしいのです」
「・・・喰わないレスか？」
「無理矢理はしないのですよ」
「・・・信用するレス」

まぁ、それはさておき。
「黒猫」の調べでは、そろそろ息切れを始めた袁紹軍は、袁術に協力をさせようとして断られ、いよいよ追いつめられているはずなのに、袁のトップ、本初さんは全く解っていないらしい。
というか、理解させてもらえていないというのが真実だろう。
それなりに御付きの二人はがんばっているらしいけど、本初さんを固める家臣団が強烈らしい。
でも、まぁ、本当につぶしてしまうのも面倒くさいのですよね。
どうしようかなぁ・・・。

「・・・ありゃ、梨花様悩み事？」

ちょいーんと現れたのは、白蓮の学友だったという巨乳チャン。
名前は・・・、そう、「劉備」。
・・・そう、あの劉備なのです。
で、なぜか文官見習い。
・・・挙兵はどうしたんだー、とは思ったのですが、こまけえことはいいんだ、と言うことでスルー。

「実は、お隣をつぶさないように方向転換できないか、悩んでいたのです」
「え？　簡単でしょ？」
「どう簡単なのですか？」

「お友達になって、お願いすればいいんだよ！」

このカリスママックスハートは言いやがりますですね。

・・・あ。

「じゃぁ、本初さんとお友達になってきてくれますですか？」

「うん！」

こうして、精神攻撃兵器「オトモダチ」爆弾が袁家に投下されたのです。

近日中にオトモダチ菌に汚染された世界が展開しているのを予想できるのです。

「じゃぁ、連絡は「黒猫」でするのですよ」

「はーい。でさ、どういう方向転換するの？」

「それはですね、本初さんに、現実を知ってほしいのですよ。」

税収は落ち、民草は差し出せるものが既に無く、このままでは「本初」さんが袁家をつぶしたという歴史が残りますよ、と。

そんなことを、劉備、いえ、桃華らしい言葉で教えてあげてほしいのです。

「うん、大変だよね、名家って」

「桃華だって、劉の末裔なのですよ？」

「あははは、亡国三桁年でなにが末裔だか。私はみんなの笑顔が増えるように動ければ立場なんて関係ないよ」

実に好意的な発言なのです。

白虎も「この天然は純粋に育てるべきなのレス」と言っているの

で、虚像ではないのでしょう。

「じゃ、出発は三日後に」
「はい、御意です、梨花様」

梨花様は恐ろしい手を打ってきました！
あの劉備さんを「本初」さんのところに送り込んだんです！！
あの抗戦的「オトモダチ主義」の劉備さんを、徹底的利権世界に放り込むだなんて、なにを考えてるんですか！？

「朱里ちゃん、これは妙手だと思うよ」

雛里ちゃんの話を聞いて、私もその有用性は理解できたけど、そんなに上手くいくのかな？

「それがね、朱里ちゃん。これをみて」

それは袁家にいる「黒猫」さんからの報告で、内容は恐ろしいモノでした。
袁家に採用されて下働きを始めたのが潜入２日目。
二枚看板に気に入られたのが３日目。
本初さんに真名を教えられたのが４日目。

で、面倒くさい案件や難しい案件を「華麗で優雅な説明」で取捨選択させることができるように判断させるようにできるようになったのが6日目。

今ではすべての上奏案件、というか本初さんの許可を絶対に取りたい案件はすべて劉備さんを説得してからじゃないと通らない仕組みになっているとか・・・。

さらに、劉備さん、民の現状とか国の現状を話の端々におり込んで、本初さんに理解させているというのです。

「りゅ、劉備さん・・・怖い人」

「朱里ちゃん、いま、最新の情報」

一読した雛里ちゃんが渡してくれた書簡をみて、私は息をのんだ。

なんと、今回の侵攻を正確に理解していなかった本初さんが、背後関係と真の理由に気がついたというのだ。

つまり、家臣団の、自分たちの私腹を肥やすための公孫家への侵攻と、民草への不満、そしてその不満を逸らすための有りもしない洛陽暴政の噂を立てる計画。

それを周辺状況から押さえ込んでいたという公孫賛家臣団の動き。

そのすべてに。

ここで、私たちが思っていた「おーっほっほっほ」という人格だったら、自分の邪魔をする公孫賛許すマジ、となるところなのですが、恐ろしきは「オトモダチ病」。

なんと、自戒したというのです。

あの袁紹本初さんが！！

そして現在の侵攻を取りやめつつ、和議の準備をしているという

のです。
　というか、反旗を立てた家臣の一部の討伐も手伝ってほしい旨が劉備さん経由できてます。

・・・本当に怖いですよ、劉備さん！！

向こうの二枚看板には「大変よい人を紹介いただいて感謝してます」って本気で感謝状がきてるんですよ！？
　ふつうならこれって、「てめえのところの工作員だってわかったからな、腕の一本でも送るから後悔しな」って書状のはずなんですよ？

なのに、本気感謝。
・・・本当に劉備さんは怖い人です。

「雛里ちゃん、じゃぁ、迎撃を前進させることが可能な方策で」
「あと、残りの家臣団が「無断越境迎撃すべし」とかバカができないように手を打たないとね」
「そっちは私がするから、雛里ちゃんは上奏をおねがい」
「うん、じゃ、がんばろうね」
「うん」

まえ、桂花さんが言っていた「大陸を締められる」話を本気で考えてしまう私でした。

なんつうか、麗羽は昔に比べて変わったけど、ここ最近の変わり様は異常だった。
というか、別人だろ、これ。
梨花の話だと、「桃華」をオトモダチとして投入したと言われて、それなりに理解できたけど。
桃華のオトモダチ理論は、基本、この世界では拒絶される。
甘いこと言ってるなよ、と。
ただ、甘いことを言ったり聞いたりできる立場の人間には千金に値する言葉になったりする。
つまり、麗羽にとってみれば、厳しい言葉でも痛い言葉でもなく優しい言葉で正しい道を示してくれるように見えるわけだ。
ふつうなら通じないよ、こんなの。
でも、桃華と麗羽だからこそ噛み合った。
二人だからこそ、一つにまとまった。
まとまってしまった。

まさに、「何とかに刃物」。

正直、二枚看板が感激と感謝でウチの城まで使者としてきたのをみて、どんだけ桃華に依存してるんだ、と寒気を覚えてしまった。

「いやー、公孫賛伯珪殿には、心底感謝感激です」
「姫のワガママを抑えてくれて、政務まで回してくれる人材を、秘密裏に回してくれるなんて、どんだけ人がいいんだってかんじだよなー」
「がんちゃん！　し、しつれいでしょ！！」
「で、でもよー、とし～。」
「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！！」

まぁ、いいさ、この程度。

私は余裕ある女なのさ～。

「まぁまぁ、二人とも。その辺のやりとりは知ってるから、以後遠慮してくれればいいよ」

「「あ、ありがとうございます」」

主たる度量も見せられたし、そろそろいろいろと本題にはいるか。

じゃ、本題用軍師、召還。

「「よばれて飛び出てじゃじゃじゃじゃ～ん」」

梨花と風を交えた戦後補償や、領地運営を順調に行うことで上がった利益を、今後の補償金に充てることなどを交えた交渉が始まった。

ま、この辺からは向こうの持ち出せる範囲とこちらの求める利益のすりあわせになる・・・はずだった。

「・・・というわけで、領地共有を行って、農業指導と治世情報交換を行うのです」

「袁家では高収穫量の秘密と治世の妙を学べ、公孫家は確実に借款の回収が出来るという共に得する計画です～」

「いまこの計画に乗ってくれれば・・・」

「桃華さんが、半永久的に本初さんのオトモダチとしてついてくるのです」

「「のった、のった、のった！！」」

おいおいおい、いいのか、それで！？

そんなわけで、麗羽の領地の半分も共有領地として管理し、戦後賠償として租税までとれる立場になってしまった。

「大丈夫なのか？」
「ん？　白蓮不安ですか？」
「あたりまえだろ！　あんだけの領地を差し出すなんてあり得ないだろ？」
「そこを上手く説明できるのが桃華なのです」
「そうですねぇ、劉備さんならたぶん「・・・そうだねむちゃくちゃに感じるよね、でも、白蓮ちゃんがこのまま支配し続けるなんてあり得ないよ。たぶん、広大だけど能力の低い土地を開発して、いっぱい作物が出来るようになって、それが安定したら、いつの間にか戦後補償終了とかいって、肥沃な土地になった領地を返してくれると思うよ。白蓮ちゃんってそういう人だから・・・」とか言ってるはずですね」

思わず私もその姿が明確に想像できて怖かった。
確かにそういう方向性で考えていたけど、逆に何の確証もなく麗羽に言い切れて、その上で説得が出来ると思える桃華が怖いと感じた。
だが、それも戦略に組み入れているウチの軍師がその百倍怖かった。
私はどこに向かって走っているんだろう、そんな風に感じたのだった。

私が拾った黒猫一味。
すべてがこれを中心に回っている気がする。

・・・となると、自業自得かぁ？

風と二人でガンちゃんトシを洗脳しきったところで、ぱぱ～と袁家に返却。
第一交渉を桃華を通して行って、あとは本初さんに通す。
これで、９割方とおる。

「全部通らないんですか？　リカちゃん」
「通らない、というよりも、桃華のところで歪むんです」
「・・・・あぁ・・・なるほど・・・。」
「さすが大黒猫、こえーなー」

風の腹話術で、頭の上の人形がしゃべって聞こえるのはいい感じなのです。
最近、字が「大黒猫」になったのです。
「大熊猫」ならパンダなんですが。

・・・あまり関係ないですね。

とはいえ、袁家が余力が無くなったのでこれで反董卓連合はなしかなーと思っていましたが、歴史の修正力はその程度ではなかったとわかるまで、時間はかからなかったのです。

挿話０１　古手梨花と恋姫０１（後書き）

いろいろとキャラ崩壊やご都合主義がまかり通っていますが、まぁ、勢いだけで書いてますんで、気にしないでくださいｗ
プロットとか全く無しなので、キャラクターの全力疾走にこっちが困ってるぐらいですし～

・・・

こんなもの書いてるぐらいなら、いま書きあがっている「文」を、全部吐き出せ、話はそこからだ、というご意見も頂きましたが、その辺の公開手法に関する見解も色々とありますので、ご勘弁いただきたい。
読んでいる人にとっては先が気になるので早々に並べろという話でしょうが、私にとって見ると、さっさと読み捨てられてしまいたくないという思いもあります。

そう、読み「捨て」られたくないのです。

自己満足で書いている作品ですが、それでも、面白いといっている人たちとは言ってくれる人たちとは世界を共有したいと感じています。

だから、

読んで「やっている」立場の意見は、ご勘弁ください。
ご意見ご批判はありがたく受け取りますが、「否定」までは受け取りませんので。

第二十三話「無茶振り」が生まれて（前書き）

アンリエッタはつくろいませんｗ

正面から、真っ向勝負です。

勿論負けますがｗ

第二十三話「無茶振り」が生まれて

「フレデリカ、シュバリエの称号を得なさい」
「いやなのです」
「フレデリカ、シュバリエになりなさい」
「だが、断る！　なのです」

王宮の無茶振りにノーといえる貴族、それがボクなのです。

突然王宮に呼び出したとたんにバカなことを言い出した御花畑を完全否定したところで帰ろうとしたら、涙ながらにすがりつかれたのです。

ええい、王女の自覚を持つのです、御花畑！

「まって、待ってちょうだい！！　話を聞いてほしいのよ！！」
「・・・だったら初めっから話すのです。」

御花畑曰く、ガリアとの国交樹立とアルビオン復興支援、そして国内不穏分子の狩り出しまでやっていると、完全に人手不足だそうなのです。

で、武力や諜報力を国内に向けなければならない今現在で、重要な案件を任せられる貴族が不穏分子っぽい状況では身動きがとれない。

だったら、国外にも人気が高い「物語のフレデリカ」に親善大使として出向いてもらえば、と鳥の骨が言い出したそうです。

あの、無駄に神経をすり減らしている爺には同情するのですが、巻き込むなっ！　なのです。

「お願い、国を、私を助けると思って・・・、いいえ、私の明るい

未来のために・・・・。」
「対アンリエッタ借款は、ずいぶんと僕寄りな気もしますが？」
「期限の決まっていない借金なんか後回しよ！」
「いい度胸なのです。ならば、かなりの無茶振りを飲んでもらうのです」
「・・・いいでしょう。国の力見せますわ」

すがりつき姿勢から女王ポーズに移行したアンリエッタ。
ふふふ、ボクの無茶振りに震えるがいいのです。

「身上が真っ白で、地位もそこそこ、名前も顔も上々という男とエレノオールねえ様を成婚させるのです。もちろん、ぼくとの成婚以外で。」

アンリエッタ、膝から崩れ落ちましたのです。
真っ青な顔を両手で支え、イヤイヤと顔を降ります。

「・・・まだ、平民を貴族にしろと言われた方が楽だったわ・・・。」

いまだガクガク震える足のせいで立ち上がれないアンリエッタの頭をなでるのです。

「・・・これが無茶振りと言うものなのです。国の力でもどうにも

出来ないことを学ぶのですよ、アンリエッタ」
「・・・ああ、私はなんて無力なのかしら・・・。」

さめざめと泣くアンリエッタに「条件は今のじゃなくてもいいし、別に後付けで取り引きすればいい」と成果払いで了解するしかなかったのです。
マジ嬉し泣きです、アンリエッタ。
というか、国の力でも無理って、どんだけ評判悪いんですか？
エレねえ。

シュバリエ称号は拒絶しましたが、名誉騎士称号は一時的に受けざる得なかったのです。
なにしろ、学生騎士団を率いての「外交」なのですから。
で、その話をした途端、ケットシー学生騎士団、通称「猫の騎士団」は大いに盛り上がりました。
何しろ「王名」で「外交」を「騎士団」として受けられたのだから。
盛大に盛り上がる騎士団全員を連れてゆくわけにはいかない。
せめて「黒」「白」「ブチ」「ミケ」のうちの一小隊だけなのです。
それを聞いても「騎士団」としての誉れであることに変わりないと胸を張る団員。
小隊「ミケ」隊長である「デブ猫」は、肩をすくめて笑う。

「まぁ、うちの隊は後方支援主軸だからね。水のトライアングルを二名ほど引き抜いて行ってもらうだけだろ？」
「さすがは「野火」。よい着眼点なのです。」

とりあえず、誉めれば伸びる子マリコヌル。

「団長。で、どこをつれてく？」
「礼儀と見た目優先で「黒」なのです。」
「わかったよ、団長。われら「青銅小隊」は、団長と祖国の名誉のために杖を捧げよう」

ギーシュが杖を掲げると、周囲から拍手が巻き起こるのです。
むー、自分達の小隊の名乗りは任せたのですが、「青銅小隊」はどうかと思うのですよ。
すでにギーシュはトライアングルに達して、様々な練金が出来ようになったのです。
さらに「物理」知識で、自然界に存在しない物質もぼくと一緒に作り出せるようになった問いのに、未だ「青銅」はどうかと思うのです。
せめて「合金」のギーシュ。
いえいえ「超合金」のギーシュと「超合金」小隊。

・・・無駄に強そうなのです。
でも男のロマンにあふれる名前なのです。
この「外交」で広めてやるのです。
ふふふふふ。

外交使節団、というのは前向きの話。
後ろ向きの話は、この外交使節を快く思わない連中のあぶり出し。
というか、そういう手勢が王宮で踊るのを観察して検挙するのが目的なのだけど、フレデリカにはすべてお見通しだったらしく、竜籠はいらない、護衛に騎士団はいらない、軍はトリスタニア常駐に

した上で一部隊を伏せ札にしろとか細かな作戦案が送られてきた。
では、フレデリカが危険かというとさにあらず。
かの「烈風」と渡り合った「猫の騎士団」が共にあるのだ。
街道では目を引くし、町中でも同じ。
町娘、村娘の視線が周囲にあって、日のあるうちに襲撃など不可能に近い。
ならば、国境や山中で狙うほか無し、とばかりに万に及ぶ傭兵が集められようとしたらしいのですが、集まったのは千。
トリスタニアのごろつきや冒険者、そして傭兵は正しい噂を知っていたので、メイジ殺しであろうとも「猫の騎士団」と敵対することなどしません。
集まったのは他国の傭兵や犯罪者、それも喰い詰め者や本当に恐ろしい者を知らないバカだけだったのです。
まぁ、報酬だけなら腰が軽くなるところですが、詳しく聞いて普通の判断力があれば避けますよね？

で、フレデリカ達が旅立った後、二晩ほどたってからガリア国境付近の山が一つ消えたとか、村に立てこもっていたという山賊組織が全員両手両足が折られた状態で発見されたとか、猫耳騎士団が山賊被害にあった村へ身銭を切って施しをしているとか、国境を越えても同じ行為を繰り返しているとか・・・・。
つまり・・・・・

「山賊どもを根絶やしにして、その資金を周囲にばらまいて人気取りをしている、と。」
「アンリエッタ様、そのとおりでございます。」

王座で私は倒れるかと思った。
確かに、先日、ミスタバサの家に里帰り同行した際も同じような行為をしていたと聞いたが、その時はもう少しささやかだったと記

憶している。

「推測になりますが・・・・」

枢機卿の推測は納得の出来るものでした。

つまり、

「新開発の魔法の実験台にしている？」

「さようにございます」

まぁ、山一つなくなるような魔法の実験など、国内の中心地でやってもらっては困るし。

「どうなさいますか？」

「とりあえず、放置ね。」

「は？」

「評判はあがるし、治安もよくなる。そして国外の山賊狩り経験値と民意をゲット。何一つ問題ないわ」

「ガリアからの批判は・・・」

「ないない。あそこの無能王もベルもフレデリカのファンだし」

「ほぉ、初めてお聞きしましたな。ガリア王がフレデリカ殿のファンだとは」

「フレデリカの書いた「カインとアベル物語」という初源の王たちの物語を読んで以来のファンだそうよ。」

おお、と家臣たちが声を上げる。

この物語は年輩の家臣に人気がある。

私には今一わからないけど、年を取れば面白く感じるのかもしれないと思い、書籍棚に入れてある。

一冊これを入れておくだけで、私の部屋を訪れた年輩者の態度が

変わるのが面白いとも考えてはいるけど。

「フレデリカたちは、予定より二日ほど遅れてガリアに到着すると伝えてください」

「「「「「御意」」」」」

うん、この「御意」っていいわ～。

「三ヶ国英雄物語」の中で、家臣たちが言っている返答をさせてみたら、家臣たちも読んでいたらしく「うれしそうに」つきあってくれた。

女官にも「御意にございます」とか言わせようかしら？

第二十三話「無茶振り」が生まれて（後書き）

無能王がどこで転んだかが明かされたのです。
元々は聖書の農耕民族と狩猟民族の衝突を物語化したものだったと思いますが、フレデリカ版はあからさまにガリアのお家騒動を描いています。
そりゃ、正気にかえりますねｗ

※今回の元ネタ
「期限の決まっていない借金なんか後回しよ！」　・・・　異世界の聖騎士物語
カインとアベル物語　・・・　聖書
三ヶ国英雄物語　・・・　三国志

第二十四話「男の夢」が生まれて（前書き）

チートとご都合主義とシリアス
・・・シリアス？

第二十四話「男の夢」が生まれて

えー、今も敵襲にさらされているんですが、ボクは今執筆中です。
以前書いた「三ヶ国英雄物語」の主要英雄を「女性」に入れ替えて、一人の男を競いあう物語にしたところ爆発的に広まってしまい、ルイズ達が同行して原稿取りしなければならないほどになりました。
いま、一番ファンレターが多いのも「これ」。
不本意ながらラ・ヴァリエールも増産に踏み切りました。
こういう男性向けの物語の執筆は、御師匠様により制限されていたのですが、市場が馬鹿に出来ないと言うことで執筆許可がでたのです。
で、今まで少量の「男性向け作品」で糊口をしのいでいた変態達が、目の前にあふれた作品を資金の限り買い集めたものだからさらなる市場付加が加わり、出版すればするほど儲かる状態になってしまったのです。
もと居た世界の出版業界が聞けば、泣いて悔しがる状況なのです。
で、今書いているのも、その「男性向け」の女体英雄物語で、こちらも馬鹿みたいな人気。
これを読んだ変態の一人が、主役の女性を娶った主人公をヴァリエール公爵だと思いこみ、真の男だと誉めたたえたとか言う逸話まで。
・・・実に、その、トリステインに帰り辛い状況なのです。
エレねえ様やカトレアねえ様から「自重せよ」とのご意見まで手紙でいただいて、もう、その、がっくりなのです。
で、騎士団連中は「もちろん」大好物の物語を綴る時間を作るためということで、修羅が如くの活躍を見せ、一日の終わりには綴ら

れた文の原稿を回し読んで身悶えるという気持ち悪いサイクルになっているのです。

「団長、俺たちは生涯ついていきます！！」
「「「「「ついていくっす！！！」」」」」
「あー、もー、変態騎士団自重！！」
「ルイズ、それはひどい。」
「我々は紳士だ。淑女を助けることにこそ真価のある紳士だ」
「あんたらは、変態って書いて「紳士」とよむってやつらでしょ？」

「・・・いやぁ・・。」「正面から誉められると、ちょっと」
「「「「「なぁ？」」」」」

「誉めてないわよ！！　蔑んでるわよ！！」
「「「「「ああああ、なんかなんだか、こう、もっと蔑んでくれ」」」」」
「いやーーーー！　もう、この変態止まれ！！」

ルイズの狙撃が次々と命中するものの、身悶える騎士団たち。
毎晩毎晩の光景なのでいいのですが、ここまで「変態（しんし）」になったのは、ルイズの調教があってのことなのですよ？
さすが御師匠様に最も近い性癖を持つ三女なのです。

「フレデリカ、いま、すんごく不快なこと思わなかった？」
「・・・・てへ、なのです☆」
「否定しろーーーーー！！！」

魔法というものは、発現した途端に完成しているものではない。
発現後にも手を加えることにより強化できるし、その強化の方向性だって様々なのだ。
初めてフレデリカ団長が「火の矢」を作った光景は未だ忘れない。
いくつもの工夫が加えられた数十もの赤い矢が、一本に束ねられたときの輝きを。

「これはお日様と同じ色なのです。」

最初は意味が分からなかったが、今ならわかる。
単に作り出した「火の矢」の数十倍もの密度であるということを。
ちょっとやそっとの風では遮れない。
水や土の壁でも遮れない。
すべてを「消し炭」に変える炎。
あの「風サイコー」ですら、フレデリカの「炎」をみて言い訳しながら逃げていった。
で、この「炎」。
一人じゃなくても出来ることを示唆された。

「君たちは、一人一人は「火」なのです。でも、君達なら集まって一つに同期したそのとき「大きな炎」になるのです。炎になったぼくたちは「無敵」なのです！」

正直に言えば、その台詞は知っていた。
フレデリカの著作「最高峰（トップ）をめざせ」という物語の中で病魔に蝕まれた指導者が生徒達に言う台詞。
でも、物語以上に現実に即していた。
いま、現実にその台詞を言われた俺たちは、物語の「ノノリリ」や「ケイズ＝ミー」よりも真摯に受け止めることができた。

そう、俺たちは「炎」なのだ、と。

始めた同期訓練は過酷だったが、成果は目の前に出ていた。

「いくぞ、火の同期トライアングル！」
「「おう！！」」

三人同期で炎の矢が着弾した途端、地面は液状化し燃え上がる。
そしてその熱により爆発し、山賊達を脅かす。
蒸発までした地面は空中に舞った瞬間に冷えて灰になる。
絶対にドットメイジの魔法ではあり得ない結果だった。

「いくぞ、ゴーレム同期トライアングル！！」
「「おう！！」」

こちらの同期トライアングルは結構実践的だ。
造形するもの、命令を半自動で与えるもの、表面を魔法加工するもの。
そんな仕事振りで作られた王城壁すら越える大きさの巨人。
これが我々「青銅小隊」の真骨頂！

「火の同期トライアングル、乗せるぞ！！」
「「「おお！！」」」

土の力の巨人に、俺たちの火の力が乗せられる。
火と土の「同期ヘクサゴン」マジック、おまえ達に味あわせてや

る!!

「「「「「いくぞ、ブレストファイヤーーー!!」」」」」

薙払われた山賊達と根城は、俺たちの「同期ヘクサゴン」によって滅んだ。

この活躍でフレデリカの創作意欲がわいてくれるといいのだが。

えー、信じられないほどの火力なのです。

計算上は出来ると思って訓練したのですが、ここまでいくとは思わなかったのです。

ルイズもさすがに目を剥いているのです。

「あの「ブレストファイヤー」って、・・・なに?」

「火の系統の魔法を収束させることが出来る「火の魔石」を練金して装備させたゴーレムに、火の魔法を放たせるとああなるのです」

「・・・ほかに武装は?」

「カッタートルネードに酸を混ぜて吹き付ける「ルストハリケーン」と、ゴーレムの腕の中身を「火薬」に練金して敵陣へ叩き込む「ロケットパンチ」なのです。」

「・・・フレデリカ、あんた戦争でもするつもり? 外交でしょうが、外交!!」

「いやー、巨大ゴーレムは男の夢なのですよ」

「女にゃ悪夢よ」

最近、ルイズの言葉に知性のきらめきを感じるのです。

きらめきは宇宙、実にすばらしいのです。

とはいえ、さすがにこのままじゃまずいので、周囲復旧を土のメイジ組と僕でやったあと、外交使節歓迎団と合流したら、団長である第一王女のイザベラ様に質問責めにあってしまったのです。
とりわけ、理論的には難しくない話なので説明すると、使節団の人々が驚きで身を堅くするのです。

「・・・フ、フレデリカ？　そんな機密魔法を国外に漏らしたら、まずいんじゃないかい？」
「そんなことないのですよ？　やり方簡単、結果絶大。その気になれば誰にでも出来る事なのです」
「し、しかしだね、いままでそんなことが出来たなんて話は聞いたことがないよ？」
「それは、気位だけが高いドッドメイジが手を取り合うなんてシーンが無かっただけなのです。逆に起きた現象を研究すれば直ぐにバレることなのです。」
「・・・そ、そうかい？」
「それに、トリステインからの技術供与という形を取れば、お互いの利益になるのですよ？」
「はぁ・・・本当に怖いやつだね、あんたは。」

苦笑いで右手を差し出すイザベラ様。

「ようこそ、ガリアへ。」
「しばらくお邪魔するのですよ、イザベラ様」

第二十四話「男の夢」が生まれて（後書き）

設定や世界の有り様につきましてはご都合主義です。
魔法の出来具合はチートです。
で、シリアス・・・なにそれ、美味しいの？ｗ

※今回の元ネタ
三ヶ国英雄物語」の主要英雄を「女性」　・・・　真恋姫無双
「最高峰（トップ）をめざせ」　・・・　トップとねらえ
ゴーレム同期トライアングル　・・・　マジンガーＺ
きらめきは宇宙　・・・　〇〇のステルビア

第二十五話「男子歌劇団」が生まれ（前書き）

男の娘ではありませんｗ

第二十五話「男子歌劇団」が生まれ

いやはや、この外交使節団の行軍中に書き上げたという男性向き作品には驚いた。

なんつうか、エロくないのだ。

男性向き作品と言えば、基本、エロエロであったはずだ。

しかし、今回の作品は、こう、雰囲気が違う。

確かに男の視線で書かれているが、こう、なんというか、そう、私たちがトキメく内容なのだ。

今書いているのが続編なので、ということで一巻目から見せてもらったところで気づいた。

これは、「始祖みて」の男子版だと。

それも、主人公があの「ユミーナ」の弟!!

なんという、なんという「萌」!!

聞けばこの作品は「禁忌」っぽいので流通制限をかけているそうで、最新作が読めるのは学院と抱き込みが完了しているロマリア教皇だけだという。

「フレデリカ、最新作をこっちにもながしな。」

「・・・異端審問官が怖いのですよ」

「教皇抱き込んでんだろうが!」

「そんな薄っぺらいトップなんか信用できないのです。金と女に狂った異端審問官に恨みは買いたくないのです」

「・・・くそぉ・・・・」

どうにかロマリアを黙らせないと、私の手元に「始祖みて」男子版が届かない、そういうことかい!?

「・・・とりあえずですね、「ロッテ」経由でなら・・・。」
「・・・そ、そうだった、そう、あたしにはあの子がいるじゃないか！？」

ロッテ、ああかわいいロッテ。
私に「始祖みて」男子版を届けておくれ！！

「あー、我が娘よ。とりあえず、外交使節との会合中に飛び込んできた無礼は目をつむるから、そろそろフレデリカ殿を解放せぬか？わしも色々と話したいのだが。」
「・・・／／／　申し訳ありません、おとうさま、いえ、国王様！！」
「よいよい、そなたの政務が進む燃料だと思えば安いことだ。」

うんうん頷きつつも、ギラリと視線を光らせる王。

「で、フレデリカ殿。」
「はいなのです。」
「・・・男子歌劇団というものを作ってみませぬか？」

女子の理想を女子が作る。
それが少女か劇団の理念。

では、男子の妄想は？

その答えをガリア王は出そうとしていた。

声変わり前の少年に少女役を、体の線が細い少年に女性役を、そして目麗しい男性に男役を。
尽くす女性、勇ましい女性、か弱い女性。
勇ましい男、女々しい男、死をおそれぬ男。
そんな男と男の介添え女の物語を書いてほしいという依頼だったのです。
イーヴァルディーの勇者でも書けばいいのかと思ったのですが、オリジナルで劇団の華になるようなものを、という要望まで来たのです。

・・・難しいことをホイホイと・・・。

と、そこで思いついたのは「シャルロット」。
彼女の名誉回復を主眼に台本を書いてしまおうというものだったのです。
王家の名誉とシャルロットの名誉を両方守る形でシナリオをかいて、シャルロット自身に許可をもらい、そして王に見せたところ、大いに喜んでもらいました。
悲劇とその回復、彼女の自信の出自を知らないながらも他国から彼女の友人達が駆けつける。
理不尽な魔法薬、そしてその効果を打ち消そうと躍起になる「猫の騎士団」。
大暴れと努力と友情と勝利が渾然一体となった大剣劇。
もちろん、話の主題の「復権」は広まること請け合い。

「ふむ、イザベラから聞いたときにはまさかと思っていたが、この手法ならば言伝も易かろう。」
「とりあえず、剣劇無視の緩い方もトリスラニアに送っておきましたので、同時公演が望ましいのです。」
「・・・なぜだね？」

「お父さんはガリア、娘さんはトリスタニア。どっちもいきたい家族は、何度も往復して実においしいのです」

ラグドリアン湖あたりを中継地点にして、一日のうち何便も船を往復させて、虚無の日前後や夏期休暇周辺でバリバリ観光収入を増やすのです。

で、その際の関税を安くすれば、商人たちも乗ってくるですし、一人当たりの乗車賃も安くなるので大歓迎。

トリスタニアとガリア友好ある限り、この劇場観光は盤石の収入源になるのですよ。

「・・・これは、おどろいたな。こんな外交カードを切ってくる使節なんていなかったんじゃないかい？」

「常識に捕らわれては新しいことが出来ないのですよ」

「・・・ふむ、これはトリスタニア王宮ものんでいることなのか？」

「王、ぼくは王宮に対して貸しがありすぎて、王女自身が泣きすがるほどなのです。のませられるか、ではなく、呑ませてくださいと頭を下げてくるのですよ？」

「なんとも怖い使節団長だね」

「心強いと言い換えてもいいのですよ？」

そんなわけで、少年歌劇団設立時の協力とトリスタニア王宮の説得を主軸にした外交交渉がまるっと完了しつつあるのでした。

もちろん、着地点は「不可侵国交」。

せめて自分たちの代だけでも王名で戦争はしないでおきましょうという前向きな条約が交わされることが決まったのです。

・・・じつに原作ブレイクなのですよ。

ぼくたち「猫の騎士団」がそろそろガリアを出国しようかというところで、ロマリアから熱いラブコールが何通も来ているのです。

『なぜ、少年歌劇団をロマリアで作らないのかぁ！？』

そんな内容の書簡が毎日のようにいろんな最高司教からくるわ、変態が伝書鳩代わりにくるわでもう大変なのです。

とりあえず、毎日ルイズが狙撃するにも関わらず、平気のへいざで現れるのは怖すぎなのです。

今度変態が来たら、まじで虚無をルイズに仕込もうかと思ったのですが、今度は協会の下っ端を使ってきたのです。

さすがに素人は狙撃できないルイズなのですが、ぼくはとりあえず呪っておくことにしました。

・・・なんとなく「オリバー」君に似ていたから。

それはさておき、今回の書状は「外交」ついでにロマリアに来ませんか？　おもしろいものを見せますよ、という教皇からの誘いでした。

もちろん、ノー。

僕は、ノーといえる貴族なのです。

が、追加できた御花畑の手紙が頭痛を呼ぶのです。

～王子との媒酌人に教皇がなってくれるそうなの！　ロマリアで打ち合わせしてきて！！～

「ルイズ、そろそろ暗殺が必要な時期だと思うのですよ」

「・・・お母様に連絡しておくわ」

とりわけ、媒酌人の件は御花畑の独走に違いないので、ウェールズ王子に突っ込みを入れてもらい、ロマリアに抗議を入れさせるのです。

さすがにアルビオンからの抗議があれば、バカなことをしないでしょうし。

「えーっと、では、お断りになる、と？」

「今回の巡回で学園の単位がボロボロなのです。受けたい講義も受けられない目に遭わせた王宮の指示など「ポイ」出来る立場にあるのを理解できていない人の策謀など踏みつぶすのですよ？」

「・・・信じられませんな。ロマリアの、教皇の命に背くなど・・・。」

「あなたはこの手紙の中身を把握していませんね？　外交のついでに来ませんか？　と誘われているだけなのです。いうなれば断るという選択肢を与えているにも関わらず、国元に揺さぶりをかけるような「人間」を信用できるとおもうですか？」

瞬間、真っ赤になったオリバー似のおっさんでしたが、深呼吸の上でコチラをにらみます。

「・・・教皇様のみこころを知らぬ愚か者が・・・。」

「どうも誤解があるようなので言わせていただきますが、絶対に従わせたいなら「勅命」を下しているのですよ？　それを行使できない時点で「個人的」な「依頼」なのは本決まりなのです。それすら

理解できない盲信者がバカをいうな、なのです」

「・・・ぐっ。」

真っ赤になったまま、下っ端はその場を去ったのでした。

もちろん、風最高組が気配を消して後を付けていたところ、途中で傭兵ギルドにコソコソ入っていたとか。

さらに待っていると、裏口からボコボコにして追い出されたそうです。

まぁ、当然ですね。

ぼくや「猫の騎士団」はブラックリストに乗っている存在になったのですから。

ぼくらの暗殺や謀略の依頼が入ると、即座に各王宮に連絡が入り、依頼者の素性が詮索されるシステムになっているのです。

バカには牢屋、大バカにはタコ殴り、超大バカには飼い主への報復が入ることになっているわけで、今回は大バカだったらしいです。

「団長、本当にロマリアにはいかないのかい？」

「ギーシュ、あんなヒドいところには何度も行きたいわけ無いのですよ」

「で、大丈夫なのかい？　教皇の誘いだろ？」

「向こうも弱みがあるから「勅命」を出せないのです。だったらぎりぎりまで向こうの出方を探るのです。」

「時間切れになる可能性もあるんじゃないのかい？」

「ぼくが持っている以上の情報は向こうも持っていないのです。」

「・・・じゃぁ、ロマリア教皇が何をたくらんでいるかもわかっているのか？」

ぼくが頷くと、団員たちがどよめきます。
とりあえず、今のところは自分が虚無だとあかして王家に準ずる立場であることを強調して、ぼくへの協力を求める、そんなところでしょう。
加え、各始祖王家に覚えめでたい僕を取り込んで、「あの」現象のために対抗するつもりでしょうが、そんな事の為に利用されるつもりはないのです。
僕には僕のアプローチがありますし、人間だけで対抗しようと言う姿勢がイタダケないのです。

「いやー、さすが我らが団長。そこにしびれてあこがれるな。」
「ああ、王宮も早々に役職に着ける算段をしているが、熱心なファンが反対してるそうだ。」
「つうか、学生騎士団って、卒業後はどうなるんだ?」
「まー、なんつうか、フレデリカ団長以外認められんけどな」
「つうことは、次男三男はこのまま騎士団で軍務か?」
「ありっていえばありだな。」
「ていうかさ、職場としちゃぁ最高だろ?」
「・・・あとは顧問の名前を気にしなければ、な」
「「「「「・・・・・」」」」」

「猫の騎士団」の顧問と言えば、言わずとしてた「ヴァリエール婦人」。
誰もが声を潜めるのですよ。

にゃおーん。

第二十五話「男子歌劇団」が生まれ（後書き）

イメージはウイーン少年コーラスです。

※今回の元ネタ
更新なし

第二十六話　「対空戦」が生まれて（前書き）

えー、話は進んでいませんが、なんとなく「ロマリア」の手が伸びていたりいなかったりです。
実際、有権力者の暴走というのは、この世界では当たり前なんだろうと思いますです。

第二十六話　「対空戦」が生まれて

アルビオンへは、ガリアの軍艦が送ってくれたのです。
風石の無駄だからと断ったのですが、

「その間の執筆が出来るだろ？」

の王の一言で皆賛成！　と大騒ぎなのでした。

・・・ルイズが一番嬉しそうなのが悔しいのです。

というわけで、短い旅の間ですが、なぜか空賊が三回も襲ってくるという珍事が発生して、誰もが首をひねったのです。
誰がどうみても「ガリア」の軍艦に、空賊ごときが襲いかかるって、誰得？　と。
まぁ、ルイズが旗艦のメインマストを「狙撃」したり、タバサの新魔法「アイシクルビット」でマストを穴だらけにされたりで引いていったのですが。

「次に来たら、私の番ね！」

キュルケも新魔法があるというのですが、未だ誰も見たことがありません。
ちょっと楽しみですね。

アルビオン軍のメイジ達も新魔法には興味津々でしたが、真似る際には王の許可を得るように言い渡されているため、結構悔しそうなのです。
まぁ、ちょっとだけなら手ほどきぐらいするのですよ？

魔のアルビオン空賊団とか言っていた癖に、魔法学校のお遊び騎士団ごときにやられる程の弱兵であった。
これならば、金など払わずに「女と金を積んでいる偽装商船」だといって襲わせた方がまだましだった。

敬愛すべき教会の頂点たる教皇様の温情を無にして砂をかけるような子供など死ねばいいのに、のうのうと生きている。
たぶんバカバカしいほど幸運なんだろう。
そうでなければ、あれほどの賊に囲まれて生き残れるはずもない。
弱兵とはいえ人殺しを生業とした蛮賊だ。
血に飢えた凶人達の刃から逃れるのだから、よほどの幸運なのだろう。
もしくは、あの幼子のような体で籠絡しているのかもしれない。

・・・なんてうらや・・・ゲフンゲフン、ふしだらな！

これは教皇様に御注進せねばなるまい！！
あとは、あの怪しげな書物の大半は「禁忌」だろう！
文字が読める貴族や平民をあれほど引きつけるのは、邪悪な魔法が使われているに違いない！

ははははは、これだけの証拠があれば、あの、あの、無礼で失礼で信仰心がなくて敬愛精神がなくて、常識がなくて・・・！！！
私のような宗教関係者を無碍に扱うような不埒な子供など！！！

「あー、衛兵さん？　あそこの、ほら、ちょっとボロボロの司教さん。ええ、ちょっと言動が怪しいんですよ」

そうだ、そうだ！　私のように心清らかで教皇様を敬愛している私がひどい目にあっているのに、あの子供がのうのうと生きているなど許せるはずもない！！

「・・・ほら、なんか怪しげな事をつぶやいて、昼間っから酒飲んで・・・」

ふ、ふふふ、ははははは！
今年の予算すべてを使ったが、お布施など独自に集めればいいだけだ！　上納金などごまかしきれるのだ！！
ふはははは！！

「・・・ね、結構やばいこと言ってるでしょ？　ええ、じゃあ、おねがいします」

ん、なんだね？　私のような善良な司教に何のようだね？　衛兵君。
ん、ん？　私が怪しい？　なにを言ってるんだね！？
教義を守り、プリミル様を敬愛し、そして、誰よりもまじめな私が怪しいわけがあるまい！！
だから、はなせ、はなせ、はなせーーーーー！！！

キュルケ期待の空賊は現れませんでしたのです。
ああいうのは期待するとこないと言う法則でもあるかもしれないのです。

「あーーーん!!　あたしの新魔法は空戦に特化してるのニー！」

それでもお披露目は敵相手にしたいというジレンマ。
ちょっと可哀想なのです。
とはいえ、目的地はもう目の前。
可哀想、可哀想なのですよ。

無事にアルビオンに到着すると、かなり盛大な歓迎パレードになってしまったのです。
まぁ、戦後復興中なのとお祭りムードで国民を慰撫しようと言う話なのですね。

で・す・が・・・・

「歓迎、「物語」のフレデリカ、猫の騎士団」

という横断幕はどうなのですかぁ!?
これでは、国の使者ではなく個別訪問みたいなのですよ!?
ああ、大段幕の下で、いい笑顔の王子が手を振ってるし!!
くそー、こっちも負けてられないのです。

「団員整列！」

「「「「御意！」」」」
「尻尾をたてろ！！」
「「「「おお！！」」」」

噂の猫の騎士団敬礼。
瞬間、港に集まっていた皆さんが、歓声を上げました。
主に女性。
つかみはバッチリなのです！！

「肉球、ふれ！」
「「「「おお！！」」」」

更に高まる歓声。
うんうん、婦女子には大人気なのです。
さぁ、胸を張って入港するのですよ！

「あのー、フレデリカどの。」
「何ですか、艦長さん」
「・・・じつは、娘から猫耳が余っていないかを聞かれていまして・・・。」
「ああ、結構ですよ。いくつかありますから、お分けするのです」

というか、商売用にかなり持ち込んでいるので、結構余裕なのですが、恩は売った方がいいのです。
大感謝の艦長を横目に、僕はほほえむのでした。

「お友達の分もお持ちくださいなのですよ。」

感謝ゲージが振り切れたようです。
ふふふ、今まで無価値だったネコミミが外交対象になるほどの人

気、たまらないのです。

「あ、フレデリカ、悪いこと考えてるでしょ？」

「そ、そんなこと無いのですよ？　ルイズ」

「うそうそ、お母様をハメる仕掛けが成功したときと同じ顔してるもの。」

「・・・・・・・」

これから気をつけるのです。

第二十六話　「対空戦」が生まれて（後書き）

まさかの上陸前引きｗ

ちょっとグダグダでしたが、ある宗教関係者が活躍している姿が素敵ですｗ

※今回の元ネタ

尻尾をたてろ　・・・　冒険者たち（ガンバの冒険）

第二十七話「御花畑's」がうまれて（前書き）

えー、自業自得ですねぇ・・・。

第二十七話「御花畑ｰ s」がうまれて

脳味噌御花畑王子。

これがもう何というか、お似合いの二人なのですが、似合いすぎで頭痛がするのですよ。

一方は「恋いに恋して恋いに生きる姫（ばか）」だし、一方は「愛に愛して愛に生きる王子（ばか）」ときているのです。

双方共に盲目に幸せを信じているのが痛すぎるのですよ。

王も頭が痛いところでしょうに、と思っていたのですが、トップの不安が不穏分子の狩り立てに役立っているので放置するそうなのです。

まぁ、「王子（ばか）」も「王子（ばか）」なりに使いようがあると言ったところでしょうか？

それよりも何よりも、上限を飛び越えたバカが居たことに頭痛を覚えるのです。

「ねぇ、バカ」

「・・・一国の王族に、そうそうバカ呼ばわりは・・・。」

「国務を放り出して、他国の軍艦に密航するような脳味噌御花畑はバカで十分ですよ、姫様」

「ひ、姫じゃないわ。わたしはアン＝フランジュール。姫様付きの女官よ」

「・・・密命があってきた、そういうことなのですね？」

「・・・ああ、フレデリカ。なぜその聞き分けを教皇様に向けてくださらないの？」

「自分の幸せのために、あんな変態のところにボクを差し向けようとする話など聞けないのです。」

「でもでも、そのせいで・・・王子との結婚の時に司教を派遣しな

いとか・・・・。」
「黙って待ってればいいのです。時間がくれば教皇自らが祝福にきてくれるのですよ?」
「・・・ほんと?」
「黒猫の夢を信じるのです」
「・・・うーーーー、フレデリカァ・・・・。」

ぎゅーっと抱きしめる密航者を適当な宿に放り込んで、部屋番にルイズをつける。

「御花畑を外に出さないのですよ?」
「一応がんばるけど、とりあえず死なないようにしとくわ」

何との頼もしい話なのです。

ロマニアの教皇周辺の変態性は噂になってたが、まさか「物語」のフレデリカにまで手を伸ばしているとは思わなかった。
世間をあまり知らない愛しのアンリエッタは気軽にロマリア訪問を依頼したらしいが、私としては絶対に受け入れ難い話であった。
今度会ったときにでも話さねばならないかも知れない。
無論、愛しのアンリエッタの親友でもあるルイズ殿やフレデリカ殿が舵を取ってくれているのはわかるが、この程度の情報は自らで判断しくくれなければ困るのだ。

共に、愛の連合王国を築くために。

・・・いかん、少々想いに耽ってしまった。

愛しのアンリエッタからの手紙を受け取った私は、いてもたっても居られなくなってしまった。

あの世間を知らぬ純真無垢な姫が、市井の宿で私を待っているというのだから！

それも、平民に変装して！

こ、こ、これは燃える、燃え上がる！！

この立場はおいしいぞ！！

ああ、こんなことをたくらむのは愛しのアンリエッタではあるまい。

「物語」の香りがする、間違いない。

くぅ、さすがはフレデリカ、やってくれるではないかぁ！！

ふふふふ、この黄金の時間を私は甘受しよう！

「わはははははははは！！」

脳味噌御花畑カップルによる平民変装デートが開始されたのです。

お互いを「アン」「ウイン」と呼びあう姿も砂吐きですが、キャッキャウフフな行動はもう、通り越して微笑ましいレベルなのです。

一応、周辺監視していた猫の騎士団も、バカバカしくて士気は底辺ですし、姫の護衛のために選抜された女子銃士隊もやる気ゼロなのです。

ルイズも真っ黒になっていますが、怪しい奴らを「狙撃」して憂

さを晴らしているようなのです。
まぁ、日頃の政務の憂さを晴らせる王族ということで、台本にでもしてみましょうか？
と、そんなわけで、護衛という任務の傍ら、「望遠」で観察した二人のエピソードを書き連ねるボクなのでした。ふっふっふ、結婚か婚約の式典で上演して、恥ずかしい目に遭わせるのですよ。

とりあえず、ロマリアに行くことなく学園、いや学院に戻ってきた私たちは、遅れていた授業や課題に取り組む日々だったりする。
フレデリカも魔法万能でござい、とはいえ、課題はやるし試験だって受けなければならない。
まぁ、同行した猫の騎士団や私たちも同じなんだけど。
そんなわけで、

「フレデリカはこっちの「課題」で。」
「ルイズ、おかしいのです、おかしいのです！　ボクは今年中のノルマはクリアーしているのですよ!?」
「あー、ほれ、外交上公演回数を増やしたから、台本が足りなくなったとかほれ、いろいろよ。」
「くわぁーーーー！　なっとくいかないのですぅぅぅぅ!!」

喚くフレデリカ。
かわいそうだけど無理、見逃せないのよ。

とりあえず、少女歌劇団の台本は十分数あったし、少年歌劇団の台本は既存の物語の脚本化でどうにかなったのだけれども、本命の

「物語」市場が加熱してしまった。
フレデリカ人気を当て込んで有象無象の物語の書き手が生まれたものの、どれもこれも鳴かず飛ばずで良いところ無し。
逆に市場の飢餓感を煽る結果になってしまった。

そんなわけで、新作と続作の要望は火の勢いでV&R出版を追い立てているとか。
学内教師でも手勢が多いらしく、「課題をする時間があるなら執筆してなさい」とかいう書状が来ているほどであった。
まぁ、わたしも、ね。・・・新作読みたいし。
タバサなんか喜んで書きあがった原稿をひったくってチェックしてるもの。
逆にキュルケは全部できあがるまで我慢するタイプ。
だから、執筆中の話は厳禁、ということになっている。
とはいえ、あらましだけでも聞きたいというのは難しいさじ加減なのよ、キュルケ。

「くそぉーーー、こうなれば、すべての物語をバットエンドにしてくれるのですぅ・・・。」
「あー、カリンとかトリバラをバットにしたら、殺されるわね。」
「・・・・くぅ、悲しいのです。悲しい運命の檻に閉じこめられているのです。惨劇は必至、逃げ道がないのです・・・」

ああ、最近試作で作った「ブックアドベンチャー」のフレーズね?
というか、これだけ嫌がっているのに、どんどん新しい本の形を作りだしている時点で「イヤよイヤよも好きのうち」とか言われる話よね。
とはいえ、あの「ブックアドベンチャー」の成功率、引くすぎじゃない?

「よいのです。あれはそういう話なのですから。それに現実の事件や騒動だって簡単な解決法ではないのです。みんなが努力を重ねてつかみとった奇跡のような話ばかりなのですよ」

錯乱状態から復帰したフレデリカは微笑んで、そして諦めたかのように原稿用紙に向かった。

「・・・はぁ、とらわれのお姫様状態なのですよ」
「ま、釈放条件が決まってるんだかりいじゃない」
「・・・フレデリカ、ガンバ」
「・・・オー・・・・。」

思わず俯いてしまったフレデリカ。
まぁ、その、今度ケーキでもおごるから、ね。

第二十七話「御花畑's」がうまれて（後書き）

ここで、フレデリカ様は「ひぐらし」な関係を出版しています。
過去を懐かしんだ瞬間かもしれません。

これが物語りに与える影響は少なくありません

※今回の元ネタ
カリンとかトリバラ　・・・　リボンの騎士～烈風姫カリン　トリステインのバラ
ブックアドベンチャー　・・・　ひぐらしのなく頃に「解」

第二十八話「プリンセスミサイル」が生まれて（前書き）

あはははは、既に原作なんかブッチギリなのですよ～

その爽快感がたまらないのですよ～ｗ

第二十八話「プリンセスミサイル」が生まれて

「プリンセスミサイル！」

突き刺さるように教室に飛び込んできたのは、トリステインの花、という事になっているアンリエッタ王女。

両腕をクロスさせて飛び込んできたその姿勢で窓を割り、宙で一回転して見事に直立した。

お父様の部隊でもできないであろう突入で、あまりの見事さに非常識さを越えた敬意が生まれた。

万雷の拍手の中、無表情に周囲を見回すアンリエッタ王女であったが、その視界の中に目当ての人物がいないことを知ると叫びをあげた。

「フレデリカはどこーーーー！！！！！」

教室の残りの窓が衝撃波で吹っ飛んだ。

さすが水のトライアングル、行き着くところまで行き着いてるらしい。

確かに土のメイジであるグランモンでも、突き抜けたメイジは何人かいたというが、今の姫様に並ぶものではあるまいとは思う。

「プリンセスミサイル！」

それに気づいたのは、王宮のグリフォンに乗った御花畑が、教室に強制襲撃をかけた瞬間だったのです。

キュルケとタバサも同時に気づいたらしく、「あ」とか言う言葉が同時に漏れていましたのです。

何事か、と思ったのですが、次の叫びで用件が知れたのでした。

「フレデリカはどこーーーーーー！！！」

衝撃波を含む叫びは、教室の窓を吹っ飛ばす程のものだったのです。

恐ろしい話です。

「ね、ねぇ、あんたんとこのお姫様、なに怒ってるの？」

「さぁ？　勘所が悪いだけなのではないのですか？」

「いやぁ、さすがにそれだけで「プリンセスミサイル」はないでしょ？」

鋭いキュルケの突っ込みですが、今度ばかりはボクもわからないのですよ？

「ところで、フレデリカ。このままで大丈夫？」

「ん？　姫様は水属性。聞こえないですよ」

と、そのときは思っていたのですよ。

「・・・フレデリカのにおいがする・・・・。」

げぇ、におい！？　においなのですかぁ！？

「フレデリカのにおいが・・・する・・・・！」

すごい勢いで宙に身を踊らせた姫は、フライもなにも使わずに二階から飛び降りて目の前に立ったのです。

「・・・ふふふ、みつけたわ・・・ふれでりか・・・」

ぎらぎらと光る瞳が怖いのですが、まるで鳳のように広げられた両腕も怖すぎなのです・・・。

「ふれでりかぁぁぁぁ！！！」

断罪をするかのように降りおろされた両腕は、なぜかボクをがっしり抱きしめただけでした。

「ああ、フレデリカ、私の親友、さすがは「物語」！！」

え？え？　何の話なのですか？

「これ、これよ！！　さすがフレデリカ！！　まるで見ていたかのような臨場感で描かれた「アルビオンの休日」ですよ！！」

あー、・・・あれ？
一級秘匿で王立少女歌劇団に送っていたはずですが・・・。
この「アルビオンの休日」は、あの「平民デート」を題材にして作った脚本で、結婚式とかのサプライズ宴目用に書いたのですが・・・。
なんで御花畑の手に？

「ああ、すばらしい贈り物だわ、すばらしい題材だわ、すばらしい台本だわ！！　こんな素晴らしいものが一回の上演で済むなんてもったいないわよね、もったいないわよねぇ！？」

ぎゃぴー、さすがに暴走しまくりなのです。

「そ、こ、で！　フレデリカ。これを少女歌劇団の宴目に加えるわ、そう、定期公演よ！！」

・・・うっわ、定期的に見せられるですか。
というか、何で恥ずかしくないのですか？

「はぁ・・・、わたくしと王子の愛の逢瀬で皆様をときめかせることができるぅ・・・・。ゆめのようですぅ・・・・。」

こっちは悪夢のようです。
書くんじゃなかった・・・。

「さぁ、わたくしの親友！　ともに歩みましょう！！」

衛生兵（メディック）、衛生兵（メディック）～～～！
姫がご乱心なのですよ～～～～！

「あー、姫様が乱心してるのはいつものことだし。」

ルイズ、怖い子、なのです。

読めば読むほど胸焼けがする「アルビオンの休日」。
さすがのキュルケも読み切って倒れた。

が、男子寮では結構評判がいい。

やっぱり市井に隠れた貴人たちのデートという舞台が燃えるというものらしい。
貴人と言うよりも「奇人」なんだとおもうけど。

従姉妹は、お姉さまは「大爆笑させてもらったよ」という感想が帰ってきたけど、女子にはキツい内容だと思う。
これを元にどれだけ演出できるかというのが、この宴目の鍵になるだろうとフレデリカも言っていた。
私も、そんなに少女歌劇を見ているわけではないけれど、それでも難しいだろうと思う。
何しろ、主役のカップル以外の出演者を必要としない物語だから。

周囲からの声や行動を、どう受け取るかというのは内心の問題だ

から、どんなに主人公たちが思っていても、それを台詞にしてしまえば陳腐になってしまう。
うん、私には難しくて思いつかない。
さすがに公演までには解決しているだろうから、その時を楽しみにしようと思う私だった。

えー、とりあえず、アンリエッタとともに王宮に軟禁されたのです。
まぁ、なんというか、王妃にはわるいのですが、ボクの責任ではないのですよ？
あくまで、お宅の姫が御花畑なのは、お宅の教育方針が原因なのですから。

「・・・その曲がった性根に、ガンガン燃料ぶち込んでいるのは貴方の気がしますが？　フレデリカ＝ベルンカステル＝ド＝リステナーデ？」
「御師匠様、それは誤解なのです。王命に逆らえない貴族の悲哀なのですよ」

なぜか現れたラ・ヴァリエール夫人こと御師匠様が、凄い形相でボクをにらんでいます。

「こ・ん・な、台本を「物語」のフレデリカが書き上げたとなれば、どうなるかぐらいわかるでしょう！」
「ちゃんと一級秘匿台本として指定したのですよ？」
「・・・少女歌劇団の中身で知らないことなど、アンリエッタ王女にはないのですよ？」

「わちゃー、なのです。サプライズの意味も分からない凡婦どもめ、なのです。」

とはいえ、バレたボクに何の用が？
で、そんなボクの目の前に、十数通の書状が。

「・・・御師匠様、これは？」
「様々な貴人のプロフィールや出会い、そして今までの道のりを書面化したものです。」
「・・・なぜこんなものを？」
「出会いや恋愛のワンシーンの劇場化など、誰もがうらやむ事柄を、我こそは貴人」という人間が、求めないはずもないでしょう！？」
「・・・もしかして・・・・。」
「これは、外交上最低限こなさなければならないものです。」
「・・・そ、それはひどいのですよ、御師匠様！」
「自らの蒔いた種と知りなさい」

うひーーーーー！！
あんなドロドロにアマアマなものをこんな数書かねばならないのですかぁ！
信じられないのですよーーーーー！！！

「・・・フレデリカ、もちろん、「カリン」の新作も期待していますよ？」

・・・・誰か助けてほしいのです。

あかさかぁぁぁ・・・・・・。

第二十八話「プリンセスミサイル」が生まれて（後書き）

えーっと、プリンセスミサイルは、なんだか沸いてきましたｗ

※今回の元ネタ
アルビオンの休日　・・・　ローマの休日
「カリン」の新作　・・・　リボンの騎士～烈風姫カリン

イメージ的には「ふしゅ～～～～」ってかんじです。
すでにトリステインの花って有名無実になりつつあるアンリエッタなのでしたｗ

ところで、カリンの新作をちゃっかり要求するお師匠様はかわいいかもしれませんｗ

第二十九話「学園祭」が生まれて（前書き）

さて、思いっきり閑話です。

宣言しちゃうとつまらないですが、色々と動いています。

それが日常というものです。

第二十九話「学園祭」が生まれて

最近、学院にいらっしゃれないフレデリカ様のお部屋は、すでに多くの女子の集まる社交場になっていた。

先住であるタバサさまはさておき、入れ替わり立ち替わりでみなさんが楽しんでいらっしゃいます。

この部屋では、侍女でも貴族であっても自分でお茶を入れる習わしになっているせいか、皆さん結構お茶を入れるのがうまくなりました。

もちろん、本職には未だ遠いのですが。

この部屋の掃除も自ら行うのが習わしで、侍女も貴族もありません。

この部屋を使うものが掃除をする、そういうルールになっています。

もちろん、自分部屋を掃除するとか洗濯を自分でするという流れにはなりません。

これを自分でしてしまえば、侍女たちの仕事を奪うことになりますし、彼女たちの収入源を奪うことになるからです。

貴族と言えども色々な価値観がありますが、それでも他人御収入源をひやがらせて良いわけではありません。

だから、彼女たちも文句もなしに、逆に「ラッキー」とばかりに洗い仕事をしているのです。

ただ、女子寮の方々は洗い物や掃除に関して気遣いしていただいているようで、侍女たちの評判も上々です。

この「館」にしろ、「始祖みて」にしろ、フレデリカ様がいらっしゃってから、学院は変わりましたわ。

人々が融和を望み、心穏やかになり、優しさにあふれた空間になりました。

ああ、フレデリカ様。

デスマーチ、終了なのです。

あまりにも辛いので、起承転結をパターン化してブロックを作って、組み合わせで物語にして後で整える方式を導入したところ、どうにかこうにか終わったのです。

手抜き？　上等なのです。

こんなアリキタリな幸せ物語なんか、誰もみたいはずもないのです！！

・・・とはいえ、持ち前の凝り性のせいか、全部に色々と手を加えてしまったのが悔しいのです。

ああ、御花畑め、呪ってやるのです・・・。

「ほぉ、さすがの「物語」も息切れしていますね、内容が」

「幸せの形なんか凡百に決まっているのです。不幸にこそバリエーションがあるのですよ・・・・。」

「至言ですね。」

うんうんと頷く御師匠様。

くそー、逃げ出せないように見張りがズーッとついていたのです。

最強の牢番あのですよ、ほんとうに。
とりあえず、ヴァリエール公爵には二人の出会いのラブラブ物語の「烈風姫カリン」を送っておいたので、帰ったら後悔するのですよ、御師匠様。

フレデリカ団長解放記念と言うことで、食堂でワインが振る舞われた。
団長は結構ワイン好きで、浴びるようには飲まないが、結構な勢いで飲むことは有名だ。
いつもは男女で分かれて座っている食堂も、今日ばかりは入り乱れて祝杯をあげている。

「団長、お勤めご苦労様でしたーーーー！」
「「「「「でしたーーーー！！！！！」」」」」
「聞こえが悪いのですよ！」

フレデリカ団長の叫びすらうれしい俺たちだった。

「フレデリカ様、新作ありがとうございますぅ！」
「すてきですわ、短編がこんなにいっぱい！」
「はぁ、どれも珠玉の作品ばかりですわぁ・・・。」

きゃいきゃいと団長に群がる女子を、俺たちは結構余裕でみている。
まぁ、ほら、団長の著作を「全部」読めるのは男子だけだから、な。

ほら、あれは女子には読ませられない作品群だし？
俺たちでも遠慮する内容もあるしなぁ・・・。
とはいえ、男子寮全体を震撼させた「ブレアヒューブレック事件探」は恐ろしかったし、その世界観が現実を浸食してきているようで怖かった。
そのその解決編として「アドベンチャーブック」なるものが考案された後でも、俺たちはあの世界観を思い出して背筋を寒くさせていたものだ。
あの世界観を紙に落としている段階で、団長の頭の中には完成した「それ」があるのだろう。
明らかに狂気だ、明らかに異常だ。
しかし、物語としておもしろすぎた。
あれは、絶対に寮の外に出せない内容だ、というのが男子寮共通の見解だった。
そんな作品すら読める優越感が、少しだけ俺たちの余裕をもたらせていた。

が、さすがに侍女の手によって写本が作られ、女子寮に蔓延しているとは知らなかったけど。

「フレデリカがこの部屋にいるのって久しぶりね。」
「ルイズ、ここはボクの部屋なのですよ？」
「主（あるじ）よりも、寮生のほうが出席率いいじゃない」
「キュルケ、それでもここはボクの部屋なのですよ？」

「・・・私の部屋でもある」
「タバサ、君の部屋は隣なのです」
「ここの本棚がなければ、ドアをつけるのに・・・」

心底残念そうにハシバミチップスをほおばるタバサ。
これにマヨネーズをつけるのがルイズとキュルケ。
マヨネーズは、未知のソースとして深く浸透しているのです。
マヨラーが発生するのも時間の問題なのです。

「でさ、フレデリカ。脚本の話考えてくれた？」
「キュルケ、もうその話は当分聞きたくないのです」

キュルケは「アルビオンの休日」風の「ラ・ヴァリエールとツェルプストー物語」を書いてほしいと言ってきているのですが、そちら方面の創作意欲は売り切れなのです。

「・・・私は「始祖みて」の新作いっぱいで大感謝」
「私も、結構新作いっぱいでうれしいわねぇ。」

タバサとルイズはジャンルを問わず読む派なので、出した分だけ楽しめるのが強みなのです。
同じようで違うのが、ガリアの第一王女。
結構好みの幅は広いけど、好み以外の酷評がひどいのですよ。

「そういえば、フレデリカ。」
「何ですか、ルイズ」
「このさ、「始祖みて」のさぁ・・・・・」

「学園祭ってなに？」

第二十九話「学園祭」が生まれて（後書き）

実に解りやすい引きですｗ

次回をお楽しみに～

※今回の元ネタ

ブレアヒューブレック事件探　・・・　ひぐらしのなく頃に

４／２２　修正なのですよ～

第三十話　「猫マスク」が生まれて（前書き）

そろそろ題名がきついですねｗ
まぁ、それもまたよしということでｗ

第三十話　「猫マスク」が生まれて

まぁ、おもしろいとは思うんじゃよ？

生徒たちから提案された「オープンキャンパス」というのは実に面白いアイデアであった。

魔法学院で学んでいる内容や、使い魔との連携、そして研究発表なんかを親族や平民に公開して、今後の交流の一端とするなどという開けた考えを何時から持つようになったのかと思ったぐらいじゃ。

しかし、なぁ・・・。

「この演劇はまずいじゃろ？」

企画の中で異彩を放つのは「歌劇」。

それも劇団「F」というのがまずい。

なにしろ「F」じゃからな。

どう考えてもパニック必死じゃろう？

加えて「少女歌劇団」でも未講演の題材だというではないか。

こんなの無理。

無理無理。

「そんな爺に朗報なのです！！」

「きたな、元凶め！」

「ふっふっふ～、今回は違いますが、いずれムンムンの男っ気を漂わせて男子寮に僕の部屋を作らせるのです！！」

「もうお前さんお部屋はあったじゃろ？」

「・・・・あ・・・・・。」

ま、バカ話はさておき、じゃ。

「とりあえず、この「歌劇」以外なら許可するじゃが？」
「でもでも、これがなければ、外交にならないと御花畑が言っているのです」
「御花畑？」
「アンリエッタとウエールズなのです」
「・・・不敬な・・・」

ばったり倒れてしまったぞい。

「つまり、このオープンキャンパスには王宮が絡んでおるんじゃな？」
「面白がって、ガジガジ噛みまくってるのです」
「・・・わしは許可するほかないのじゃな？」
「もちろんその通りなのです」

かぁ・・・・・、わし、最高責任者なのに中間管理職みたいじゃなぁ・・・・。

爺の許可を得たことを食堂で宣言すると、みんなわいたのです。
貴族もメイドも関係なしで大盛り上がりなのです。

事の始まりは、「始祖みて」のなかで描いたオープンキャンパス「学園祭」のネタでした。

模擬店や研究発表、そして演劇舞台。
生徒の趣味全開で遊びを盛り込んだお祭りを学園でやるというのだから面白いに決まっている。
それを魔法学校でやろうというのだから、盛り上がるしかないのです。
女子はくじ引きを開始して、ロマリア対策の研究発表をするための人員を選出し、男子も男子で対ロマリア対策の「美少年による賛美歌隊」を組織し始めたのです。

「そんなわけで、会長。賛美歌隊にはいってくれ」
「却下なのです」
「そこをなんとか・・・・」
「だが断る、なのです」

あのクソ坊主たちのために動いてやるものか、なのです。
だいたい、あのクソ坊主どものせいで、実家のボクの部屋が「痛い詩集&痛い宗教画」博物館になってしまったのですよ!?
そればかりか、こっちにまで学院にまで送ってきて!
迷惑千万なのに、迷惑と拒絶すれば異端って、どんな無理ゲーなのですか!?

「団長、ここは一つこらえてくれないか？　団長の対ロマリア迷彩が完璧なせいで、ロマリア嫌いが伝わっていないんだから」
「くぅ、そろそろレジェンドオブロードスを開封するしか・・・。」
「あ、ありゃだめだろ、団長。第一王女も一級封印指定だって！」
「でも、あの坊主達とは仲良くできないのですよ!!」

そう、こんな風にまで変態だから!!

「アストラルバインド！」

水の属性の矢にしびれ薬を仕込んだ魔法の直撃を食らって、そいつは倒れたのです。

「・・・や、やぁ・・・黒猫姫・・・。」
「しね、しね、即死しろ!!」

くそー、教皇め。
とうとう、こんな所にまで変態を派遣したのですね!
G以上にしつこくて汚らしくて、不快感満載なのです!!
ボクが叩き込む氷の矢を避けまくっていたのですが、常設の罠に引っかかり逆吊りになったのです。
ざまーなのです!

「い・・・いやぁ・・・いつもながら熱烈な歓迎だねぇ・・・。」
「この、ゲイ坊主。偵察なんてやめるのです!」
「しかしだねぇ・・・、黒猫姫の普段の姿の描写報告は、実に人気なんだよ?」
「・・・このままクビリ殺すのが望ましいのです・・・。」
「あああ、それも快感かもしれないねぇ? もちろん君がやってくれるんだろう?」
「わが猫の騎士団の処刑人がやるのです」

ボクが指を鳴らすと現れるのはもちろん!

「モテ野郎はいねーがーーーーーー!?」

我らが「野火」、デブ猫マルコリヌ!

「さー、顔の前に「ナニ」をヒッコヌクゾーーー!」

「く、く、黒猫姫！　か、彼は何者だね！？」
「ふっふっふ、対イケメン専用の拷問吏なのですよ？」
猫の覆面をかぶったデブ猫が、キュピーンと瞳を輝かせます。
「ソ、ソコニイルノハ、イケメン、だな？」
「ひ、ひぃ・・・！」
「イケメン、コロース・・・・。」
どこから出したのか、二本の長剣を構えたマルコリヌ。
「イケメンを一人殺せば、それだけ世界がよくなる・・・。」
「そ、それは誤解だよ、うん、誤解だ！！」
「イケメンを一人殺せば、女の子が一人でもあぶれる」
「そ、それも誤解だよ！！」
「イケメンを殺せば・・・幸せな気分になれるぅぅぅぅ！！！！」
踊りかかるマルコリヌを逆さ吊りでよける坊主。
うん、いい余興なのです。
「さぁさぁ、かけるのですよ～。イケメンが後どのぐらいでモゲルか？　いや、削げるもありなのです～」
「ひゃっはっは～、ダ～～～～～イ！！」
「く、くく、く～～～～！　鋭い鋭すぎる剣筋だ！！」
夜分遅くまで続いた坊主削ぎレースは、坊主の頭が逆モヒカンに

なったところで時間切れとなり、坊主は逃げ出すことに成功したのです。

「マルコリヌ、次は削ぐのですよ？」
「サーイエッサー！」

うんうん、実に濁ったいい瞳なのです。

第三十話　「猫マスク」が生まれて（後書き）

いやー、デブ猫、いい味してます。
さらにマルコ、変態キャラで決定ですｗ

※今回の元ネタ
レジェンドオブロードス　・・・　ロードス島戦記＞エロフ信仰の元ｗ
「アストラルバインド！」　・・・　スレイヤ〇ズ

第三十一話「乙女の嘆き」が生まれて（前書き）

さてさて、どんな乙女の嘆きでしょう？

第三十一話「乙女の嘆き」が生まれて

舞い込んだチケットに狂喜したのはあたしばかりじゃないだろう。
メイドたちも小躍りしているし、アミダクジで随行人員まで決め始めている。
お父様も行く気満々で「パンフレット」のチェックに余念がない。
まぁ、わかるさ、なにしろフレデリカからの直接の誘いだ。
どんなに冷静に振る舞っていたって舞い上がるに決まっているじゃないか。

「で、姫よ。どうする？」
「基本、リステナーデの別邸を定宿に出来るよう交渉済みです」
「なんと、物語の屋敷に招かれているのか？」
「いいえ、父上。別邸はあのマティー隊長の方です」
「うーむ、それでも興味深いな。」
「はい、あの物語の父親ですから。」
「うんうん」

あの悲嘆家だった父が、ここまで周辺に興味を持つようになったなんて誰が信じるだろうか？
さらには「少年歌劇団」のメンバーを使った諜報組織「ガリア少年歌劇団月組」なんてものまで作り上げて大喜びだなんて。
二年前の私なら信じなかっただろう。
しかし、去年の私なら信じたかもしれない。
なにしろ、フレデリカを知ってしまっていたから。

「では姫よ、後は任せたぞ？」
「お父様、政務に精励していただけなければ、この行幸認められません」

「ふぬっ！なんたる脅迫！！」
「・・・王権を持つのはお父様ですよ？」
「ぐぅ・・・い、いつまでにすればよい！？」
「今晩中にお願いいたします」
「・・・しかたあるまい！！　家臣団召集じゃ、だれかある！！」

大声で私の部屋を飛び出していったお父様をみて、私もメイドたちも笑ってしまった。
なんて暖かな空気にしてくれたんだい、フレデリカ。
何としても責任をとらせないといけないねぇ？

招待状は各国併せて数千に上るのです。
各王族、各王権族、有「力」貴族、大豪商、そして抽選で受かった一般読者。
遠くはサハラの方からもくるというのだから、どんな抽選をしたのか疑問なのです。
とはいえ、個人的なコネも呼んでおいたので、色々と面白いことになると思うのですよ。ニパー。

「で、コネって言うのは何処の王族だい？」
「ギーシュ。王族ばかりが権力者ではないのですよ？」
「ふむ、しかし宗教は嫌い、と」
「当たり前なのです。なんの生産性もないのに消費しかしないし、心の安定だけが目的なら、まだ花畑のほうがマシなのです」

愛の力でプリンセスミサイル、ちょっと感動したのです。

「んー、ボクも平均的な貴族なんでね、貴族的な思考からは離れられないらしいね。」

もう降参ですか。

まぁ、二人とも誰にも知られないように暮らしているので、知っているはずも無いのですが、それでも、みんなに幸せになって欲しいのですよ。

これは、ボクの、フレデリカ＝ベルンカステル＝ド＝リステナーデの中の人の、最後の妄執なのです。

「まぁ、わが友のことだ、我々の眼すら剥くような衝撃を見せてくれるのだろう？」

「さすがギーシュ、わかっているのです」

さぁ、タバサのお披露目ですら霞むような衝撃を叩きつけるのですよ！！

フレデリカぁ・・・・・。

よくもやってくれましたね、フレデリカ。

たしかに私も「カリン」を書けとは言いましたが、この「カリン」は、どういうことですか！！

「すてきですわ、カリーヌさま。」「ええ、本当にすてきですわぁ。」「ああ、私もあの頃が物語りになって帰ってきてほしいものです

わぁ。」
「「「でも、カリーヌ様ほど波乱に満ち溢れていませんものねぇ。」」」

わざわざトリステインの別邸まで押しかけてきた自称貴族マダム達が、今まで私に使ったこともない声色と視線で私を絡めとります。
なにしろ、フレデリカが「烈風姫カリン～カリンの恋」なんていう番外編を書き上げてしまったから！
羨ましいが、自分達は平凡だ、ああ、羨ましいと、一日中言ってくるのですよ！！
それも毎日毎日別の貴族マダムが！！

くぅ、これは意趣返しですね、フレデリカ。
貴方の罠は年々巧妙になっていきます。
・・・ああ、この遣る瀬無い思いをどうしてくれよう。

流石に一般貴族に物語化の話は持ってこれない。
これは難しすぎる。
フレデリカだけの苦労で済むなら、いくらでも持ってくるが、絶対にそれだけでは済まず、国政に対する不満になって帰ってくる。
これは間違いない。
あの脳味噌御花畑カップルみたいな機動力を普通の貴族は持っていないので、そのへんは不満に感じても羨望で済むだろう。
が、一般貴族にそれが振舞われれば、そうそう解消できる類の不満、いや不公平感ではない。
以前から物語化されてきた宮廷スキャンダルも、その際に不名誉とされていた事件でさえも、物語化されたという名誉とすら囁かれているのが恐ろしい。

この状態で、「アルビオンの休日」が開演されるのか・・・・。

そういえば最近の著作で「ツンデレを超えたツンドラ美人が主人公を滅多切り、だけど内心デレデレ」という新ジャンルが評判になっていて、そのヒロインがエレオノールにそっくりだと言う話を聞く。

その噂のせいか、国外からも娘への求愛の手紙があるとか。

フレデリカ、あなたはラ・ヴァリエールをどうしたいの！？

わたし、エレオノール＝アルベルティーヌ＝ル＝ブラン＝ド＝ラ＝ブロワ＝ド＝ラ＝ヴァリエールは、困惑している。

何しろ、実家と私の職場に、山のような恋文が送られてきたから。

送り主は様々で、国内貴族、国外貴族、国家間大豪商、ロマリア司教と様々。

中には「バーガンディ伯爵」様からのものもあり、正直困惑しすぎて研究もままならない。

このことをトリステインの別邸にいたお母様に相談した所、「フレデリカぁぁぁぁ」と歯軋りしていた。

・・・なるほど、フレデリカの「物語」の影響か。

そう言われてみると、色々と冷静になれた。

確かに今まで物語の題材にされた人たちや事件には人々の気持ちが集まり、注目も十二分に集まった。

題材にされた人たちは最初迷惑がっていたが、最後には鼻高々に物語にされたことを誇っていたものだ。

なら、私はどのような物語になっているのだろう、そう思って話題の物語を取り寄せてみると、なんというか、この、趣向が偏っているというか、なんというか。
ヒロインの内面展開や心理状態は、解りやすいほどにわかる。
なにしろ、私もそう思うから。

でも、これはないわよ。
相手も若い男の子なんだから、ちょっとぐらい気を許してあげても良いだろうに、結婚するまで手も握らせないでは、若いこの気持ちは離れてしまうでしょう。
まぁ、主人公の特殊性癖の御陰で、物語は進むのだけれど、一般的にはありえない展開だった。
強く辛く当たるヒロインの言動に、妄想と特殊性癖で迎え撃つ主人公。
なんだか戦争みたいな人間関係が、面白おかしく書き綴られている印象だった。
その人間関係を気持ち良いと感じている主人公とヒロインが、周囲の怪異や事件を解決してゆく物語は、主題や目的が二重三重にもなっていて難しく感じるけど、基本は二人の掛け合い。
言葉の掛け合いがこの物語の主題だと感じる。
礼儀も儀式も何もない、裸の罵りあいが気持ちいい。
そんな物語。

そうか、そうなのね、フレデリカ。
私はこんな人間関係を求めていたのね。

私は理解したわ。
フレデリカが折に触れて私の好みの物語や演劇を見せてくれていたのは、こういう意味だったのね。

私が物語から学ぶことが出来る、そんな感性を磨けるように、私を育ててくれていたのね。

ありがとう、フレデリカ。

小生意気で自己中心的で腹黒で、自分が可愛いことを武器にして無茶と無理を世界に押し付ける魔王のような存在だと思っていて御免なさい。

私はこれから少しだけ素直になるわ。

だから・・・・・・。

「この変態たちの手紙を何とかして、フレデリカ・・・。」

バーガンディ伯爵様までそっちの人だと思うと絶望は深くなった。

第三十一話「乙女の嘆き」が生まれて（後書き）

取り合えず、うちのフレデリカ様は有言実行です。
せめてエレオノールフラグだけでも折りたいと考えて活躍しました。

もちろん、その逆の展開が口を「くぱぁ」と開けている訳ですが、
その辺の情報の伝達速度が遅い世界なので、大概は片足を突っ込むまで気付けません。

実に不幸な話ですｗ

※今回の元ネタ
ガリア少年歌劇団月組　・・・　サクラ大戦
烈風姫カリン～カリンの恋　・・・　お師匠様のラブ話
ツンデレを超えたツンドラ美人が主人公を滅多切り、だけど内心デレデレ　・・・　化物語＞実際は小説の解説のような内容ではありませんｗ

第三十二話「魅惑のハーレムフラグ」が生まれてＴＴ（前書き）

・・・まぁ、運命の一端ですね。

第三十二話「魅惑のハーレムフラグ」が生まれてＴＴ

私たちは息を呑んでいた。

フェイスチェンジのタリスマンで顔を変えられていた少女が、ちょっと緊張感のないタバサの顔に変わったから。

彼女の名前はジョゼット。

タバサすら知らなかった双子の妹。

僕が知ったのは、タバサの母親の治療のとき。

記憶の整理を行っていたからなのです。

「・・・うわぁ、私ってこんな顔していたんですねぇ。」

水鏡を覗き込んだジョゼットは、両手を組んで何かフワフワしている。

どうやら姫様系の妄想少女らしい。

「・・・というわけで、ジョゼットには幸せになる権利があると思うのですよ。」

「うぇぇぇ、「物語」のフレデリカ様から声を掛けていただいただけでも幸せなのに、このうえ、幸せに?嫁、嫁ですかぁ!?」

スパーンとタバサのツッコミに、笑顔でそれを迎えたジョゼット。

「流石双子、いいツッコミです!」

だめだわ、この子。

かなりダメダメだと理解したわ。

「で、ジョゼット。あんたにゃ、人生を決める権利があるし、望めばあたしが後押しできる。あんたはどう生きたい？」

立ち会ったイザベラ様は苦笑いでジョゼットを迎えることを表明した。

「第一希望は、フレデリカ様の従者なんて最高なんですけど・・・お姉さま方に許してもらえそうにないので、考える時間をいただけませんか？」

実は結構考えてるわね。
御花畑に見習わせたいわ。

「そういいつつ、猶予期間を学院で過ごして物語三昧、じゃないだろうねぇ？」
「・・・・びくぅ！」

こりゃ、いい性格してるわ、この子。
結構面白いし。

「フレデリカ、ジョゼットはあたしが預かる。良いね？」
「勿論なのですよ、王女。いい子にしてたら新作を送るのですよ？」

びしっと敬礼のジョゼットは笑顔も輝かしく答えた。

「プライベートジョゼット、職務に精励するであります」

うっわー、ここまで染まっていたら周囲から浮いてたんでしょうねぇ？

「そうなんですよ、そうなんですよ！　みんな表面しか物語を追わないから全然話が合わないんです！」

私の手をとったジョゼットは、半分泣いていた。

「流石「初めての物語の人」、解ってらっしゃいますぅ！」

ま、タバサもその系統だし、ね。

「お姉さまもそうなんですか！？　うれしい！！」

何の蟠りもなくタバサを抱きしめるジョゼット。

なんだかこういう光景も良いかもしれないと思う私だった。

学園祭と題されたオープンキャンパスに様々な人が集まってきたのです。

各国の王族王眷族、貴族従者平民、もう様々。

この学園祭の中では最低限の地位しか表明できないことになっているので、かなり楽しそうにしている貴人が多いのです。

逆に言うと、誰が来ているかわかりにくい、これが主眼です。

つまり、どんな「ヒト」がいてもＯＫなのです。

・・・そんなわけで

「モードの血筋の姫様なのですーー」

「「「えええええええええ！」」」

読者招待客のので迎えに来たといういいわけで、ルイズ・タバサ・キュルケで魅惑の妖精亭にきたのですが、正面のバスト革命（レボリューション）を相手に驚く三人。

「あ、あ、あ、あの、フレデリカ様、そのことはどこから？」
「物語に知らぬ事などないのですよ、ニパー」
「す、すごいです！！」

モード公のお姫様であることや今まで隠遁していたことや、その隠遁先にむりやり物語を届けていたことなんかを話すと、三人ともにため息なのです。

「フレデリカの規格外には慣れてるつもりだけど、今回はとびきりね」
「フレデリカって、本当に何者なのかしら？」
「・・・送っていた本の目録を教えて」

ひとり空気が読めない娘が混ざっているのがいい感じなのです。

「ふわぁ、これがあの「始祖みて」のモデルなんですねぇ。」
「いいえ、モデルはいないけど、結構そういわれてるみたいよ？」
「女子寮の中にもバラの館って呼ばれている部屋もあるわ。後で一緒に行きましょ？」
「「物語」読みには桃源郷。」
「・・・とりあえず、僕の部屋なのですよ？」

最初の衝撃はどこへやら。
物語好きという共通項でくくられた女子は、キャイキャイ盛り上

がっていた。

「フレデリカさま～、本当に出店を出していいのかしら～？」

くねくねフレディー風のミレディーに僕は笑顔を向けるのです。

「当たり前なのですよ？　我らが猫の騎士団の企画の一部としてですが、是非とも参加してほしいのです。そして、休憩時間には自由に見学してほしいのです」

僕の言葉を聞いたお姉さん達は凄い勢いで喜んでくれたのです。

実にいい感じなのですよ。ニパー。

「で、フレデリカ。つまり私たちにこの子の案内係を任せたいのね？」

「ルイズ、最近知性が光っているのです。どうしたのですか？」

「・・・あんたや姫様に脳筋発言を広められて、流石に考えるようにあったわよ。」

良いことなのです、良いことなのです。

これでオエレオノール姉様のところへ縁談が集中すれば、実にみんな幸せになれるのです。

「あ、そういえば、お聞きしたいことがありました」

ぽふと両手をあわせるティファニア。

「フレデリカ様、お聞きしたいことが・・・・。」

・・・胸の間から小型装丁版の物語が出てきたのです。
あまりのことに息をのむ周囲。
ミレディの娘が真似できないかを、寄せてはあげて繰り返しているのです。
む、キュルケ、余裕ですね？　あ、やったことがある余裕ですね！　そんな二人を親の敵のようににらむルイズとタバサ。
一気に空気をかき乱すこの能力、恐ろしいのです！

「この、主人公とヒロイン、何で罵りあっているのに楽しそうなんですか？」

こんなに仲がいいなら、優しくささやきあえばいいのに、とシュンとなるティファニアに周囲騒然です。
「も、燃える」「萌えさかる！！」「ぎゃーーー！ほれたーーー！」とか女子が叫ぶせりふではないのですよ？

「んー、ティファニアには理解できない感情でも、誰かには理解できる感情があるのです。そんないろんなヒトの感情をつづってまとめたのが物語り。今理解できなくてもいつか理解できる日が来るかもなのですよ？」

んーっ、と眉をしかめたティファニアにもう一言乗せる。

「ティファニアが、いつか一緒にいたい男の子が現れたら分かるかも、しれないのですよ？」

真っ赤になってワヤワヤするティファニアに、みんな癒されたのですｗ

「な、なに、このかわいい生物は！　ふ、ふ、フレデリカ紹介しなさい！！」
「あ、噂のツンドラヒロイン登場なのです」

魅惑の妖精亭が沸いたのです。
どうやら給仕（ようせい）のお姉さん達も読んでいたみたいです。
いやー、うれしいですねぇ。

「がーーーー！！！　その物語のせいで、各国の変態という名の貴族から、変態性欲の詰まった手紙が集中して仕事どころじゃないわよ！！」
「ええ？」
「何でそこで意外そうな心外そうな顔をしてるのよ！？」
「だって、エレオノール姉様をゾッコンラブになるような特殊性癖な方を集中的に集めることに成功したんですよ？　何で責められているのですか？」

おお、と拍手喝采。
僕も丁重に礼の姿勢をとるのです。

「なんでよ！　そこまで私を思ってくれてるなら、フレデリカがもらってよ！！」
「ねえさま！　フレデリカは私の嫁です！！」

きたのです、鉄板来たのです。

「くぅ、確かに年の頃ならあっているでしょうが、あなたとフレデリカでは色々とつりあわなくてよ！？」
「大丈夫です、お姉さま。私で足りない分は、ちい姉様で補うので

す、主に胸！！」

ぐはぁ、と片膝をつくエレオノール姉様。

「・・・王宮の噂は本当のようね。次女と三女を抱き合わせて嫁がせようとしているという、その恐ろしい計画」

「ふふふ、ちい姉様はすでに王宮をとりまとめているわ。私も学院を経由して王宮から離れた貴族にも根回しを完了してる。あとはタバサまでついてこの値段、ハウマッチ！って状況よ！！」

は、初めて聞いたのです。

というか、タバサもついてくるのですか？

「・・・ルイズ、ＧＪ」

かなり満足そうですね、タバサ。

「ふ、ふ、ふ・・・・・」

「「「ふ？」」」

「ふえーーーーーーん！」

滂沱の涙を流すエレノオール姉様。

「なんで、なんでよ、何で私だけ仲間外れなの？　私たち仲良し姉妹だったじゃない～～～」

呆然の僕たち。

「・・・そりゃ、厳しくもしたし、ひどいことだってあったわ。でも、私たち姉妹は支え会ってきたじゃないのぉ・・・・。」

思わず、本当に思わずの行動なのだろう。
ティファニアはエレノオール姉様を抱きしめた。
そしてルイズも同じように抱きしめた。

「・・・ねぇ、私も一緒じゃだめ？」
「・・・エレノオール姉様には、ただ一人のヒトが必要だって思いこんでいたんです、私もちい姉様も。」
「・・・ルイズやカトレアだったらいいのよ？」
「・・・たぶんタバサだけじゃすまないと思いますよ？」
「それでも、それでも私は・・・。」

きゅっと二人を抱きしめたツンドラ様を、給仕（ようせい）さんたちは御馳走をみるように涎を垂らしているのです。

わかります、ツンドラがデレデレ、それもリアル。
エレオノールならぬデレオノール。

わかります、ええ、わかるのです。
でも、それが僕の双肩にかかっているかのような視線でみないでほしいのです。
流石に三姉妹を娶るなんて恐ろしいのですよ・・・。

「フレデリカ、いずれオトコを見せるときがくる」

重々しいせりふで締めくくってくれたタバサに感謝なのです。

第三十二話「魅惑のハーレムフラグ」が生まれてＴＴ（後書き）

えー、ここに一つの分岐が生まれました。
リカちゃんが諦めれば三姉妹丼コース、諦めなければ英雄召喚コースです。
どんな英雄かは未公開ですが、まぁ、色々ですｗ

※今回の元ネタ
プライベートジョゼット　・・・　プライベートライアン（旧軍の三等兵）（自衛隊であんな事件があればどうなる？　と関係者に聞いたら、曹より大切な下っ端だぜ？　助けに行くって、とのことｗ）
フレディー風　・・・　フレディー＝マーキュリー（Ｆｒｅｄｄｉｅ　Ｍｅｒｃｕｒｙ　ロックミュージシャン）

挿話０２　古手梨花と恋姫０２（前書き）

１００万ＰＶ超え記念！　挿話、「古手梨花と恋姫」でございます。

こちらの梨花は、中の人の性格が強く出てるので、かなり奔放です

ｗ

挿話０２　古手梨花と恋姫０２

黄巾と呼ばれる奴らがいる。
が、これには三種類いると「黒猫」は分析している。
一つは、喰い詰め者や犯罪者、山賊などが集まっている集団。
一つは、流しの歌手を追っかけているうちに流浪の集団になってしまった者たち。
どちらも生産性はなく、人から奪うばかり。
が、もう一つ、三種目は別だ。
税で苦しめられ、理不尽に苦しめられ本当に立ち上がった農民たちだった。
彼らは確かに暴れたが、それによる被害よりも彼らが受けた苦しみにこそ目を向けるべきであると公孫賛様はいう。
で、三種目は、実のところ、黒猫と公孫賛伯珪による活躍により、公孫家領地内へ入植させ、平和な農家へ転業させている。
悪は悪だが、三種目の方は交渉の通じる相手ということになっている。
つまり、相対するのは二種。

強盗とバカ。
黄巾なんて言ってるけど、理念も理想もないバカ集団であることには変わりない。

とりあえず、強盗は利に聡いので逃げ回っているが、バカはバカなので遭遇戦が始まると、壊走するまで戦うというバカさ加減。
戦略も軍略もない。

そんなわけで、発見必殺（サーチアンドデストロイ）は決定なのですが、困ったことが起きました。
なんと、皇帝から召還を受けたんですよ、公孫賛伯珪様が。
今までの治世や山賊退治、そして抗菌、いや黄巾退治の褒賞に。
一軍をつれて来い、と。

「朱里、雛里、これはまずいのです」
「そ、そうでしゅね、まずいでしゅね」
「・・・どうにか、しないとなりません」

僕たちが焦っているのを感じて、風や桂花も献策しています。
なにしろ、正史に於ける「董卓」の役目を代わりに押し付けられそうになっているのです。
というか、善政を施行して言うことを聞かない董卓の代わりに僕たちを据えて僕たちに言うことを聞かそうという形ですね。
へたすりゃ「霊帝」暗殺の汚名まで着せられるのですよ。

「・・・いやな時期、というか着せられること請け合いじゃない」
「そうですねぇ・・・ぐぅ」
「風、ねるな」
「・・・あまりに露骨なので、思わず夢の国逃避してしまいました」

まぁ、取り合えず、黒猫で董卓と呼応しかないかぁ。
そんなわけで、予想される危機と謀略、あと関わっていそうなバカの一覧を白蓮に見せた所、にやりと笑ったのです。

「つまり、董卓と組んで内政改革と正常化って事もできるってことか？」
「かなりの綱渡りになるのですね」

「じゃぁ、外の諸侯と呼応して、黄巾退治。収まったあたりで、諸侯同士が同士討ちしてる、・・・ように見せて諸侯全員で禁裏の裏のバカ掃除、て言うのはどうだ？」

感動したのです。

白蓮、確かに「知将」方面に平均を伸ばした「いいこ」に育っているのです。

朱里雛里どころか桂花までグットサインなのです。

「そうなると、政争になる前に姫たちを押さえておきないとなりませんねぇ？」「神輿を担がせる前に、神棚隠しちまうのが一番だよな」

風、恐い子なのです。

で、武将置いてきぼりかと思いきや、くじを作り始めたのです。

誰が洛陽までいくか、という話らしいのですが・・・。

「何人行くかも解っていないのに、くじは無用なのですよ」

「というか、関羽　張飛　許緒　典韋の四人でしゅよ」

で、知将は既に決めてあって、古手　諸葛亮　鳳統なのです。

色々と討議もありましたが、内外呼応にはこれが一番なのです。

「「「「「「ええええええ！！」」」」」」

「白虎がお留守番、ありえないのレス！！」

ばたばたと暴れる白虎に囁くボク。

「他の姉妹も呼んでおくのです。でも、町で人気の白虎はお留守番なのです」

ああ、もっと早くに呼んでいれば押し付けられたのに、可哀想可哀想なのですよ。

白虎姉様方の召還を受け私青龍と妹朱雀がフレデリカ様の護衛につくことになった。

最初は、幼女成人女性構わず喰いまくる強姦魔神かと思っていたのですが、私や朱雀に鎧や武具を仕立ててくれる優しさをかいま見せてくれる、非常にいい人でした。

こんな事ならもっと早くにお会いすればよかった。

「青龍ちゃんは世間知らずですものねぇ・・・。」

「え？　どう言うことですか、朱雀」

「そういうふうに、防御を崩すのが目的だと思うのよ、私」

「そんな！　精霊である私たちにすら心砕いてくださるフレデリカ様を疑うなんて、朱雀、見損ないましたよ！！」

まったく、あの麗しくて可愛くて優しいフレデリカ様、梨花様を疑うだなんて！？

えー、龍も雀も幼女ではなかったのです。

実に助かったのですよ。

なにげにこの世界、幼女率が高すぎて困っていたのです。

色々と。

僕自身も年齢が高いとは言いませんが、それよりも、かなり低い感じで、それなりに困っていたのですよ。

もしかして、この世界、男よりも女、成人よりも幼女の方が強いとか？

・・・

ちょっと怖い考えになったのです。

まぁ、バカな話はさておき、軍編成の関係上、白蓮の状態がちょっとリセットかかって「いいこ」から「よゐこ」になっているです。

「なぁ、梨花。本当に大丈夫なのかぁ？」

「白蓮は僕が守るのですよ」

「梨花ぁ～～～～」

馬上から抱きついてくる白蓮をなでながら、一応の作戦を話し合う。

もちろん、先日までは納得していた白蓮も平均値が少し下がって自信が減ってるらしい。

・・・いや？

「・・・甘えてるのですね」

「ギク」
「最近、主としての仕事ばかりだったので、甘える時間が少なくなったという事で、今補給してるのですね？」
「ギクギク」

しかたないのですね。
今だけなのですよ？

今都を牛耳っているのは、官害・・・じゃなかった、タマナシ、・・・まぁ、いいか・・・タマナシなので、根性が腐っているのです。基本、暗殺、謀殺、謀略と、まぁ、およそ自分の手を汚さずに楽をする手段については幾らでも思いつく集団なので、都に行くだけで死地にいるようなものなのですが、黒猫情報で様々な味方を付けることに成功したのです。

たとえば、曹家。
祖父がタマナシですが、本人は優秀この上もない人物。
たとえば、袁家。
本初さんの方には「劉備」さんをあてがったことにより太いパイプができて、徹底的同盟関係が生まれたのです。
で、うちに仕官している関係で、馬家。
正直、イヤになるぐらい人間関係が集中しているのです。
ただ、もう一つの袁、袁術は、何というか交渉とか関係とかを結ぶ以前のレベルの人物、というかガキなので、手の打ちようがなかったりするのです。

あれを甘やかしている張なる軍師はなにを考えているやら。

とまれ、都におけるそれなりの人物の渡りを付けて、都に駐留している軍をおおよそ押さえられる人物たちに声が行き渡ったことを安心して、僕は大人物と交渉を持つことにしたのです。

何進大将軍

正史ではタマナシに暗殺されてしまうのですが、さすがにそのフラグは折りたいなーと思っていたのです。
で、その思いは間違っていなかったのです。
美人、ナイスバディー、声「折笠愛」！！
一瞬で惚れたのです！！

・・・あー、ステイステイ、どうどう。

「古手殿。どうかなさいましたかな？」
「いえいえ、何進閣下が余りに美しくて、我を失ったのですよ」
「これはこれは、実に耳障りのよいお世辞ですな」
「なにをおっしゃいます、閣下。僕は美しい人に嘘は言わないのですよ！」
「嘘は言わない、しかし真実もすべては告げない。そういう類の人物だと思っておりますが？」
「・・・う、ぐぅ、ひどいのです。素直な感想ぐらいは受け取ってほしいのです。」
「ではそのかわりにお聞きしましょう。今あなたの瞳の奥で燃える

想い、その真実を」
「・・・・美人さんには死んでほしくないなぁ、閣下の命はどうやったら守れるかなー、なのです」
「・・・・・！！」

古手（クーディ）という知将がいる。
彼は、信じられないが「彼」は男であった。
自分の息子ほどの子供に「美人」と呼ばれるのも新鮮だが、守りたいなどといわれたのは衝撃だった。

確かに自分のみが危ういことは感じている。
宦官の排斥を宮中に上った妹に進言しているが理解されている様子は無く、逆に宦官の反発が吹き込まれている始末だ。
下からは宦官排斥が上奏され、妹からは抑えるように押し付けられて随分と鬱屈していたのだが、古手の少しだけ明るい気持ちになれた。

「閣下、一つ提案があるのです」

古手の話は巧妙であった。
宦官全全ての排斥意見を撤廃して安心させ、逆に、陛下の意向を忠実に行えない無能な宦官を排斥するように勅令を出させるのだという。

現在の宦官の有能さなど文官における有能さではなく贈収賄の腕にかかっているとも言える。

つまり、優秀さを誇れば誇るほど罪業が増えるというわけだ。

それを密偵に精査させているうちに宮廷内の宦官を疑心暗鬼で身動きできなくなっているうちに、姫たちを押え、今後起こりうる政変での宦官暴走を防ごうという、見方によっては不敬満載の計画だった。

が、既に帝の命脈は絶えると見て間違い無い。

漢王朝の命脈も危なかろう。

とはいえ、死病に犯された老人のような国を任されるであろう姫たちには何ら罪は無い。

いささか乱暴ではあるが、幾分は健康な状態で国譲りをされても良いのではないかと古手は苦笑いだ。

「宦官を全て排斥せねば、諸侯は納得せぬぞ？」

「宦官は皇帝の手足なのです。アレが本当になくなれば、漢王朝は即時破滅なのです。」

たとえば上奏分の書式や過去の資料なんてどこにあるか判るか、ときかれれば首を捻るほか無い。

探せばあるだろう。

しかし、全てわかるかというと難しい。

慣例、慣習という膨大な知識は、継承させたまま道具の状態に戻ってもらう、それが古手の計画だった。

「大体、諸侯が気に入らない宦官を一掃すれば、凡その膿は出るのですよ？」

まぁ、確かにそうだな。

諸侯諸侯といっても、言いがかりで飛ばされたものばかりではな

い。
実際に罷免や罪業によるものも少なくないのだから。

「よかろう、古手。貴様の計略に乗ろう」
「つまり、生き残ってくださるのですね？」
「ああ、そなたの計略で生き残れた暁には、そなたの主を厚く遇しよう」

ありがとうなのです、とにこやかに微笑む古手は、その際に逢い引きをしようと約束してでていった。

・・・本気か？
まぁ、それもまた面白いかもしれんがな。

何進閣下が勅命で城に呼び出されたと聞いたのは、董卓様とその家臣団と打ち合わせをしているときでした。
取るもの取りあえず向かうと、謁見の間が閂で閉じられています。

「斗詩さん、猪々子さん！」
「「はい、姫！」」

二人の一撃で破られた扉の向こうでは、小刀を構えて狂った笑い顔を浮かべているタマナシ、そして地に伏した何進閣下・・・。

「か、か、か、何進は、勅命に従わなかった、だから、だから無礼打ちになったのだぁぁ！！」

瞬間、怒りに黒くなる袁紹・公孫賛の二名。
家臣団も其れに煽られて真っ黒になる。

「・・・遺言はそれだけか？」
「・・・こ、こ、こ、ここは宮中なるぞ！！　武装しての侵入は朝敵となる覚悟かぁ！」

腰元の剣に手を伸ばした公孫賛伯珪を威嚇するタマナシ。

「その小刀は武装じゃないのですか？」
「こ、こ、これは、これは・・・そう、何進が持ち込んだものだぁ！！」
「で、取り上げて、さらに自分で装備？　バカなのですか？　アホなのですか？　宮中法度で持ち込みを許可されている何進閣下から取り上げて、自分で装備？　どちらが悪いかは明白なのです」

真っ青になったタマナシ。
深い、真っ暗な気配が広がる中で、軽やかな笑い声が響いた。

「ふ、ふ、ふふふふ、はははははは」

それは、倒れている何進閣下から聞こえる声。
彼女はゆっくりと身を起こしてニヤリと笑う。

「いやいや、さすがだな、古手殿」

ほこりを払うようにして立ち上がった彼女をみて、タマナシは怯えたように後ずさります。

「ば、ば、ば、ばかな、ちゃんと刺したぞ・・・」
「本当に、おまえたちはバカだな。そんな小刀で、この「ぼでぃーあーまー」を貫けるものか」

ばっと広げた彼女の胴には、コルセットのようなモノがついているのです。
これこそ、繊維単位で「固定化」をかけたコルセット型ボディーアーマーなのです！！
先日の会見の後、稚拙な策に対応できるように送っておいて正解だったのです。
ちなみに、うちの武将の衣類には大概繊維単位の固定化をかけているのです。
マントなんかの矢避け装備がないので、結構好評なのですよ。

「く、くそ、宮廷内に入り込む蛮族どもめ！！　だれか、だれか！
袁紹・公孫賛の反乱だ！！　誰かぁ！！」

もちろん、黒猫が手を打ってますよ？
すでに、離宮から脱出した姫たちは、タマナシたちから保護してますし、曹操さんとも黒猫で連携して軍部に嘘の勅命がいかないように手を打っているのです。

「さて、それでは、私が呼び出された勅命を遂行してもらおうではないか。」
「・・・な！？」
「私は皇帝に呼び出されたのだ。そのように勅命として発行したのは貴様だ。ならば、その言葉に嘘がなければ、この場に皇帝がいらっしゃるはずだ。さぁ、皇帝はどこにいる！！」
「きききき、き、き、貴様、軍人の分際で、私に指図するかぁ！」

すでにもう、グダグダですね。

「公孫伯珪、袁本初、両名に告ぐ。目の前のバカは、勅命を偽造して漢王朝を混乱せしめし愚か者だ、即座に捕縛、累計にわたり斬首せよ！！」

「「はっ！！」」

「ま、まて、嘘ではない、勅命なのだ、勅命なのだぞ！？」

へたりこみ、後ずさるタマナシを捕縛した家臣団は、そのまま関節を決めつつ連行した。

「うそだ、うそだ！！　何でこんなことになる、何で私がこんな目にあうんだぁ！！」

絶叫が響き、背中の彼方に消えてゆきます。

「・・・妹よ、これが真実だ」

閣下の言葉とともに、何皇后が柱の蔭から現れたのです。

「・・・ねえさま、それでも私は・・・」

「わかってる。だからすべてを排斥するわけではない。膿を出す、それだけだ。それだけはさせてくれ」

顔を両手で隠した何皇后が小さく頷いたのを見て、閣下は片手をあげる。

「よし、以降、バカの狩り出しにかかる。公孫伯珪、袁本初、両名にその任を与える。董卓・曹操両名は追って連絡するが、黄巾討伐任務を与えるつもりだ。公孫伯珪、袁本初、名声が欲しくば、早々

に宮廷を整理せよ!!」
「「はっ!!」」

外腹とはいえ袁家を代表する本初。
治世、外交、商工に力を付け、政治的なバランスもよい公孫伯珪。
この二名に対する嫉妬は深いけど、タマナシ狩りをする評判を聞くと溜飲が下がる。
民草の評判は董卓・曹操でわけ、諸侯の注目は袁紹・公孫賛で分けるという流れとなるようなのです。
漢の末期の水は袁紹・公孫賛にとらせ、その後の群雄割拠は董卓・曹操に舵を取らせる流れっぽいのです。

何進閣下の絶妙なバランスには関心なのです。

「そうそう、古手殿」
「なんですか、閣下」
「逢い引きは、いつにするのだ?」

やったーーー!!
次の休みを調整するのですぅ!!

公孫賛伯珪の配下にいる諜報の長、古手。
大黒猫と呼ばれるその姿は麗しい少女の姿だという。
そして彼女の配下の黒猫は、方術に優れており、どんな早馬より

も早く大黒猫に報告ができるという。
　このほどの宮廷掃除で、その黒猫の姿を見て、絶対に手に入れる、と決心したのだけれども、寸前のところで煙のように消えてしまう。どんな方術なんだ、と調べてみたけれど、全くわからなかった。くぅ、あれほどの美貌、絶対に閨に引き込んでやるぅ・・・。

「華琳様、黒猫がきています」

　秋蘭の言葉に我に返った私は、通すように伝える。
が、そこに現れたのは、希薄な気配の黒猫ではなかった。
確かな存在感を醸し出すその姿は、間違いなく黒猫と同じだったが、別人でもあった。

「お初にお目にかかります。古手（クーディ）、字は「大黒猫」ともうします。」

　やはり、と思うと同時に私は微笑んでいた。

「私は、曹孟徳よ」
「御高名は、漢の国、津々浦々まで響いているのです」
「あら、ほんと？　うれしいわ」

　私のほほえみに対して、古手もにっこり微笑んで答えた。

「さて、この度の来訪の用件を聞きましょうか？」
「はいなのです。この度は、内外呼応にご協力いただき感謝の極みなのです。すでに喰い尽くされた屋台骨を少しでも延命して姫君に渡したいという想いが通じたものと思っております」

　あら、この娘、すでに漢の命脈が絶えたと言っているに等しいことを。

「この場で捕縛されてもおかしくないことを言うのね、あなた」
「少なくとも、何進閣下と意志交換できております。大きく問題ないかと」

まぁ、閣下の直属の流れですものね、その程度の防御はしているのはふつうね。

「まぁいいわ、その謝辞受け取るわ」
「・・・感謝の印というわけではありませんが、何進閣下からこのような書状を受け取っているのです。」

渡されたそれは、董卓との共同任務。
黄巾の討伐の旗振りであった。
つまり、黄巾討伐の名声を得よ、ということらしい。

「あら、任務よ、これ？　報酬という風には見えないわ？」
「得られるモノが金銭ならば、これは報酬にあらずなのです。」
「・・・ふふふ、試したの。ごめんなさい」
「いいえ、曹操様が聡明な方と解っただけでも収穫かと」

いいわ、いいわね、この娘。
欲しいわ、絶対手に入れたいわ。

「ねぇ、古手。」
「はい、なんなのですか？」
「・・・私に仕えてみない？」
「え？」
「あら、そんなに意外？　あなたのように麗しくて聡明な女の子は、是非とも仕官して欲しいのよ」

「・・・えー、と、そのぉ。」
「解ってるわ。今仕えている主への義理立てでしょ？　大丈夫よ、今回の報酬として客将として借り受ける形を取るから。で、私に心酔して仕え直す形にすればいいわ」
「いえ、そういうことではなくて・・・。」
「あら、ほかに何か問題があるの？」
「・・・僕は男なのですよ？」

・・・え？

・・え？

え？

「「「えええええええええええええ！？」」」

話に参加していなかった春蘭も秋蘭も驚きで声を上げていたのだった。

羞恥で真っ赤になりながら、凶悪な「アレ」を見せられては納得せざる得なかったけど・・・・

「ちょっと、あの表情は反則よね」
「はい、華琳様」
「でも、あの顔なら、男でもいいかもしれないと思った私は、今までの私と違うかしら？」
「それでも華琳様は華琳様です」
「・・・・・・」

私の話に同意する秋蘭。
春蘭は泡吹いて倒れてる。
男の「アレ」を見た初めてが「アレ」では、確かに泡を吹くだろう。
私もしばらく夢に見そうだった。
「泡を吹く姉上もかわいいなぁ・・・・。」
あんたって、そういう娘よね。

挿話０２　古手梨花と恋姫０２（後書き）

いかがでしょうか、古手梨花と恋姫でした。

ちなみに、本編はちゃんとしたペースで書き進んでいますので、ご安心くださいｗ

４／２９　ハムの人の「呼称」を修正。　賛抜きに統一しました。

４／３０　色々と手を入れました

第三十三話「共同合意」が生まれて（前書き）

えー、いざるような速さで話が進みますｗ

話を引き伸ばしているわけではありませんが、書きたいことを叩き込むと、時間が足りません・・・・ＴＴ

第三十三話「共同合意」が生まれて

準備公開期間というものを作って、貴人を招待するのと同時に、周辺の町をお祭り一色に変えるという試みには成功したのです。

各貴族のトリスティン別邸では連日のようにパーティーが開かれ、僕らはゲストとして呼ばれ、顔を出していったのです。

そんな中、タバサをシャルロット＝エレーヌ＝オルレアンとして紹介して、時々現れるイザベラ様と良好な関係をアピールしているのです。

で、更に、ジョゼットをオルレアンとして紹介することで知名度を上げて、足がかりにさせていたのです。

流石イザベラ様、そこが痺れるのです！！

で、タバサ・ルイズ・キュルケの三人は、いわずと知れた物語の学院有名人なので、パーティーごとに人垣が出来て大変なのです。

「おや、物語。おつかれかい？」
「・・・流石に疲れるのですよ。」
「ま、連日の接待パーティーをこなしておいて、当日姿をくらませるつもりなんだろ？」
「わちゃー、なのです。イザベラは謀れないのです」
「ふん、初めから相談してくれれば、一から乗ってやったんだよ？」
「いえいえ、イザベラ様の手のひらには小さい遊びなのです」

「あたしは、その、小さい遊びに混ぜて欲しいって言ってるんだけどね？」

思わず笑ってしまうと、イザベラ様も笑っているのです。

「ま、お父様も政務が終わればくるそうだから、会ってやってくれないかい？」

「・・・終わらなかったのですね」

「終わらなかったんだよ」

王、無残なのです。

普段から政務をためなければ良かったのですのに。

「まぁ、イザベラ様とフレデリカ様はお知り合いですの？」

「ああ、ロッテ経由でね。ロッテも身分を隠して学院に留学していたから、何となく仲良くなったんだよ。」

「まぁ、素敵ですわ。ソサエティーの主催とガリア王族の友誼、まるで物語ですわね。」

「ははは、そうかもしれないね。何しろ相手は「物語」だからね。」

ウイットに富んだ、実に高貴な方々の話なのですが、もっと話したいことは裏にあるという閉息感が気持ち悪いのです。

まぁ、その辺は慣れるほかないのですけど。

「・・・そういえば、噂で聞きましたけど・・・・」

む、本題がきたのです。

警戒なのです。

「・・・あの「アルビオンの休日」のモデルが、「あの」姫と「あ

の」王子って本当ですの？」

それが本題ですか・・・・・。

思わず膝から落ちそうになった僕を、イザベラ様が支えてくれたのです。

感謝感激なのですよ。

まぁ、真実は公演の時に、ということで濁しましたが、彼女は真実を言い当てたと思ってくれたと思うのです。

まさに沈黙もまた情報なのですよ。

「フレデリカ、あんた苦労するねぇ」

「そういってくれるのはイザベラ様だけなのです」

今や僕の対イザベラ様好感度は鰻登りなのですよ。

もう、別々に回るのも面倒だったので、その後は僕とルイズ・タバサ・キルケに加えてジョゼットとイザベラ様が加わり、さらにはちょこっとだけフェイスチェンジしたティファニアを連れて巡業したのですが、ティファニアに男性貴族から求婚が津波のように押し寄せたり、その存在の真偽を問うために女性貴族から揉まれたりと大騒ぎになったのでした。

うーん、やっぱり破壊力があるのですよ、あれ。

「そうねぇ。ちい姉様をも超える「モノ」が在るとは思わなかった

わ」
「・・・あれでもまだ堅かった。成長の余地がある。「あれ」は危険」
「ロッテ、その人が殺せそうな目はやめな。」
「お姉さまも結構危険な視線でみてた」
「・・・あの子にゃ罪はない。しかし恨めしいのはかえられないんだよ」
「魂の叫びなのです」
「・・・フレデリカ、あんただって貧乳だろうが」
「僕は男の子ですよ?」
「「「「・・・・・」」」」

なんです、その変なモノをみるかのような視線は?

「とりあえず聞くけど、いつもフレデリカが着てる服って、誰が買ってるの?」
「お母様とメイドのフレンシア以外は手を出してはいけないことになっているのです。ただ、下着を買う自由はあるので結構こってるのですよ?」
「なんだろうねぇ、この敗北感は。」
「姫以上に姫って感じがするんだけど。ヴァリエール（うち）だって、そこまでじゃないし。」
「・・・流石フレデリカ、そこに痺れる憧れる。」

あー、なんかヒドいこといってません?

「仕方ないんじゃない? フレデリカのセンスって「やばい」し。」
「そうなのかい?」
「ええ、そうなんです。この前一緒に城下に行ったとき、「僕はこれで男らしくなるのです」とかいって取り出した服が、また・・・・

。」

「あああ、人間誰にでも欠点は在るものだねぇ？」

「たしかに、ヴァリエールのクローゼットにもヤバイもんが入ってたけど、あれって・・・・。」

とてもヒドいことをいわれているのです。

「だ、大丈夫ですよ、フレデリカさま。文章にはそのヤバイセンスでてませんから！！」

「あ、あ、あの、私も気にしませんから！！」

ジョゼット、ティファニア、トドメはつらいのですよ。

これ以降、僕の服はみんなの合意の上で購入され、下着まで管理されることになってしまったのです。

・・・泣いて良いのですよね？

あかさかぁ・・・・・・・ＴＴ

第三十三話「共同合意」が生まれて（後書き）

さて、ヴァリエール以外の包囲網が固まってきました。
ハーレムルートというには厳しい人員かなーとは思いますが、どちらかというと「フレデリカ共同体」みたいなサークルという感じです。

※今回の元ネタ
更新なし

何かというと赤坂に助けを呼びますが、使い魔では召喚されません。
りかちゃん、不幸ＴＴ

第三十四話「ジョセやん」が生まれて（前書き）

えー、なんか信じられない方向でみんなはっちゃけてます。

第三十四話「ジョセやん」が生まれて

「トリステインよ、私はやってきた！！」

仕事を溜めすぎて、夏休みの宿題を最後の三日間ほどでやり遂げた子供のようなテンションでガリア王ことジョセやんがやってきたのです。

各貴族の事前パーティーが終わった頃にやってきたのは、明らかに超お忍びモードなのは間違いなので、とりあえずこう呼んでおくのです。

「ジョセやん、遅かったのですね」
「うむ、リカちゃん。わしもあそこまで仕事があるとは思わなかったが、結構面白いことが解ったぞ。」

なんぞや？　なのです。

「実はだな、我、虚無だったのだ」
「ぶっ」

驚いたな驚いたな？　などとうれしそうに笑っていますが、あんたそれ、するっと言える事じゃないのですよ！？

「いやぁ、必要は発明の母というではないか？　時間がない時間が

ないと焦っておったらパニックになってな、気づいたら「加速」という魔法に出会っておったのだ。」

・・・どうパニックになったのですか？

あれ、詠唱も長いはずなのですよ？

「まぁ、そのおかげで常時加速で仕事をやっつけて、堂々トリステイン入りなのだよ」

なんという非常識。

ルイズも非常識なのですが、さすが狂王の資質をもつオヤジ。非常識さが斜め上なのです。

自ら「加速」とか名乗りそうなのが怖いのです。

・・・あ、もしかして・・・・。

「ジョセやん、もしかして、娘の部屋の「改造メイジ殺しの番号は9番」を読んだのですね？」

「な、な、なにをいってるんだね、リカちゃん。私が思春期真っ盛りの実の娘の部屋に入り浸って本棚を漁ったりしているわけがないじゃないか！　フレデリカの秘蔵本の中にあった娘の日記を見つけて驚喜なんかしていないぞ！！」

ジョセやん、それは死亡フラグなのです。

なにしろ、ほら、ジョセやんの背後には・・・・

ジャーンジャーンジャーン！

「・・・おじさま、少しお話をお聞きしていいですか？」

「げぇっ、イザベラ・・・・・！」

「ふふふ、まるで三国英雄物語にでてくる雑魚の台詞のようですわ

よ、おじさま？」
「ふ、ふふふふ、そう凄むでないぞ、「星の降る夜は涙のよう」さん。」
瞬間、真っ赤になるイザベラ様。
さすがジョセやん、王器とはここまでか、なのです！！
うちの御花畑一族に見習ってほしいのです！！
でも、ジョセやん、死亡フラグが固まったのですよ？
まるで、虚無の加速のように一気に距離を積めたイザベラ様は、ここ数日の交流で手に入れた「カリン乱舞」を放ったのです。
どうやらイザベラ様と御師匠さまって気が合うみたいで、個人的交流が進んでいるのです。
僕には異国の軍閥同士の合併に見えてならないのですが・・・。
「ふー、ふー・・・あれは友誼ある方からの借り物ですと、何度もＯＨＡＮＡＳＨＩしておりますよね？」
ＴＡ・ＫＡ・ＭＡ・ＣＨＩ式ですね？　解ってます、のです。
ボロ雑巾にようになったジョセやんを荷物のように担いだイザベラ様は、うちの別邸の中へ消えていったのでした。
「ふーちゃんふーちゃん。」
入れ違いにでてきたのは母上。
オープンキャンパスに両親を招待したのですが、さすがに父上はマティー勤務なので身動きがとれなかったのです。
そんな訳で、母上を僕がエスコートするのです。
当初は僕が知らない女性をエスコートするという事に難色を示し

たルイズだったのですが、相手が母上と知ってあきらめたわよと笑ってくれたのです。
なぜなのですか？　と聞いてみると、
「フレデリカの一番かわいい時期をラ・ヴァリエールが奪ってしまったんですもの。御義母様に少しでも返さないと。」
気になる発音が混ざっていたのですが、その心の優しさがルイズの特徴なのです。
いずれいつかは現れるであろうルイズの使い魔君も、その優しさを理解してほしいものだと思うのです。
そうすれば、ヴァリエール姉妹丼・地獄巡り風味が緩和するはずなのです！！
あと、トリステイン包囲網・銅貨一枚這い出る隙もない！　はどうにか僕のセンスを理解して貰うしかないのが厳しいのです。
みんなのセンスは中世で立ち腐っているのですよ、まったく。
ああ、母上に思考を戻さないと。
「・・・ああいう親子関係もいいわね？」
「母上、泣いては殴り笑っては殴り喜んでは殴るという完全鋼鉄の肉体関係に、どこがそんな憧れる要素があるのですか？」
「本音で話せているもの。ふーちゃんとそういう関係にあれたのって、最近でしょ？」
「イザベラ様とジョセやんがああいう関係になったのも最近らしいのですよ？」
そうなの？　とかわいく首を傾げる母上。
とても一児の母とは思えないのです。
・・・そういえば、もう一人ぐらい作って僕で楽しめなかった育

児を楽しもうと思っているらしいという噂なのですが・・・。
確かめないのが華なのです。
もしそれが本当で、男子でも生まれれば、本当に僕はヴァリエールに喰われるのですから。

「あしたからのオープンキャンパスは、僕がエスコートするのですよ。」
「お願いね、ふーちゃん。」

きゅっと僕の腕を抱きしめる母上。
・・・僕も男の子です。
マザコンなのは仕方ないのですよ?

いや、メイクに力はいるわ、うん。

目標はリステナーデ男爵婦人へのお目通り。
本当ならフレデリカとツーショットというのも狙うべきなんだろうけど、さすがにずうっと戦闘態勢は維持できない。
だったら、瞬間的に自分の良さを高めて電撃作戦でいくしかない。
その結論は私たち三人の共通事項になっただけではなく学園女子の、いや、学院女子の共通作戦目標になった。
で、加えて、来賓の子女にもルール化させたところ、逆に燃え上がってしまった。
派手さは好まれないことが知られているので、かなり穏やかで落ち着いていて派手な感じに。

・・・カオスね、結構。

とりあえず、国賓招待している連中は姫様や関係者で案内するし、フレデリカの陰謀招待は私たちが案内することになっている。

で、ロマリア関係は枢機卿が相手をする算段になっているのでフレデリカの負担は最小限になること請け合い。

一応、招待券には「数少ないリステナーデ親子のふれあう場なので、できるだけ直接接触を御避けください」と書いておいたのが利いたのだと思う。

とはいえ、物語ファンにはフレデリカに直接あえる数少ない機会なので、抑えがどこまで効くのかがわからないけど。

「その辺は任せてくれたまえ」

胸を張る「猫の騎士団」。

この紳士共（へんたい）も人気の存在なので、そうそう安請け合いもできないはずなのに。

「わかってないね、ルイズ。僕らが注目を浴び、そして人員を分散すれば、それだけで団長の負担がれるって寸法さ！」

バカはバカのまま、いまいちね、ギーシュ。

「い、いま、何か非道こと考えなかったかい！？」

「いいえ、私はいつも通りよ。」

「ふぅ、それならいいのだけれど」

いつもどおりに評価してるわ、ギーシュ。

第三十四話「ジョセやん」が生まれて（後書き）

・・・ルイズがフレデリカ化してる・・・
うちのルイズは脳筋だったのに・・・・・ｗ

※今回の元ネタ
「トリステインよ、私はやってきた！！」　・・・　「ソロモンよ、私は帰ってきた！」　・・・　アナベル＝ガトー
改造メイジ殺しの番号は９番　・・・　サイボーグ００９　＋　定吉７番「定吉七は丁稚の番号」
カリン乱舞　・・・　龍虎乱舞　・・・　龍虎の拳
ＯＨＡＮＡＳＨＩ　・・・　高町式　・・・　リリカルなのは
泣いては殴り笑っては殴り喜んでは殴るという完全鋼鉄の肉体関係
・・・　ＰＳゲーム「騒（奏）楽都市　ＯＳＡＫＡ」内の台詞から、ちょっとアレンジ。

５／３　「ジョセやん」の名称統一

第三十五話　「再会の種」が生まれて（前書き）

・・・とうとう出ます、一部の人たち。

期待していた人たちではないでしょうけど、それでも出ます。

キセキの欠片が、こうやって少しずつ集まる、そんな展開で行きます。

第三十五話　「再会の種」が生まれて

それを知ったのが偶然だった。
家の書庫なんか興味なかったし、礼儀だの何だのと詰め込み教育も泣けた。
妹は要領よく立ってたけど、私だって負けてない。
評判は別にして成績は悪くないんだ。
ま、貴族社会なんてところは評判が一番なんだけどね。
んで、そんな中で妹が妙なものを見つけてきた。

「おねぇ！　これこれ！！」

差し出されたのは「ツエルプストーとヴァリエール物語」。
そぞろ恋愛もんかよ、と鼻で笑う私に読み聞かせた。

「おお、ロミオ、ロミオ、あなたはなぜヴァリエールなの・・・・」

「にゃ、にゃにぃーーー！？」

家名は違えどもそれは子供向けっぽいハムレット。
原作を読んでるからわかる。
で、さらに調べれみると、でるわでるわ、その物語とやら。
あの、向こうの物語が、結構アレンジされて面白くかかれているのだ。
これは二次創作とか同人ってレベルでもハイレベルといわれるところだろう。

「おねぇ、作者をみて驚いてください。」

作者、フレデリカ＝ベルンカステル＝リステナーデ・・・。
リステナーデといえば、水のトリステインの陰王家、（ト）　リステ　（イン）のナーデという真実の名前を隠されつつも、王家に連なる貴族ならば知っている隠れた有名どころだ。
公爵家のような表だった権力は持っていないが血統保持のために厚遇されている家でもある。
いわゆる「ブラッドホルダー」というやつだね。

「って、おねぇ！　そこじゃないそこじゃない！！」

指さされて目をむく。

「ふれでりか、フレデリカ？」
「フレデ＝リカ！」
「・・・フルデ＝リカ！？」

瞬間私たちは動き始めた。
その容姿、言動、評判、様々なものを集めてその結果に驚いた。
それは間違いなく「古手梨花」その人と瓜二つだった。

「こりゃ、私らみたいに、ひょっとするかね？」
「ひょっとするに決まってるでしょ、おねぇ。」

スジャーラ＝アリステレス＝ド＝オニキスは私に向かってほほえむ。
私、ミディリアム＝オーファニア＝ド＝オニキスもほほえむ。
この世界にきて唯一の繋がりだと思っていた妹と私。
次も双子がいいね、と誓いあった私たち姉妹は、前世の繋がりを見つけた瞬間だった。

さすがにゲルマニアから何の理由もなく国境越えはできなかった。
少し前なら、ヴァリエールの家に修行できてたそうで、その際に会うこともできたかもしれないけど、さすがにそのころは知らなかったので無理だ。
では、どうしよう、というところで、調べると、今、リカちゃんはトリステインの魔法学校に行っているそうだ。
留学、とも考えたけど、さすがに貧乏貴族にゃ荷が重い。
国境越えで魔法学校は難しいのさ。
貴族といっても娘しかいないこの家に、嫁に出す以外の政策はない。
ともなれば、国外に留学など出さず、閣下と呼ばれる方々に妾に出した方が有意義だともいえる。
が、希望がないわけではない。

あのトリステイン魔法学校でオープンキャンパスをするというのだ。
抽選率はバカみたいだけど、一般読者にもそのチャンスがあるという。
貧乏貴族もその枠にかけるしかない。
というか、もう一人のフレデリカ様こと、キュルケ様の口利きを期待したところ、わりと快く引き受けてくれた。

「おねぇ、これで・・・。」
「うん、あのときの話を聞けるかも、ね。」

あのとき、まるで時が止まったかの様な瞬間、ケイちゃんの目の前で破裂した弾丸。
あの弾丸の白さに目を奪われた次の瞬間、私と妹はこの世界にいた。

この、魔法と暴力が政治を行う世界に。

妹と私は、双子だけど従姉妹として育てられた。
双子は不幸の元ということらしい。
とはいえ、前の人生も含めれば随分と長いこと双子をしているので、すぐにわかった。
母親も「引かれあうものなのね」とか陰でささやいていたりする。

妹は風のライン、私は火のライン。
わりと優秀だと思っていたつもりだけど、リカちゃんは全要素スクエアだっていう。

なにそのチート。

ありえないんだけど。
そう思っていた私たちだけど、その訓練を聞いて真っ青になった。

あの、山向こうの局地型魔法兵器実験って、リカちゃんの訓練だったの!?
あんなの食らってれば、そりゃ強くもなるわ。

そんなわけで、前の知識もあわせて、いろいろと強くなろうとしているんだけど、まぁ、そう簡単にはいかないのでした。

時は流れて、どうにかチケットを入手。

そのチケットには猫を図案化した紋章があった。
それはトリステイン魔法学院内に存在するケットシー学生騎士団の紋章だった。
どうやらリカちゃんが主催している学生騎士団で、国内でも有数の実力を持っているという。
両親から「コネ」を作って来いと正面から言われていたりする。
私もお姉(おねぇ)も、その気は十分だし、もしリカちゃまならば、色々と優遇してもらえること請け合いなんだけど、それ目当てというのが気に入らない。

「なにいってるの。りかちゃん一人で大変だろうから、おじさんたちが協力しようっていうだけだよ。」

おこぼれに預かるけどね、とニヤニヤ笑いのお姉(おねぇ)。
ああ、まったく、幸せな人だなぁ。
ま、そんな人だから、こっちでも一緒にやっていけるんだけど。

「ほんじゃ、まぁ、いっちょいきますか?」
「そうですね、お姉(おねぇ)」

幸せになるとか、そんなんじゃない。
あの時果たせなかった約束のために私たちはトリステインに向かう。

「りかちゃん、あんたを信じるよ」
「りかちゃま、あなたを護りますよ」

第三十五話　「再会の種」が生まれて（後書き）

きました、来たのです、双子なのです！！

某青毛の双子は残念な結果（笑）になることが決定しているので、別の双子を召喚しました！！　といっても、こちらも実に残念！！ｗ

ちょっと無茶でしかたかね？

しかし、その斜め上を行く無茶が次に登場なのですよ！！

第三十六話「はうー」が生まれて（前書き）

超絶かき混ぜキャラの参入予告！！

はーうーーー！！

※お詫び：前回クロスは「ひぐらし」だけと書いていましたが、一部違うことに気付きました。えー、訂正します。うみねこ出ません（＾＾；

第三十六話「はうー」が生まれて

「リィナァー」

「・・・・」

「リィナァー」

「・・・・」

「リィナァ。なんで無視をする？」
「わたしは、レナ。そういったよね？」
「それは君が自分で決めた勝手な名前だ」
「私はそう呼ばれたいんだよ！！」

少女、リィナァは、いわゆる夢見がちな存在だった。
学力も知識も全く問題ないが、発言や求める行動がバラバラだった。
その上、知識や学力を蛮族の研究に費やしている。
何とも嘆かわしい。
しかし、彼女の愛らしさのせいで、老評議会も彼女の問題行動を押さえられていなかった。
私も、婚約者がいるのだが、それとは別にリィナァを甘やかしている。
これは私ばかりではない。
みな、彼女には甘くなってしまっている。

「そんなに怒ると、この土産はなしだぞ？」

そう、これが、リィナァ最大の弱点にして我々がもっとも理解できない点だ。

「うわぁ！！　新作、新作だね！！」

そう、リィナァは蛮族の書物、それも「物語」と言われる「嘘」の話を好む。

私が以前「嘘」の物語に対する批判をしたところ、物理的に反撃されひどい目にあったものだった。

それも泣きながらだったもので、治療の魔法すら必要だったのに私の方が責められた。

実に不可解だったが、リィナァの周辺ではよく起こることなので、あきらめている。

「かわいいよ～、かわいいよ～」

ん～、とうれしそうに「物語」を抱きしめてくるくる回る姿は、幼子のような愛らしさがあり、周囲の目も柔らかだった。

「ありがとね、ビダーシャル♪」

うん、この笑顔のために蛮族の世界を巡るのも悪くはない。

「ああ！　レナ、また一人だけお土産もらってるぅ！！」

ルクシャナか、やっかいなのに見つかったな。

あの蛮族研究家を気取る姪っ子にも困ったものだ。

「私にもなにかないのぉ！？」

「ないない」

「くぅ、やっぱり泣きながらボコらないと駄目なのぉ！？」

まったく、リィナァのせいでイヤな風習が生まれたものだ。

こら、その、痛そうな武器をおろしなさい。

はうぅー。

やっぱり村では手に入らない書物はおいしいよぉ。

この世界にきて思うんだけど、私たちって娯楽が少ないんだよねぇ。

なんというか、禁欲的っていうのかな？

すごく不自然。

だから色々とみんなと話すんだけど、いまいち通じない。

というか、可哀想な子呼ばわりはどうかと思うんだけどなぁ！

まぁ、それはおいておいて。

ビダーシャルが持ってきてくれる本の中身が結構変わってきているのがうれしい。

この、ベルンちゃんって人が作家でよく見るようになってから、話の中身が私好みになってきていると思う。

というか「向こう」っぽいのだ。

すでに老評議会には報告しているんだけど、私はこの体になる前の記憶がある。

それも「シャイターンの門」の向こうの知識だと思われるということで、結構問題になった。

なったんだけど、それほど危険な知識がなかったことから、わりとスルーされてしまっている。

いいのかな、とは思ったけど、両親曰く結構危ない薬で深層心理まで探られていたらしい。
その上で問題なしということになったらしいので気にしないことにしたけど。

さてさて今回の「物語」は～・・・・

あれ、なんだろう、この「物語」。
なんで、「あのこと」が書いてあるんだろう？
なんで、「あそこのこと」が書いてあるんだろう？
なんで、「彼のこと」が書いてあるんだろう？

なんで、なんで、なんでなんで？

また、リィナァが暴れた。
今度はさすがに収監されたが、その中身がまずかった。
彼女は「蛮族」の世界にいかなければならない、と思いこんでいたから。

さすがに問題だ。

本人の錯乱した発言では伺いしれなかったので「薬」を使ったところ、真実がしれた。
彼女が持っている「向こう」の記憶そのままの内容が書かれている、というのだ。

「物語」に。

老評議会は基本的にそのような些事には関わらない。
しかし、門の向こうの記憶の話となると、そうは言っていられない。
リィナァの記憶は、それほどまでに恐れられているのだから。

「では、リィナァ・・「レナ」・・・レナ。君は蛮族の元にその記憶の正確さを確かめにいくんだね？」
「・・・はい。その必要があるものと判断します」
「それは何故だね？」
「我ら一族が恐れしシャイターンが必ずしも門を目指すわけではないと考えるからです」
「しかし、何度も我々は脅かされているぞ？」
「この６０００年の間で、「何度か」しか脅かされていません。つまり、交渉の余地があるものと判断します」

その言葉に、議員はうなり、反論をしようとして押し黙った。

「彼らの「魔法」は精霊を使役する、乱暴なものだ。我らとは合わぬのではないかな？」

その言葉にレナは静かに笑った。

「男と女は違います。価値観も、考え方も。しかし共に歩くことができます」

レナの言葉は極論だが、それでも真理の一端だった。

「私は確かめねばなりません。あの知識の先になにがあったのか、この知識を持つものがなにを考えているのか。」

「・・・・で、本音は？」
「・・・フレデリカちゃん、おーもーちーかーえーりーーーーーー！！」

尋問室が瓦解した。

とまれ、リィナァは蛮賊たちの調査にでることとなった。
お目付け役は私、ビダーシャルとなった。

「わたしもいきたいーーーーー！！」

黙れ姪っ子。

第三十六話「はうー」が生まれて（後書き）

えー、これ出しちゃまずいかナーとは思ったんですが、前ふりもしてますんでｗ

この勢いでオープンキャンパスに突入します！！

※今回の元ネタ
更新なし

５／７　少しだけ修正しましたのですわ

第三十七話「学園祭開催」が生まれて（前書き）

やっとこさ、開催ですよ。
とはいえ全部回れるわけではありませんので、ダイジェストになりますがｗ

第三十七話「学園祭開催」が生まれて

「トリステイン魔法学院オープンキャンパス「学園祭」を開催する！！」

学院長の宣言で始まった「学園祭」。
光系の魔法が入り乱れ、歓声が溢れた。
生徒達は模擬店や出展の準備で昨夜から徹夜で、結構既に疲れているのですが、徹夜ハイでイイカンジなのです。
というわけで、猫の騎士団と魅惑の妖精亭合同の企画「猫と妖精喫茶」の開店なのです！

「ケットシーなお姉さんと騎士のダブル攻撃で、老若男女狙い撃ちなのですよ！」
「「「「「りょうかい！！」」」」」
給仕（ようせい）のお姉さん達にも猫尻尾と猫耳を装備させた途端、うちのデブ猫が鼻血耳血などを流して倒れたのです。
このまま埋葬、と埋めたら即効で出てきて、泣きならがボクに縋ったのです。

「団長、団長！　後でこの衣装を僕にも譲ってください！」
「彼女ができたら譲ってあげましょう」
「絶対彼女を作るぞ！！」

「「「「「おおおおお！！」」」」」

流石猫の騎士団、賛同者（へんたい）には事欠きません。

「では、ボクは女子部のほうにも顔を出してくるのです、後を頼みましたよ？」

「まかせてちょうだい、フレデリカ様」

今日は昼間の営業ということで、男装っぽい格好をしてくれたフレディーなミレディー。

たのむのです。

ちょっと離れた所にある女子部の有志出展「F様がみてる」。

これは学内でしか閲覧されていない出版物で、イザベラ検閲を通った作品を自由に閲覧できるコーナーだそうなのです。

わりとギリギリだったのですが、先日先行閲覧した某教皇がリストに丸を付け始めたのです。

何事かと思いきや、チェックの入った作品を複製させて欲しいという要望リストだったのです。

じゃぁまぁ、「教皇お勧め」ってリストと似顔絵を付けた所、我こそは「貴人（奇人）」という方々が集まってリストを作り始めたりなんかしたのです。

だから閲覧スペースよりも「お勧めリスト」のほうが展示面積が大きいなんていう本末転倒振りになっているのです。

ちなみに、教皇はＢＬっポイ友情モノがお勧め。

某教区の異端審問管は、純愛「はーれむ」モノ。

某狂王予備は、政経がらみの恋愛モノ。

で、某国の従姉妹姫は、戦場の愛情と友情系＋始祖みて。
ボーイズエディションは必須と訴える文章の長いこと長いこと。
この辺は教皇と被ってるのです。

「フレデリカ様、いかがですか？　優雅にまとまってますかしら？」
「はい、かなりの優雅さに驚いているのです。」

なにせ書かれているのは欲望、読んでいるほうも欲望、で、展示は優雅。
ありえない組み合わせなのです。

当然といいますか、当たり前といいますか、始祖みて展示系は少なくありませんが、やはり男女合同の「始祖みて喫茶」は好評なのです。
作品内の制服を着た男女が給仕してくれたり、ユミーナやユウーキの扮装をしさせてくれる姿などを見せ合ったりするコーナーがあり整理券乱舞の状態なのです。
すでに本日中の入場も難しい状態になっているというのだから困ったものです。

「ま、人気は仕方ないだろ？　あたしだって、侍女連中を抑え切れなかったし」

イザベラ様も「始祖みて」扮装中なのです。
お下げを前にたらして「ヨシーノ」の格好なのです。
彼女のキャラは女子に大人気なのです。
中の人の地位を知らずに、嬉しそうにみんなが手を振っているのです。

「侍女の方々は？」
「各所に散ったけど、そこの喫茶で嬉しそうに給仕してるのが大半だね」
まったく、遊びに来てるのに侍女仕事とは、何を考えてるんだろうねぇ、とか嬉しそうに語っているのです。
イザベラ様はかわいいですねぇ。
「で、イザベラ様は、みんなのタメにここを動かずなのですか？」
「ち、ちがうよ。私がヨシーノのはまり役だって言ってくれるから、ちょっと手伝ってるだけだよ」
ツンデレなのです、ご馳走様なのです。
別宅に母上を迎えにいったところ、お客さんが来ているというのです。
キュルケの伝で会いに来たという貴族さんで、ボクにとても縁深いそうなのです。
だれなのでしょう？
客まで初めに目に付いたのはキュルケ。
小さく手を振っているのですが、その隣にいる貴族の娘さんには見覚えはありませんでした。

が、どこかで会った気がするのです。

どこでしょう？

思わず小首を傾げると、その姿を見て、二人は驚きで顔を歪ませ、そして泣き始めたのです。

「だ、だ、じょうぶなのですか？」

「・・・梨花ちゃんだ・・・」

「梨花ちゃまなんですね・・・・・」

「・・・・え？」

すっとボクを抱きしめた二人は、ボロボロ涙を流しています。

「梨花ちゃん、梨花ちゃん、梨花ちゃん・・・。」

「梨花ちゃま、梨花ちゃま、梨花ちゃま・・・・。」

「も、もしかして、ミーとシーなのですか？」

「「うん！」」

園崎魅音、園崎詩音、彼女たちも転生していたのです！！

込み入った話と言うことでキュルケは席を外してくれて、今は三人だけになりました。

二人の記憶は、あの皆殺しの後以降らしく、その後は記憶にないようでした。

一応、その後に移った世界でみんなの協力もあり運命を打ち破れ

たことを報告すると、本当にうれしそうに喜んでくれたのです。
こんな二人だから僕は協力を惜しまないのです。

聞けばゲルマニア貴族に転生していた二人は、こちらでも双子だとか。
で、いろいろあって、僕の本を見る機会があって、間違いなくボクであることに気付いた二人は、結構苦労して会いに来たそうなのです。

「いやー、まいったまいった。これで別人だったら、ハラボテジジイの妾に行かされるところだったよ～」
「おねえはまだ良いじゃないですか。私なんか、端女に売り飛ばされる所ですよ」
「「あはははは」」

って、結構面倒な事になってるのですね。

「「で、なんかやらせてくれない？」」

儲ける方向で、というのが涙を誘うのです。
で、基本的に何でもいいけどお金は恵むのなし、ということなのでひとつの仕事をお願いすることにしたのです。
それが・・・・

「「製紙革命？」」
「そうなのです。ハルケギニア中で紙の需要が高い癖に生産量が低いのですよ。だから向こうの知識が深い二人に、製紙革命をお願いしたいのです。買取なら任せて欲しいのです。研究開発費も私費で出すのですよ？」
「「うっわ・・・・・・」」

本気で仕事を振ってきて驚いてる二人なのです。
とはいえ急務なのですよ。

「いやぁ・・・こっちの梨花ちゃん、頼れるなぁ・・・。」
「いっそ、嫁にもらってもらえません？」

こっちでは男だと解った途端その態度はどうかと思うのですよ？

「いやいや、ほら、こっちの世界では、金と政治力が全てじゃない？　両方持ってるって価値高いし、あたしらの事わかっててくれるしねぇ。」「そうそう、結構ねらい目かなーとか」

やめとくのです。
そういう話題になると・・・・・

「おまちなさい！！　フレデリカは私の嫁よ！！」

出ましたね、ルイズ。鉄板反応ありがとうなのです。
突然表れたルイズに驚いた二人だったけど、静々貴族の礼をとったのです。
「はじめまして、ミディリアム＝オーファニア＝ド＝オニキス。ゲルマニア貴族でございます」
「スジャーラ＝アリステレス＝ド＝オニキス。ゲルマニア貴族でございます。」

見事な貴族の礼に、反射行動で礼を返すルイズ。

「ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。トリステイン貴族よ」

「まぁ、初めての物語の人！」「素敵ですわぁ。」
「あ、あの、その呼ばれ方は好きじゃないのよ」
「では、「狙撃」」「「狙撃」、すてきですわよね～」
「どこがよーーーーー！！」

シーもミーも弄りどころを心得ているのです。
でも、これはボクの玩具なのですよ？

「・・・はぁはぁはぁ、つまり、フレデリカの仲間、そうなのね？」
「「ご名答～」」
「なんなのかしら、このフレデリカを複数人相手にしているみたいな疲労感は？」
「「「ボクなら常に複数人いますよ？」」」
「意味なく偏在つかうなーーー！！」
「「「ルイズの美味しいツッコミがあるなら、結構ありなのですよ？」」」

あれ、ミーもシーも呆れてるのです。
この程度は日常なのですよ？
だって、この瞬間にも周囲警戒で偏在を周辺に潜ませているのですから。

「梨花ちゃま、普段どういう生活してるんですか・・・？」
「トイレに入っているとき以外、いつ訓練開始されても偏在を身代わりに逃亡して罠を仕掛けられるようにする、これがヴァリエールでの私生活でしたよ？」
「そうね、そんな感じだったかしら」

なぜかキュルケやタバサも絶句してるのです。
おかしいですね？

これはマティーの伝統的な特訓だと聞いたのですが？

母上にミーとシーを紹介すると、実に嬉しそうに対応してくれた上に、一緒にみて回りましょう、といってくれたのです。
母の愛の上限なしさは感動なのです。
でも、母上中心で回るのですよ？

「ふーちゃんは私ばかり構わなくてもいいのよ？」
「息子が母上に甘えちゃいけませんか？」

ということで、学院内を案内することになったのです

もちろん、いつの間にかこの場にいた学院三人組と名高いキュルケ・タバサ・ルイズは、例の娘「たち」を案内のために再び学園内に消えましたが、すぐにでも合流できるでしょう。

第三十七話「学園祭開催」が生まれて（後書き）

魅音・詩音共にハルケギニアっポイ顔なので見た目が雛身沢とはかなり違います。
それでもフレデリカが気付けたのは、可能性の世界を超えてきた経験によるものです。

て、単純に「勘」なんですがｗ

※今回の元ネタ
更新なし

第三十八話「感動空間」が生まれて（前書き）

えー、基本学園祭はまだ続いていますｗ

第三十八話「感動空間」が生まれて

食事をしながら軽く「製紙」に関しての知識をすりあわせて、どうにか実用段階になるのは冬頃だと言うところまで話を煮詰めたところで、一区切り。

お仕事だと言うことでじっと待っていてくれた母上が、にっこり微笑んで指を指す。

「ねーねーふーちゃん、あの娘さんすごいわね」

指さした先では、あれな紳士（へんたい）が、女性に乱打されていた。

「へー、すごいじゃないか。まるでレナだね」

「そうですねぇ、レナさんの「レナパン」みたいな連打ですねぇ」

いやー、結構にてるのですよ。

「はう、はう、はうっ！」とか言いながら連打してるのです。

・・・・

「実験をしてみるのです」

そういった僕は、カーボンロッドと釣り糸、そして「えさ」を錬金で準備。

「ふーちゃん、このダンディーなおじさまの人形は何？」

「餌なのです」

ぶうぅぅぅんとロッドで振り投げられた「人形」がアレな紳士（へんたい）

に直撃。
みればその少女、人形に抱きついたのです。
「フィッシュ！」
練金の応用で人形を使って抱きしめさせた僕は、一気に引き戻したところ、人形ごと少女が釣れたのです。
「・・・かーいーよー、おーもちかえりーーー！」
ダッシュで走ろうとしていますが、人形に抱きつかれて身動きできなくなっている少女を僕たちはのぞき込みました。
「・・・もしかして、レナ、なのですか？」
「ふぇ？　もしかして、梨花ちゃん！？」
「「レナ！？」」
ここ、この場において、すでに言い訳はできない。
だから、僕やシー、ミーが、生まれる前の記憶があって、その記憶で友達だったことを母上に話したのです。
そうしたら、ころころほほえんで、受け入れてくれたのです。
「子供の頃はそういう遊びが好きよね～」
・・・やばい、妄想戦士扱いなのです。
とはいえ好都合かもしれないのです。
その路線で行くのですよ、と視線を双子に向けると、二人とも親指を立てて了解。
うんうん、こう言うときだけ空気が読めるのは良いことなのです。

えー、衝撃的事実なのですが、レナ、エルフなのです。
練金で「実物大着色ケンタ君」をあげたところ、大喜びのレナがフェイスチェンジを解いてしまい、正体が露見。
大騒ぎになるかと思いきや、大拍手にあったのです。
わざわざエルフの仮装、その勇気がすごい、と。
なんだか解らず照れてるレナはおいておいて、その場のノリのまま構内を案内、結構大騒ぎになりましたが、同じく巡回中のティファニアに遭遇したときにこの台詞がでたのです。

「はう？　このこ、おばさまの若い頃にそっくり」

聞けば、レナの叔母の若い頃の肖像画があり、その絵にそっくりなのだという。
これを聞いたティファニアは大いに盛り上がり、詳しい話を聞きたがった。
だったら、ということで、寮の僕の部屋にみんなを招待したのでした。

「・・・これが「物語」の部屋」
「ここで、リカちゃんが物語を書いてるんだねぇ・・・。」

二人とも僕の物語を好んでいてくれるみたいで、二人で交わしながら、物語を読んでいるのです。

「ふーちゃん、姉妹って良いわね」
「母上、妹二人は長期計画すぎるのですよ」

「あら、ふーちゃんがいるんだから、妹一人で良いでしょ？」
「母上、僕は男なのですよ？」
「うんうん、わかってるわ。ふーちゃんは男の娘、そうよね？」
「「「「そーでーす♪」」」」

なぜか部屋にきたみんなが答えているのです。
ぐす、泣くもんか、なのです。

「はあああああ、リカちゃんかわいいよぉ～、おーーーーもちかえりーーーーー！！」
「ぐぎゃーーーーー、レナ、力が強い、ティファも掴まないのでほしいのですぅ！！」
「フレデリカは私の嫁ぇぇぇ！！」
「ルイズ、掴まるなのっかるな引っ張るななのです！！」
「・・・私は二番目で良い」
「そういいながら足に掴まらないのです、タバサ！！」
「美味しい匂いに誘われてやってきました、ジョゼット三等兵、いきまーす！！」
「ぎゃーーーー！　混沌の使者きたのですーーー！」
「宮廷工作に明け暮れて、ささくれた心を癒しに来たカトレア推参！」
「カトレア姉様、キャラ、違う違う！」
「きぃー、出遅れたわ！！　こうなったら・・・ヴァリエールジェットストリームアタックよ！！」
「「はい！！」」
「どんな攻撃ですかぁ！！」

もう、本当にパニックなのです。

梨花ちゃん、もてるわぁ。
あのヴァリエール三姉妹を誑し込んでいるだけじゃなくて、ガリア王家も誑し込んでるっていうのがすごい。
加えて、モード家の系譜と、それの復権を約束させているというのだからどんな政治力よ？
思わず、妾でも良いからもらってもらえないもんかと聞きたくなったよ。
まぁ、時間もあるし、学校の間は無茶はないってことで製紙革命の方が本命かな？

リカちゃんのお母さんに妄想戦士扱いされたのは痛いけど、それでも仲良くなれたのはうれしく感じる。
こんな母親ならよかったのになぁ、と思わなくもないけど平民に生まれるよりましだという感じもある。
相応の地位がなければリカちゃんに出会うことすらできなかったわけだしね。
で、色々と騒動の途中で、リカちゃんを呼びに来た男が現れる。

「団長！　歌唱のじかんっす！」

何でも、ロマリアの教皇が来ているらしく、宗教的な圧力軽減のために美少年による合唱を披露して機嫌をとろうということになったのだけれども、独唱をリカちゃんにさせることになったらしい。
で、聞けばリカちゃん「ロマリア」が大嫌いだそうで、拒みまくったけれど仕方なしに独唱だけは引き受けたそうだ。

「なに歌うの、リカちゃん」

「秘密なのですよ、ミー」

合唱の方は、確かにすごかった。
本職の合唱隊のような練度には驚いた。
でも、それ以上に驚いたのが「独唱」。
リカちゃんといえば、「雛身沢」でも有名な歌い手で、老人連中を虜にしてきたけど、このハルケギニア通用するのだろうかと思っていた。
思っていたのだけれども、それは、杞憂だった。
どこからか取り出したマイク型の杖。
ぐっと握って見せると、伴奏が始まる。

「こ、これは・・・・」「天城越〇!?」

そう、不朽の名曲天城越〇!!
それがリカちゃんの声で歌われるのだ!!
やばい、ということでハンカチ装備。
あ、レナも装備してる。
リカママも装備ってことは知ってるんだ。
で、逆に三姉妹や学院の生徒たちはキョトンとしてる。
ああ、知らないんだね、知らないんだ。
それは幸せだ。
ならばその幸せをかみしめて、その裾を涙でぬらすのだ!!

伴奏も終わり、オリジナル魔法「カラオケ」も終了。
万雷の拍手に礼をして演台を降りたところで、みんなが集まっていたのです。

「リカちゃん、あの天城越〇から津〇海峡冬景色までのエンドレス大泣きコース、最強すぎだよ！」
「梨花ちゃま、教皇様も衣服がたるむほど涙を吸い込ませていましたわ」

ぱーんとハイタッチの僕たちだったけど、他は大泣きのまま。
母上は久しぶりに聞けてうれしかったわ、と言っていたけど、ルイズたちは涙で目を真っ赤にしてる。

「ふ、ふ、ふれでりか・・・すごく良い歌詞だったよぉ・・・」

と、学園三人組は口々にほめてくれ、ティファニアも涙ながらに笑顔を向けてくれた。

「・・・やっとわかりました。想いが連なって闇に転じることもある。想いが明るいものばかりではない、やっとわかりました」

うんうん、と頷くレナがティファニアを抱きしめているのです。

「ふ、ふ、フレデリカ。ガリアでも公演しないかい？」
「イザベラ様、僕は歌手ではないのです」
「で、で、でも、アレをみんなに聞かせたい、そう思ったんだよ」
「そこまで評価していただき有り難うなのです」
「フレデリカ！　歌って、式で歌って！」

「フレデリカ殿、私からも是非！！」

御花畑カップル、ここでそういうことを言えば、どうなるかわかってるんでしょうねぇ？

「だったら、ガリアの式典でも・・・」

「・・・ろ、ろ、ろまにあでも、おねがいしたいですねぇ・・・。」

現れたのですね、涙ぼろぼろの変態の親玉。

・・・ちぃ。

「祖国のためには歌いますので、その際にお聞きに来てはいかがですか？　教皇様」

「・・・前向きに検討しよう」

それを聞いた御花畑，Ｓは、ひどく感動したかのような視線でこっちをみてますよ、まったく。

本当だった、本当だった。

以前、フレデリカが「教皇なんで向こうから参加させてほしいといってくるのです」なんて言ってた。

どんな策謀や陰謀が渦巻いているかと思いきや、「歌」を聞きたくてやってくるというのだ。

はじめは疑った、そして最近まであきらめていた。
それなのに、それなのに、フレデリカは「やってくれた」。
本当に私のフレデリカに対する借財は嵩む一方だ。
これで体を求められたら逃げられないかもしれないと思えるほどだった。

・・・

というか、それでチャラにしてくれるなら、私もうれしいのでそっちの方がいいのだけれど。

・・・

なぜかフレデリカが背筋をふるわせている。
何でかしら？

第三十八話「感動空間」が生まれて（後書き）

振り向くな、振り向くな、フレデリカ、振り向くな！

やばいやつからレーザー出てます！！

気をつけろ！！w

※今回の元ネタ

実物大着色ケンタ君　・・・　カーネ〇・サンダ〇ス

第三十九話「驚愕」が生まれて（前書き）

今回はフレデリカの出番がちょっと少なめw

第三十九話「驚愕」が生まれて

我が息子、フレデリカによる脚本劇があるということで、護衛に来ているマンティコア隊員が交代勤務の時間の争奪を行っていた。
まぁ、私は息子がでるわけではないのでいいのだが、隊員たちは妙にこだわっている。
なにが良いやら悪いやら。
とりあえず、競り勝った者たちへ優先入場整理券を渡したところ、地に両膝をつけて忠誠を誓われてしまった。

おまえ等の忠誠は王国にあるだろうが。
・・・全く。

こんな姿を隊長には見せられんな。
いやいや、あのカリーヌ隊長には見せられない。

「そうですね、さすがに無様すぎます。」
「・・・カリーヌ隊長、いかがしましたか？」
「いえ、古巣が見えたので見に来たのですが、規律がゆるんでいるのではないですか？」
「いいえ、これはいわば楽園警護任務。規律が際立てば逆に威嚇になりますよ」
「ふん、あなたは昔からそういう言い逃れが上手でしたね」

不機嫌そうに鼻を鳴らすのはいつもの癖。
こんな魔神と暮らしていたというのだから、我が息子もたいしたものだと思う。

「で、どうなのですか？」

「どう、とは？」
「フレデリカです。あの子の行いは大きすぎて読みきれません。」
「全てを読む必要は無いかと思いますが？」
「・・・ある程度読めていないと、被害が大きすぎます。・・・主に精神の。」
「ああ、あの頃の話ですね？」
「・・・話したのはあなたですか？」

うんと言えば殺される、そう判断できる気配があった。

「いいえ、あやつ独自の情報網、らしいですが？」
「偽りは寿命を縮めますよ？」

偽りなどというはずが無い。私とて命が惜しい。

「まぁ、いいでしょう」

深いため息と共に視線を泳がすカリーヌ隊長は、一点に視線を止めた。

「見なさい、貴方の息子を。」
「・・・うっわぁ・・・。」

なんと、我が息子、エルフを二人も連れてる。

「最近、一般に出版されていないフレデリカの書物の中に、エルフを良き者として捉えるものが多いのは、この布石でしたね」
「流石に私も知りませんでしたぞ？」
「解っています。あれはフレデリカの暴走です。」

しかし、と言葉を止めるカリーヌ隊長。

「あの暴走は力になるでしょう」

「国も孵す勢いですがね」

はっきりいおう、いま、視界の中で、異端審問官とエルフがであった。

そして、何か体を震わせた後、大いに興奮して異端審問官はエルフに手を差出し・・・・

「あ、あ、あ、あきゅしゅしてください！！！」

カミカミで握手を求め、そして満足げに離れていった。

・・・おいおい、エルフだぞエルフゥ！！

あ、今度は某王族母子。

・・・娘は目を輝かせてエルフに抱きついて、母親はそれを嬉しそうに見ていた。

うむ、おかしいな、私の常識がおかしいのか？

「これがフレデリカの「物語空間」の力です」

こえー、我が息子、こえー。

隣国王族親娘だのまで大喜びで抱きしめてゆくのは、本当に信じられなかった。

更に信じられなかったのは、そのエルフが我が別邸に宿泊する事になったことだ。

息子よ、少しは父に説明してくれ。

お帰りになった父上に、ミーとシーを紹介したら喜ばれたので、レナとテファを紹介したら更に喜ばれたのです。
調子に乗って二人のフェイスチェンジを解除したら、喜びのまま気絶したのです。

・・・流石に不味かったですか？

気絶から復帰した父上に詳しく説明したところ、何とか理解してもらったのですが、説明中に戻ってきたジョセやんとイザベラ様は、エルフの二人を見ることができてご満悦なのです。
作品で言うなら「レジェンドオブロードス」が大好きのイザベラ姫は生エルフに感動してるし、エロいオッサンであるジョセやんはバスト革命（レボリューション）に感動しているのです。
親子揃って、実に欲望が先立つ存在なのです。
イザベラ様の侍女たちも物語り好きの影響かエルフに忌避感が無く、わりと普通に会話しているのが凄いのです。

「始めまして、リカちゃんの友達の、レナです。エルフしてます」
「あ、あ、ああ、あの、わたしは、その、ハーフエルフのティファニアです。」

かわいいいーーーー、と接客間が大騒ぎなのです。

とりあえず、雛見沢組で頭をつき合わせる事が先決なのですが、

ティファニアの血統も明らかにしないといけないのです。

「ジョセやん、父上、先日ボクがアルビオン王家から受けた報酬を知ってるですか？」

ゆっくりと首を横に振る二人に、ボクはささやく。

モード家とサウスゴータ家の復興、と。

目を見張るジョセやんと父上。

ティファニアがそのモード家の御落胤であり、サウスゴータの姫も存命である事が僕から伝わると、今までとは違う視線で射抜かれます。

「フレデリカ＝ベルンカステル＝ド＝リステナーデ。ソナタは、何を求めておる」

「楽しい世界ですよ」

「我が息子、お前は何をしたい」

「この「世界」全員で手に手を取った生活がしたいのです」

それは夢想だ、それは妄想だ、それは無駄だ、それは無茶だ。

それは・・・・

「「無謀だ」」

二人の大人に胸を張るボクなのです。

「千里の道も一歩から。歩み続ければ、いつかデブ猫でもモテモテなのです」

ジョセやんは、まだデブ猫がイザベラ様を落とす確率のほうが高いというし、父上は、まだエレ姉さまがボク以外と成婚するほうが高確率とかいうのです。

ふっふっふ、デブ猫はまぁいいですが、エレ姉さまは結構確率高いのですよ?

まぁ、リカちゃまの目的といっても、それは長期未来的な目的であって、短期未来のものではありません。

現状では製紙革命が第一目標であり、活版印刷による印刷出版革命が第二目標だといっていました。

とはいえハルケギニアの中だけで革命を充満させても、それは狭い範囲の経済循環にすぎませんから、やはりエルフも交易の中に入れるべきでしょう。

くわえて、経済活性化に伴うように、消費の欲求も満たさざる得なくなります。

そうなれば何時までも物語産業では済まないでしょう。

「そうなのです、娯楽産業の次こそは、「旅」なのですよ」

そう、人の移動と来訪を、平民レベルまで可能なものにする。

これが娯楽産業で求める、この世代の最大目標でしょう。

収入面はさておいて、治安の面だけでも安全が保証されなければ誰も旅などしない。

今はまだ、貴族の旅だって命がけなんですから。
それに領主が農民の流出を嫌うので、そんな娯楽は認めないでしょうし、ね。
まぁ、そこが認められるようになるには数十年単位の意識改革が必要になるでしょう。
それの下地を「物語」で整える。
実に遠大な、腹黒い戦略ですね。

「人聞きの悪いことなのですよ、シー。この戦略目標だって、後付けの目標なのです。こんな事を初めから考えているわけがないのですよ」
「そういいながら、リカちゃん。割と昔から考えてたでしょ？」

お姉はニヤニヤしながら目録を引っ張り出します。
それは出版された本のタイトル。
そしてその内容は、自分の町を中心にした話から、徐々に各地を歩くタイプが増えつつあった。
こんな分布で、そんな方針を読みとるお姉もお姉ですがね。
そんなこんなな話をしている私たちを、もう一人のフレデリカ様、キュルケ様がため息でみていた。

「本当にあなた達、フレデリカと話が合うのね」

そういう触れ込みで話を持っていったのは事実ですが、まぁ信用されていなくて当然ですね。
なにしろ私たちの両親は、ご近所様に有名な「詐欺師」「山師」ですから。
娘と言うだけで信用できるものではないのですが、なぜかキュルケ様は私たちを信用してくれました。
なぜでしょう？

「私だって見る目はあるつもりよ？」
「では、お眼鏡にかなった上で、間違いではなかったという事ですね？」
「ええ、自分を誉めたいところね」
ふふふ、と笑う私たちでした。

あー、信じられない話だが、あの蛮族、フレデリカといったか？
あれは、なんと、私たちと同じ力が使える。
それも、この土地であれば、エルフの我々を遥かに超える力を振るえるのだ。
精霊達がそれを明確に教えてくれた。
さらに、精霊を統括するという存在も示され、その存在と契約をしているというのだ。　・・・はっきり言おう、信じられない。
が、その信頼無くば精霊に力を借りることなどできない。
ゆえに、その信頼は絶大だ。
が、心の底で思うぐらいの自由は許してほしい。
精霊よ、君たちの言葉を疑うことはない。
しかし、今までの常識にすがりたいのは弱い存在たる私の定めなのだから。

第三十九話「驚愕」が生まれて（後書き）

実は父上、屋敷に帰ったときには二人のエルフの存在を知っていましたが、流石に自分の家にいるとか、ハーフのほうがモード公の系譜だとか言う話には驚いている、という流れです。

周辺もまさかエルフとは思っていなかったので驚いたけど、「フレデリカだし」で納得の流れ。

まぁ、そういうことですｗ

※今回の元ネタ
更新なし

第四十話　「混沌空間」が生まれて（前書き）

いろんな人の視点がくるくる入れ替わりますｗ

第四十話　「混沌空間」が生まれて

まったく、うちの侍女（メイド）達は、本当に、もう。

「物語」の招待を受けてオープンキャンパスに来てみれば、・・・確かに私は前夜祭までで盛りあがったけれど、当日からは侍女（メイド）達の天国だった。

「物語」の学院内限定出版本を写本したり、「物語」の部屋を堪能したり、「始祖みて」を模した出展に紛れ込んだり、やりたい放題だ。

まぁ、そういうことをしても良い雰囲気なので、それはそれでいいのだけれど、はじけすぎているのは間違いない。

正直、諸侯の間者だと思ってた娘まで、目をキラキラさせて喜んでいるのをみると、「物語」おそるべし、としか思えなかった。

とりあえず、間者率が高いグループが「始祖みて」出展にカジりついて離れないので、最後までつきあったが、途中で抜けて見に行った、あの「独唱」には度肝を抜かれた。

「物語」め、こんな特技まで隠し持っていたとは、水くさいことこの上ないじゃないか！

その上、リアルエルフだって！？

とっとと紹介してもらおうじゃないか！！

くぅ、片や着やせするタイプの純粋エルフに、片や暴力的な胸囲のあのティファニアが、ハーフエルフだってぇ！？

まずい、まずすぎるよ、この二人！

男の欲望が結晶化したかのような「エロフ」そのものじゃないか！！

「イザベラ様、さすがにエロフは無いかと」

「・・・口に出てたかい？」

「出てたのです」

・・・・まぁいい。

お父様まで視線釘付けのティファニア嬢はさておき、この純粋エルフを紹介してもらうよ、いいね、フレデリカ！

「はいなのです。前世の絆の友、レナなのです」

「はい、初めまして、イザベラ様」

・・・な、なんだってぇ！

「前世」・・・前世だってぇ！？

「ちなみに、こちらの二人も、前世仲間なのです」

「「よろしくお願いいたしまーす」」

・・・ひどい、ひどじゃないか、フレデリカ。

そういう細かな遊びに混ぜてくれと何度も言ってるのに・・・！

私も「妄想戦士」したいじゃないかぁ！！

あー、やっぱり妄想戦士扱いなのです。

この話を聞きつけたジョセやんと父上まで自称の二つ名などを披露しあって、感じいっているのです。

まさに厨二乙、なのです。
というか、僕にも二つ名、あるんですよ。
「物語」とか、いろいろなのです。
ただ、いま背後で父上とジョセやんが、僕の称号を言い会ってるのが痛いのです。
その「史上最強の弟子」は死亡フラグなのです。「教会最大の敵」って、僕を異端審問させるきなのですか。「リステナーデ弾爵」はやめなさい、なのです。

聞いているだけで、胃が痛くなるのですよ。
とりあえず、女性陣は「妄想戦士」ネタを嬉しそうにはなしているのでいいのですが、姿を消してジッとコチラを見ているエルフはどうするですかねぇ？

うを、僕がガン見してるのに気づいてるのです。
・・・重ね掛けで姿を消しても無駄なのです。
あ、視線からはずれるように身をよじってるのです。

結構、往生際が悪いですね。

あ、脂汗かいて柱の陰に隠れたのです。
結構追いつめられているのです。

指さしたら避けましたよ。
なんというか、ちょっとかわいいですね。

「ねぇ、リカちゃん。なにしてんの？」
「ああ、みー。この指先に、純粋エルフの男性がいるのです」
「ほ、ほ、ほ、ほんとかい！？」

食いつきのいいイザベラ様。
エルフ好きも極まれりなのです。

「ビダーシャル、姿消しても無駄だって言ったじゃない」

レナの一言で、端整な顔立ちの男性が現れたのです。

・・・もちろん、脂汗をかいて。

「蛮人、貴様は何者だ」
「みぃ、黒猫なのですよ、にぱー」
「くっ」

脂汗を拭いつつ、レナの側にたつエルフ男性。
守ってるつもりですかねぇ？

「あ、あ、あの、お話させてもらっても良いですか？」
「・・・蛮族と交わす言葉はない」
「くぅ、これがツンデレってやつかい、おもしろい、デレさせてやろうじゃないか・・・」
「イザベラ様、無謀なのです。コチラのエルフの方には婚約者がいるのですよ」
「なっ！！　なんでそんなことを知っている！」
「もちろん、カマをかけただけなのです。そんなわけで、婚約者がいるのでした～」
「「「「「おおおお～」」」」」

ふっふっふ、驚く事なかれの原作知識なのです。
でもこれで、蛮族と侮ることが難しくなるのですよ？
そう、ただの蛮族ではない、ホブ蛮族、みたいな？

いや、レッサー蛮族の方が・・・。

・・・あれ、おかしいのです。全く嬉しくないのですよ。

あれぇ～？

全行程三日間の「学園祭」の二日目は、フレデリカも私たちも「当番」があった。

フレデリカは「F様が見てる」の説明当番と、空調の魔法当番。

さすがに集まる人数が多すぎて、熱気がすごいことになる事がわかっていたので、風のラインメイジ以上が持ち回りで当番をして換気しているのだ。

同じく、水のラインメイジ以上は救護当番がくまれている。

で、土のラインメイジ以上は当日まで強制的にお土産作り班に従事していたので、当日はお休みになっている。

で、私たちはというと、キュルケは、潜在的変態の餌になり、私がそれを狙撃するという「係」になってしまった。

ティファニアやレナ、そしてゲルマニアからのお客さんたちは、物語好きの、フレデリカマニアらしいので、急先鋒であるタバサに任せている。

一応彼女も王族なので、いくら無礼講でも彼女に喧嘩を売る人間は・・・・

「あ、アイシクルビット・・・、杖もって大暴れ・・・・、おいお

い、それ、だめだって！広域凍結魔法だめぇ・・・。あ、レナさんＴｕｅｅｅｅｅ・・・・」

あれなら護衛いらなくない？

そんなことを考えてしまった私だった。

実は土のラインメイジが多い猫の騎士団は、本番当番が少ない。

そのせいか、ギーシュは「超合金」隊を率いて展示や揉め事を納める警備にフル回転。

かなりの人気を博していて、本人も、ご両親も、ご家族も鼻高々だったりする。

「さて、そろそろキュルケの周りを掃除するかな・・・、あ、タバサ乱舞に近づいてる。」

このままだと変態という名の貴族と、タバサ乱舞がぶつかってしまう・・・。

つまり

「私の仕事が減るって事よね、良いことだわ」

「その油断が戦場で命を落とすのです」

や、やばい声が聞こえるわ。

振り向いたらだめ、振り向いたら死ぬわ。

「・・・その意志力は買いましょう。常に戦場に目を向ける意志力は」

くぅ、このままどうにかやり過ごさなくちゃ・・・。

「しかし、恐怖から視線を逸らしたままというのは認められません」
「お、お、お母様。私、任務中ですので・・・」
「その任務、放棄していたのではないですか？」
「い、いいえぇ、そんなわけがありませんわ」

ふぅ、とため息をもらしたお母様は雰囲気を変えました。

「現在の、フレデリカの攻略は？」
「肯定レベル三まで済んでいます。嫁発言の否定が尽きましたので、次の段階に移ります」

本当はもう一歩進めたかったけど時間切れ。
これはちぃ姉様と共同で進めるしかないかしら？

「いいでしょう、ならば肉体接触までの許可を出します」
「一発かますんですね！？」

きたぁーーーー！　親公認！！
お母様公認と言うことは、お父様も説得可能、というかフレデリカを落とせるなら了解するに決まってる！！
そうなると、卒業と同時に出産を目指して仕込めってことですよね？
いえ、夏期休暇中に出産を目指して、というのもありね、うふふふふ。

「・・・キスまでです」

そ、そんな！

「その程度のアドバンテージで引っ張れる相手ではありません、お

母様！既成事実が有用です！！」
「・・・歯止めがはずれて他の娘まで「キメ」てしまっては意味がありません」
「ぐぅ・・・そうでした。私の思慮が足りませんでした、お母様」

そ、そうよね、そうだったわ。
私とちぃ姉様の肉体で女を覚えたフレデリカが、そこいら中の女の子に対して「デブ猫」したらいやだし。

「よいのですよ、ルイズ。若い頃はそんなものです。しかし、「キメ」ると決めた瞬間からは戸惑ってはいけません。わかりましたね？」
「はい、お母様！！」

さすが「烈風姫カリン」！
そこに痺れて憧れる！！
そうやってお父様を落としたんですね！？

「ルイズ、「あれ」を読みましたか？」

・・・あ、やばい・・・

第四十話　「混沌空間」が生まれて（後書き）

ホブ蛮族とかレッサー蛮族とか、言われていないのが面白いというかなんと言うか。
物語がサハラに浸透したら、やばいかもｗ

※今回の元ネタ
「史上最強の弟子」・・・・ケンイチ
「教会最大の敵」・・・・・多すぎてフォローできませんｗ
「リステナーデ弾爵」・・・武装錬金＞ギーシュたちではありませんｗ
「あれ」・・・「烈風姫カリン」の新作・・・当然ルイズは読んでます
ホブ蛮族とかレッサー蛮族・・・メタル蛮族・バブル蛮族もあり

５／１３　シルフィードいませんでした

第四十一話「天然」と「天災」が生まれて（前書き）

結構頭の温かい人が多い世界になってしまいましたｗ

第四十一話「天然」と「天災」が生まれて

すごいんです、すごいんです！

あのフレデリカ＝ベルンカステル＝ド＝リステナーデ様からの招待を受けて、孤児院のみんなと一緒にトリステインまで遊びに来れたのですが、私がハーフエルフであることを始めからご存じだったみたいで、フェイスチェンジの魔法が込められたマジックアイテムまで準備してくれ、旅費まで出してくださったんです。

いつもいつも、いろいろな本を送ってくださるばかりではなく、こんな事までなぜしてくれるのか、直接聞いてみたら・・・

「テファ、きみは幸せになる権利があるのです。僕はそのお手伝いをしているだけなのですよ」

・・・ものすごく感動しました。

で、もっと驚いたのが、私がモード公の血筋だと言うことも知っていたということ。

本当に驚きです。

何で知っていたんでしょう？

「物語をかくときには、いろいろな歴史や事件を追って、そして謎を解いてゆくのです。追いかけた事件とその謎を紐解くと、隠れていた真実は思いの外簡単に顔を出すんですよ？」

ほんとうに、本当に、フレデリカ様はすごい。

そして驚きはそれでは収まらなかった。

なんと、フレデリカ様のお友達に「エルフ」がいて、さらにお母

さんを知っている人だったんです。
詳しい話をしてみれば、なんと、彼女、エルフのレナさんと私は従姉妹だったのです。

「はうぅ～、肖像画のおばさまの若い頃にそっくりだよ～」

一目見てわかるほど似ていると聞いて、私はうれし泣きをしてしまいました。
そんな話を聞くのは初めてだったから。

そしてもっとも驚いたのは、あのマチルダ姉さんが学園で働いていたということでした！

「テファ！　あんた何でこんなところにいるんだい！！」

驚いて肩を抱くマチルダ姉さんは、動揺あまり目を白黒差せています。
じつは、フレデリカ様から驚く人が学院長の秘書をしているので会いに行くと良いと言われていたことを告げると、なぜか真っ青になりました。

体調が悪いのでしょうか？

「・・・テファ、教えておくれ。フレデリカ＝ベルンカステル＝ド＝リステナーデとはいつから知り合いなんだい？」

結構前ですよ？
物語や童話を私たちの孤児院に寄付してくれてましたし、前々からトリステインに招待するって約束してくれてましたし・・・。

「・・・はぁ・・・・・」

深々と溜息をついたマチルダ姉さんの耳元にささやきます。

「私がハーフであることも、モードであることも、姉さんがサウスゴータであることもご存じでした」

「・・・な！」

驚いた、驚いた、やっぱり驚きましたね？

私も驚いたのでおあいこです。

「そして、チューダ王朝に「モード」と「サウスゴータ」の復権と追従させられた貴族の名誉回復も約束させているのですよ」

あれ？

振り向けばそこにはフレデリカ様。

でも、何となく感じが違う。

「・・・偏在かい」

「ご名答なのです」

現れたフレデリカさんは、魔法で作られた分身だそうですが、本人とも意識はつながっているそうです。

「で、あんたの目的は？」

「テファの心と環境の救済なのです」

「・・・信用できないね」

「信用しろとは言わないのです。でも、ミスロングビルの許可が無くとも関係ないのです。僕が全力で救うのです」

・・・うわぁ、これって愛の告白？

「テファ、正気にお戻り」

「・・・は！」

危ない危ない、ちょっと妄想してしまいました。

「フレデリカ＝ベルンカステル＝ド＝リステナーデ、あたしは「サウスゴータ」なんてものになる気は無いんだけどね？」

「でも、このままの生活では何れ泥にまみれて死ぬのです。それはテファも望まないのですよ？」

え？　死ぬ？　なんで？　だって、秘書でしょ？

秘書ってそんなに危ない仕事なのですか？　フレデリカ様。

あれ、マチルダ姉さんが何故か苦しそうな顔です。

「なにも慈善事業で救済と言っているわけでは無いのです。目的も報酬もあるのです」

「・・・それはなんだい？」

苦しそうなマチルダ姉さんの言葉に、フレデリカ様は笑顔で答えました。

「目的は、幸福的終演をこの目に刻むこと。報酬はテファや子供たちの笑顔なのですよ」

瞬間の静寂。

しかし、その後は姉さんの大爆笑。

かなりの時間笑い続けたマチルダ姉さんは、ゆっくりと涙を拭いながらフレデリカ様に向き合った。

「それが本当なら、あんたは始祖以来の詐欺師かバカだね」
「いえいえ、作家は真実に貪欲なだけなのです」

え、ええ？
もしかして、これって物語の取材なんですか？
ええ、じゃ、じゃぁ、私が物語になっちゃいますぅ！？

「こんな可愛い生き物を、悲しませたいわけがないのですよ」
「・・・納得しとくよ、フレデリカ＝ベルンカステル＝ド＝リステナーデ」

すっと右手を差し出すマチルダ姉さん。

「あんたの描く幸せって奴を聞かせてくれないか？」
「了解なのですよ。ミス　ロングビル」

二人の握手はすごく嬉しい、もう、これ以上の幸せはないかなって思えるほどの幸せでした。

ところで、なんでマチルダ姉さんは「ロングビル」なんて名前で呼ばれてるの？

「マチルダ＝オブ＝サウスゴータ　で就職なんて無理なのですよ」
「ああ、なるほど・・・ところでフレデリカ様」

「なんなのですか？」
「私も偽名って使ってみたいのですが・・・」
「「・・・・・」」
なぜか、マチルダ姉さんとフレデリカ様から生暖かい視線をもらいました。
あれぇ～？　なんででしょう～？
変態どもへの餌（おとり）として一人練り歩いているんだけど、これがまた面白いぐらいに紳士（へんたい）が寄ってくるのよね。
視界の端でルイズが杖（タクト）を構えているのが見えるから安心してるんだけど、それにしたって、この紳士（へんたい）の多さには辟易。
こりゃ、なにか壁役の紳士（へんたい）がほしいわね・・・・
「やぁ、キュルケ。大変そうだね」
どこかに壁役、いないかしら？
「・・・キュルケ、なんで無視するのかね？」
はぁ、どこかに頼れて後腐れのない紳士（へんたい）は居ないかしら～
「さすがにここまで正面から無視されると、結構傷つくんだが？」
「あら、モンモランシーとの愛が深まって、そろそろ婿入りかと噂されているギーシュ＝ド＝グランモン殿じゃありませんか」

「わー、や、や、やめてくで、キュルケ、その手の噂は・・・・」

わたわたと慌てるギーシュだったが、もう遅かったりする。

なにしろ、「あれ」がもう来た。

「・・・・モテヤローハイネーガーーーー・・・・・・・？」

自称、モテ男たちは、警戒のために杖を出す。

もちろん、武装したた奴から順番にルイズの「狙撃」が襲う。

「・・・モテヤローイネーガーーーーー！」

模擬店の屋根を跳ねるように飛んできた黒い陰。

醜い顔をマスクで隠したその物体の名は・・・

「猫マスク（オレ）、推参！！」

現れた瞬間、なぜか歓声が沸き上がった。

「モテない男の期待を一心に込めて、モテモテ野郎を血祭りに上げる、俺の名は「猫マスク」！！」

どどーーーん、と音がするような気配だったけど、背景は何故か拍手の渦。

「この中でモテセンサーに引っかかるのは・・・・」

キュピーンてやつね、あの目の光り。

「・・・貴様だ、ギューシュ＝ド＝グランモン！」

「ま、まて、猫マスク。僕はモンモランシー一筋、モテモテじゃない！」

「笑止！　一人に一途だと！？　ならばその一人すら居ない我々孤児（オーフェン）は、その孤独な心（ロンリーハート）は、傷つけられ続ける男心は、その罪は、どこに向ければいい！！！！！！」

大歓声を背に、猫マスクはまるで優雅な俳優のように、双剣を手にする。

・・・単なるデブのくせに。

「さぁ、我が同胞よ、孤児達（オーフェン）よ、モテ野郎の運命は・・・・」

「「「「「有罪（ギルティー）！！」」」」」

「我々が行う正義の行き先は・・・」

「「「「「イケメン殺せ！！」」」」」

「では、開始しよう、イケメン「剃り」を！！」

ぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃ、とか笑いながらギーシュを襲う猫マスクは、実のところ「イケメン狩り」というイベント扱いで、逆説的に格好良い男子が狙われるという評判になったそうだ。

彼女連れで、彼女が美人というだけでも襲われるそうなので、彼女にとっても自慢になるらしいけど、逆モヒカンはごめんよね？

第四十一話「天然」と「天災」が生まれて（後書き）

お祭りの最中というのは、かくもまとまりがないものだと思う神代でした。

※今回の元ネタ

「猫マスク（オレ）、推参！！」　・・・　いわずと知れたモモタロス

挿話０３　古手梨花と恋姫０３（前書き）

１５０万ＨＩＴ超え記念！！
古手梨花と恋姫です！！

今回は、実に古代中華的な黒い話ですｗ

挿話０３　古手梨花と恋姫０３

さて、公孫賛の内政リストラと袁紹のタマナシ粛正は多くの官僚と大商人達の悲鳴を引き起こし、一時的な経済停滞を起こしました。

もちろん、生活必需品というものについては滞りなく流通しているのですが、最高級品というものを扱う大商人が、ほぼ壊滅したため、少しパニックになっているのです。

白蓮は「そんな贅沢は無駄なんだけどなぁ」と言っているのですが、為政者が高級品を買い上げるのは国としての義務なのですよ。

「どういうこと？」

「最高級品を生み出す技術や能力を育てるため、その技量を賞賛することができる組織があれば、その名声で農民すら地位を与えることができるのです。優れたるものは、武将でアレ農民でアレ商人でアレ、賞賛されるべきなのですよ」

２１世紀の知識や記憶があっても、地位制度や選民思想を否定しないのはその辺を高めあうのにちょうどいいと考えているからなのです。

とはいえ、その名声に胡座をかきがちなので、細かにチェックして判断し、そしてその力を育てる。

これこそが正しい為政者の姿だと思うのです。

「古手、その意志はすばらしいわ。やはり、私の元にくるべき人材よ、あなた」

ふらりと現れたのは曹操さん。

従姉妹も一緒に登場です。

「おやおや、曹操さん。お元気ですか？」
「ふふふ、ここ毎日の出撃で、疲労がひどいわ。慰めてくれないかしら？」
「背後のお二人が、ボクを射抜かんばかりに見てるのですよ」
「あなたの主も私を殺さんばかりの目で見てるわ」

とりあえず、白蓮を押えつつ移籍の意思が無いことを再び突きつけると、曹操さんも挨拶程度だったらしくニッコリ微笑んで引いてくれた。

黄巾退治において、董卓・曹操の名声が上がり庶人の人気は確かなものになっています。
これにより、領地での夜盗山賊の数は減り、計り知れないほどの利益を得ているのです。
更にいえば、今後の群雄割拠の時代に向けた「名声」という力を蓄えているともいえるのです。
まぁ問題は、本来曹操や董卓が得ているであろう戦力、荀？・程立・郭嘉・陳宮・許緒・典韋等などが全部白蓮の元に集まっていることかもしれないけど。
これはあれかな、劉備陣営の代わりに白蓮が居るという感じなのでしょうか？
でも、歴史の流れというかそういうものって、早々変わるものじゃないのです。
それゆにえ、大変革を修正するような大きなうねりが出てきてもおかしくないのですよ。

歴史の変革どころか、認識の変革を求められてこの世界にいる僕としては、歴史の修正力なんて無視無視なのですが、予想外に跳ね

られるのも考えものなのです。
ここいらで一つ、コントロールすべきでしょうか？
とはいえ、もともとの歴史に沿った流れになると、かなり殺伐とするのですよ。
それは流石にまずいとは思うのです。

のんべんだらりとした変革はできないものかと考えていますが、この世界の政治は、トリステイン以上のダメさ具合なので、どうしようもないのです。
一度老木を打ち倒して新たなる芽を育てるか、老木から若芽だけを植え直すかしかないのでしょう。
新たなる芽の旗手たるのは、やはり「三国志」的にいえば、曹操、孫策、劉備なのでしょうが、孫家は未だ力及ばず、劉備は戦略的御友達主義として袁家で猛威をふるい、元気なのは曹家だけですが、駒が足りない状態ですね。
曹家に、優秀な将はそろってきているようですが、一段格が落ちる感は否めないのですし、孫家には時間と権力が足りない。
で、袁家には旧臣の老害が現王朝と同じレベルで存在しているので身動きが悪いときている。
そうなると、目を引くのは「董家」「公孫家」だったりする。
加えるなら、「公孫家」に野心はないので、いいえ、持たせていないので、ここぞと言うところは全て他家に華を持たせている。
つまり、目立つところは、諸侯にとってねたましく目に映るのは、「董家」になってしまうのですよ・・・・。
というか、董卓に押しつけてしまうしかないのですが、気が引けるのですよねぇ・・・・。
なにしろ、董卓、月とは真名を交換するほど交流してますし、その仲間たちも気のよい奴らなので何とかしてあげたいのです。

とはいえ、今の王朝に必要な武力を持った後ろ盾は、いま、都を

中心に行動している家しかありません。
一番の候補もこの「四家」。
・・・むー。

洛陽の茶家でうなっている僕の隣に誰か座りました。
視線をあげると愛しの何進大将軍様。
にっこり微笑んで、ぐっと体重を預けてきました。
こ、この心地よい重さと柔らかさ、やばいです、やばすぎです！
はうはう、落ち着くのです、落ち付けなのです、ああ、僕の中の野獣よ、治まるのです・・・。

「なにを悩んでおる？　梨花」

なにげに真名を送っているのですw

「生け贄の羊に順当な家がないことを悩んでいるのです」
「・・・それはまた、答えのでない悩みだな」

この言葉だけで理解できるのは、彼女自身がその中心にいるからなのです。
本来捧げられるべきであった何進代書群の命は助けられ、滅亡するはずだったタマナシは少数生き残る。

「どこかに天子の血筋で捧げられても心が痛まないお子さまはいませんかねぇ？」
「袁術」
「は？」
「天子の血筋を引いていて、ここぞと言うところでバカをしでかし、民意を国から離しつつ、次の王朝は普通の治世で善政とうたわれる。これ以上の条件はないぞ？」

「・・・うわぁ・・・・・」

見事な配役で、見事すぎる事態なのです。
というか、そうなると一緒に孫呉が捧げられてしまうのです。
それは問題なのですよ、今後の流れとして。
これは少し宮廷工作をしないといけないでしょうか？

「それには及ぶまい。あの小猿にこう囁けばいいのだ。「これからは漢全てが家臣です。孫呉などにこだわる必要もありますまい」とな」

うっわーーーー。
さすがさすが、宮廷工作でも軍内工作でも一角の人になっただけのことはあるのですよ、大将軍！！
惚れ直したのです！！

そんなわけで、董卓・曹操・袁紹・公孫賛の筆頭家臣を集めて、現状のやばさと帝の後ろ盾になった途端起きるであろう騒動について会議しました。
さすがに皆さん朧気ながら感じていたらしいのですが、一番反応したのは曹家の筆頭家臣である夏家の人でした。
ドガーっと怒りの口火を切って、さらには陰険すぎる行いに怒りを燃やしたり何だったり。
で、もう一人の夏家の人にいさめられて、で、こちらをみる。

「・・・古手どの、その様な策謀、同調しかねる話だぞ？」
「しかし、このまま誰かが都に残れば、誰かが圧制を引いている犯人にされて、討たれるのは間違いないのです」
「・・・その誰かがうまく工作すればよいのではないかな？」
「正直に言えば、僕はみんな討たれてほしくないと思っているのです。御友達は、みんな仲良くなのですよ、ねぇ、桃香？」

と、ここで袁家筆頭で来ている劉備元徳に話をふると、便所の１００wという笑顔で朗々とこの案のすばらしさを語ったところで、自分の案も披露した。
つまり、

「みんなで漢を支えればいいんだよ！」

集まった四家で国の中枢をケアしたのだから、その四家で支えればいい。
継承問題とかいろいろとあるけれど、仲良しの四家で支えればいいし、逆に四家の力を総合すれば、諸侯連合が悪い噂を流そうとも対抗できるというわけだ。

「そして、四家で相互監視もできるというわけね、存外腹黒いわね、劉備」

董卓軍、唯一の軍師賈駆の一言に大反論の桃香だったけど、まぁ、人は自分の物差しでしか測れないのですから仕方ないのですよ。
それに賈駆だって大賛成なのですから。

「ということは、四家体制に不満を持つのは袁術、と言うことになるかしら？」と賈駆
「・・・自分だけ美味しい汁にありつけなかったということで、兵

を起こすでのですよ」
「うわー、もしかして、古手、なんかあくどいこと考えてない？」
さすがに鋭いですね、賈駆。
「桃香は反対すると思うのですが、この挙兵に対して、挙兵するものとして、策略を仕掛けるのです」
筆頭家臣たちの耳が集まったところで、僕は策を開陳します。
もちろん、この手の策謀を嫌う桃香はさておいて、全員の賛成が得られたのでした。
ふふふ、群雄割拠に楔を打ってしまったのです。

さて、この時代の動乱の引き金は何だったか、語るには多すぎる話です。
売官が原因とも、荘園が原因とも言われていますが、要因としてあげられる事例としていえるのは「霊帝崩御」なのではないかと思うのです。
邪遊陰蕩、不摂生・不健康に全身全霊を込めていたおっさんが長生きできるはずがないのです。
ところがぎっちょんちょん。
こちとら水のスクエア&先住魔法の使い手なのです。
即死以外なら、たいがい何とかしてしまえるチートだったりするのです。

そんなわけで、未だ幼女である劉脇・劉弁に成長の時間を与えるために、じじぃには長生きしてもらうのですよ。
もちろん、食事や運動に至るまで付きっきりで黒猫が面倒をみているのです。

「クー姉様、クー姉様！」「脇、ソナタは昨日もクー姉様を独占したではないか！」「弁こそ、一昨日は隠れん坊だと言って、クー姉様を・・・！！」

あー、はいはい、いつの間にか二人の教育係にされてしまったのですよ。
正式名称は別にあったのですが、面倒なので教育係と名乗っているうちに、そうなってしまったのです。
とりあえず黒猫、「偏在」に任せて本体は撤退。
二人に増えたので仲良くわけあえばいいのに、独り占めしたいらしいのが子供っぽいのです。
そんなわけで、偏在から「このお勉強ができたらおつきあいする時間を作るのです」と提案したところで、ダッシュで逃げやがったお子さま二人。
もちろん、バリバリ魔法が使える偏在から逃げることはできず、そのまま勉学部屋へ直行。
カリーヌ式でガンガンお勉強なのですよー。
はっ、もしかしてこの方式がまずいのでしょうか？
だったら「カリン式」で・・・。

そんなお勉強中のバックグランドで、僕は本業の公孫軍に現れたのです。
もちろん、トップの白蓮は書類の山に埋もれているのが当たり前なのです。

「り、梨花！　早く手伝ってくれ！！」
「計算ものばかり残っているのですよ？」
「そんなの私の二百倍速く計算できる梨花に任せた方が確実だ！」

まぁ、重要な仕事も人任せにできるようになったのは良いことなのです。
昔から性能の高い部下に恵まれなかった白蓮は、何でも自分でやらなければならないと言う強迫観念にとりつかれていたのです。
それを突き崩したのは僕だという事実が結構うれしいのです。
だから、いいこいいこなのですよ？

「・・・なんだよ、梨花。急に私の頭をなではじめて」
「感謝と祝福なのですよ」
「・・・うん」

まったりとした時間が過ぎる途中で我に返る白蓮。

「くそー、そういう時間はもっと遅い時間に頼むぞ！」
「白蓮も大胆になったものです」
「・・・根性決めた女を嘗めるなよ？」
「後で積極的に舐めておくのです」

真っ赤になって倒れた白蓮をそのままに、僕も偏在を追加して一

気に政務を加速させたのでした。

青龍もきらくなものよねー。

洛陽に入ってから早々にお手つきにされてるくせに、「梨花様を信じる、それが私の使命だから」とかキラキラした瞳で護衛し続けてるんだものねぇ。

もちろん、他の女に手を出している現場に居合わせているのに嫉妬の一つもしないのはすぐすぎるけど。

あまりに平然としているので聞いてみたら・・・

「もちろん、同じ分量だけ私を愛してくださっているのを「毎晩」実感しているからですよ？」

・・・すげー、フレデリカ、すげー。

並の性豪じゃないとおもってたけど、斜め上に行くオトコだったんだぁ。

こりゃ私が加わっても問題ないかな？

「白虎、あなた、今なにを考えたかいえますか？」

やべー、一撃必殺ってな気配だ。

「本気ならいいですが、遊びで手を出すと焼き尽くされますよ？」

実感のこもった、そんな表情だった。

「じゃ、本気でならいい？」
「本気で背中を防御できるなら」
・・・こえーよ、青龍、武器準備するなよ！
冗談だってばよ、冗談。
「冗談ですめばいいですね？」
ごめん、確かに自信ない。

さすがに恐ろしい娘ね、古手。

春蘭秋蘭が持ち帰ってきた四家合同会議の内容は驚くもので、いや、予想の範囲内では一番斜め上に行く内容だった。
はじめの生け贄と言う話はすでに考えていたことだったが、四家合同統治という手法はあり得ないと最初思っていた。
が、細部にわたる内容をみれば、逆にこれしかないと思えるもので、納得することになってしまった。
表向きの軍最高指令は「何進大将軍」であり、いつ倒れるともしれぬ老木を支える柱になってもらいつつ巨木の陰で若木を育てる。
正常な環境で精神を育てられれば、今の王朝に明日がないことぐらいは理解できるだろう。
その時点で、自分のみの振り方や、今後の方針などを問答すればいい。

統治の力なからば、四家合同統治に切り替え、帝はそのまま象徴として残ってもらうことになるだろう。
あとは四家で反抗勢力たる諸侯を鎮圧し、そして最終決戦が必要であればつぶしあえばいい。
だが、南蛮・五湖が犇めく外敵がいる現状で内部戦力を消費するのは巧くない。
ならば、諸侯戦で戦力を上げて、そして外敵に備える方が前向きだといえる。

「・・・秋蘭、全部つぶせばいいのではないのか？」
「姉者、後で説明する」
「たのんだぞ、秋蘭♪」
「うむ」

まぁ、いいでしょう。
基本方針は呑めるわ。
この王朝自体の延命は神でも難しいこと。
霊帝の崩御と共に起きるであろう混乱で、どれだけ私たちの力が必要になり、そしてどれだけの混乱の中で味方を増やせるのか？
力を試されつつ、生き残るであろう英雄たちとのつばぜり合いを期待する私だった。

「冥琳、まずい感じよ」

袁術に呼ばれて帰ってきた雪蓮が私を引っ張って自室まで連行。
つまり、孫呉の未来に関わる話だと言うことだ。
兵に周囲を警戒させ、間者類も全てはらってまだ始まらない話に、
本気を感じた。

「・・・袁術ちゃん、本気で狂ったみたい」
「それはいつものことだろ？」
「それどころじゃないのよ、これみて」

見せられた書簡は「檄文」であった。
内容をみると、いろいろともってまわった表現であったが・・・・

「妾腹の袁紹を嫉妬して、有ること無いことを押しつけて、他の諸侯にも美味しい立場に成り代わるぞ、というわけか」
「これ、間違いなく失敗するし、逆賊として討たれるわよ」
「間違い有るまい。黄巾退治で名をあげている曹操・董卓どころか、西涼の董卓に「あの」公孫賛だ。今は各陣営に兵を残しているが、本格的に挙兵されれば勝てる道理はない」
「でもねぇ、うちには「これ」来てるのよ」

渡されたのは命令書。
孫呉、というか雪蓮への出兵を強制するものだった。
なんのかんのといっても、この挙兵は朝敵となる要因が高すぎる。
そうなっては孫呉復活などありえない。

「・・・そんな皆さんに良い話なのです」
「きたわね、黒猫」
「おや、僕のことをご存じで？」
「いまや漢王宮の背後を取り仕切る、謎の幼女集団。顔つき、髪型、姿形が全く同じでありながら、どの都にでもいるという謎の人物。

知らぬ者などおらんよ」
「そうそう、この前も私がさぼってたのを密告されたし」
「二度ほど見逃しているのですよ？」
「げ・・・見つかってなかったんじゃなかったの？」
「ふふふふふ」

そうかそうか、そうそう何度も抜け出していたのか、雪蓮。

「ま、まった、まった冥琳。黒猫の話の方が先、ぜったいにいい話だって勘が言ってるの！！」

まぁよかろう、とりあえず聞くが・・・

「おまえの説教はその後だ」
「・・・めいりーーーん」

泣くぐらいなら初めからサボるな。

「で、黒猫。貴様の話を聞こう」
「絶対お得なので、聞くのがしちゃだめなのですよ」

にぱー、と笑った黒猫から語られたその内容は、実に恐ろしく魅力的な内容であった。
雪蓮の勘はおそろしい。
心底驚き、そしてその案が全てならば乗ることを決めた。
が、受けたそのときに決めた報酬以上の者が示されたのは、その後しばらくのことであった。
本当にあの時決めて良かったと、雪蓮と二人で胸をなで下ろしたのであった。

黒猫通信で得た情報で、挙兵情報を得た僕は、各位への情報提供をしたところ・・・

「美羽さんは本当のバカですの？」
「小猿には同情するわ」
「・・・えーっと、なにを考えてるんでしょうか？」

と、袁紹こと麗羽様、曹操こと華琳様、董卓こと月様の感想でした。

我が主、公孫賛伯珪は、がっくりと肩を落としてつぶやきます。

「替わってほしいなら替わるぞ？　この事務量、こなせるもんならこなしてみろってんだ」

いやいや、白蓮。

あいつらは仕事を視しないで贅沢ざんまいして、諸侯に討たれてオシマイなのですよ。

だからこそ、生け贄の羊にしてやろうかと思ったのですが。

「庶人の苦労も少なくせんと、国力全体が落ちるからなぁ」

どっちにしても、小猿が腰を上げたおかげで、虎の楔がゆるんだのです。

「それは、朱里と雛里が居ないことに繋がるのか？」
「さすが白蓮、わかってるのです」
「おまえなぁ、もうちっと私に一言入れてから動けよ。主がなにも知らないってのは結構つらいぞ？」
「おや？　この前、報告書をあげておいたのですよ」
「それを私の代わりに自分で処理して流したんだろ、どうせ」
「うんうん、白蓮は賢いのです」
「で、キイとルルは？」
「官軍の教導してるのです」
「・・・キイで無理させて、ルルで甘えさせるわけか？」
「飴と鞭が公孫軍の大特徴なのです」

胸を張る僕をみた後、白蓮は苦笑いです。

「なぁ、梨花」
「なんですか、白蓮」
「あのとき私が泣きつかなかったら、おまえはどこに行っていたんだろうな？」

んー、と考えた後、白蓮にほほえむのです。

「どこに行ってたとしても、白蓮の危機に駆けつけてたと思うのですよ？」

その一言に盛り上がった白蓮を抱きしめて、本日の営業は終了なのです。
きゅっと抱きしめた白蓮の髪の毛の甘い匂いを楽しみながら、僕はこれからの未来に思いを馳せていたのでした。

挿話０３　古手梨花と恋姫０３（後書き）

どかんばきゅーんのない戦争が吹き荒れる恋姫世界。
がきんぎりぎりが発生する前に、戦の趨勢は決まっていたりしますｗ

ゼロ魔世界では救済しまくりの梨花ですが、恋姫世界では救済を意識していません。

第四十二話「舞踏会」が生まれて（前書き）

そういえば、初めの舞踏会も次の舞踏会も入れていませんでしたｗ

第四十二話「舞踏会」が生まれて

最終日の舞踏会に間に合うように準備していたものが、間に合ったみたいなのです。

それは、王家の秘宝。

その秘宝を使えば、想い描いた理想の姿になれるのです。

まぁ、スレイプニィル舞踏会の焼き直しなのですが、各国のみなさんは経験のないことですし、平民のみなさんも参加できるんで、面白いかなーとおもったのですが・・・・

「うわー、やっぱフレデリカ率たっか～」

ルイズはカトレア様に、カトレア様はルイズになっているのです。

「ま、仕方ないでしょ？　見た目は最強だし」

エレノール様は何故かウチの母上、で母上はそのまま。

母上がふたリーとか思ったのですが、わりと一目でわかるものですね。

母上がツンデレになった感じがするのです。

「どうどう、なつかしいでしょ、リカちゃん」

「ふふふ、結構覚えてるものですね」

しーとみーは、向こうの自分、園崎姉妹の格好なのですが、

「シーは何でバイトの格好なのですか？」
「・・・こっちの方がイメージしやすかったんです」

ご愁傷様なのです。

・・・・・・・・・ところで、レナ。

「なにかな、リカちゃん」
「鉈は標準装備なのですか？」
「うん、これがないとレナじゃない気がするんだよ～」
「・・・・・・・・」

恐ろしいことからは視線を逸らす、これはヴァリエールで学んだ事なのですよ。

で、タバサ、キュルケ、モンモランシー、ジョゼット、イザベラ様、ティファニア、そしてイザベラメイド隊のみなさん、全員・・・・

「僕ですか」
「フレデリカだって、自分の姿だろ？」
「ぼくのは、向こうでの自分なのです。だから、この体は幼女版なのですよ？」

僕のその一言に、なぜか血走る瞳の母上。

「ふーちゃん、それ本当？」
「・・・事実なのですよ」

「ふ～～～～ん・・・・・」

にっこりほほえんだ母上は、陰をにじませる表情で「ぱちり」と指を鳴らしました。

「・・・ダイアン」

「ここに」

「フレデリカ装備「乙女」を開封します」

「奥様、それでは・・・」

「リステナーデ「乙女」騎士団、最善を成しなさい」

「「「「御意」」」」

ふわっ、気づけば別宅のメイド全員が僕を取り囲んでいるのです！！

「ぼっちゃま、いえ「お嬢様」、お召し替えを」

「ちょ、ちょ、ちょ、ちょっと待つのです。どういうことなのですか、母上」

思わず母上をみると、何故か周囲の人々とスクラムを組んでいます。

不吉としか思えないのですよ！

「・・・大丈夫よ、ふーちゃん。この千載一遇のチャンスをものにするために、根回ししてるだけだから」

「だから、何をするつもりなのですか、母上！」

「ふふふふふふふふ」

「いやーーーーーー、なのですよーーーーーー！！」

汚されたのです。

服装も下着も、あらゆるものを女性もので統一させられて、ファッションショーをさせられたのです。

最後にゃ、歌まで歌わせられて。

向こうのアイドルみたいな衣装が、いつの間にかできあがっていて、それを着て「大和撫子七変化」と「木枯らしに抱かれて」の二大姫曲まで歌ってしまったのです。

母上は「あんみつ姫」系がお好みで、実家でも歌ったのですが、こんな大勢の前で歌うだなんて思いもしなかったのです。

母上、恨むのですよ。

絶望的に暗い気持ちになったのですが、あんなににもうれしそうな母上の顔を見ると、恨み言をいえるわけもなく、一人寝室で涙するのです。

「・・・大丈夫、可愛かったから」

ターバーサー、空気よめ、なのですぅ～～～。

というか、ごく自然に僕の寝室に同化してるタバサ、恐ろしい娘、なのです。

全くその存在を感じなかったのですよ。

「あら、じゃぁ、私の気配も感じなかったのしら？」

「か、か、カトレア姉様、なんでぇ！？」

ふふふ、と軽く笑うカトレア姉様ですが、にじみ出る黒い気配は消えていないのです！

「ほら、ルイズと違って学院にいない私の接点って少ないじゃない？」

しゅる、となぜか服を脱ぎ始めるカトレア姉様。

「だから、このへんで、すこし、リードしておこうかなーって・・・・」

緊急転移！！！

「やばいのですよ、ほんとに」

思わず屋根の上に偏在と入れ替わりで転移する「微塵隠れの術」をつかってしまったのです。

この技はラ・ヴァリエールで多用していたので、カトレア姉様はわかってくれるでしょう。

しかし、健康になったカトレア姉様は活発的過ぎなのです。

あれでは捕食獣の類(たぐい)なのですよ。

「っと、とっとと撤退なのです」

つらつらバカなことを考える暇があれば、セーフハウスに逃げる、と見せかけて森にでも逃げ込んだ方がましなのです。

目の下真っ黒になったリカちゃんが、私たちを見送りに来てくれた。

お土産に「製紙研究及び開発に関する契約」というトンでもないものまで渡されて。

レナも、同行者とともに信じられないほどの量の本を持ち帰っており、ホクホクであった。

この「学園祭」来て得られたものは多い。

あの瞬間からこちらに来られた人間がいたことが驚きだし、これなら、と希望も持てた。

圭ちゃんとサトコ。

絶対に領地を回復させて、二人を捜そうと心から思った。

「おねえ」
「わかってる、あんたも協力してよね」
「サトシ君も探します」
「・・・あー、絶対見つけるよ、うん」

さすが、我が妹、空気よめねー。

「ミー、シー、必ず、成功させるのです」
「「うん」」

にっこり微笑むリカちゃん、すんげーやつれてんだけど。

「ねぇ、昨日何かあったの？」
「・・・肉食獣達から逃げ回ってたのですよ」
「・・・ああ、なるほど、ね」

まぁ、モテるんだから文句は言わない。

「僕も男なので、決める前に「キメ」られるのは困るのです」

結構うまいこというね、リカちゃん

「では、名残も惜しいですが、そろそろいきます、リカちゃま」

ケルマニア組とエルフ組が旅だった後、ティファニアを送るためにロングビルさんが旅立ち、ジョゼット三等兵をつれたイザベラ様が、いやだいやだ帰りたくないリステナーデさん家の子になるんだぁ～と駄々をこねるジョセやんを拳系の説得をして帰郷したのです。

実に心温まる光景なのです。

大騒ぎで始まった「学園祭」も、大成功のウチに終わり、トリステイン貴族の意識の中に何らかの楔を打つことができたのではないかと思うのです。

それが吉と出ることを心から祈る僕なのです。

「で、収支は？」と、ルイズ。

「大黒字なのです」と僕。

あー、なんら疚しいことはしていないのですよ？

でも、儲けられるときに儲けないのは、官僚とバカだけなのです。

ええ、鉄板なのですよ？

「じゃ、次は「体育祭」かしら？」
「あれは一般観戦できないのです」

というわけで、観戦外交を出来るというネタということで、枢機卿に恩を売るのです。
鳥の骨らしい使用法を考えるはずなのです。

「じゃ、フライ魔法でする「競技」は？」

平民少年が実はスクエアメイジの家系で、真実を知った少年が魔法学校に入って友情を育むという物語の中で語られる競技のことですね？

「一国だけでやるのはつまらないのです。各国で精鋭チームを作って、戦争の代わりに勝敗を決めるのですよ」

軍事にかける予算でチーム強化しそうで怖いのですが、それはそれでおもしろいのです。

「・・・という物語なのね」
「おもしろいと思うのですよ？」

実際は無理なのはわかってるのですが、それでも国粋主義を軍事にだけ求めるよりは、結構健康的だとおもうのです。

「ま、草稿がかけたら見せてよね」
「結構書き進んでるのです」
「もう書いてるの！？」
「ふふふ」

さすがルイズなのです。
ボケ拾いには天性の才能があるのです。
これなら大阪に生まれてもノビノビ生きられるのですよ。

第四十二話「舞踏会」が生まれて（後書き）

うちのフレデリカはマザコンですｗ

※今回の元ネタ

「あんみつ姫」系　・・・　８０年代アイドル　小泉今日子、キョンキョン

平民少年が実はスクエアメイジの家系で、真実を知った少年が魔法学校に入って友情を育む　・・・　汚くない「ハリィ」の方物語の中で語られる競技　・・・　箒に乗ってやる、あれｗ

「・・・という物語なのね」・・・元ネタ多数

第四十三話「野望の手」が生まれて（前書き）

あれだけ否定していた時間跳躍ｗ

第四十三話「野望の手」が生まれて

そろそろ小雪が舞おうかという時期に、不幸の手紙がやってきたのです。
内容は同じようなものなのですが・・・

父上「ロマリアに行ってくれ。領民を人質に取られた。」

なんでも、敬虔な教徒をロマリアに招待という形で移送されたそうです。
あの変態の親玉、キモ過ぎなのです。

枢機卿「ロマリアに行幸予定あり。」

つまり、あの畑、結婚式の予行演習を大聖堂でしませんか？　とかいって誘われやがったのです、絶対に許せないのです、あの畑！！

アルビオン「ロマリアへ行幸予定あり。」

あんた、元敵の総本山に何しに行くんだよ、反乱の陰にいたオリバー君、忘れたんかい！？　ええ、種！！

母上「変な詩集と絵画で部屋がいっぱいです。何とかしてください。」

・・・母上、ごめんなさいなのです。心底ごめんなさいなのです。

「・・・ロマリアに行くの？」
「行くしかなさそうなのです」

心配そうな声を出すなら、原稿用紙から視線をあげるのですよ、タバサ。

「ちゃんと手を打っとかないと、喰われちゃうわよ？」

いま食べてるお菓子の総カロリーを理解した方がいいのですよ、ルイズ。

「まぁ、どうせ、信じられないぐらいにドロドロの手を打っておくんでしょ？」

キュルケ、君は誤解しているのです。
僕ほどの平和主義は、このハルケギニアに存在しないのですよ？

「「「うっそだー」」」

うぐぅ、な、泣かないのですよ。

そんなわけで、悔しいけれどどうにもならないので、あきらめていろいろと手を打つことにしたのです。

とりあえず、製紙関係は順調なので、春まで手放しでいられるほど。
この今書いている原稿用紙だって、試作品といいながらもかなり

良い出来なのに安いのです。
これで本の値段も落ちて、もっとみんなが買いやすくなるのです。
で、す、が、ロマリアには流さないのです。
ムカつくまねをしてくれた報復は、ぜったいに足に来るほどカマスのです。

本の販売も順調で、そろそろ際物も出せるかな、と感じているのです。
も、ち、ろ、ん、ロマリアには流さないのです。
当然なのですよ?

で、逆に付加価値が高まっているので、偏在を使って、「教皇おすすめ」も複写してますし、外交特産物はこれでいいでしょう。
あとは、某地下鉱脈に対する僕の見解を叩きつけて決別、「4の4」に対する態度もきちっとしないと、いいように使われてしまうのです。

実際のところ、原作知識がどこまで通用するかも不明ですが、あの「男色」教皇とは同じ旗の下に立てないのです。
ならば、徹底抗戦を「政治経済」でするしかないのです。
もちろん、ド＝リステナーデとラ＝ヴァリエールの常駐軍があれば、聖堂騎士ごとき紙っぺらなのですが、いまだ宗教の楔が離れていない世界での行為としては悪手すぎるのです。
だから、向こうの派閥工作も手を抜けないのですよ。
ロマリアなんてところは、共和制政治の皮を被った共産主義なのです。
それも宗教という偽名を名乗った頭の悪い政治形態の負の遺産を押しつけるだけの詐欺商法を各国に押しつける悪党集団なのです。
山賊野盗の分際で、「聖なる」ものを語る時点で反吐がでるというものなのです。

「フレデリカ、悪党顔になってるわよ」
「ルイズ、言い方を変えてほしいのです」
「じゃぁ、王族顔」

な、な、な、なんて酷いことを言うんですかぁ、ルイズ！！

「あー、うちの閣下に似てるかも」

ガリアのアレな閣下に似てる笑いですかぁ！？

「・・・お姉さまが好みの物語を読んでる顔に似てる。」

・・・ちょっと光栄かもしれないですが、そういう顔になるですか、イザベラ様。
さぞや三等兵も肝を冷やしているでしょう。
なむなむ～。

梨花ちゃんが譲ってくれた物語。
かなりの量を持ち帰ったのに、誰も読もうとしなかった。

・・・某姪は別だけど。

結構落ち込んでたんだけど、しばらくすると夜のうちにやってく

る人がバラバラと増えてきた。
はじめは奥様方の暇つぶしだったんだけど、子供が、大人が、最後には青年たちが読みに来てくれるようになった。
みんな一様に「続きは」という質問だったけど、持ち帰れる限界を超えていたので、持って来れなかったことを告白すると、みんながみんな落ち込んだ。
でも大丈夫！　本の入手先は押さえたし、ビシャーダルも覚えてもらったし。

「だから、新刊はこれからもよろしくね、ビシャーダル！」
「「「「「よろしくーーー」」」」」

なぜか膝から崩れ落ちたビシャーダル。
なんでかな、かな？

老評議会は紛糾していた。
何しろレナが持ち込んだ書籍のせいで、かなりの市民が蛮族に興味を持ってしまったのだ。
それもかなり好意的に。
その責任を追及された私だったが、すでにこの可能性は出発前に指摘していたし、あんな化け物が居るとは考えていなかったのは誰も一緒なのだ。

「・・・たしかに、な」

かの蛮族、フレデリカ＝ベルンカステル＝ド＝リステナーデが従

えたという統括精霊存在「精霊王」の存在を報告した際、本気で健康を疑われた。・・・主に頭の。

しかし、薬の使用や精霊直接から聞いた情報で真実だと確認され、老評議会はパニックになった。

その騒動中にレナが「物語」を布教してしまい、今では老評議会のお膝元は「物語」に汚染され尽くしていた。

さらには新たな物語を求める声も高く、私はその役目を背負わされかけている。

・・・なんたる屈辱的な。

「ビシャーダル、して、その蛮族は虚無か？」

「いいえ。しかし、蛮族の魔法すべてが使え、精霊魔法も土地との契約なしで全力で使えます」

「・・・・そうであったな」

ぐったりと、評議会員たちはうなだれた。

「その蛮族と、友誼を結んでいるのは・・・」

「リィナァ、・・・レナ、ですね」

「むぅ・・・。」

まぁ、この先は見えた。

情報収集と意識確認、さらには同意の上で連行して薬による調査、必要であれば暗殺。

そんなところだろうが、かの蛮族を殺せばこの先エルフは精霊の加護を失うとまで言われているので、暗殺まではないだろうがな。

「では、議決をとる。ビシャーダルに全部押しつける、賛成のもの、起立を」

がたがたと立ち上がる評議会員。
・・・って、まちたまえ！

「賛成多数で議決。ビシャーダル、あとはまかせた」
「数の暴力だ！！！」
「数の評議会に訴えたまえ」
「横暴だーーーーー！！」

第四十三話「野望の手」が生まれて（後書き）

原作キャラの一部が不幸なのは、筆者のシュミですｗ

※今回の元ネタ

三等兵　・・・　プライベート　・・・　ジョゼット

「数の評議会に訴えたまえ」　・・・　「言葉の警察に・・・」

・・・　化物語の台詞より

第四十四話「〇〇〇ー止め」が生まれて（前書き）

えー、タイトル落ちなので、隠されてますw

第四十四話「〇〇〇ー止め」が生まれて

試作品「原稿用紙」は、実に好評で、実はアルブレヒト三世閣下からも融通するように言われている。
無論、契約を無視しろとの言いつけなんだけど、じつは梨花ちゃん、アルブレヒト三世閣下からの強制は予想していて契約書の中に盛り込まれていた。

～製法についての開示は禁じるが、製品を販売すること自体は禁止せず。～

つまり、私らの最良でやっていいけど損するなーという事になる。
まったく、人の使い方をわかってるなぁ、と感心してしまった。

「おねえ、どの辺のを持っていきます？」
「製品版をひとしめ、かな」
「「ティッシュ」も持っていきません？」
「まぁ、うちの基幹産業にしようかってもんだしね、献上ぐらいはするけど・・・最高級？」
「プラス、溶ける紙も、ですね」

うん、かなりの需要をみこめるんだよねー、これ。
とはいえ、あんまり調子にのると、出る杭扱いになるから、その辺が難しい。

「・・・んー、原稿用紙、ティッシュまでにしとこ。それ以上は異端の嫌疑が掛かるし」
「すでに原稿用紙の製法を明かさない時点でヤバヤバなんですが」
「まぁ、その辺は黒猫印だってことで、梨花ちゃんに押しつけよう

！」
「・・・おねぇ、卑怯ですね」
「格調高く卑劣つうことで」

ここはおひとつ、ハイタッチでお互い了解の意志を交換した。

「「ま、この程度の面倒は、梨花（ちゃん）（ちゃま）には軽いだろうけどね」」

過大評価気味だけど、まぁ、頼らせてもらうよ、こっちの力が付くまではね。

さーて、せっかくの光の国への招待です。
僕も本気で行くことにしたのですよ。

作戦目標は一つ。
無事帰還。
次段目標は、いくつか。
たとえば、教皇の心の目的は何かとか、次期教皇の勢力図とか、政体への民意はどのレベルで反映されているかとか・・・・

基本情報収集ですが、いろいろと楔を打ち込まなければならないのです。
そんなわけで、今回は女子部の参加お断りなのです。

「ま、正論だけど・・・だが断る！」

無用に男らしいルイズ。

「向こうで御花畑な姫様が人質になるんでしょ？　だったら女子がいないと入れないところがあるじゃない」

無用に論理的なキュルケ。

「・・・わたしはフレデリカの剣であり盾。」

一歩も引く気配のないタバサ。

「団長、いや、我が友フレデリカ。あきらめが寛容だと思うぞ」

くぅ、ギーシュのくせに、生意気だ。
ギーシュのくせに生意気なのです」

「あー、我が友、声に出てるぞ？」
「ん？　まぁ、結果は変わらないのでいいのです」
「大変失礼だな、きみは！！」
「ふふふ、イジられキャラが切れても、愛らしいとしか思われないのですよ？」
「大変不快だな！！」

まぁ、ギーシュいじりはこの辺にして、三人に向き直るのです。

「今回は、最悪の場合、ロマリアと事を構えるのです。御花畑's の救出と領民の解放、そして二度とこんな事を考えないように恐怖を刻み込まなければならないのです。それはスゴく反宗教的行為なのです。僕一人ならば姿を消すだけで済むかもしれないですが、みんなが一緒だと、これはハルケゲニア全体を巻き込むことになるのですよ？」

「でも、それなりに手は打っていて、その最悪は避けられるのでしょ？」

「・・・過信はできないと行っているのです」

気軽なルイズにくぎを差すと、なぜか三人はそれぞれ書状を出した。

「これは、皇后様から」

・・・めんどくさい宗教から脱却できるならそれもまたよし。

「これは、アルブレヒト三世閣下から」

・・・坊主、ムカつくだろ？　一戦構えるなら援軍出すぜ？　あと、歌いに来いよな。

「・・・これはジョセやんから」

ムカつく坊主丸焼き？　いいねーいいねー、かの「戦国物語」の武将のようじゃないか。しびれるねぇ、あこがれるねぇ。なんなら戦艦出すか？　いっちゃう？　出すなら呼べよ？

僕は全力で倒れたのです。
なんか、知ってる人たち全員壊れているのですよ。

「つまり、私たちはそれぞれの名代よ。」
「それなりに戦力もあるからいいでしょ？」
「・・・猫の騎士団だけでも十分」

まぁ、たしかに。
うちの猫の騎士団は「学園祭」でも模擬戦をやって、各国の騎士団を下しているのですよ。
もう、王宮からは「学生騎士団」の「学生」を取れと矢の催促がきているのです。
ガリア聖衛騎士団との対戦の時に使った、ドットメイジトライアングルゴーレムなんかアカデミーで研究させろと大騒ぎになったぐらいなのです。
以降、ギーシュの字は「超合金」。
無駄に格好よくなったのです。

閑話休題

そんなこんなで、猫の騎士団全員と三人娘を連れて、僕はロマリアに行くことになったのです。

はぁ、まぁ、一度実家によってからなのですが・・・・。

凄い量だった。
ド＝リステナーデの屋敷から運び出された絵画、というよりも怪画と詩集、いや死臭などの怪文章、そして怪しげなアイテムの数々。
それが切り札その一だそうだ。

「どうみても黒歴史でしょ？」
「だからこその切り札なのです」

なるほど、人質ならぬ記憶質なわけね。

「ルイズが脳筋じゃなくなって寂しいのです」
「そうね、なんか知的で、ルイズじゃないみたい」
「・・・中の人が変わった」
「あんたたち何気にとんでもないこと言うわね！　それに中の人ってなによ、中に人はいないわよ！　これが生身よ！！」
「うんうん、そういう設定なのですよ」
「・・・さすがルイズ、身のあるつっこみ」

くそぉ、フレデリカに純粋培養されたボケを振るうタバサには勝てない・・・。

「それにしても、よくもまぁ、これだけ怪しい内容を寄贈できるわね」
「ロマリアには、輸出規制しているので、どうしても暴走しがちなのです」
「ちなみに、どこで止まってるの？」
「「始祖みて」でいうと、「レイニーブルー」なのです」
「「「・・・・げ」」」

あの状態で情報停止？　暴動が起きるわよ・・・・。

「もしかしてさ、今回の暴挙って、輸出規制撤廃が目的なんじゃない？」

・・・・・

フレデリカの笑顔は硬直していた。

「とりあえず、簡易装丁版を大量に持ち込むのです」

どうやら完全に想定外らしい。

V&R出版によって、希少在庫をかき集めた私たちは、やっとロマリアに出発できたのだった。

第四十四話「〇〇〇ー止め」が生まれて（後書き）

というわけで、「レイニー止め」が生まれて、でした。

・・・なんか既に展開が読めているかも・・・・w

※今回の元ネタ

「プラス、溶ける紙も、ですね」・・・　スパイメモ

それ以上は異端の嫌疑が掛かるし・・・魔法で解析できない、理解不能の技術＝異端　となる懸念がある

だが断る！　・・・　某作品内の某漫画家

「戦国物語」の武将・・・織田信長公

「レイニー止め」・・・小説「マリア様が見てる」のレイニーブルーという作品の後、暫く出版がとまっていた為、展開が気になってファンがヤキモキしていた時期のこと。ネットでもかなり荒れていた

第四十五話「苦渋の選択」が生まれて（前書き）

対ロマリア、なのですよ

第四十五話「苦渋の選択」が生まれて

「これが、光の国、なの？」

キュルケの言葉は実感だと思うのです。

始祖ブリミルを崇める宗教を中心とした、神聖なる国、それがロマリアのはずでした。

しかし、目の前に広がる風景は、そんな想いを叩き壊すものだったのです。

路地にはいつくばる人々、町にあふれる物乞い、絶望を瞳に浮かべた平民たち。

各国の中でもっとも平民に苛烈だといわれているトリステインであってもここまで酷くはないのです。

「前より増えてない？　フレデリカ」

「確実に増えてるのです。そして、悪化してるのです」

絶え間ない重税、押さえつけられる活動、商売だってやりにくいはずなのです。

いま、ロマリアを動かしているのは税ではなく、各国から搾り取った寄進。

そしてそれを浪費した後のおこぼれに預かる商人たち。

商売を否定はしませんが、この光景を見てなにも思わない人間と取引はできないのです。
だから、ロマリア内部に入り込んでいる商人との関係を切ったら、本が流通できなくなった、それだけのことなのです。

町間にある教会では炊き出しをしているのです。
こういう巷(ちまた)のの善行は認めるのですが、その炊き出しも巻き上げられた税で賄われているのです。
大体、9官1民って、どんだけですか！

・・・あー、冷静に冷静に。

さすがのトリステイン最悪の領土でもやらない清々しいまでの悪政なのです。

「・・・フレデリカがなんであそこまでロマリアを嫌うかが実感できたわ」

キュルケは忌々しいとばかりに眉をしかめます。

「これは政体としての問題です。ですが僕が嫌っているのは教皇なのです」
「ああ、「アレ」ね」
「ああ「アレ」だものね」
「・・・「アレ」は私もイヤ」

実のところ、騎士団全員も嫌悪している。
まぁ、変態の好みに引っかかるのは二人ほどなのですがね。

「「「「「ちょ、ちょっとまて、そこのところくわしく！！」」」」」
「本人に言うのは可哀想なので、内緒なのですよ」
「「「「「ぎゃーーー、きがやすまらねーーーー！！！」」」」」

ふふふ、我が騎士団の士気は最高なのですよ。教皇の罠がどんなものか、喰い破ってやるのですよ！

ふはははははは！

しゅーりょーーーーーーーTT

対ロマリア戦略終了のお知らせなのです。

もう、なんというか、深読みしすぎていてごめんなさい、といった感じなのです。

事の起こりは「レイニー止め」。
輸出制限により民にも聖職者にも「物語」が渡らない日々。
そして手元にある最新巻は「レイニーブルー」。
何度も何度も読み返して、何度も何度もやるせない気持ちが高まり、最後には気力消滅。
商工収益ダウン、農産物ダウン、ダウンダウン。

で、起死回生の機会が訪れたということで、「学園祭」に参加した教皇へ望みをかけたところ、自分だけ最新巻まで読んでホクホクと帰って着やがったというわけで、現在教皇窮地。

地位とか立場とかいう以前に命の危機が迫っているとか。
ロマリアは国として財政危機、民は存亡の危機、自信は命の危機。
進退窮まり泣きついてきた、というのが真相だとか。

ルイズ感謝なのです。
レイニー以降を満載した荷馬車を見せたら、教皇、五体倒地で拝んでるのです。

ここは一つ、負の遺産もひっくるめて公開するのですよ。

「は？　それは何ですか？」

負の遺産なのです。
というか、萌えない産業廃棄物なのですよ。

先入観、怖いわー。

確かに政体は悪質だし、民衆の心も離れてるけど、今回の騒ぎの大本は「レイニー止め」。

フレデリカによる「物語」輸出制限によるものだった。

つうか、すでに侵略できてるんじゃないかしら？

「キュルケ、その視線は不快なのです」

「あらあら、それは失礼しました、名誉聖騎士殿。」

「了解していないのです！！」

この度、国家荒廃の要因を打ち破った勇者という事で、名誉聖堂聖騎士の称号を送りたいと飛びついてきた教皇を撃墜したフレデリカだった。

けど、称号の乱発は国家の位を下げるものなのだと真剣に忠告している姿は、大嫌いな人間にする行為ではないな、と思わされた。

「だから、その視線をやめるのですよ、キュルケ」

「ふふ～ん、いいじゃない、聖騎士様」

「むか～」

「うふふ」

まぁ、そんな意味のない名誉よりも実用的な取引は行われていた。

基本、大嫌いと思っていても利益誘導という立場に立てば、家族

従業員のことを考える一端の承認の顔になるフレデリカは、最大限の情報と対価を引き出した。
現在の教皇が持つハルケギニアの状況と、大地崩壊に関する情報、そして聖戦の意味。

「とりあえず、この件に関して協力はしないのです。この件に僕の家族や仲間を巻き込んだら、徹底抗戦なのです」
「・・・し、しかし、事は全ハルケギニアに関わる問題で・・・」
「すべての人、すべての生命が協力するというなら良いですが、貴方のみているすべては「貴族」、いえ「マギ」だけですね？」

体をふるわせる教皇。
それ以上の話はされなかったけど、彼には大きな楔が打ち込まれたのがわかる。

「ブリミルを蔑ろにするつもりはないです。ただ、過去の亡霊が示したものを何の疑いもなく盲信させられている時点で会話が成立するとは思えないのですよ。」

なにか暗い炎を灯した瞳で、教皇はフレデリカをみていたのが印象的だった。

「ふ、ふ、ふ、フレデリカ、痛い痛いたたた！！」

「ふ、ふ、ふ、フレデリカ殿、痛い痛いたたたた！！」

ダブルアイアンクローで、御花畑・Ｓの教育なのですよ～

「さー、危機感と政治感覚を喪失した王族（ばか）の教育が始まるよ～」

「一番、ルイズ！　狙撃します！」

「あ、あちちちちち、とても大切な部分の周辺が異常に熱い！！！
あちちち！！！」

「二番、タバサ。凍ります」

「いたたたた、いたいですわいたいですわ、か、か、かみのけが
おもくてつめたくていたたたた！！！」

「三番キュルケ、微熱よ？」

「「あちちちちちちちち！！！　業火、業火だから！！！」」

とりあえず、猫マスクお休みなのです。

第四十五話「苦渋の選択」が生まれて（後書き）

・・・あれぇ？
なんでこうなったかなぁ？

実は、政治的取引とか教皇周辺のとりまとめとか、人民掌握なんて事までプロットしていたはずなのに、書いてみたらこの有様。

自分にゃぁシリアスが向かないっすよ～
とはいえ、暗い種は植わってしまいました。フラグですね。
とはいえ、聖戦への楔はありますので、いろいろと面倒なことにはなりそうです。

次回もお楽しみに～

追記：そろそろ約束の春（５０話）が近い。プロット道理なのでカウントダウン状態ですｗ

第四十六話「お詫び」と「誤算」が生まれて（前書き）

まだちょっとロマリアにいます。

ちょっとだけですがｗ

第四十六話「お詫び」と「誤算」が生まれて

お花畑カップルを、問答無用で国外退去させた猫の騎士団だったんですが、渡りに船ということで、行幸の帰りに領民を連れてかえってもらったのです。

ほら、見た目は「トリステインの華」ですから、領民も嬉しそうについていたのですよ。

近衛による護衛もあるので、安心安心なのです。

実際のところ、行きは聖堂騎士団で、帰りは王宮近衛。

どれだけ贅沢な旅なんだか。

ボクとしてはこんな感じの旅が、誰でも出来るようになって欲しいというのが本音なのです。

そのためには、偏見と強権を押さえつける何らかの手法が必要なのです。

今している民意による誘導以上の何かが。

流石に王権とか使えるものではないので、もっとソフトで強力なものが欲しいですね。

こんど、ミーやシーに相談してみるほうがいいかもしれないのです。

今回の交渉で判ったのは、ある程度の文化侵略が成功しているという実感が得られたということなのです。

逆に僕自身がその自覚が無かったせいで、いろいろと空回りしてしまったのですが。

原作を知っている所為で、もっとドロドロした展開だと、大いに

勘違いしてしまったのですよ。
最近はあまり原作を意識していなかったのですが、仲間を守るという意識になると、どうしても頭を掠めるのが怖い気がするのです。
とはいえ、大本は好き嫌いが始まりの輸出規制ですから、感情の類するところが収まらなければ意味が無いのです。
ロマリアが嫌いというよりも、あのホモ教皇が嫌いなだけでしたので、首がすげ変われば問題が無かったはずですが、想定された問題が勘違いだったことがわかった時点でフォローしてしまったのは間違いだったかもしれないのです。
そのまま放置すれば、教皇暗殺すらあったはずなのに・・・・。
こと、恨みとは怖いのですね。

ナムナム～。

勿論、国民の皆さんには罪はありません。
勘違いにはお詫びをするのです。

そんな訳で、レイニー以降を持ってきた馬車で臨時販売したところ、凄い長蛇の列になってしまったのです。
V&R出版の臨時事務所ということで始めたんですが、馬鹿みたいな勢いで売れてしまって、逆に困ったのです。
これだけの利益をロマリアから持ち出すと、絶対に禍根になるのですが、寄進は更にイヤなのでパス。
じゃぁどうするか、と考えたところで、ナイスアイデアが浮かんだのですよ。
そう、黒歴史の展示会をしてやるのです。

国を超えて、聖職者の方々が製作してくださった「死臭（ししゅう）」や「怪（か）（いが）

画」の数々を、皆さんに閲覧できるように、公の図書館を作るのですよ。

いえいえ、費用は僕が出しますから！！

どうだ、恥ずかしかろう！！！

そう思っていたのですが、何故か自分の部下や同僚を引き連れて現れて、そして自慢げに語るやつら続出なのです。

・・・おかしい、こんな気が違った内容、絶対他人に見せられないはずなのに・・・。

「あー、フレデリカ、団長？」

「この奇怪な現象の説明をするのです、ギーシュ」

「多分、私費でこの会場を開いたフレデリカに、存在を認められているという自己評価なんじゃないのかな？」

・・・・・・・・・

ボクは今、心底絶望的な気持ちになったのです。

正直に言うのですが、自分のたくらみが斜め上にずらされたなんて、久しぶりすぎて記憶に無いのですよ。

・・・・・・・・・

あ、そうか、「死臭（ししゅう）」や「怪画（かいが）」はここに集めてもらうのが一番なのです！！

実家や学園に持ち込ませない良い手なのです！！

災い転じて福となせっなのですよ！

「団長、現実逃避は程ほどにな」

「・・・なんて冷たい言葉なのでしょう、そんなレイナールは今度

カリン戦の先頭行きなのです」
「それって処刑命令だよなぁ！？」
「まさかまさか、生き残る確率がちゃんとあるんですよ？　処刑とは程遠いのですよ」
「いやいやいや、無茶すぎるって！」
「生き残れれば、トライアングルは硬いでしょう。スクエアすら届くやもしれませんね、というのがお師匠様の決め台詞なのです」
「むりだーーー！」

個人的にはイケルと思うのですが。
僕も届きましたし。

「ねーねーフレデリカ、これどうする？」

渡されたのは、黒歴史展に自慢しに来た聖職者の方々が持ち寄った果物や生ものの数々。
勿論消費するなら「デブ猫」が居るので問題ないのですが、数が数なので、結構余りそうなのです。

「・・・凍らせる？」

それでは細胞が壊れてしまうのです、タバサ。

「焼く？」

食べるバリエーションがほしいといってるわけではないのですよ、キュルケ。

「んー、氷室みたいなのがあればいいのにねぇ・・」
「ルイズ、それです！！」

そんなわけで完成しました保冷庫！
木製の箱と氷とを組み合わせた簡単版ですが、かなりの鮮度が保てること請け合いなのです。
このままでトリステインまで戻ったのですが、マルトーおやじが驚くほどの鮮度で保てたのです。
いやー、これはいいものだ、ということで、いろいろと改良を加えて売り出すことを決めたのです。
うん、保冷の材質も発泡剤を使えばいいし。
これは楽しいそうなのですよ！

第四十六話「お詫び」と「誤算」が生まれて（後書き）

というわけで、ロマリアからかえってくることになったのでしたｗ

第四十七話「出会いは突然に」が生まれて（前書き）

さてさて、何の脈絡も無い話に見えて、いろいろと関わってくる話なのです
おたのしみにｗ

第四十七話「出会いは突然に」が生まれて

学院に戻ると、王宮から呼び出しがきていたのです。
名目上は今回の働きに対する報償という事になっているのですが、明らかに別件の方が重そうなのです。

「でも、一応、国の頂点よ？　そんな人間があからさまに裏がありますって呼び出し方をするなんて・・・」

ルイズの疑問も解るのですが、国家権力も逆らえない存在といえば、三つしかないのです。

「三つ？」
「より強い権力、より強大な財力、そして・・・宗教」
「また、ロマリア？」
「それはないと思うのです」

十分たたいたのです。
しばらくは身動きとれないのですよ。

「じゃぁ・・・」
「財力だと思うのですよ？　今のところ動いているのですが、それでもトリステインは借財が多いのです」

ガリア、なら直接僕のところにくるでしょう。
なら、ゲルマニア？
でも、それならキュルケか双子経由、になるのですよ。
あとはどこ？

「・・・あ」

あるではないですか。
あの金貸し公国が。
国に恩が売れていて、無理な要求が通せる相手。
結構面倒な事になりそうだなぁ、と思ったのです。

ヒポグリフ隊の迎えまで来たのはどうかとおもうのですよ。
何しろ授業中。
明らかに目立ちまくりなのです。

一応、うちの猫の騎士団は「学生」なので着ませんでしたけど、
マンティコアの隊長である父上は同行しているのです。

「で、我が息子。今度は何をしたのだ?」
「聞こえが悪いのですよ、父上」

少なくとも国庫には納税的な意味で貢献していますし、某王族には教育的な意味で貢献しているのです。
外交という面でも間違いの無い貢献をしていると胸を張れるのですよ。

「・・・つまり、後ろ暗いことは無い、と?」
「そんな聖人君子、ロマニアにもいないのです」
「・・・自覚があるんだな、我が息子」
「心当たりは無いのです」

もちろん、「ばれている」心当たりが無い、という意味なのです。
少なくとも、異端審問されるネタには事欠かないのがボクなので

すから。

そんな心温まる親子の会話も一時中断。

謁見のまで控える僕ら親子の前に、もう一組の親子が現れます。

見た目だけなら荘厳な王族ですが、内面的なものがあるので結構形だけ敬っている僕なのでした。

「リステナーデ卿、表を上げてください」

すっと、同時に姿勢を正したボクと父上でしたが、今回の報奨対象がボクなので、一歩前に出ます。

「フレデリカ＝ベルンカステル＝ド＝リステナーデ。このたびの貴方の働きを労い、シュバリエの・・・・」

とりあえず睨んでおくですよ、ええ、わかってるんだろなぁ・・・と。

「位につきましては、未だ学生である立場もございますので・・・、おって報奨金の設定を致しますわ・・・」

「王家への献身は諸侯の責務。報奨を頂くほどではございません」

と、この一言で、結構な数の諸侯を敵に回したはずなのです。

何しろここ数年で見ても王国への貢献度で見れば僕を超える諸侯は少ないですし、そのボクが無褒賞となれば自分が請求できるわけでもない、ということなのです。

というわけで、その心意気はよし、しかし必然賞罰は必定、とか何とか大騒ぎの宮廷貴族や王宮スズメの皆様。

諸侯の皆様も生活がかかっているので大騒ぎなのです。

「・・・フレデリカ＝ベルンカステル＝ド＝リステナーデ、貴方の心意気は買いましょう。ですが貴方ほどの偉業をなしたものを報奨せねば、王国が立ち行きません。なにか望みはありますか？」

一杯あるのですよ？

王宮からの呼び出し拒否権とか、御花畑ｰ Ｓとの縁を切りたいとか、締め切り無視権とか・・・・。

勿論言わないのですが。

で、実際のところ領地は既に男爵の位を越えるレベルに来ているのです。

一段上の子爵へ階位を変更する話もあるのですが、現在の領地を考えるとそれでも足りないそうです。

・・・伯爵、は流石に貢献度があっても無理なので、父上の代で子爵領への更新をして、ボクに代替わりした時点で切り替えるそうです。

なんだか色々と付いてきそうですねぇ。

というわけで、地位も、土地も十分得られるので、全く求めるものなんか無いのです。

「尊き王族の方々に申し上げるのです。このたびの報奨は、民に還元していただくことを願うのです。フレデリカ＝ベルンカステル＝ド＝リステナーデが望むもの、それは人々の融和。やさしい世界になることを心から望むのです」

ボクのその言葉は受け入れられ、平民への戦費増税や臨時増税が期限限定で撤廃されたのです。

枢機卿は真っ青になっていたのですが、今年の流通税に対する収

益を考えれば大したことは無いはずなのです。
増えるお金には鷹揚ですが、減るお金には敏感、基本的な人間の反応ですね。

で、本命。

予想に違わず、某国からの面会者がきていたのです。
かの金貸し国、クルデンホルフ大公国の国主とそのご家族。
情報が遅れてしまって、先日の学園祭にこれなかったことを娘さんたちに切り込まれて、いろいろな政治的資金的有利を捨ててまで今回の面会をねじ込んだとか。
鳥の骨も外向的な面会だけで、色々と押しつけている無理が解消できるのならばということで、国への献身という先ほどの台詞を引っ張りだしやがったのです。
自分から申し出る献身とは別なので、もちろん貸しですよ？　といったら、非常に苦々しい顔ですが了解したのです。
うんうん、それでこそ苦労人。
胃に穴があくような顔が似合う人なのです。

面会に訪れたクルデンホルフ公は、金髪ながら洗練された迫力のある美男なのですが、そのお子さまたちが、なんというか、面白すぎたのです。
気弱な兄と強気な妹。
なんだか、すごく、すごく懐かしいんです。

「・・・セイマス＝アグリアス＝フォン＝クルデンホルフです。著作はいつも楽しませていただいています」

お兄さんの方は僕より一歳上だとか。

「ベアトリス＝イヴォンヌ＝フォン＝クルデンホルフですわ。先生の著作は楽しませていただいておりますの、おーほっほっほっほっほ」

・・・なんでしょう、このかわいい外見に負けないように淑女然とした物腰を無理に引っ張りだしている無茶な言動。

すごくかわいいのです。

というか、むちゃくちゃトキメくのです。

そう、それはまるで・・・・

「サトコみたいなのです・・・」

思わずつぶやいてしまった僕の台詞に、セイマス殿とベアトリス殿の目が見開かれたのです。

わなわなと震えるからだから腕を引き剥がし、そして尊いものを求めるかのように差し出される。

不安と、期待と、そして、何かを織り交ぜにしたかの表情。

これは、あまりにも見慣れた表情なのです。

「・・・リカ、ですの・・・・？」

その言葉、織り込まれた感情、間違いない。

「サトコ、なのですか・・・？」

滝のようにあふれる涙をそのままに、ベアトリス殿は僕の胸に飛び込んできたのです。

「リカ、リカ、リカーーーーー！！」

その涙、表情、そしてその笑顔、それは間違いなく北条沙都子。

そのとき、みーにもしーにもレナにも感じた感情が吹き出してきたのです。

胸の内から吹き出す感情は罪悪感。

僕は、やっぱり偽物なのだと思ってしまいました。

「・・・リカ、どうしましたの？」

「・・・何でもないのですよ、沙都子」

ゆっくりと沙都子をなでながら、僕はセイマス殿をみると、彼も苦笑いだったのです。

「もしかして、悟史なのですか？」

「・・・うん」

向こうの双子といい、こっちの兄妹といい、ずいぶんとご都合主義な話です。

とはいえ、この罪悪感を押しつぶしてでも二人には安心を与えてあげたいのです。

「・・・リカ、少し疑問がありますの」

「なんですか、沙都子？」

「・・・リカ、あなたもしかして年上？」

「悟史の一歳下なのですよ」

「・・・それなのに、なんでこんなに凹凸がないの？」

「失礼ですね、沙都子」
「で、でも、リカなら、絶対・・・」
「凹凸が少ないのは筋肉がつきにくい体質だからなのですよ」
「・・・・・？」
「・・・・みぃ？」

なんでしょう、すごく大きな食い違いを感じるのです。

「・・・ねぇリカちゃん。ちょっと聞いていい？」
「いいのですよ、悟史」
「もしかしてさ、リカちゃんって、男？」
「もしかしなくても、僕は男なのですよ」

「えええええええええ！！」

驚く沙都子。
あ、ああ、僕にとっては当たり前だったので説明し忘れていたのです。

「じゃ、じゃぁ、わたくし、だんせいのむねにとびこんでしまいましたのぉーーーー！？」
「淑女にあるまじき行為だったのです」
「うわーーーーーん！！」

そういえば公を置き去りだったのです。

第四十七話「出会いは突然に」が生まれて（後書き）

おまたせしました、「沙都子」爆誕！！
なんと、ベアトリス嬢に転生ですよ！！
・・・やりすぎですかね？ｗ

※今回の元ネタ
更新なし

第四十八話「強行軍」が生まれて（前書き）

みんな活動的なのですよｗ

第四十八話「強行軍」が生まれて

驚きましたわ、本当に驚きました。

かの有名な作家、フレデリカ＝ベルンカステルが、なんと古手梨花だったなんて。

そのうえ、あの容姿で「男」だったなんて！！

心底驚きですわ。

「驚くのはそればかりではないのですよ」

「・・・もう何をいわれても驚かないと思いますわよ？」

「ふっふっふ、それは沙都子の想像力が足りないせいなのです」

そういいながら語った言葉の内容には驚きまくりました。

なんとあの、「園崎魅音」さんと「園崎詩音」さん、そして「竜宮レナ」さんも、こちらの世界にいるというのです。

本当に驚きです。

加えてレナさんは、なんと、エルフに生まれているというじゃないですか！！

・・・さすがレナさん、人の想像の斜め上に行く存在ですわね。

ただ、寂しいことに、もう一人のニーニー、圭一さんはまだ見つかっていないそうです。

「そのうちひょっこり現れるのです」

そんなリカの言葉に安心しましたが、にぃにぃとわたくしの記憶の食い違いについてリカに確かめてもらったところ、たぶん、意識のあった時間に差があるのだろう、ということでした。

私や詩音さん、魅音さんの記憶は「あの」鷹野が銃を撃った瞬間のところまで。

銃弾が圭一さんに当たる瞬間に起きた不思議な時間と、その銃弾が真っ白に輝いたそのときまででした。

ですが、その後、リカは再び過去の雛見沢に戻り、運命を私たちと共に打ち破ったとのことでした。

そのときの記憶がないのは残念ですが、寿命を迎えることができたと聞いてうれしく思えましたわ。

そんな瞬間までの時間に記憶のある私に対して、にぃにぃはあの失踪寸前の記憶までしかないのです。

何か理由があるのではないかと思いましたが、この世界でにぃにぃと幸せに暮らすうちに、気にならなくなっておりました。

でも、リカの言葉を聞いて再び疑問がもたげたのです。

だから、聞きましたわ。

「リカ、何か知ってますのね？」

「それは質問ではなくて確信なのですよ？」

いいえ質問ですわ。

もちろん、答えは「イエス」か「ハイ」。

ベアトリスは、沙都子はわからないからと頭を痛めてるけど、僕は実のところ何となく判っていた。
僕の記憶が「あの」日までしかない理由。
それは、僕があの日以降、死んでいたか、意識が保てていなかったからだろう、と。
で、たぶんなんだけど、リカちゃん、フレデリカ＝ベルンカステル＝ド＝リステナーデは、その真実を知っているのだろうと。
沙都子は厳しく詰問してるけど、リカちゃんはノラクラと逃げているのが証拠だ。

リカちゃんのいう「幸せに暮らした世界」で僕がどうなったかだけでも知りたい気もするけど、今の自分の自力で支えるだけでも大変なので、気にしない方がいいかな、とも思う。
父上が言うように、いくら生まれる前の自分の記憶があったとしても、それは生きる状況でないのならば、今を生きるしかあるまい、と僕もそう思う。

「悟史、沙都子からシーのことを聞いたですか？」
「ああ、聞いてるよ。魅音と時々入れ替わって僕の世話とかしてくれて、そのうえ、沙都子を守ってほしいって電話で受けてくれたのが魅音じゃなくて詩音さんだったんだって。」

そう、あの当時、誰も僕たちを守ってくれなかった。
でも魅音、いや、詩音さんだけは僕たちを守ってくれようと、守ろうとしてくれた。
そればかりじゃなく、僕がいなくなった後も沙都子を守ってくれたという。
もう、感謝程度ではすまないと思う。

「どうやって感謝したらいいと思う？　リカちゃん」
「ぎゅっと抱きしめてあげればＯＫなのですよ」
「いやいや、だって、今やゲルマニアの貴族だろ？」
「ふっふっふ、そのへんは明日確かめるといいのですよ」
「え？」

聞けば、なんと魅音と詩音が明日、別件でトリステインに来るというのだ。
だったら、だったら、今更ながらだけど感謝をしようと思う。
心の底から感謝しようと思う。

リカちゃんからのフクロウ便を読んだ妹が、気絶した。

何かすごいことが書いてあるんだろうと思って読んで、妹の気絶が納得できた。
なんと沙都子と悟史を見つけたというのだ。
相手はクルデンホルフ大公国。
悟史はそのクルデンホルフ家の長男で、沙都子は妹だそうだ。
そりゃ、気絶するだろう。
心底探していた相手が、自分の届く範囲の地位に居ないと理解したのだから。
せめて平民、もしくは騎士階級なら良かったのだろうけど、さすがに王族相手じゃ・・・。

「おねぇ！　いますぐトリステインに行きますよ！！」

あ、復活した。

「つうか、明日到着じゃん」
「そんなのを待っていられません!!」
「・・・わかったよぉ、もう」

自分達用の馬車から馬を外して、私達は飛び乗った。

「あとは、ゆっくり来てねぇ」
「急ぎますよ、おねぇ!!」
「へいへーい」

潰す勢いで駆け出す馬を操る妹は、本気でこえー。
あたしもケイちゃん見つけたらこんな勢いになるのなかぁ、とか思ってしまった。

汗だくのシーの馬が飛び込んできたのは、もう深夜という時間だったのです。
リステナーデの別邸にいた僕がたたき起こされたのは寝入り端で、正直寝ぼけていたのですが、シーを見た瞬間背筋が凍ったんですよ。
なにせ「ウケケケケ」寸前の表情なのです。

「さとしくんはどこですか?」

感情という感情の消え去った顔のシー。

このまま会わせる事は不可能なのです。

「鏡を見るのですよ、シー。そんな疲労困憊の顔では落とせるものも落とせないのですよ」

「・・・・！！！」

はっ、といろいろな事に気付いたらしいシーは、近くにあった姿見をみて大混乱。

「今からお風呂を用意させるから、ゆっくりして、身支度を整えて、片手に持ってるミーを休ませるのですよ」

さらに自分がミーを引きずっていることに気付いたシーは驚いているみたいです。

「シーはいい女なんですから、絶対に気に入られるのですよ？」

「・・・ありがとう、リカちゃま」

かなり冷静になったらしいシーは、ボロ雑巾のようなミーをその場において、フラフラと浴場のほうに歩いていったのでした。

学園祭のときに泊まっていたので、一応場所は覚えているぐらいには冷静みたいですね。

「さーって、ミーはボクがヒールしておきますか」

「リカちゃーん、手紙なんかじゃなくて、もっと穏便な伝達方法無かったのなかー？」

「明日、トリステインに到着してから教えたら、僕が殺されるのです」

「おじさんが死にそうなんですけどー」

「即死じゃなければ、大概直してあげるのです」

「あー、うれしいなー」

ミーに付いている細かな傷まで直したボクは、入浴中のシーにミーを預けて、再び睡眠をとることにしたのでした。

もう起こすなよー、といったのですが、再び起こされて、やれ化粧だ衣装だなんだと・・・・。

まぁ殺されるよりマシなのですが・・・。

第四十八話「強行軍」が生まれて（後書き）

再会はいったん据え置きですw

※今回の元ネタ

「ウケケケケ」　・・・　本人なのですw

第四十九話「胸のしこり」が生まれて（前書き）

・・・ちょっと内面が露呈します

第四十九話「胸のしこり」が生まれて

再会した園崎姉妹と北条兄妹。

泣きながら現状報告と、これからの話をしている姿はほほえましいのです。

公は随分と双子を警戒していましたが、製紙革命中の話を聞いて興味を持ったようなのです。

今はみーとサトコが一歩はなれ、頬を赤らめつつ会話をしているサトシとシーに、暖かな視線を送っているのです。

「ま、こういう姿が見れるんなら、夜通しの早駆けも無駄じゃなかったかな？」

「・・・本当に、詩音さんの執念には恐れ入りますわ」

「にぃにぃとられて悔しいですか？」

「・・・リカ、意地が悪いですわよ？　にぃにぃの幸せを思えば、どこかの馬の骨と結婚するぐらいなら、ネェネェの方がいいに決まってますわ」

瞬間、真っ赤になってこちらを向くシー。

「さ、さとこ、いま、なんて？」

「・・ネェネェとお呼びしたんですわよ、詩音さん」

ぶしゅー、と真っ赤になって倒れたシー。

支えるはサトシ。

わりとお似合いな姿に私達は口笛を吹いて祝うのでした。

お互いに、これと言って用が無くなった二人は、トリステインの街中にデート。
で、ミーとサトコは、僕と一緒に学院見学に来ることになったのです。
まずは寮に案内したのですが・・・・

「リカ、なんで女子寮なのかしら？」
「・・・この見た目なので、男子寮に寝泊りすると襲われそうなのです」
「・・・納得したわ」

虚無の日では無い今日は授業中であることに間違いないのですが、なぜか学校中がざわざわしてるのです。
何事、とおもって、マルトーおやじに聞いてみると、涙を流して肩をたたかれたのです。

「りかちゃん、あんたはやっぱすげえ！！」

なんでも、先日の減税が交付されたそうなのですが「フレデリカ減税」という名前で発表されたとかいうのです。

「リカもすごいことするわね」
「りかちゃん、おじさんとこでもやってよ」

まぁ、無理ですよ？
とまれ、平民の大半が減税の効果を受けるわけで、フレデリカ万

歳、猫の騎士団万歳という騒ぎらしいのです。
こうしている間にも侍女の皆さんが手を振ってますし。

「このままだと面倒ごとになりそうなので、寮の部屋で一服なのです」

「お、じゃぁ、茶でも入れさせるぜ」

さすがマルトーおやじ、気が効いてるのです！

で、自分の部屋に行くと、すでに常備品タバサと、オプショナルイズ、そしてキュルケがいるのです。

「とりあえず、ただいまなのです」

「「「おかえり」」」

もくもくと新作を読むタバサ、モシャモシャとハシバミチップスを啄ばむキュルケとルイズ。

「ねー、りかちゃん。もしかして同棲してるの？」

「真っ向否定なのです」

流石にシモネタは封印中らしいのですが、三人と話しているうちに開封して、それはそれは聞いていられないレベルになっているのです。

さすがミー、サトコは聞いちゃ駄目なのですよ。

「あ」

「なんですの、リカ」
「来年はウチに入学するですか？」
「勿論ですわ、リカがいるんですもの」

可愛いですねー、サトコ。
可愛すぎなのです。

思わず抱きしめてナデナデなのですよ。

「・・・そう、だったのね、フレデリカ。貴方の趣味が見えた」
「タバサ、誤解が大きいみたいなのです」
「・・・こうなると、成長中のわが身が恨めしいわ」
「大して大きな成長はしていないのですよ、ルイズ」
「ほーっほっほっほ、昔からリカはわたくしにメロメロですのよ！？」
「・・・事実無根ではないのが悔しいですね、サトコ」

まぁ、こんなバカ話をしていたところ、気付けば廊下が騒がしい。
覗いてみると、なんと侍女の群れ。
一枚のトレイを奪い合って、メイドファイト中なのです。

「・・・・・なにしてるのですか？」
「「「「はっ」」」」

聞けば、マルトーおやじに頼まれたお茶入れ当番を争っていたとか。
まったく、最近の皆さんはアクティブすぎなのですよ。

そんなこんなの再会劇は、この後少し長期になったのです。
かなり盛り上がったサトシとシーは、そのまま別邸で逢瀬を繰り返し、その代わりにミーが製紙の仕事に専従。
サトコもサトコで別邸と学院を往復生活をして、このまま学院に入学するつもりらしいのです。
ミーもサトコも、別邸に居座った二人に気まずい思いをさせないように気を使っているらしいのですが、大公のことはガン無視らしく、すごすご帰っていったのを見送ったのは僕だけだったのです。
可愛そう、かわいそうなのです。

レナにも連絡を取ったところ、近々顔を出すといっていたので、圭一を除く雛身沢組は全員集合できそうですね。

・・・その時にでも僕の秘密を明かしたほうがいいのかな、と思うのです。

皆から、多分、怒られると思うのです。
皆から、多分、軽蔑されると思うのです。
それでも、ボクは本当のことを告げないといけないと思うのです。
いつか、その日が来たときに、圭一とも出会いたいと思うのは贅沢でしょうか？

第四十九話「胸のしこり」が生まれて（後書き）

一応、オリ主であるフレデリカも悩んでいます。
そんな感じです

第五十話　「伝説的使い魔」が生まれて（前書き）

さー、とうとう使い魔召喚です！
今回で、とうとう皆さんの予想の結果が・・・ｗ

第五十話　「伝説的使い魔」が生まれて

先日、ロマリアからかえってくるときに思いついた氷の魔法を使った保冷庫は、凄く好評なのでした。
ド・リステナーデとラ・ヴァリエールの工業製品にしようと思っていたのですが、水と風の素養が必須となると限定過ぎるので、本当に大きな家でしか使えないのです。
爆発的ヒットになると思ったのですが。

こうなるとうる覚えの「放射冷却式」の冷蔵庫を開発するしかないのかもしれないのです
ミーにその辺の相談の梟便を飛ばしたら、「こっちで作らせて」って泣きついてきそうです。

以前作った気化冷却をつかった冷風器は、爆発的なヒットになったのですが、乱造コピー品が横行したのです。
元もとの構造が簡単なので、皆がまねをしたのですが、除湿の部分がイマイチらしく、湿気っぽい部屋になるのです。
これはヴァリエールとリステナーデのキモの部分なので、公開されていないのですが、公開できない部分でもあるのです。
なにしろ、除湿は精霊さんにお願いしているのですから。

冬の寒い時期も越えましたし、まぁ、もうすぐ暑くなる季節なので、また作り込みをしないといけませんが、今は別のものの作り込みなのです。

明後日に行われる「使い魔召喚の儀式」の際に、呼び出されるであろうルイズの使い魔のために、色々と準備しておいてあげようと思うのです。
呼び出される対象が原作どおりなら、多分日本の少年が呼び出されてきてしまうのです。

なんの断りも無く、強制的に。

ボクはせめて彼の負担が少なくて済むように、世界の説明や意識の問題、そして身分制度に対する常識などをまとめた「日本語」の手引書や、空腹にならないようにある程度の食事を準備しておいて揚げてういるのです。

もちろん、言い訳としては「使い魔召喚成功お祝い会」の準備ということになっているのですが。

「ねぇ、フレデリカ、これなに？」
「新しいお菓子の試作品の準備なのですよ」
「・・・そこのところくわしく」

ふらりと現れたルイズはいいのですが、影も無かったタバサ、どこから現れたのですか。

「詳しい説明を、フレデリカ」

とりあえず、構造やら中身やら製法を説明したら、そのまま倒れたのです。

「・・・あまりの想像外の内容に意識が遠のいた」

「タバサ、あんたどれだけ食い意地がはってるのよ」
「・・・私は未知への探求者。食い意地じゃない」
「ごめん、理解したわ」

わりとタバサの視線は、本気の視線だったのです。

とりあえず、火の魔法を使った石釜オーブンをつかって焼き上げたシューにカスタードクリームと生クリームを封入したところで完成。

全部で２０個ほど作ったのですが、確保しておいた5個以外、試食メンバー全員に食べられてしまったのです。

タバサは「このお菓子のためになら命が張れる」と絶賛。

あまりの美味しさに「ダイエットキラー」という渾名まで得てしまったシュークリーム。

この勢いで色々と開発しようか悩むところなのです。

これにマヨネーズも安定開発できていることを並べると、実に幅の広がった食生活なのです。

ですが、あれ、がないのです。

本当に残念なのですよ。

そんなこんなな準備を終えた今日。

とうとう使い魔召喚の日になったのです。

皆いろいろと属性を持っているので、それなりの使い魔が召喚されているのです。

ギーシュはジャイアントモール。

モンモランシーはカエル。

レイナールは梟。
アランはオオタカ。
みんな可愛がってデレデレ。
だからボクも、心の其処から期待を込めて呪文を唱えたのです。

僕の召還の扉は一度で開いた。
その銀色の扉からなにがでてくるのか、期待は盛り上がっていた。
タバサのような竜もいいと思うし、ギーシュのようなモグラもいいかもしれない。
ただ、僕の属性はマンベン無いものなので、なにがでてくるかもわからないのです。

・・・もしかして、赤坂が・・・

そんなことをおもっているところで、それが出てきたのです。

「りーかーーーーーーーー!!!」

ばびゅーんと飛んできたそれを、僕は踵で迎撃してたたき落としましたのです。

「ひ、ひどいのです、ひどいのですよリカ!!」
「酷いのはそっちなのです！　いきなり至近距離で何か飛んでくればたたきおとすのが必定なのです！」
「どこの世紀末覇王なのですか、リカ！」

「とりあえず黙るのです！」

引き上げてそのまま契約のキス。

「うにゃーーーーー！　リカが百合になったのですーーーー！」
「今の僕は男だから百合じゃないです！」
「ひにゃーーーーー！　リカに無理矢理されたのですぅーーーー！」
「黙るがいいです！」

ヘッドバットで悶絶させ、どこにルーンが刻まれたかを確認すると、なぜか赤くなった額にルーンが・・・。
それも「神の頭脳（ミョズニトニルン）」なのです・・・・。
なぜ？
僕は虚無じゃないのに・・・。

「ひどいです、ひどいのです。無理矢理したのはリカなのに、まるで僕が悪いかのような暴虐残虐ファイト、実に人でなしなのです～」
「あー、わるかった、わるかった、わるかったのですよ～」
「心がこもっていないのです！！」
「じゃ、これ」

とりあえず、羽入の可能性が高かったので準備しておいたシュークリームを食べさせると、瞬間的にニッコニコになる。

「さすがリカなのです！　あいしてるのです～」

じっくりパクつく羽入をおいておいて、僕はコルベール先生に向き合いました。

「とりあえず、使い魔の契約まで終了なのです」

「召還足蹴契約懐柔って、あり得ない流れをみた気がするのだが、とりあえず納得しておくことにしましょう・・・ところで、あの使い魔は・・・？」

「亜人の鬼族なのです。昔、御師匠様に吹っ飛ばされた山の中で罠にかかっていたのを助けた縁があるのです。」

「ほほぉ～、確かに縁のある幻獣が呼ばれたという前例もあるね」

「・・・あと、ルーンについては学園長も含めた相談が必要なのです」

「・・・危険なのかね？」

「・・・なぜ「あれ」なのかが意味不明なのです」

とりあえず、召還が続く中、みんな何かを祈りだしたのです。

「かわいいかわいい女の子、美少女希望、巨乳希望！！」「フレデリカみたいな男の娘希望、希望！！」

「ぐあー、美女、美女しかねぇ・・・・」

欲望丸だしなのですよ。

そんな中でも切実なのはルイズ。

「頑丈な男の子。頑丈な男の子。性癖にも幅があって柔軟な男の子。エレねえ様の婿になっても大丈夫な男の子！！！」

・・・ルイズ、それは召還で呼べるレベルを超えているのですよ？

「五つの頂点たるペンラグラムよ、我が望みに答えし全能なる運命の破壊者よ、ソナタを求め訴える、ソナタに求め訴える！　運命の破壊者よ、我が召還に答えよ！！」

一瞬生まれた銀の扉だったが、誰かが出てくる前に爆発した。
さすが狙撃、そう思ったのだけれども、それは違っていた。

確かに呼んだのだ、頑丈な男の子を。
確かに呼んだのだ、全能なる運命の破壊者を。
そして現れたのだ、永遠の運命から解き放った勇者を。

「お、おおお？　何で俺は？　ここはどこだ？」

黒髪で、ちょっとワイルドな感じの、そんな感じの男の子。
運命なんか金魚スクイの紙みたいに破るといってくれた、彼の名は・・・・

「圭一！！」

「え、ええ？　りかちゃん！？」

僕が飛びつくと、少し驚いた後で抱きしめてくれた。

「え、え、ええ？　リカちゃん急に成長した？　というか、その格好なに？　つうか、ここどこよ？　俺は確か鷹野の銃に撃たれそうなところで・・・・。」
「圭一、詳しい話は後にするのです。少なくとも、今全部を説明することは時間がなくてできないのです。」
「・・・わかったよ、リカちゃん。おれはリカちゃんを信じるって

決めたんだ。だから少しぐらいリカちゃんも信じてくれるかな？」
「アイアイなのですよ。・・・というわけで、ちょっとくるのです」
「なんだい、リカちゃん。」

くいくいとひっぱって、今にも泣きそうなルイズの前に立たせるのです。

「フ、フレデリカ・・・。」
「ルイズ、君は大成功したのですよ」
「ほ、ほんと？　ほんとうに？」
「ホントなのです。彼の名前は圭一＝マエバラ。あらゆる性癖に対応でき、SでもMでもバッチこいの強者なのです！！」
「おいおい、ほめるなよリカちゃん」

冗談だと思ってるのでしょう、圭一はいい感じにポーズを取ってます。

「じゃ、じゃぁ、エレノオールねえ様の相手も・・・。」
「ふっふっふ、ここで圭一に質問です。見た目クール、中ツンデレ、ツン期が長くてデレが絶望のツンドラ美人。どうおもうですか？」
「バッチコイ！　めがねが似合ってタイトスカート、ハイヒールならなおよし！！」
「「「「「おおおおおおおおお！！！！！」」」」」

エレねえ様を直接知っている団員があまりにぴったりな表現に感動しているのです。

「み、み、ミスタ圭一、少しかがんでくださる？」
「あ？ああ、うん。」

余りに真剣な様子に、戸惑いながら従う圭一。
ルイズはしばらく深呼吸して、そして圭一に向き直る。

「五つの頂点たるペンラグラムよ、・・・・以下略、エレノオールねえ様の婿げっとじゃーーーーー！！！！」

なんつう呪文。
というか、呪文じゃないし。
とはいえ無事圭一にルーンが刻まれたのです。
・・・・・・なぜか両手に。

第五十話　「伝説的使い魔」が生まれて（後書き）

というわけで、鉄板召喚ですｗ
羽入＆圭一は、まぁ、ブレの無い召喚ですよね。
ルイズの召喚目的もアレですがｗ

とはいえ、フレデリカの召喚の所為で、人間召喚をうらやましがられたルイズなのでしたｗ

第五十一話「闇の秘密」が生まれて（前書き）

いやらしい話ではありませんｗ

第五十一話「闇の秘密」が生まれて

とりあえず、簡単に現状を説明したのです。
圭一が死にそうになっていた世界とその後の世界で救われた僕。
そしてその世界の後で転成した僕が男であること。
この世界の成り立ちと今の生活、そして圭一の立場。

「ふーんじゃぁ、俺はルイズちゃんのサーバントってことでいいのか？」
「メイドでもいいのですよ？」
「・・・心の傷がバクバク開くので勘弁してください」

で、今僕がやっている活動を説明すると、圭一は瞳を輝かせます。

「つまり、俺も萌の伝道師になれるってことか？」
「というか手伝ってほしいのですよ。さすがに一人で執筆できる量じゃないのです」
「よっしゃ、じゃぁ、俺に男のロマン部門を任せてくれ！！」
「とりあえず、読み書きの練習が先なのですよ」

そういって手元の本を見せると、んーっとみた後でニヤリと笑う。

「ドイツ語、つうか、ゴートの系統だろ？　語彙と文法を勉強すればいけるぜ」
「さすが圭一、口先の魔術師なのです！」
「おいおい、ほめるなよ～」

わっはっは～、と笑う圭一ですが、本気で感心したのですよ。

ドイツ語の系統じゃないかと思ってはいたのですが、もう一段昔の言葉だったとは思いもしなかったのです。

「ね、フレデリカ。ミスタ圭一とお知り合いなの？」

「ん、ああ、ミスタ圭一は東方の賢者なのです」

ついっと視線を向けると、圭一も乗ってきた。

「ミス、先ほどは唇を失礼しました。私の名前は圭一＝前原。りか・・・フレデリカ卿の友人にして戦友です」

さすがなのです、つっこみどころはあれども逃げての多い自己紹介、流石なのです！！

「あの、その、急遽呼び出して申し訳ないと思っておりますが、その・・・。」

「ミス、男たるもの、眼前にそびえ立つ無理と無謀に立ち向かうもの。美女美少女の頼みならばなおのこと！　それこそが男の真骨頂！」

よく言ったのです、圭一。

もちろんそれは死亡フラグなのです。

なーむー。

「で、では！！　あの、その、一番上の姉の婿になってくださいませんか！？」

もちろんここで怯まない、前原圭一ここにあり！！

「・・・私は問題ありませんが、お姉さまにも選ぶ権利がございま

すでしょう。私めはいつでもお姉さまの最後の砦として待ちましょう。」

ふっふっふ、逃げたつもりですね圭一。

しかし、エレオノールねえ様にはすでに退路はなく、最後の砦とか聞けば速攻で逃げ込む事請け合いなのですよ!!

「よかった・・・ミスタは紳士ですのね?」

「いえ、在野のただの男です」

「紳士(へんたい)なのは確実なのです」

「おいおい、りかちゃん、ほめるなよ」

そんな心温まるコントの裏で、召還は続いていたのですが、マリコルヌが呼び出した猫を見て、僕と圭一は驚きの声を上げたくてもあげられなかった。

その巨体、その風格、その赤いチャンチャンコ。

間違いない、その姿。

間違いない、その風格。

「「猫大将(ブータニアス・ヌマ・ブフリコラ)!!!」」

「なーう。」

その返事にハイタッチの僕と圭一。

「り、りかちゃん、古バルカラル語、いけるか? さすがに俺は無理だ」

「僕はいけるのですよ、黒猫にお任せなのです!!」

興奮のままに恭しく礼を取る僕。

「（偉大なる猫の王よ、我が友の召喚に応じていただきありがとうございます）」
「（よい。われも既に役目を終えた身。戦いも終わった世界で朽ちるよりも戦いに身を投じようと思っただけじゃ）」
「（その気高き御心に感謝します）」

「ね、ねぇミスタ　ケーイチ。フレデリカは何ニャゴニャゴ言ってるのですか？？」
「静かに。あれは猫精霊の言葉、古バルカラル語だ。」
「・・・精霊語。すごい・・・フレデリカすごい・・・。」

「（偉大なる猫の王よ、いかなる盟約を共に召喚に応じてか？）」
「（我をあがめし精霊騎士の宣誓と、我を戦いに導く運命を求めに）」
「（ならば、我が騎士団の象徴へお願いいたします。我が騎士団の名をケットシーと申します。）」
「（ほほぉ？　我らの名を冠するか、人族の英雄よ）」
「（私は英雄などではありません。英雄の語り手でございます）」
「（謙遜はよい。ソナタには「青」に通じる気風がある。それを認めぬなら契約は無しじゃ）」
「（・・・それは、無体な）」
「（王とは、神とは、そう無体なものよ）」
「（・・・認めましょう、猫の王よ）」
「（ふむ、ならばソナタを騎士団長と呼ぶとしよう）」

「リカちゃん、話は纏まったみたいだな？」
「はいなのです。ブータニアス・ヌマ・ブフリコラ卿は、マリコルヌの使い魔になると共に我がケットシーの象徴として、戦乱を渡り歩き勝利を得ることを望んでいらっしゃる戦神なのです！」

「「「「「おおおおお！！！」」」」」

「しかし、団長。猫・・・猫大将がなぜ戦神なんだい？」
「古来より、戦の神はモフモフの毛皮をきてニャーと鳴くものなのですよ？」
「なーう」

そんなわけで、我が騎士団に新たな仲間が加わったのです。
金棒の圭一と猫の騎士団象徴ブータニアス・ヌマ・ブフリコラ卿。
ブータニアス・ヌマ・ブフリコラ卿と共に歩くマルコリヌの姿は、学園周辺でも有名になったのです。

夜、さすがに女の子と一緒の部屋はまずいという事で僕の部屋にきた圭一は、今までのことを一部始終説明されてぐったりしているのです。

「さっすがに異世界つうのは驚いたな。」
「で、左手のルーンは「ガンダーヴル」武器を扱うもの、右手は「ウィインファーヴル」獣を扱うものの象徴なのです。」
「で、羽入ちゃんの額のが・・・「神の頭脳（ミョズニトニルン）」か」
「魔具なら何でも使えるという迷惑なルーンなのです」
「迷惑は酷いのです！！　「おやしろさま」たる僕にはぴったりなのです！！」
「それが一番の驚きなんだよな。あのおやしろ様が、こんなかわいい女の子だったなんて・・・。」
「か、かわいいだなんて・・・。口説いても無駄なのですよ、圭一」

「いや、ほら、うーん。調子狂うな」

いやんいやんと跳ねる羽入をみて苦笑いの圭一。

まぁ、真実とはそういうものなのです。

とはいえ、さらなる真実は語るまでもないのです。

まさか、僕が外装だけの偽リカであること何で説明する必要なんてないのですよ。

「でさ、リカちゃん。俺ってやっぱ戻れないのかな？」

「・・・難しいのです。あの瞬間のみー達には悪いのですが、殺されることが決まっている世界から圭一だけでも引き釣り込めたのはルイズの功績だと考えているのです」

「さらに、何人も引っ張り込めない、か。」

「その点は謝るほかないのですよ」

「いや、リカちゃんのせいじゃないのは理解してる。理解してるんだが、な」

圭一は、笑顔の中で涙を流します。

「この世界のルールは非常で無情です。ですが、僕やルイズが必ず後ろ盾になるのです。だから、力を貸してほしいのですよ」

涙を流す圭一を抱きしめると、圭一も僕を抱きしめた。

「・・・はぁ、本当にリカちゃん、男になっちまったんだなぁ。」

「ごつごつしていて気持ちよくないですか？」

「いや、別の意味で」

「ホモ野郎だったら閉め出すのですよ」

「それは大丈夫。おれ、美脚派だから」

やりますね、圭一！！
エレノオールフラグ乱立なのですよ！！
これは剣術と魔法と騎乗をマスターして、白馬の王子様計画実行なのです！！

いや、右手と左手で、バッチこいじゃないですか！
礼儀作法をたたき込めば、若いツバメの出来上がりなのです、すごいのですよ圭一！！

「・・・リカちゃん、もしあして不穏なこと考えてる？」
「にぱー」
「頼む、否定してくれ」

「にぱー」

疲れた圭一が寝たあと、僕は羽入に向き直ったのです。
用件は解っているはずなので、ずばっと切り込むと、羽入はニコニコでした。

「リカ。リカは自分で思っている以上にリカなのですよ。この世界のリカはフレデリカ、アナタなのです。気後れする必要も何もないのですよ」
「でも・・・」
「こう考えてほしいのです。ループを繰り返した古手梨花に、もう一人の記憶がある、その程度と」
「じゃぁ、僕は、みんなの期待通りに古手梨花を名乗っていいのですか？」
「ぼくは大歓迎なのですよ」

唐辛子のない世界は最高なのです～、とか跳ね回る羽入を僕は抱きしめたのです。
耳元でありがとうとささやくと、羽入も抱きしめなおしてくれたのです。
まるで母上のような温もりなのでした。

「梨花ならもうぐっすりなのですよ、圭一」
「・・・やっぱ気付いたか」
目の前でにっこり微笑む羽入ちゃんは、あの頃と変わりなかった。

「やっぱり圭一にも色々な記憶があるのですね」
「ああ、皆を傷つけたときやら橋から落ちたときやら、あの戦いを潜り抜けたときの、な」

そう、オレには様々なオレの記憶があった。
そして、梨花ちゃんの言う「あの」時の記憶も、その後の記憶もあった。

「それは、とてもあり得ないほどの奇跡なのですよ、圭一」
「判ってる。こんなことが二度も三度もおきるなんて、奇跡以上の奇跡なんだろ？」

俺の言葉に静かに頷く羽入ちゃん。
彼女が神であることも、そして人間として暮らした未来の記憶もあるので、結構複雑な思いがある。
彼女の来歴を調べるために、大学でいろいろと研究した影響で、この世界の言語も凡そ判ったぐらいだ。

「リカにはあまり言わないであげて欲しいのです。リカは皆を自分が巻き込んだと思っているのです」
「わからないでも無いけど、言わないことにするよ」

苦笑いで答えをかえすと、羽入ちゃんはにっこり微笑んだ。
それはまるで慈母のもの。
それは長年りかちゃんの保護者であったことから生まれたものだろうか？

「ふふふ、これでも一児の母だったこともあるのですよ？」
「うわー、想像できねぇ」

梨花ちゃんにもオレにも言えない秘密がある。
こんな世界で出会った二人だからこそ、明かせない秘密。
それを、いつか話せるときがあれば、本当に嬉しいと思いつつ目を閉じたオレだった。」

第五十一話「闇の秘密」が生まれて（後書き）

なんと、圭一、スーパーＫＥＩＩＣＨＩでしたｗ
怪しげな知識も経験も、かけらの記憶の集合体だったわけです。
チートすぎますかね？　でも、元々のリカちゃんも半ばチートだしｗ

※今回の元ネタ
猫大将（ブータニアス・ヌマ・ブフリコラ）　・・・　ＰＳゲーム　ガンパレードマーチ
古バルカラル語　・・・　ＰＳゲーム　ガンパレードマーチ　・・・
ドラマＣＤより・・・猫精霊の言語
戦の神はモフモフの毛皮をきてニャーと鳴くものなのですよ？　・・・
ＧＰＭ内の台詞より借用

挿話０４　古手梨花と恋姫０４（前書き）

フレデリカとゼロ魔　２００万ＰＶ突破記念！

古手梨花と恋姫の続きでっす！

挿話０４　古手梨花と恋姫０４

悪辣なる四家から洛陽と天子を取り戻すというお題目を掲げて挙兵したのに、官軍は攻めてもこない。
これは天が我らの行いを認めたからだ、というのが劉表だの劉障の田舎ものの言葉だった。
で、旗頭となっている袁術ちゃんは高笑い。姉の袁紹系のバカだわ。

劉表だの劉障だのの田舎者である彼らは広大な土地を持っているくせに治められないものだから、新たな土地と権力を求めてやってきた狗だ。
そしてその他の雑兵も間違いなく狗。
誇り高き狼などいない、そんな連合軍の盟主とあがめられているのは、袁術。
バカを頂いた狗の集団。
まだ黄巾の方が性質（たち）がいい。
とはいえ、その袁術に飼われている状態の私たちも大概だけど。

「まったく、こんな行軍の殿とはいえ一緒にされるだけで名を落とすってものよ」
「そういうな、雪蓮。士気も熱意もすべて物欲という、希にみる見せ物だぞ？　これから咲きこれだけ愚かな人間が一堂に会する機会などありはしないだろう」

バカ話はしているけど、私も冥琳も殺気を隠すのに必死だった。
なにしろ、あの穴蔵にこもって出てこない劉表（バカ）が目の前にいるのだから。

槍一本、いや、弓一本で殺せる位置にいる。
そう考えるだけで気が狂いそうだった。
お母様の、孫堅の仇。

戦場での生死は猫の目のようなものだ。
一瞬で変わってしまう。
しかし、卑怯な策謀で狂わされた運命だけは絶対に許しはしない。
目の前で冷たくなってゆくお母様を思い出すだけで、歯が砕けどうなほどの怒りを覚える。

「雪蓮、正気に戻れ」
「・・・しばらく離れるわ」

屈強な精神を持つ孫呉兵すらおびえさせているのだ、私が今、行軍している意味などない。

「卑怯討ちは「あいつら」の得意技だ、気をつけろよ」
「ふん、できるならやってみろってのよ」

その前に私は自分の怒りに飲まれて死ぬかもしれないけどね。

朱里からの書簡をみて、私たちは怒りに燃えた。
いわれのない罪状とでっち上げの風評。
明らかに、庶人ですら気付くであろう偽りの悪評を元に、諸侯はこぞって洛陽に攻め込もうとしていた。

袁術を盟主とした「救国連合軍」その数２０万。
あり得ない数といえた。

「大丈夫なのですぞ、愛紗。実働はその三分の一以下なのです」

軍師たちの意見は一緒だった。
少なくともそれだけの軍を展開できる場所はなく、一度に展開して攻め込めるであろう数が7万を下るそうだ。
しかし、一度に戦えぬからといって、２０万の数が減るわけではない。

「確かに都には、各軍を併せても１０万ほどしかいませんが～・・・」

風の言葉が一度切れた。
思わず注目する私たち。

「・・・ぐぅ」

「寝るな！」
「おおっ、さすが愛紗ちゃん、よいつっこみなのです～」

細かなつっこみで呼び戻した風の言葉は続いた。

「・・・少なくとも、本拠地の兵力をあわせるとそれ以上になるのです～」

つまり・・・・

「なるほど、関攻め中の軍の背後を絶つ、か？」

「それも良いですが、とっとと抜け作さんたちの本拠地を落としてしまう方が効果的ですねぇ～」

さすがにそれは武人の本分ではない。

「でもですね、愛紗ちゃん。官位の指名は王権なのですよ。そして言うことを聞かない人は剥奪されるべき事なのです」

「ほほぉ、つまり、帝に太守や役職の権利を剥奪させ、不当占拠しているその部下を追い出してしまう、ということか？」

「風たちの元に届いた計画書状にはそのように書かれています～」

見せられた書状をみて、あの黒猫の、古手梨花（クーディ リカ）の恐ろしさを感じた。

内容は四段階にわたるもので、一段階は救国連合の足止めと時間稼ぎ。

第二段階は、出兵した家の地元で出兵の不当性や行動の不義理さの噂を蔓延。

第三段階で時間稼ぎをしている戦場で、勅命で罷免を発表。

第四段階で守備地営地からの追い出しを、四家及び孫呉に命令。

もちろん即時実行。

法的な根拠だの何だのは後付けだ。

なにしろ朝敵にされてしまうのだから。

主戦力は、間違いなく「公孫軍」になるだろう。

他の戦力はというと、曹家・董家は黄巾鎮圧のために全軍出動状態。

袁家も現在、部隊再編が終わっていない。

が、公孫軍は大部分の実働部隊が本城に残っており、準備も万端だった。

欠けているのは主を守護する親衛隊である流琉と季衣の部隊だけ。
この時点で、公孫軍の実働戦闘部隊全体を動かせるといえる。

「あ、蒲公英ちゃんは、白蓮様のもと、というか梨花様のところにいってほしいのです～」
「え～、なにか面倒ごと～？」
「いえいえ、実におもしろおかしいようなのです」

風が見せた書状をみて、蒲公英は実にうれしそうにほほえんだ。

「さっすが、梨花さま！　わかってる～♪」

なんというか、与えてはいけない奴に刃物を与えた、そんな感じを覚えた私だった。

梨花様も季衣も、何というかお気楽すぎる。
氾水関から見下ろす軍勢は、まさに人の海。
何人いるかなんて数えたくないほどだった。

「すごおすごーい！　梨花様、梨花様、これ、全部倒していいんですかー！？」
「これこれ、季衣ちゃん。全部はさすがに無理だと思うのですよ？」
「でもでも、梨花様が「全力」を出せば、五万だろうが十万だろう

が、一瞬だって、白蓮様が言ってましたよ？」

実のところ、これは事実。

少なくとも、一万の黄巾を一瞬で・・・という現場には居合わせたし。

なんというデタラメとしか思えなかった。

「季衣ちゃん、これは、バカを根絶やしにするための作戦なのです。ここで一気に先滅しても、巣穴の奥にいる害虫は生き残るのですよ」

「ああ、流琉も嫌いなあれ！」

「思い出させるな、バカ季衣！！」

「「・・・・あ」」

なぜか砦の外に、うれしそうな笑顔で飛んでゆく季衣。

いつもなら軽く受けるくせに、こう言うときだけ美味しい・・・

いや、変なことを！！

・・・落としたのは悪かったけど、なぜか「害虫」みたいな感じで壁を上ってきたのはキモかった。

親友止めようかな？

～とある孫呉の陣内。

「ねぇ、冥琳」

「むりだ」

「いや、でも、あのちびっこい・・・」
「無理だ」
「・・・ねぇ」
「あれをやったら、絶交だ」
「・・・ごめんなさい」

～とある袁家の陣内。

「七乃」
「きこえません」
「紀霊」
「きこえませーん」
「だれかあれをやってみせてたもれ」
「「きこえないっていってるでしょーが！」」
「・・・なぜじゃ？」
「これ以上追求したら、蜂蜜禁止ですよ、美羽さま」
「わかったのじゃ・・・　（ガクブルガクブル）」

多少の衝撃的な事件はあったけど、汜水関での籠城戦は始まったばかり。
攻めてこようと挑発されようと、地道な攻防で時間を稼がねばならないのです。
たとえ奇抜な策を練られようとも、たとえ猛攻にあおうとも、たとえ、あくびをするほど相手が愚鈍で攻めあぐねいている時間だけで時間稼ぎができてしまおうとも！！

「・・・ねぇ、梨花。そろそろ春蘭の抑えが効かないんだけど」
「主らしく、ビシッとやるのですよ」
「・・・そうね、そういう趣向もありかしら」
「詳しく聞かないですよ？」
「あら、百戦錬磨の女殺しさんの台詞じゃないわね？」
「僕は純愛の人なのです」
「なら私は親愛のひとね」

「華琳さまぁ・・・、もう、もう、わたしはわぁ・・・・」

妙にくねくねしている春蘭は、目をぎらぎらさせて大剣を持っているのです。
というか、妙に色っぽすぎる。
これが人を切りたいという欲望じゃなければ、もてるんだろうけど、ズバーっと人を「殺(や)りたい」からという欲望が大元じゃぁ、ねぇ？

「春蘭、今、梨花から新たな趣向を聞いたわ。今夜試すわよ？」
「はい♪　華琳様！」

当面の危機は去ったようなのです。

「梨花様！　来たよ～！」
「待ってたのです、蒲公英」

ぱーんとハイタッチ。

「あれ、蒲公英さん」

「やっほー、流琉ちゃんおひさしぶりぃ」

きゅんきゅん手をふる蒲公英は、いたずら小僧のような顔で僕をのぞき込みます。

「で、梨花様。好き勝手できるってほんと？」

「もちろんなのです。あと、僕の知る罠の神髄も授けるのです」

「やったー！　これで脳筋と馬鹿を血祭りに上げられるんですねぇ！？」

「存分にやるのです」

さぁ、役者はそろったのです。

あとは、みんなも知らない第五段階も含めて、じっくり攻めるのですよ。

いやぁ、まさかの氾水関止め一ヶ月。

予想の斜め上をいく鈍くささ。

私（タンポポ）が梨花様の召集に応じて陣に参上したときに、すでに連合は布陣していた。

だから直ぐにでも戦闘開始かと思いきや、全く攻めてこない。
何をしているのだろうと思っていると、梨花様に黒猫情報が入った。
聞けば、細々とした馬鹿みたいな事を会議しており、まったく軍議に進まないとか。
たとえば糧食の質が悪いので細分敗しなければならない議題とか、作戦指揮における責任分担とか、損害時の連合負担率は、とかなんだとか。
もう、こんな下らないことをよくも思いつくなぁ、と大いに感心してしまった。
とはいえ、これ自体が密偵に対する欺瞞情報の可能性もあるので細心の注意を払っているらしいのだけれども、どうにもこうにも本気としか思えないとか。
試しに、黒猫によって劉表軍の糧食を放火したところ、あまりのことに震えだし、こんな不公平なことがあるかといって、他の軍の糧食を奪いに走り、大騒ぎになったとか。
密偵の内部工作だけで、連合をつぶせるんじゃないかなぁ、と私（タンポポ）が聞くと、梨花様はにやにや笑いでした。
たぶん、「できるけどしてやらない」という事だと思う。

梨花様に届いた書状では、すでに各軍の本拠地で悪い噂が蔓延しており、実に不穏な空気になっているという。
さらに、董軍による補給線の襲撃と伝令の襲撃は劇的な効果を果たしていて、すでに連合は一月の間、何の情報も得られていない事になってるんだって。

・・・一部の例外をのぞいて。

明命によって届けられた書状により、着々と作戦が進行していると理解した私は、この頭痛のする現状からの脱出の機会をうかがっていた。

正直に言うと、この場から離れられるなら、劉表軍を一時的に見逃すことも考慮の内に入れているぐらいだった。

はじめの１０日ほどは、馬鹿につきあうのもマダありだとおもっていたけど、今この段階になると、無駄な毎日を返せと言いたい。

率直に言えば、毎日の無駄な会議の繰り返しは、袁術に対しする連合参加手当稼ぎに相違ない。

一日でも延びれば糧食と小銭が入るのだから時間がかかった方がいい、というのが田舎者たちの感覚らしい。

全くをもって理解しがたい。

袁術もそのことに全く気付いていないというのがすごすぎる気もする。

張勲も紀霊も何も言わないってのがどうも。

・・・もういいや、やめちゃおっかなー。

「雪蓮、もう少しの辛抱だ」

「・・・ごめん、冥琳。でもそろそろ限界」

「策殿、ほんとうにもう少しなんじゃ。頼むぞ」

「・・・祭ぃ・・・私気が狂いそうよぉ」

「ふむ、これが策ならば、十二分に成功しているようじゃな」

「そうですね、雪蓮の精神を削り取ることに成功していますね」

くそぉ、これがまだ攻めあぐねいで、様々な戦闘を仕掛けていますってな瞬間ならマダいいけど、この無限に無駄な時間をどうしろ

って言うのよ！

「これならまだ政務をしてたほうがまし」

「・・・祭殿、本格的に雪蓮が壊れてきています」

「ふむ、本格的にまずいようじゃな」

糧食が届かないよりも蜂蜜が切れた事にキレる幼児、袁術。

大騒ぎを起こし、一刻でも早く蜂蜜を手に入れるのだ、と騒がれたため、手当稼ぎをあきらめた諸侯は、そぞろ攻め込もうとしたが、関に立つ旗を見て混乱した。

「千将軍とはどんな人間だ！」

「万将軍というほうが強そうだ！」

「来将軍とはどこの将だ！！」

「客将軍だと？　聞いたこともない！？」

右往左往の連合だったが、孫策は冷静だった。

というか、やる気がゼロであった。

「千客万来って書いてない？　冥琳」

「・・・雪蓮、本気で袁術に出立を伝えるべきだな」

「策殿、よい案があるぞ」

「なに？　祭」
「蜂蜜と糧食の輸送のために一軍を率いて引く、と言えば、間違いなく「いってこい」と答えるぞ」
まぁかなぁ、あるかもしれないけど、まさかまさか・・・そんな風に思っていた雪蓮であったが、彼女の提案に対して目を輝かして「いってくるのじゃ！！」叫ぶ幼児。
本格的に今までの自分を省みて、何でこんな馬鹿に従っていただろうと、真剣に悩む孫策こと雪蓮であった。

孫呉が抜けたからといって２０万の軍勢に大きな変化はなく、およそ２０万程度に変わっただけであった。
が、練度という点でみれば大きく変わった。
糧食を守る兵の規律が落ち、練兵する兵たちの士気がおち、そして戦意自体が底打った。
そう、連合の兵たちの戦意は地を潜っている。
なにしろ、糧食はすでに先が見えているのに補給がない。
補給担当は本城へ派遣されるものの帰ってくる様子がない。
配給が減る度に殺気が盛り上がり、そして今日もまた鬱屈とした感情を持て余して喧嘩が絶えない。
もちろん、連合首脳陣はそんなことに気をかけるほど有能ではない。
そんなわけで、すでに戦う前に崩壊寸前の連合であった。
ともなれば、単純に集められただけの兵が残りたいはずもなく、

徐々に徐々にその数を減らせいていった。
一人減り、二人減り、部隊ごと消えたり。
糧食ごと消えたり。
そのへんいなると、やはり自分の食料に関わることなので大騒ぎになる。
「わらわの食事が、なんでこんなものなのじゃ!?」
確かに貴人が食する内容ではなかったが、すでに底に近い糧食の状態では限界だった。
「孫策はなにをしておるのじゃ!?」
「美羽様、どうやら黄巾による襲撃で、こちらに来れないらしいのですよ～」
「なぜじゃ!?　孫策ならば軽かろう!」
「いえいえ、補給部隊も一緒なので、兵数が足りないそうです」
「ならば、旧臣を集めさせればよかろう!?」
「・・・えー、っと、いいんですかぁ?」
「よいにきまっておる!!」
「・・・なんか、こう、まるで、暗い運命を決めてしまっている気がするんですよねぇ・・・・」
とはいえ、袁術の命令を実行しないと言う選択肢はない張勲。
即時実行させたが、もちろんそれが運命の歯車を回す合図であったことは間違いなかった。

その命令をみて、私は崩れ落ちるような脱力感を覚えた。
もちろん、目の前にいた雪蓮に見せたのだが、あいつは大爆笑であった。
いや、爆笑で狂喜を隠しているだけだったのかもしれない。

「いいわ、袁術ちゃん。あんたの首は私がもらい受けるから」
「さすがに勅命の後にしてくれよ？」
「それはもう、当然でしょ？　天下晴れて袁術と劉表を討てるのよ？　こんな好機は生涯何度もないわ」

笑いを納めた雪蓮は、周囲に向かって宣言する。

「お遊戯は止めよ！　我が兵よ、我が友よ、我が家族たる孫呉の強者（つわもの）たちよ！　今より我らは新たな局面に立つ。そう、孫呉の復活だ！！」

周囲は爆発する。
散発的な戦闘に見せかけた遅延行為と、敵方に扮した呉兵も含めて。

「心を改めよ、身を清めよ、今から始まるは孫呉復興の聖なる戦いだ。胸を張れ、背を伸ばせ、私たちの目標の一つが目の前だぞ！！」

応、と応じる声が響きわたり、地面すら揺らすようだった。
いま、まさに、孫呉復活の時来ると言ったところだろう。

この光景を目にすることが出来た私は、何と幸せなのだろうとすら思った。

すでに眼下の連合は連合という名の暴徒に近い。
お互いを傷つけあい、お互いを責め合い、お互いの責任を擦り付けあっていると公孫賛伯珪配下の密偵が報告してきている。

目の前の状況と相違無いことから、その情報の精度は理解できるし信用も出来るだろう
。

つまり、奴らにかける慈悲などは存在しないと言うわけだ。
ふむ、この状況は実の所、虎牢関で行うはずだったのだが、思いの外事態が進行したので、関を抜かせてやるまでもない、という結論がでたのだが、そのためか実働部隊の鬱積がたまっておる。
曹操の所の将軍など、鬱積がたまりすぎてか、首輪＋鎖という状態で引き回されておる。
うむ、戦場とは簡単に人の心を壊してしまうのだな。
妹を連れてこなくて正解じゃった。

では、愚かな者達へ、引導を渡さねばなるまい。
我の宣誓からこの戦いは終局へ向かうのだから。

我の宣誓を聞け、逆賊どもめ！！

挿話０４　古手梨花と恋姫０４（後書き）

いかがでしょうか？　お楽しみいただけましたでしょうか？

お楽しみいただけたのでしたら幸いです。

わりと乗りのりで書いたせいか、とんでもない方向に滑ってますｗ

第五十二話「運命を切り裂く者」が生まれて（前書き）

えー、ロックオンされましたw

第五十二話「運命を切り裂く者」が生まれて

翌日、早朝から、学院長に直撃したのです。

「爺！　大事件なのです！！」
「又厄介ごとか、リステナーデ殿！！」
「コルベール先生も聞くのです！」

羽入と圭一を引き連れて学院長室に行くと、すでにオールドマンスミスとコルベール先生は居たのでした。
そして二人のルーンを見せ説明したところ、絶句したのです。

「ガンダーヴル」「ウィインァーヴル」「ミョズニトニルン」

僅か二人に三つのルーンが発現したのです、驚くのですよ。
さらに、そのルーンが「虚無」関係となれば、絶句も必至なのです。

「ボクはかなり非常識なので比較になりませんが、多分ルイズは虚無なのです」
「その根拠はあるのかな？」
「明確なものは無いのです。ただ、四系統全てに適性が無くコモンすら正常な形で発現しないくせに制御ができるルイズの適正は、未だ試していない、試せていない虚無しかない、と思うだけなのです。あと、ラ・ヴァリエールは、王家の血筋。発現は必然かと」
「「うーーーーむ」」

悩むコルベール先生とオールドマンスミス。
まぁ、思うに、虚無だなんて事になったら・・・・
「なんて好都合！　トリステイン王家はルイズに任せるわ！　私はウエールズ様と共に・・・」
とかなんとか・・・、やばい、リアルすぎるのです。
あと教皇にも利用されそうですね。虚無ですもの、伝説ですよ？
これ幸いと聖戦発動して、宗教的理由から誰も反対できないような話を振ってくるに違いないのです。
そうなったらもう遅い。
以前の件でジョセやんやらアルぽんの口沿いがある時点で、二大強国によるロマリア殲滅戦が開始されてしまうのです。
で、方やジョセやんも「虚無」。
先日呼び出した使い魔も、わりとヤバ目な方。
紹介してもらったのですが、恐ろしいレベルのヤンデレ感覚満載だったのです。
実に、実に不運な話なのです。
「というわけで、王宮には秘匿せねばならんじゃろうなぁ」
「ボクもそう思うのです」
そんなわけで、使い魔の詳細は秘匿されることになったのです。
というか、東方の賢者で納得してしまうルイズも、結構暖かいままですよねぇ。

力強い瞳の紳士にして賢者、ケイイチ＝マエバラ。
エルフにすら友人を持つフレデリカだけに、その友好範囲にいる人物が召還されたのは驚きだったけど、彼の柔軟さにも驚いた。
まさか、エレ姉様狙い撃ちでも大丈夫だなんて・・・・。
この感動を手紙に叩き込んで、私はお母様とお父様にフクロウ便で送った。

所作に問題はあれども、騎士たる心根を持つ少年。
フレデリカに対等な知識を持つ賢者。
姉の婿を求めて召還した使い魔。
その屈強さはフレデリカの保証付き。

私は、私は、エレ姉様だけの人になりうる人材を呼び込んだ喜びに身を震わせていたのだった。

「あー、リカちゃん、これどういうこと？」

圭一の前には、お師匠様が悠然とたっているのです。
それは間違いなく臨戦態勢であり、それは絶対的な「死」の象徴。

「えー、とりあえず、ルイズの母親にして僕の魔法のお師匠様なのです」

それを聞いた圭一は、ゆったりとした礼を取って見せたのです。

「お初にお目にかかります。あなたの娘様の使い魔となった、ケイ

イチ＝マエバラともうします」

ぴりりとした空気をそのままにお師匠様は杖を構えます。
が、臨戦態勢で杖を構えていても攻撃はしていない。
つまり、こちらに、圭一に先手を譲る形で叩きのめすという宣言なのです。

「圭一、ここは命の賭どころなのです」
「・・・まじで？」
「まじなのです」

というわけで、僕は錬金して作った「悟史」金属バットを渡すのです。

「・・・くあぁ、こりゃ燃えるな」

きゅっとバットを握ると、圭一の左のルーンが輝くのです。
両者共に必殺の準備完了。
が、お互いの手の内を知らない二人は、相手の準備ができるのを待っているのです。
双方ともに一方的な先手を嫌う傾向にあるので、手に汗握るにらみ合いが続く中、初めに動いたのは御師匠様。
つぶやくように囁くように発せられた呪文を見取った圭一は、まるで見えているかのようにエアハンマーをバットで打ち消して前に飛びます。
それは、あの雛身沢で培ってきた勝負運と戦度胸。
毎日毎日で命すら懸けたといってもおかしくないほどの実践で培われた「力」。
運命すら切り裂く圭一を、風の一撃程度で破れるものか。
そのまま駆け抜けるかと思いきや、急遽伏せる圭一の背中の方に

いた生徒を僕がエアシールドで守ります。
何の身振りもないエアカッターを、圭一は気配だけでよけました!!

よけたそのままの姿勢で足下を強襲した圭一を避けるように、御師匠様は軽く背後に飛びましたが、それは致命的です!!

「くらえ、バスターホームラ〇!!」

立ち上がりと同時に振るったフルスイングを、反射的に杖で受けた御師匠様は、瞬間的にフライで逃げました。

「・・・ちっ、もう勝ち目はねえな」

一方的な攻め手をやめて両手をあげた圭一をいぶかしむ御師匠様。

「どうしました？　まだ全力ではないでしょう？」
「でも、あんたの油断は終わった。つまり勝ち目はもうなくなったってことさ」

その言に、頬をゆるめる御師匠様。

「あなたにはフレデリカ並の才能を感じます」
「そりゃありがてぇが、何の意味がある？」
「ルイズを守る使い魔として認めましょう」

そう言いながら、御師匠様が僕にだけ見えるように杖を差し出しました。
なんと、あの御師匠様の杖にひびが入ってるのです!
あのまま全力攻撃をしていたら、もしかすると負けたのは御師匠

様だったかもしれないのです。

「さて、フレデリカ。いろいろと詳しい話を聞かねばならないようですね」

「うっす、細かく説明するのですよ、御師匠様」

「ルイズにも聞かせます。良いですね？」

「・・・猶予期間（モラトリアム）はおしまいですか」

「良い経験と成長をしています。問題ないでしょう」

まぁ、思いの外圭一がチートなので、この先も安心なのですが。

「（騎士団長よ、ソナタの配下は良い戦士ばかりだな）」

「（猫大将、仲間なのですよ？）」

「（ふむ、そちらの方がよい響きだな）」

うにゃーと嬉しそうになく猫大将を背負って、僕は食堂に向かうのでした。

フレデリカの言うとおりだった。

彼は、私の使い魔をしてくれることになった彼、ケイイチ＝マエバラは、本当に運命すら切り裂く勇者だった。

お母様の油断を逆手に取り一撃を加えるどころか、お母様に認められてしまった。

見えない魔法を打ち消す、避けるのにあわせて打ち込む、そして、眼前の死すらこえて勝負を見通す冷静な目。

本当に、本当にこんな人が私に呼び出されてくれたなんて、信じられなかった。
でも、フレデリカは言う。
「圭一は呼び出してくれたことを感謝しているのですよ」
聞けば、あれほどの力を持っていても、津波のような運命からは逃げられず、死ぬ寸前だったところで私が召還できたそうだ。
まさに運命的だったとほほえむ彼は、少しだけ苦笑い。
深く聞いてはいけないと思うけど、少しだけ胸が痛んだ。
「そういえばフレデリカ」
「？　なんですか、ルイズ」
「ミスタケーイチとあの前世仲間はお知り合いじゃないの？」
え？　という顔のミスタケーイチと、「わちゃー」という顔のフレデリカ。
え、え？　わたしなんかやっちゃった？

第五十二話「運命を切り裂く者」が生まれて（後書き）

さー、お次は園崎超特急２ですｗ

第五十三話「真実」生まれて（前書き）

園崎超特急、発車しマース

第五十三話「真実」生まれて

おねぇが倒れた。

フレデリカ＝ベルンカステル＝ド＝リステナーデこと梨花ちゃまの手紙を読んでいる途中のことだった。

何事かとのぞいてみれば、成る程と思うほかない。

なにしろ、見つかったのだ。

前原圭一、そう、あの、けいちゃんが。

それも転生とかではなく、本人が見つかったというのだ。

どうやって、と大いに疑問を思ったんですが、なんとヴァリエールのお嬢様が、使い魔召喚したら出てきたとか。

「その手があったかぁーーーーー！！！！」

絶叫で血の涙を流す「おねぇ」。

まぁ、私らが呼んでも、食費に困る系統の大怪獣が出てきそうだからやめとけと言うのが両親の話でしたので、無理だと思うのですが。

聞くところによると、本気で大怪獣を一族そろって引き当てているので、やめろと言うのは本気らしいです。

まぁ、本人なら色々とあるでしょうねぇ、と思っているところで、がんがん荷物を準備し始めるおねぇ。

「あー、止めませんよ、止めませんけど、一応仕事もあるのを忘れないでくださいね？」

「わかってるっ！　でも、でも・・・・」

ええ、ええ、何と言っても公国の王族と婚約の決まった私ですし、余裕抜群なのですよ。サトシきゅーん。

「じゃ、閣下方面は私が商談を進めますから、おねぇはトリステイン方面にいくんですよね？」
「恩にきる！！」

パンパンのバックを担いだおねぇでしたが、一応呼び止めます。

「おねぇ！」
「なに！！」
「これぐらい持っていってください」

投げ渡すのは２００エキューほど。
梨花ちゃまに関わる前じゃぁ考えられなかった裕福さだった。

「・・・ありがと」

いえいえ、おしあわせにー

この手が震えて止まらなかった。
失敗魔法とさげすまれた日々。

成功率ゼロの魔法で、使用人にすら微妙な視線で見られていた毎日。
その失敗を逆手にとって、お母様とフレデリカと共に特殊魔法にまで昇華させた特訓。

しかし、本質はそこにはなかった。
真実はそこにはなかったのだ。

「・・・ルイズ、君が今まで使った魔法の中で、爆発以外の結果で終わったことは？」
「ないわ」
「水・風・火・土、そのなかで爆発以外の結果は？」
「ないわ」
「・・・召喚の時に使った呪文に疑問は？」
「水・風・火・土・・・・」
「五角の魔法、最後の一角を思い出すのです」
「・・・・・虚無っ！」

そう、フレデリカはすでにそのことを把握していたようだった。
ただ確信と確証、そして政治的な問題から秘匿してきたという。
何でとは問えない。
私にも容易に想像できるから。
そう、もし、王宮に、姫様にばれれば、

「ルイズ、ああ、ルイズ！　私の大親友ルイズ！！　これでトリステインなんて不良債権はあなたに丸投げね！　ああ、何と言っても虚無、虚無ですもの！！　ブリミル様の正当なる後継者であるヴァリエール王朝に任せたわ！　じゃっ！」

とか何とか言ってお空の向こうに逃げ出すに決まってる。

そんなわけで、お母様とフレデリカの話を冷静に聞くことができた。

寧ろ、心から感謝を捧げていたといってもいい。

無論、虚無には虚無の呪文があるのだろうけど、それがどこにあるのかもわからない現時点では・・・・

「・・・というわけで、始祖の祈祷書と水のルビーなのです」

「え、え、ええ？　それって国宝でしょ！？」

「ルイズに友人代表で祝(のとり)を上げさせるから貸せと言ったら、ホイホイ貸してきたのですよ」

グダグダ言わずに中身を見ろと、指輪をつけさせられて中身を見せられたとたん、それを理解した。

それこそが始祖の残した魔法、虚無の魔法だった。

そう、私は、虚無だったのだ。

「とりあえず、魔法実験は許可制なのです」

「な、なんでよ！！」

「虚無、その初歩の初歩、エクスプロージョンでも、この校舎を粉みじんにする力があるのです」

「・・・・！！」

「その力を目撃されれば、必ず国の力に組み込まれ、そして戦争の「兵器」として利用されるのです」

「そ、そ、そのぐらい、貴族であれば・・・」

「そして、虚無こそが真なる王家として持ち上げられ・・・・・」

「わかったわ、フレデリカ！　絶対にばれないようにする！！」

冗談じゃない、あの御花畑が結婚引退できる環境になんかしてた

まるものか！
絶対に私たちに迷惑をかけつつも「大親友」を連発して負債を消しにかかるに違いないのだから。

「流石ルイズ、王族派だの貴族派だのに割れるのはお空の国だけで十分なのですよ」

うんうんと頷くフレデリカとお母様。
・・・ごめんなさい、結構利己的な理由なんです。

まぁ、ゴタゴタとしましたが、じじいに口止めをしてルイズにはカミングアウトしたあと、どうにかこうにか原作路線に舵を切れたのです。

そう、使い魔をつれた初授業。

僕たち、キュルケ、タバサ、ルイズ、僕、そして使い魔＊3が教室にはいるとどよめくクラスメイト。
原作ならば「ルイズ、召喚できなかったからって平民さらってくるなよ！」とか騒ぎになるところなのですが、目の前の光景は原作(それ)を裏切っているのです。
なにしろ・・・・

「く、くそぉ、あれほど祈ったのに、祈ったのに・・・・」
「美少女、うらやますぃ・・・・」
「くぅ、私も男の娘がよかった・・・」

「僕に似合っているのは、ピクシーサイズなのか、そうなのかぁ！」

なんというか、羨望のまなざしなのです。

加え、原作のルイズなら鼻高々のはずなのですが、目の前のルイズは、賓客をもてなすように圭一を相手しているのです。

「ミスルイズ、そのように気を使わないでください。わたくしは、あなたの使い魔なのですから」

「いいえ、ミスタ圭一。たとえ儀式の中とはいえ、意志ある存在を使い魔にしてしまった償いをしなければなりません。」

実に堂々と、品格ある姿なのです。

やっぱり自分の属性がわかったことに関係してるのだと思うのです。

で、そんなルイズを見て女子も男子も何となく目を輝かせているのが丸わかり。

以前から結構人気のあったルイズなのですが、この貴族として見習うべき態度こそが人気の根幹であることを本人はあまり知らないのです。

「とりあえず、圭一もルイズも、しゃべり方を柔らかくするのです。シェイクハンドから始まる物語なのですよ」

「あうあう～、ホントはキスから始まったのですよ～」

言われてお互いにキスをしたことに気づいたらしく、真っ赤になって握手をしあう二人。

思いの外似合ってるのですね。

・・・圭一には幸せになってほしいので、この組み合わせもありかも・・・・

・・・なんでしょう、この寒気は？
「ウケケケケ」の予感がするのです。

「じゃ、これからよろしく、ルイズさん」
「はい、よろしくお願いします、圭一さん」

目の前の光景は心温まる光景のはずなのに、なぜなんでしょう？

第五十三話「真実」生まれて（後書き）

えー、フレデリカたちは貴族派を王族派が割れることを恐れていますが、ルイズは面倒ごとを押し付けられることを恐れていますｗ

※今回の元ネタ
更新なし

第五十四話「再会と望郷」が生まれて（前書き）

えー、っと色々と再会しますw

第五十四話「再会と望郷」が生まれて

授業開始前にそれぞれの使い魔の種族や能力の話になったとき、僕はこう答えたのです。

「種族は鬼族の亜種、名前は「羽入」。能力は飛ぶことと姿を消すことと、ご飯をどんぶり三杯食べることなのです」
「僕は、どこのオバQですか！」
「というわけで、つっこみも特技なのです」
「「「「「おおおおお」」」」」

大いに感心されたのですが、羽入は教室の隅っこで「おやしろさまなのに・・・」と泣いているのです。
なぜでしょう、羽入をいじると嗜虐的快感があるのです。

「私の使い魔になってくれたのは、東方の賢者「ケイイチ＝マエバラ」。種族は、人間でよろしいかしら？」
「ええ、大丈夫で・・・」
「ちょっと待つのです！」

割って入った僕に目を白黒させた圭一に僕は宣誓するようにいったのです。

「圭一の種族は「紳士（へんたい）」なのです！」
「おいおい、梨花ちゃん、ほめるなよ」
「「「「「おおおおお」」」」」

猫の騎士団を含む男子全員がリスペクト視線を送っているのです。

「なるほど、ミスタ圭一の特技はぼけ流し、と」

キュルケ、着眼点はすばらしいのですが、それは特技じゃなくて技能なのです。

そんな自己紹介が一通り済んだところで、教師登場でした。

で、ＫＹ教師が「珍しい使い魔がいる」と揶揄したところで、猫大将が唸りをあげた。

「な、なんですか、この猫は・・・」

「猫大将は、我が友たちを嘲る者は許しはしないと言っています」

圭一とは別の意味で紳士（へんたい）と名高いマリコルヌが珍しく、好みの範囲外というオプションがあったとしても、女性に冷静な視線と意見を向けていた。

「先生、僕も許せません。ケイイチ＝マエバラは、短い瞬間でしかわかりませんでしたが、・・・勇者です！」

「「「「「勇者です！！」」」」」

なぜか猫の騎士団絶叫。

というか、エレ姉の婿候補ってだけで、これだけの尊敬を集めたのです。

加えるならば、後日行われた御師匠様とのガチで神話（マイストロジー）にまで上り詰めたのです。

そりゃそうなのですよ、猫の騎士団総当たりでできなかったことを、金属バット一本で成し遂げたのですから。

僕も実はリスペクトしてるのです。

そんなわけで、練金失敗というイベントは発生せず、和気藹々と教師ハブで盛り上がる教室なのでした。
だって、いまさらなのですよ、このチート教室で練金なんて。
できる奴らは皆ライン以上ですし、できない奴らもそれ以外ライン以上なのです。

加えるなら、ギトー氏の授業も・・・・

「諸君、最強の系統魔法はなんだと思うかね？」
「「「「「烈風です」」」」」
「・・・そのとおりだ、風サイコー」

なんというか、クラスメイトが覚醒し過ぎなのです。
正直、自分ではどうにもならない力に対する理不尽を身にしみているものだから、平民に優しい貴族が大量生産されているのですよ。

そんな、実に穏和な日常の中、彼女はやってきたのです。

「りーかーーーーー！！！！」

飛び込んできたのは、ベアトリス嬢ことサトコ。
どうにかねじ込んで、一年早く入学してきたのです。
原作通り騎士団も同行しているらしいのですが、なぜか全員リーゼントなのです。
これでは氣志團なのですよ。

再会を喜ぶ僕たちの隣にたっったのは・・・

「梨花ちゃん、こっちの友達かい？」

「・・・・！！！！！」

声を聞いて固まるサトコ。
ブルブルと震えながら、そしてゆっくりと視線をあげるとそこには・・・

「けいいち、さん？」
「あれ、あったことあった・・・いや・・・・・」

じっと見つめて、何かの答えを探る圭一は、ゆっくりと綻ぶ笑顔でいいました。

「さとこ、か？」

滂沱の涙と笑顔で、サトコは圭一にしがみつき、大声で泣きながら圭一の名前を連呼して、今自分の感情が届くようにと、圭一にしみこむようにと擦りつけるのでした。

「ほらほら、沙都子。レディーなんだろ？　かわいいレディーに涙はにあわねぇぜ？」

胸ポケットから出したハンカチで沙都子の顔を世話する圭一は、本当ににぃにぃみたいです。

「圭一さん、再び出会えて本当にうれしいですわ」
「おれもさ、リカちゃんや沙都子に会えてうれしいしさ、召喚してくれたルイズさんもそのお友達も優しくてさ、何の不満もないんだけどさ・・・・」

ゆっくりと、きゅっと沙都子を抱きしめる圭一。

「やっぱさ、二度と帰れねえっておもうと、結構キくなぁ・・・・」

がたがたと震える圭一を、僕と羽入が抱きしめました。

沙都子も、涙を流す圭一を誰にも見せないようにと小さな胸に隠したのです。

それを見て絶望的な罪悪感を背負うルイズでしたが、それを飲み込むだけの度量があるようで、背筋を伸ばしていろいろと決意したようなのです。

うん、これなら、トリステイン王族にルイズがなってもいいかもしれないですね。

つかみ所のない少年、ミスタマエバラの涙を見て、少しだけ揺らいだ。

借金だらけで良いところなしの領地、モンモランシだけど、そこに二度と帰れないなんて考えたら、背筋が凍った。

召喚とは、使い魔の儀式とはそれを行っているのだと気づいたのだ。

彼の涙を見て、私は思わずロビンに話しかけたい衝動をおぼえたけど飲み込んだ。

少なくともロビンは応えてくれたと理解していたから。

ミスタマエバラも、それなりに理由あっての召喚だとキいている。

しかし、故郷に帰れない、両親縁者に会えないというのは想像を絶する。

いや、昨今の世相を考えれば、簡単に発生する可能性もあるのだ。

たとえば、フレデリカがおらず、王族を押さえる手綱が弱かったら？

たとえば、物語外交が存在せず、各国との連携が弱かったら？
たとえば、たとえば、たとえば・・・

少なくとも国家に力がなく、戦渦に巻き込まれていたことは間違いないだろう。
そして、二度と領地に、国に、両親に会えなくなったかもしれないのだ。

しかし、戦争であるのならば、貴族である自分も関わることはできる。
土地も両親も取り戻せる可能性がある。
が、彼は、二度と帰ることができない。
東方、それもエルフの領地の向こうなんて、行けるはずもないから。

私は、愚劣にも同情で彼を見ている。
みんなもそうだろう。
でも、この場だけにしようと私は決意した。
心から沸き上がる思いにはうそをつけないけど、同情だけで評価されたら、私もイヤだから。

第五十四話「再会と望郷」が生まれて（後書き）

ベアトリス様の外見を、某ベアトリーチェっぽくしちゃおうかと揺れていたのは秘密ｗ

この作品では圭一ですが、原作でのサイトの絶望って、どのぐらいなんだろうと想像も出来ません。

第五十五話「神話作家」が生まれて（前書き）

えー、本作の圭一は、「ＫＥＩＩＣＨＩ」なので、一応チートですｗ
どういうチートかというと、
・欠片の世界の自分の記憶がある。
・全てを成功した世界の先の老衰までの記憶がある。
・わりと勉強しているので、かなりの教養がある。

・・・オリ主だな・・・ｗ

第五十五話「神話作家」が生まれて

前原圭一おそるべし、なのです。

萌え部門の執筆を任せたところ、爆発的な勢いで書き進め、途中挿し絵まで描いて見せたその才能にタマゲたのです。

最近は信じられないほど紙の質が上がっているので、細かな表現も可能になっていてスゴいのですが、印刷技術が殆どないので挿し絵は細かく描けなかったのです。

しかし、圭一は試作版画で挿し絵を作ったかと思ったら、猫の騎士団の練金班を巻き込んで単色の挿し絵だけ活版印刷を作ってしまったのです。

挿し絵は塗り絵風の主線のみで差し込むことにより、より娯楽性が上がったのです。

ただ、ソフトハーレムものが多いのが男性主体すぎるのではないでしょうか？

「甘いな、梨花ちゃん」

そういって引っ張りだしたのは、「エンジェリ○ク」と題された小説。

・・・逆ハーレムですかぁ！

「そうだ、梨花ちゃん。逆転は今まであっただろうけど、ここまで徹底していた要素はなかったはずだ」

流石ですね、前原圭一！！
盟友の名にふさわしい男なのです。
で、す、が・・・・。

「とりあえず、四冊作って様子見なのです」
「え？　馬鹿売れだろ？」
「いえいえ」

まずは異端チェックが先なのです。
別名イザベラ検査。
で、王宮にも突っ込まないとうるさい馬鹿がいるのでさらに一冊。
で、実家にも一冊送って出版見本にしてもらって、最後には宣伝用の「館」用。

「なるほどなぁ、中世ヨーロッパ状態が六千年も続けば、そうなるか・・・」
「めんどくさいので、宗教つぶすのが一番なのですが・・・」
「それはやめとけって、梨花ちゃん。生活や常識の一部に固着している宗教を潰したら何が起こるかわからんぞ？」
「むー、その宗教依存を何とかした言うのですよ」
「だから、物語依存に切り替える？」
「そこまでは乗らせませんが、宗教以外の価値観を浸透させたいのです」
「それって、異端ってやつだろ？」
「ぎりぎりアウトなのですが、審判もやってるので、お見逃し状態なのです」
「うっわ・・・賄賂より悪辣だな」
「格調高く、卑怯というのですよ」

こんな馬鹿話をしながら、圭一は僕とともに物語り量産をしているのです。

・・・授業時間中に。

すでにこの状態でも出席扱いの僕に、学院在籍の意味があるのでしょうか？

「あうあう、怪しげな人間からの逃げ場としては最適なのですよ～」

まぁ、いいんですが。

圭一自身もこの数日で、神話級の男子支持を得ているのですし、ルイズも使い魔を放任しすぎなきもしますが、放置していた方が結果がでる使い魔というのも微妙なのですよ。

「・・・・ん？」

ものすごい衝撃が教室から・・・。

「なー梨花ちゃん」

「なにも言わない方がいいのです」

「・・・とりあえずさ、俺の右目で見える風景が教室でさ」

「聞きたくなのです」

「先生が、ドリフの髪型に・・・」

「今すぐダッシュで見物にいくのですよ！！」

圭一にペーパーナイフを持たせて基本能力を上げて、僕は魔法でダッシュなのです。

リアルドリフコントとは、ルイズめ、僕の予想を斜め行き過ぎなのですよ！！

ひゃっはーーー

到着して後悔したのです。
ドリフはドリフでも・・・・・・

「カトちゃんだったとは・・・・・」

目の前で、ギトー先生だけ「カトちゃん」ヘアーに・・・・。
とりあえず、破壊されているのはギトー先生の背後の扉だけですので、たぶん、

「最強の系統を「風」だと言い張ったギトー先生に、「狙撃最強」をキュルケがあおって、教室内で実験。風の壁で防御したギトー先生だったけど、防御の内側で爆発が発生、ギトー先生以外無事、といったところですか？」
「「「「「おおおおおおお」」」」」

正解みたいですね。

「えーっと、ギトー先生、生きてる？」

さすがに悪いことをしたという気持ちはあるみたいで、ルイズは杖で先生の頭をつつきます。
地肌まで真っ黒なくせに、頭頂部だけ一本残ってるのです。
あまりの「カトちゃん」具合に、圭一は撃沈してるのです。

「とりあえず、救護室に放り込んで・・・」

「みなさん、授業は中止です！！」

現れたのはコルベール先生。

なんかカツラかぶったり礼服ひっかけてたりしてるのです。

「本日は、トリステイン王国の花、アンリエッタ姫様が行幸なされます！　授業を中止して姫様を迎えます！！」

瞬間、教室中が窓に向かって防御姿勢をとったのです。

「・・・梨花ちゃん、みんななにしてるんだ？」

「姫と言えば、プリンセスミサイル。トリステインの新常識なのです」

さすがに今日はプリンセスミサイルはなかったみたいなのです。

結構安心なのです。

さすがに今回はプリンセスミサイルがなかったと安心した私たちは、行幸にきた、いいえ、いらした姫様をお出迎え。

一斉に並んで万歳を繰り返している中で、馬車がゆっくりを通り過ぎる。

よく顔が見えるようにされた馬車の中で、姫様が笑顔で、よそ行きの笑顔で手を振っているんだけど、一瞬だけ視線が合おうと「に

やり」と笑いやがった。
くそー、何か企んでるわね。
思わず苦々しい思いを押さえていると、隣にたつミスタ圭一が難しそうな顔をしている事に気づいた。

「ミスタ圭一。何か問題でも？」
「ああ、ルイズさん。ちょっと質問していいかい？」
「ええ」
「あの、今馬車に乗っていた人が、姫？」
「はい、トリステインの花とも呼ばれるアンリエッタ姫です」
「・・・そっか」

黙り込むように、しずみ込むような表情の圭一さん。

「圭一、なにが気に食わないのですか？」
「いや、うん、ちょっとあの姫さんの雰囲気が気になってな」

さすが賢者、目の付けどころが違う！

「なんかさ、自分の目的があって、それ以外興味なくて、その目的のために全部投げ出せる、そんな奴の目をしてた」

・・・鋭すぎですよ、ミスタ。

「誰かに似てるのですか？」
「鷹野」

瞬間、フレデリカと羽入さんが吹き出しました。

「にてる、にてるのです、ヤバいところがそっくりなのです・・・」

「リ、リカ、そんなに似てるですか？」
「迷惑なところとか、男に食いついたら離れないところとか、自分の妄想に固執して世界を巻き込むところとかソックリのですよ！！」
うっわー、共通の知り合いにそんな奴がいたんだぁ・・・。
フレデリカも結構不幸。
「・・・新たなる、運命の輪なのですか？」
「さすがにそこまで閉じてないけど、被害甚大は決定ルートなのです」
その被害の中心に私が居そうなのよねぇ・・・。
「ルイズさん」
「はい？」
「守りますよ、俺。だって、ルイズさんは俺のご主人様ですから」
ミスタ圭一って、結構かっこいい。
「ふーん、けいちゃんってば、そうなんだー？」
「へ？」
視線を向けた先には、汗ダクの女性がたっている。
剣呑な視線の先には、ミスタ圭一。
じっと視線を合わせていたミスタ圭一は、一度小首を傾げた後、急に目を見開きました。
「もしかして、魅音、か？」

不機嫌そうな表情も吹っ飛んで、彼女はニヤリと笑って倒れた。

「お、おい、魅音！」

「圭一、ゆらしちゃだめなのです。たぶん疲労による気絶なのです」

フレデリカとミスタ圭一に介抱されている女性を見て、なぜか胸の内が重くなった気がする。

なんでだろう？

第五十五話「神話作家」が生まれて（後書き）

園崎超特急、到着しました～
現地天気大荒れ、時々修羅場でございます～ｗ

第五十六話「思いの交差」が生まれて（前書き）

野望の女、学院に現る！

※なんとかストック消失を乗り越えられそうです（苦笑）

第五十六話「思いの交差」が生まれて

僕の名前はジャン＝ジャック＝ワルド。
若くしてトリステインの親衛隊「グリフォン」の隊長さっ。
魔法はスクエアの超エリート、将来を嘱望されたナイスガイさっ。
が、仕えている国が悪い気がする。

王族は頭が悪く貴族も最悪。
正直に言うと、なんで今まで潰れていないのか解らない国だ。
が、この国に唯一誇れるものがある。

それは、「フレデリカ様」だ。

あらゆる文学に通じ、あらゆる欲望を文学に昇華させる「神」に等しい作家。
ああ、あの「駄王族」の警護でこさせられた魔法学院だったが、この宝物庫に等しい書棚に出会えたこと自体で収支が完全に黒字に変わった。
一般に出回っていない書籍棚が学院男子寮にあるときいていたが、これほどの密度とは思わなかった。
「ドロレス恋愛忌憚」は実に重々しい内容だった。
年を重ねた男性貴族が、自分の娘ほどの少女に「恋」をしてしまった、肉欲ではない恋いに悩む男性貴族の心の動きは、実に感動的で共感してしまった。
少女の視点では、その年を重ねた男性貴族を「父」のように感じているくだりや台詞が交えられ、さらに男性貴族の苦悩が深くなる。
この恋は最後まで語られず、結末が描かれず終わっているモヤモ

ヤ感も堪らない。

ああ、フレデリカ様。

あの「若紫」「マイフェアレディー」でも感動させられましたが、「ドロレス」という新境地には目眩すら覚えます。

ああ、フレデリカ様。

あなたはどれだけ我々を幻想の世界に引き込めばすむのだろう？
これは早速写本して、我が友等と共感しなければ！！
全力で「偏在」だ！！

顔かたちは全然違うのに、なぜだか魅音だとわかった。
なんというか、こう、やっぱり「あの」記憶があるからだろうと思う。

いくつかの記憶ある人生の中で、魅音と添い遂げた記憶があり、その濃厚な経験が彼女の気配を思い出させる。
だから、如何に姿形が変わろうとも、その気配を感じれば理解できる自信があった。

学院の侍女達が魅音の世話をしてくれたおかげか、汗だくだった彼女は身綺麗にされていた。
たぶん香水とか使われているのだろう、ちょっとだけいい匂いがする。

「な、魅音。おまえもコッチに来てたんだな」

ゆっくりとなでつける髪の毛は、記憶にある艶と違うけど、それでも「園崎魅音」を感じさせるものだった。

「・・・こうやって考えると、向こうに戻る意味ないかもな。リカちゃんも沙都子も魅音もコッチにいるんだし、俺たちを脅かすモノもいない。だったら、コッチで平和に暮らせるかもな」

あの狂気一歩手前の繰り返し世界に関わることはもうない。

懐かしい世界ではあったけど、あの時間と空間から離れてみれば、如何に恐ろしい世界だったかがしれる。

あの世界に閉じこめられていたリカちゃんの苦悩を考えると、これからも彼女の味方でありたいと思う。

「・・・魅音。これからもよろしくな」

け、け、けけいちゃんが、なでなでしてくれてるぅ・・・・・・・

目の前のカオスに意識が遠退いたのです。

ふらりと正式ルートで学院に現れた御花畑（アンリエッタ）は、学院長に表敬訪問した後で、食堂に向かって若き貴族達との語らい、そして自ら背負う未来を語るという流れのはずだった、そんな鳥の骨の話だったのです。

が、なぜか「プリンセスミサイル」談義になり、技術要点やら突入速度の話になるあたりが怪しい開花を迎えている魔法学院なのです。

「・・・リカ、プリンセスミサイルってなんなんですの？」

「あー、たぶんそのうち見られるのですよ」

多くを語ることができない光景。

それが「プリンセスミサイル」なのです。

直接突入を見ていたルイズやキュルケ、そしてタバサもその話の中心にいて、実に盛り上がっているのが怪しいのです。

「あうあう、あのお姫様、雰囲気が怖いのです」

「羽入さんでしたかしら？　どこかでお会いしてませんでしたかしら？」

「いつかどこかで会ってると思うのですよ？　遠い遠い時間の彼方で、一緒に遊んだのかもしれないのです」

「そうかもしれませんわね。おほほ」

自然に仲良くなる二人を見て、僕はなんとなく胸の内が苦しく感じます。

羽入はああ言ってくれましたけど、この罪悪感とは生涯つきあうことになりそうです。

「それで、姫様。本日の行幸の目的はなんですか？」

ルイズのその台詞に、きらりと瞳を輝かせる御花畑。

やばい気がするのです。

御師匠様を召喚しておいた方がいい気がするのです。

「春の使い魔召喚の儀で、いろいろと珍しいモノたちが呼ばれたと聞きおよびましたので、お話をみなさんから聞きたいと思いましたのよ？」

・・・こやつ、何処から話を引っ張って来やがった？

「まぁ、嬉しいですわ姫様」

「姫様、私の使い魔もごらんになってください」

「うふふ、みなさんの使い魔を、明日見せていただくということでお願いしますわ」

そんなこんなで突如決まった使い魔公開会。

というか、出さないとだめですか、この「オバQ」。

「オバQはひどいのですよ、リカ！」

「リカも容赦ありませんのね」

「この流れるようなボケと突っ込みに評価が欲しいところなのです」

あ、そうそう。

「悟史とシィの婚約おめでとうなのです」

「さすがに家柄で諸侯ももめましたけど、今をときめく「製紙」の

家ですものね」

そう、家柄的に会わないと言うことで公国ないも揉めたそうですが、実際、今のところ急成長中に家柄なので、婚約も許可されたみたいなのです。

シィの舞い上がりっぷりは砂糖が口から出るほどなのです。

ミィも圭一を狙ってるかもしれないのですが、圭一にはエレ姉様をくっつけるという重要任務があるのです。

譲らないのですよ？

フレデリカの手紙を見るとため息が出る。

確かにお母様も認めるほどの才能を持った男の子だそうだし、フレデリカも絶賛する少年だそうだ。

魔法で対したお母様に一歩も引かず、そしてフレデリカの執筆活動も支えることができる。

性格にも態度にも問題はなく、逆にそれが味わいになっているとルイズの手紙にあった。

・・・なんでこんな惨めな気持ちになるんだろう。

フレデリカ、あなたが私をもらってくれれば何の問題もないのに・・・・。

フレデリカ、あなたの責任よ。

言われたままの見合いも婚約にもなにも感じなかった私が、こんな風に理不尽を感じるようになってしまったんだから。

フレデリカ、あなたはもう少し自分の責任を真剣に考えないとだめね。

私がその責任について、懇々と説いてあげる。

第五十六話「思いの交差」が生まれて（後書き）

久しぶりにジャンさんの登場ですが、するりと入ってゆける体制って恐い気もしないでもないですよね？

いろいろあって、うちのジャンさんは裏切っていませんが裏切りの芽は萌芽してます。それを食い止めているのが萌え書庫。恐い世界ですｗ

※今回の元ネタ
「ドロレス恋愛忌憚」・・・ロシア映画「ロリータ」・・・ロリコンの語源になった作品。・・・ドロレスの愛称が「ロリータ」なのは詳細不明ｗ

第五十七話「使い魔品評会」が生まれて（前書き）

野望が今、花開きます

第五十七話「使い魔品評会」が生まれて

突如、使い魔の品評会が始まったのです。

主催はお花畑。

なにやらチェックリストやらなんやらを見ながらニコニコしてるのが恐ろしいのです。

「フレデリカ、やばいわよ」

ルイズが指差しているのは、なんと「ブリミル叙事詩」という本。お花畑が嬉しそうに時々覗き込んでいるのです。

一芸を終えた使い魔と主に向かって「始祖の祝福がありますように」なんて言葉まで振りまいて。

絶対、「何か」気付いたのですよ。

そんな危惧はさておき、タバサと風竜によるプリンセスミサイルが再現されたあたりで大盛り上がりになってる会場。

とはいえ、タバサも「プリンセス」なので、プリンセスミサイルの名に嘘はないのです。

「あ、あれがプリンセスミサイルですの？」

「・・・おじさん、この国に生まれなくて本当によかったと思うよ」

沙都子も魅音も驚きで身を固めているのです。

「アンリエッタは、グリフォンであれを二階の教室に向けてやった

のです」
「どこの軍人ですの？」「いやぁ、エリート軍人でしょ？」
大喝采のうちに舞台から離れたタバサの後はキュルケ。
自分の火の魔法で作ったリングを、ペットジャンプの感じで走らせて見せているのです。
結構アクティブに動く火蜥蜴に、会場おおわき。
最後の最後で失敗して火だるまになったのですが、火蜥蜴だけに無事で「失敗しちゃった」という感じで頭をかく火蜥蜴の愛らしさにみんなメロメロなのでした。
結構高度な芸が続く中、とうとうルイズの番が回ってきたのです。
「で、なにするの？　けいちゃん」
「え？　ああ、圭一の本質なのですよ？」
「え？」「なんですの、りか？」
フレデリカに渡された「それ」は、あの「鍵盤ハーモニカ」だった。
「始祖見て」の中でも、その存在を大いに疑問視されたマジックアイテム。
が、実は「楽器」だったのだ。
吹き出す息と鍵盤に合わせて音がでる楽器で、難易度は低く、そして完成度が高かった。
で、この楽器で伴奏をしている私の前で、なんと圭一さんが「手

品」をしてみせるというのだ。

あの「ヨシーノ」のように！！

試しに見せてもらった「手品」は見事の一語で、常に魔法探査をしていたキュルケとタバサにも魔法の痕跡が見られなかったといわしめた。

「そりゃそうなのです。種も仕掛けもある「技（トリック）」なのですから」

フレデリカの一言に燃えた私たちは真似をしてみたけれど、全くうまくできなかった。

が、魔法探査に監視された圭一さんとフレデリカは難なくやってみせるのが悔しい。

就寝間際に圭一さんにお願いして「仕掛け」を聞き出した私は、あまりの盲点に驚くしかなかった。

そんなわけで、「物語」のなかではわからなかった楽曲「オリーブの首飾り」を楽器で演奏できるようになった私は、まるで「始祖見て」のワンシーンのような会場に使い魔品評会を塗り変えることにしたのあった。

やられましたわ、ルイズ。

どうやら私の企みを察知したらしいルイズによって空気を混ぜっ返されてしまい、計画を切り出す時期を失ってしまいましたわ。

でも、あの「始祖見て」の再現してほしいワンシーンのうちの第一位にもなっている「お姉さま方の卒業会」の「手品」を再現させるとは、さすがルイズの使い魔でありフレデリカの盟友にして、エレノオール様の婚約者候補。

恐ろしいまでの才覚を見せつけられましたわ。

加えて、フレデリカと亜人の少女。

息を吐くように先住魔法を使っているのに生徒たちも教師たちも当然のように受け入れています。

まるで芸人のような受け答えの二人に笑い、そして声を合わせて歌う姿に熱狂していました。

・・・おかしいですね。

なぜ私も「猫手」のステッキを振って熱狂しているのでしょう？

悔しいのでもう一晩泊まって、何とか計画を推し進めますよ？

ああ、でも、この猫耳はかわいいですね。ウエールズさまにお見せしたいですわ。

「ルイズ、あなた、「虚無」ですね？」

突然僕の部屋に電撃訪問しにきた「御花畑」が、ルイズ・キュルケ・タバサ、羽入・僕・圭一がいる中で、おもむろにそんなことをいい始めたのです。

内心冷や汗をかいていたのは僕とルイズだけで、後はガン無視。

圭一は僕と共に執筆中ですし、タバサはその書き上がった原稿のチェックを続行。

キュルケは最近校内で出回っている新刊の発注嘆願の処理をしていて、ルイズは内心の狼狽はおいておいて、V&R出版関係の処理に戻った。

「・・・えーっと、みなさんお聞きくださいませんこと？」

「忙しいので、後にしてほしいのです」

「・・・結構、重大なことをはなしているつもりなのですが？」

「今書いてるのは、某王族にして御花畑が妄想の限界まで引っ張りだした駄文という名の設定を脚本にしている最中なのです」

「ごめんなさい」

さすがに速攻で折れたのです。

「・・・お忙しいとは思うのですが、本当に少しだけお時間をいただけませんか？」

王族とは思えない腰の低さに視線をあげると、本当にうれしそうに笑う御花畑。

くそ、羽入にしろ御花畑にしろ、何で僕の周りには嗜虐心を煽る人材がいいのですか。

「一応言っておくのですが、王位継承順位をどうこうするという提案なら、絶対に動かない旨の根回しは終わってるのですよ？」

「・・・えええええええ！？」
「少なくとも、アンリエッタが握っていると思いこんでいる「ネタ」なんか、くすぶる前に水かけ終わってるのです」
「・・・・・・・・・・・・・・・」
がっくり膝から落ちる御花畑。
「せっかく、不良債権（トリスティン）を押しつけられると思ったのに・・・」
案の定の反応なのです。
あまりに鉄板すぎて、ため息もでないのです。
とはいえ、トリステインにしてもアルビオンにしても不良債権であることには変わらないのですから、復興に心血注ぐべきなのです。
「りかちゃーん、この書類なんだけどさ～」
ふらりと現れた「魅音」は、その人口密度を見て眉をしかめつつ、僕にハイタッチ。
「・・・ん～、わかったのです。出版にはこっちで書面にしとくのです」
「たすかるわぁ、一応値下げだけどさ、ほかの業者さんとも歩調あわせないとならなくてさぁ」
「ダンピングじゃないのが大歓迎なのです」
ほんじゃねー、と手を振る魅音を羽入が送ってゆくといってでていったのです。
「じゃ、野望も潰えたし、そろそろ帰るのですよ、アンリエッタ」
「・・・一つだけ確認させてください」

「何ですか？」
「ルイズは虚無ですか？」
「その問いを枢機卿と皇太后に聞くのです」

深いため息をはくアンリエッタ。
つまり僕は、その問題は国の中枢に関わる問題であり、肯定も否定もできない代わりの答えを得よ、そんな状況を指し示したのです。

「で、だれか虚無がいれば、アンリエッタは幸せなのですか？」
「・・・ゼロとまで言われた親友の名誉が、国を挙げて盛り上げられるのです。この機会を利用したいじゃありませんか」
「で、ついでに王位継承順位を繰り上げて押しつける、と」
「・・・それはついでです」

とはいえ虚無が国を仕切らなくちゃいけない理由はないのですよ。
まぁ、虚無がトップをとっている国は知ってますが。

「あら、どこですの？」
「ガリアのジョセやん」
「「「ぶーーーー」」」

思わず吹く、アンリエッタ・キュルケ・タバサ。
タバサなんか、無表情な仮面を落として、完全に驚愕しているのです。
実は、ルイズには、今判明している虚無の情報は話しているのです。聞いたときは結構驚いていたのですが。

「ジョセフ王が虚無ですか・・・・」
「これでトリステインの王を虚無にすると、さすがに色々と不味いことが起きるのです」

「それは？」
「まず、虚無イコール始祖の再来、ということでロマリアによる介入が大きくなるのです」

前後を考えず教義的な介入と横やりがはいって、国の体裁が方々になるのです。
財政的にも信じられない状態になり、国内貴族が割れて、大騒ぎなのです。
まぁ、オリバー君の騒ぎを見ればわかるのですよね？
で、そんな騒ぎが起きている国なんかを信用する気になんか無いので、無惨に引き裂かれること必至なのですが、力ばかりはある「虚無」。がんがんハルケギニアが壊れてゆくのが丸ワカリなのです。

「自分の権益（しあわせ）のために、世界を壊すですか？」

さすがにそんな先までは読んでいなかったらしい御花畑は、がっくり肩を落として帰っていったのでした。

「で、どこまでがマジ？」とキュルケ。
「虚無が王になったら『今まで弟子筋の分際でかってしやがったバカどもを成敗』とかいってロマリアと戦争になるかと思うのです」

僕の言葉にげんなりのキュルケ。

「フレデリカ、ジョセやんが虚無ってほんと？」
「これは本当なのです。見せてもらったのですよ」

こんな感じの魔法で～、と説明すると、興味津々のタバサ。

「・・・こんど直接聞いても大丈夫？」

「避けてほしいのです。直接虚無を教えられるまで待つしかないのですよ」
「・・・残念」

さーって、そろそろ執筆再開なのです。

「ところでさ、リカちゃん」
「なんですか？」
「一国の王族を護衛もなしに帰してよかったのかい？」
「「「「「・・・あ」」」」」

瞬間、ものが壊れる音、破裂する音、悲鳴、絶叫が響き渡ったのです。

第五十七話「使い魔品評会」が生まれて（後書き）

途端に枯れましたｗ

フレデリカの部屋は、本人プラス五人が優雅に過ごせる限界です。
そのため、それ以上に人がいる際は出直すルールになっています。
みぃがすぐに出たのはそういうわけです。

第五十八話「幸せ計画」が生まれて（前書き）

ジャン君・・・・哀れ

第五十八話「幸せ計画」が生まれて

僕と圭一、そして圭一に抱かれたルイズが窓から飛び出すと、いつの間にか現れた風竜シルフィードと、それに飛び乗るタバサ・キュルケ。
ダッシュで建物から離れつつ寮をみると、怒声と悲鳴が響いているのです。

「フレイム」
「ぎゅ！」

キュルケの使い魔がダッシュで寮に飛び込みます。

「圭一さん、お願い」
「承った」

すっと僕が作った小刀を構えた圭一が、風のような早さで寮に飛び込むのです。
同時にタバサがシルフィードに乗って体制を整え始めました。
どうやら「あれ」をやるつもりらしいです。

「タバサ、時期を見極めるです」
「・・・ん」

そうこうしているうちに、寮の壁の一部が爆発し、真っ黒焦げで飛び出してきた男二人と、抱えられた御花畑。
それを追うように、するりと現れたのは圭一とギーシュ。

「やるな、粉塵爆発とは恐れ入った」
「なに、団長の入れ知恵だよ」

バラ型の杖を構えたギューシュが、なにげに新しいゴーレムを練金したのですが、その形状と数には恐れ入ったのです。

「ピグミ〇！」

やばいですよ、やばすぎなのです。
というか、男たちの視線がおびえてるのです。
つまり、「自爆」済みですね。
さすがギーシュ、その開発力には舌を巻くのです。

「ち、ち、ちかづくな！！　人質がどうなってもいいのかぁ！！」

一瞬、ほんの一瞬だけ周囲全員が怯みましたが、僕は一歩前にでました。

「我が名は「物語」のフレデリカ。即死以外なら全能の治療をもって治すのです。猫の騎士団、前へ！」
「「「「「おおお！！！」」」」」
「にゃおん！！」

猫大将を先頭に、猫の手杖を構える猫の騎士団。
その帽子には猫耳、そのマントには猫のしっぽがついた、知らない人には大爆笑の扮装だけれども、その実力と伝説を知っているものたちには悪夢の格好だった。

「トリステイン、ケットシー学生騎士団・・・・」

男たちは僕たちを知っているようなのです。
というか、僕たちを知っていて尚、人質の素性を知らないみたいなのです。
ならば追いつめるべきでしょう。

「その名を知るものならば命を惜しむのです。我らは死の川の向こうに渡ってタッチして帰ってくること幾数回の強者（モサ）。その追体験をすることを覚悟できの無いのならば、罪を悔やんで首を差し出すのです！」

ふー、と声を上げた猫大将をみた後、杖を構えた学生騎士団をみた男たちは、がっくりとひざを付いて人質を解放しました。
ゆっくりと近づいたギーシュが御花畑を受け取ってめでたし、ではありません。

「フレデリカ・・・！」

キュルケの鋭い声を受けて、僕は頷きました。
・・・やはり、ですか。

すっと視線を上げると、すでにタバサは「体制」を整え終えていました。
僕らも身構えます。

一瞬にして高度を上げたシルフィードは、ぐるりと学院の空中を

舞いつつ速度を上げる。
男子寮の一角を目指したシルフィードから解き放たれたのは一人の「プリンセス」。
長い杖を前面に押し出して、空間を割るように押し進む彼女は小さくつぶやくように言う。

「・・・プリンセスミサイル」

飛び込んだ先で何故か爆発が起き、男子寮の一部が吹っ飛んだかと思いきや、その爆煙とともに一人の人影が落ちてきました。
その男の人は白い仮面をかむって、数冊の本を抱えています。

「騎士団、第一射、バツ！」
「「「「「おう！！」」」」」

アイシクルビットの飽和攻撃に男が消えた。
というか、あれは「偏在」！

「相手は風のスクエアーなのです、気合いを入れるですよ！」

瞬間的に三人の男が穴が空いた部屋から飛び出して飛ぼうとしましたが、背後からの攻撃と僕たちの攻撃で打ち落とされました。
・・・って、あと二人も偏在ですか！

偏在たちの落とした本を確認して、未だ仮面を被る男の正体が知れました。

後生大事に数冊の本を抱えた男、煤で真っ黒になったその男性へ、冷たい言葉を僕はかけます。

「で、混乱中に男子寮の中で何の用だったのですか、ワルド子爵？」

混乱で言葉も出ない彼にさらに言葉をかぶせます。

「・・・破落戸（ごろつき）まで雇って泥棒遊びとは、貴族としてどうなのですか？」

がっくりとうなだれた子爵は、それでも抱えた本を離さなかった。

それは「館」内にある写本用の予備で、多分、御花畑滞在中に移した内容なのでしょう。

が、あそこにあるものの大多数は写本禁止＋持ち出し禁止のものばかりで、それを咎められての犯行ではないかと考えます。

マニアという奴らの行動力には肝を冷やすことばかりなのです。

枢機卿にでも相談しないといけないですかね。

取り調べによって明らかになった事実は、想像の域を出ないものでしたが、周辺貴族から擁護の声が結構多かったのは驚きでした。

というか、同じ趣味のお友達だと踏んでいるのです。

同士として、同好のよしみとして理解できる、と言うことでしょ

う。

とはいえ、学園設備への無断進入や、客人を人質に取っての行為は許されるはずもなく、かなり重い処置になることが決まったそうです。

とはいえ、「御花畑」が男子寮に出入りしていたことは表沙汰にできることではないので、王族拉致は罪として伏せられましたが、実質上の幽閉処置に至るはずなのです。

でも、もっと厳しい処置はあるのですが。

「それは何ですかな？」

「枢機卿、簡単な話です。無休で枢機卿の部下にすれば、半年以内に逃げ出すか倒れるのです」

枢機卿の下に部下ができ、監視ができる上に罰にもなる。

一石何鳥になるのでしょう？

それを聞いた枢機卿は大爆笑の末に、ワルド氏の人事を自分の下にするよう働いたのです。

ああ、これでワルド氏の無限地獄の始まりなのです。

なーむー。

えー、忘れていたわけではありませんが、ふらりとエレ姉さんが学院に現れたのです。

というか、圭一が召還された後、いろいろと手を打ったのに、二月も放置というのはヘタレの属性たっぷりなのです。

ファッションやアイテムで防御力を上げて、圭一をあしざまに言ってやろうと身構えてきているのが丸解りな癖に、かなり圭一に興味を引かれているのも解るのです。
うんうん、これで幸せ計画が・・・。

ジャーン、ジャーン、ジャーン。

「りかちゃーん、おじさんにもその「幸せ計画」って言うの、説明をしてほしいかなぁ・・・」
「げぇ、みぃ・・・・」
「ふっふっふ～、素直に教えてくれないと、いろいろと実力行使しちゃうかもねぇ～」
「あ、あははは、いや～、誤解なのですよ、みぃ」
「嘘だ!!!」

何、突如現れたですか、レナ!!

「りかちゃん、レナには本当のことを教えてくれるかな?かな?」
「おじさんにも真実を教えてほしいな～」

・・・やばい、やばいのです。

「か、変わり身に術!」
「あうあう!!　ひどすぎなのです、リカ!!」

地平の彼方まで逃げるのです!!

「逃がすわけないよね～」
「にがさない～」

第五十八話「幸せ計画」が生まれて（後書き）

とうとう表れた「雛見沢女傑」団！！
わが身可愛さに逃げ切れるのか、りか！！
勿論、羽入は役に立たないぞ、オバQ以下だぞｗ

※今回の元ネタ
ピグミ○　・・・　いわずと知れた例のゲームｗ
白い仮面　・・・　原作でも使ってましたよね？

第五十九話「お見合い」が生まれて（前書き）

えー、いろいろありますが、執筆速度に連載が追いつきました。

というわけで、しばし書き溜めモードにうつります。

ちょっとおやすみです。

第五十九話「お見合い」が生まれて

あー、これ、お見合い？

女子寮のフレデリカの部屋で、いろいろとエレ姉様と圭一さんが話してるんだけど、結構専門的すぎて解らなかった。

だけど適当に話を合わせているわけじゃないのはよく分かる話だった。

なにしろ、エレ姉様が本当に気持ちよさそうに話しているのに、圭一さんの相づちを聞いて尚うれしそうにしてるから。

で、それを面白く思っていないのが、約二名。

製紙の某女史とエルフの某女史。

なんでも、召還される前の所で、圭一さんを懸想していたとか。

とはいえ打ち明けていない恋心なんて、開いていない手紙みたいなもの。

相手に伝わっていないのでは意味がない。

そう、意味がないのだ。

その点では、実に得難い相手を召還できたものだと思う私だし、エレ姉様に見合う話題を準備できたフレデリカも大したものだった。

だったのだけど、フレデリカが防戦一方な二人の女史ってどんなの？

「りかちゃーん、おじさんはそろそろ切れそうだよ～」
「りっかっちゃ～～～ん、レナは、なんだか、おやしろさまの声が聞こえるかなぁ～」

やばい、なんだかとってもヤバい気がする。
というか、こんな雰囲気の二人を放置してエレ姉様と「キャッキャ、ウフフ」できる圭一さんがすごいのか、うちの姉がすごいのかが解らない。

話で聞いていたルイズさんのお姉さん、エレノオールさんは、堅物でヒステリックな人ってイメージだったけど、直接会ってみるとかわいい感じの女性だった。
こう、華奢な感じで、それでいて少女のような感性をしている人だったことを話すと、ルイズさんは目を輝かせた。

「さすが圭一さん、エレ姉様の良いところを直接且つ大胆に直撃してる！」

いやいや、なんつうか、見たまんまだし。
とかなんとか話した後で、なぜか超不機嫌な魅音とエルフの女の子・・・

「・・・って、レナか！？」
「大当たりだよ、圭一君！！」

なんつうか、貴族のみんなも驚きだけど、エルフ、それも肉感的なエロフってどんだけだよ、レナ。

「ん？　ん？　圭一君は今、なにを考えたのかな？　かな？」

やべ、目からハイライトが消えた。
レナのギアが入ったらしい。
Ｌ５じゃねえのに、やっぱ「あっち」の女の子はこえーよ！！

「・・・おじさんも聞きたいかなぁ」

両手をわきわきとさせる魅音。
にこにこな笑いのレナ。

まるで「部活」の時の空気、鉄火場の匂いがする。

「おーっほっほっほ！　リカ、圭一さん、遊びに来ましてよ！！」

うっわー、混乱必至か！？

「もしかして、沙都子ちゃん！？」
「って、レナさん！？」
「「わーーーーー！！」」

レナ曰く、本の定期安定供給が望まれているそうだ。

・・・感染させたですね、レナ。

で、エルフサイドから金銭の代わりとして労働力が供給される。
労働力として、ビシャ殿が充てられ、レナは定期運送でエルフの里とトリステインを往復するそうなのです。
というか、死ぬほどいやそうな顔ですね、ビシャ殿。

「・・・それもこれも、すべて自分の不徳だ」

聞けば、自分の姪とレナの為に僕たちの書物を与えていたのが事件の始まりだそうな。
つまり、

「若い女の子に構ってほしくて、お土産をわたしていた、と？」
「・・・ひどく屈辱的な表現だ」

死にそうな顔色のビシャ殿。
うん、イジリがいがありそうですね。

「門の向こうの工芸品でもいいのですよ？　武器意外でも何とかなるのです」
「ふ、番族の分際で・・・・」
「あうあう、これ、結構使えるのですよ～」
「お、羽入ちゃん、それ貸して貸して！」

「圭一にはこっちが似合うと思うのですよ？」
「うわ、これ結構いけるわ」

ビシャ殿が持ち歩いていた道具を、喜々として扱う、そんな伝説的使い魔の二人を、呆然と見つめるビシャ殿。

「あー、ビシャ殿？」
「私は、疲れているのだろうなぁ・・・」
「それは確実なのです」

頭をふらふらさせたビシャ殿は、「ｏｒｚ」なポーズで固まってしまったのでした。

「というか、販路を広げて、うちの支店でも作る？」
「ルイズ、よい考えなのです。そして支店長を・・・」

いまだガックリしているビシャ殿の腰をポンポンと叩く僕。

「え？」

何しろ供給される労働力なのです。
戦働きばかりが労働ではないのですよ？

「ええ？」

蛮族の世界に長期出張を覚悟していた私だが、早々にかえってこれた。
新しい肩書きとともに。

「V＆amp;R出版東方支店　支店長」

この話を押しつけられたとき、血を吐いて倒れるかと思ったが、戻ってからがひどかった。
評議会に呼び出され、市民たちに集まられ、他の集落に巡回させられた。

この死ぬほど重い本を背負って。

明らかにこれは拷問の類に違いない。
少なくともあの蛮族は、こういう未来を見通していたに違いないと思う。

ああ、なんて不幸なんだ。

まるで原作のような光景なのです。

ルイズの使い魔を挟んで、女子が鞘あて。
実にラブコメ光景で心温まるのですよ。

第一のコース、エレ姉様。
第二のコース、みぃ。
第三のコース、レナ。

「フレデリカ、これが貴方の幸せ計画？」
「ルイズ、少なくともエレ姉様のプライドの鎧はおろせたのですよ？」
「それを降ろしたのはフレデリカの物語だと思うわよ？」

まぁ、こまけぇことはいいのです。
でもこれで三姉妹丼だけは避けられたはずなのです。

「あら、フレデリカ。じゃぁ、二姉妹丼は諦めてるってこと？」
「キュルケ、避けることを諦めてはいないのですが、御花畑の結婚で「特赦」が出るのを期待しているのです」
「なによ、それじゃぁ私って刑罰みたいじゃない」
「・・・自覚は必要」
「ターバーサー！」

久しく三人組のじゃれあいなのです。
むにむにタバサの頬を引っ張っていたルイズが、急遽タバサを抱いてその場を離れました。
悟った僕も羽入を横だきにして離れます。
もちろんキュルケもフレイムを抱いて離れるのですが、視線で追うまでもなくテーブルが弾けました。

やばい、やばい、混ぜるな危険、だったのです。

第五十九話「お見合い」が生まれて（後書き）

熟成不足・・・でした。

追い立てられるように書いているせいか、ちょっと余裕がありません。

以降少し時間を置きたいと思います。

ごめんなさい

挿話０５　古手梨花と恋姫０５（前書き）

ＰＶが２５００００超えているのに気付きませんでしたｗ

そんなわけで、すとんとＵＰです

挿話０５　古手梨花と恋姫０５

勅

外戚でありながらも朝廷に弓引く者達よ！
劉家名代「劉弁」の名において、そなた等を断罪する！
連合に参加せし諸侯全員の官位を剥奪する、支配地を手放し、早々に退去を命ずる！！

この勅に従わぬ者は一切の例外無く朝敵として討つ！
この命に従う者は、悉く荷物をまとめ、とくと去れ！！

劉弁様の言葉を受け、怒声をあげる諸侯だったけど、さすがにすぐに弓は引かないだろうな、と思っていたのですが・・・

「青龍！」「はい、梨花様」

劉弁様の前に立ち、雨嵐のごとくに降り注ぐ矢を振り払う青龍。

「気が触れたか、劉表、劉障！！」
「御子に矢を向けるとは、その命惜しくないのだな！！」

春蘭と秋蘭も矢払いに進み出て、叫ぶ。
しかし、関の下では狂気の笑いをする諸侯が二人。

「討て、打ち抜け、撃ち殺せ！！　影武者などを使う姑息な逆臣など、影武者ごと殺せ！！」
「そうだ、高貴なる劉家の者が親族を罷免するなどありえん！！偽物だ！！」

暴走する二諸侯だったが、連合各家は怯んでいた。
当たり前だ。
この混乱を征するだけの度量は誰にもなかったのだから。

「な、七乃、紀霊、妾（わらわ）は、妾（わらわ）は、どうしたらいいのじゃ？」

呆然と関を見上げる袁術であったが、自分で判断をできるだけの能力など無かった。

「美羽様、方策は三つです」
「紀霊・・・」
「このまま劉弁様ごと朝廷を討つ」
「・・・無理じゃ。その程度はわかっておる」
「では、即時撤退し、当座の資金を集めて流浪の生活」
「ぎりぎりじゃなぁ？」
「さいごは・・・」
「責任をお二人に押しつけて、二人を討つ代わりに免責をしてもらうですか～？」

「いや、討つには討つが、その代わりに庇護を受ける、だな」

庇護？　と首を傾げる袁術に対して紀霊は苦笑い。

「今、背後は、一族の結集した孫呉がいる。今までの行いを考えれば、討たれてしかるべき状態だろ？」

「「・・・・あ」」

「多分、洛陽の連中と孫呉は連んでいるのだろう。そうでなければこの時期に連合からはなれんだろう」

存分に納得した用事は、泣きそうになる自分を叱咤しながら背を伸ばした。

「な、七乃。袁家として恥ずかしくない選択は何じゃ？」

「・・・朝敵逆臣を討ち、そしてその身柄を朝廷に預ける、これば一番生存率が高いですねぇ・・・」

「とはいえ、不利だからバカを切って逃げたって風評も立場が悪い」

「・・・妾（わらわ）は、風評など気にせんが、庶人を無用に死なせるのも忍びないのぉ」

少し考えた袁術は、すっと視線をあげた。

それは実に透明な決意にあふれていた。

「・・・これより、袁術軍は解散するのじゃ。領地も公職も失ったのじゃから給金もはらえん。武具や糧食は均等に与える。自由にするのじゃ。」

「み、美羽様は・・・？」

「運があれば、城に戻れて軍資金の一つでもえられるじゃろうが、

帰り道には孫呉が待っておるのじゃろう？　兵たちを道連れにするつもりはないのじゃ」

言葉を失う側近二人。

「お主等も、早々に準備せい」

背を伸ばす袁術はただの幼児ではなかった。

必要な虚勢と判断を最後にすることで、領主のあり方を示したのであった。

「美羽様、最後までお供します」

「美羽様、水くさいですよ～」

「・・・七乃、紀霊」

三人は、陣に集めた兵たちに今回の出兵の不明を詫び、そして現状を説明。

このまま撤退すれば、間違いなく孫呉による皆殺しにあうので、早々に朝廷へ和議、恭順を示すように言い渡すと、颯爽とその場を去った。

孫呉が居ると自ら示した方向へ。

それは必要な犠牲であったと将兵たちは涙を流していた。

関の前から動いたのは袁術だけだったのです。
ただ、兵たちへは恭順を勧め、自分たちは荷物をまとめに帰ったとの話でした。

「なんたる無責任な！！」

怒りに声を上げる劉弁様ですが、実際は違うのですよ。

このまま兵を率いて撤退しても孫呉が居る。
ならば自分の首を手見上げに、自分達の兵は生かしたい、そんな最後の、本当に最後の領主としての責任のとりかたなのです。

僕のその言葉に、目を見開く劉弁様。

はらはらと涙を流す袁紹様を慰める劉備さん。
しっかりと抱き合う姿は十年来の親友のよう。
さすが超級烈波友人弾は違うなぁ・・・。

「美羽さん、あの子は・・・・」
「麗羽様、これが袁術様が選んだ「袁」の道だと思うのですよ」

「さて、軍師殿。指揮をお願いできるかしら？」

華琳様の言葉を受けて、僕は指揮棒をふりあげたのです。

「・・・心して聞け、我が兵達よ。これより我欲と私欲にまみれた賊軍を打ち払う！　敵は人倫も常識もすべて失った畜生なのです！！　油断するな、手加減するな、皆殺しにするのです！！」
「「「「「おおおおおお！！！」」」」」

関は開け放たれる。
そこからは神速の将兵たちが駆けだした。
春蘭が、霧が、剛椀の武将達が賊兵を平らげてゆく。
秋蘭が、弓兵達が風雨のように賊兵達をいぬいてゆく。
屈強なる強者達（つわものたち）の剣に賊兵達が勝てるわけもなく、地に潜った士気は消え失せ、総崩れの体となってゆく。
中には先陣を切って切り込む者もいたが、一切の交戦もできず矢の餌食となる。
自らの将を失った劉表・劉障は、戦場をそのままに背を向けて逃げようとしたが、視線の先の砂塵に気づき息をのむ。

牙門旗は、「孫」。

瞬間、助かった、そう思ったのが彼らの意識の最後であった。

孫呉一族による蹂躙戦が行われ、諸侯軍はすべて全滅した。
唯一、領主の願いを命と引き替えに受けた雪蓮の指示で、袁術兵

は後方へ送られた。
袁術討たれるの事実に泣いた兵達だったが、孫呉兵を恨むでもなく受け入れたようだった。

事態収集のための陣で、雪蓮は一束の「それ」を袁紹に、麗羽に渡した。
それは金色の髪の毛の束だった。

「許しを請うつもりはないわ。これが私、私たちの悲願だったのだから」

それを聞いて麗羽は、静かに涙を流し、髪の毛を抱きしめた。

「バカな美羽さん・・・・」

さめさめと泣く麗羽様からちょっと離れた雪蓮様に僕はささやくのです。

「で、どこに逃がしたですか？」
「・・・なんのことかしら～」
「一応、その現場を黒猫はみてたのですよ」
「だったら、どこに逃げたかも知ってるでしょ～？」
「・・・まぁいいです」
「そ、まぁいいのよ」

何となく、どこに行ったかわかるので、つっこまなかったのですが、何れ会えそうな気がするのです。

そんなこんなで、孫呉の土地の回復を恩賞で受けた雪蓮は、太主としての権限を持って土地の切り回しをすることになったのでした。

公孫、袁、董、曹、そして孫の五家による漢王朝守護、五爪の龍にあやかって「龍爪五家」として後の歴史に残るはずなのですよ。

「おお、古手(クーディ)どの！！」

ソフトマッチョな謹上皇帝閣下は、僕の水魔法によって健康体になったのですが、その影響か味覚や趣味が完全にかわってしまい、お酒も贅沢な食事も大嫌いな運動大好きおじさんになってしまったのです。

通勤で自転車を使ったり、夜のマラソンで絞り込みができてしまった人みたいな感じで、ジリジリ変化する自分の格好を見て悦に入っているのです。

「最近、こう、首筋に不満があってだなぁ・・・」

「帝、さすがに三日四日じゃ結果がでない領域にきてるのですよ」

「ふむ、なるほど。余分は削げている、そういうことだな？」
「その通りなのです」

うれしそうに笑うその顔は「ビルダー」系で、すこしキモかったのです。

とはいえ、この変化についていけない人たちも多かったのですが、何皇后には好評で、何大将軍経由の話では、夜の生活に幅と深みが加わって、実にブリリアントらしいのです。

で、ついていけない人たちの筆頭は「華琳」様。
まだ生きるか死ぬかの方がよかったと半泣きなのです。

僕個人としては健康的でいいんですけどね。

「龍爪五家」による漢王朝守護は、たぶん二世代保たないでしょう。というか、今この瞬間だけが、僕たちの世代の唯一の革命の時期だったのだと思うのです。

ですが僕は、白蓮の、仲間の命惜しさに歴史の流れをねじ曲げてしまったのです。

魔法の力を全力で使って、精霊の力を全力で借りて、そして僕自身も様々に動いて。

いつしか、この歴史の流れを見て怒りに燃える人がいるかもしれないのですが、今は腕の中にいる白蓮を撫でていたいと思うのです。

この甘えん坊な主様を。

挿話０５　古手梨花と恋姫０５（後書き）

ちょっと短めですが、これで黄巾と連合が終了です。

が、霊帝が健康になってしまいました！

・・・すでに大破綻ｗ

白頭巾が大慌てでしょうねぇ・・・

第六十話　「三等兵の夢」がうまれて（前書き）

えー、そのー、スランプ中なのですが、悪乗りしちゃいました

第六十話　「三等兵の夢」がうまれて

ジョゼット三等兵の要望に答えて、お誕生日の際に歌いに行ったのですが、何故かコンサート会場が出来ていたのです。
ライトの魔法が付与された「ペンライト」や、極彩色のハッピを着ている貴族が相当数居るのが泣けるのです。

「えーっと、私も出ないと駄目？」
「キュルケ、ここで逃げたら、リステナーデ家と戦争なのです」

マジ戦闘です。御師匠様にも援軍を頼むのです。

「・・・気軽に引き受けすぎたかしら？」
「僕と二人で「ふたりはフレデリカ」は、キュルケのネタなのです。最後まで付き合ってもらうのですよ」

気軽に、宮廷パーティーの余興程度と思っていた僕たちでしたが、ジョセやんの悪乗りに気付かなかったのが負けなのです。
ラグドリアン湖のガリア側の、広大な敷地に富士ロックフェスティバルもはだしで逃げ出すようなコンサート会場に集まった極彩色の髪の毛達。
この熱狂に正面から向かいのですか・・・。
まぁ、やるしかないのです。

いやはや、熱狂した。
キュルケ殿とフレデリカ殿の「二人はフレデリカ」から始まった「コンサート」は、爆発的な盛況のうちに終わり、ゲルマニア・トリステイン・アルビオン各国からの開演依頼が突き刺さっているらしい。

まぁ、目の前の少年、リカちゃんをみると、どうもそう言うことはしたくなさそうだが。

「ジョセやん、もうあれはいやなのですよ？」
「はっはっは、リカちゃんそれは無理だ。おもしろい遊びを教えられて、二度と付き合いませんとは言わせてもらえまい」
「うわー、陰謀王にはめられたのです」

貴賓室で久しく二人になった我とリカちゃん。
こんな気軽な会話ができるようになったこと事態に感謝したいものだ。

「で、ジョセやん。なにか話したいことがあるのですよね？」
「う、うむ。実はな、ちょっと愚痴を聞いてほしいのだ」

全部聞いて、絶望的な気分になったのですよ。
ジョセやんの弟殺しには正義があったのです。
なんですか、女装趣味って。

なんですか、偽装結婚って。
なんですか、女装王女と偽ってジョセやんを襲おうとしていただなんて。
・・・近親相姦女装男色って、どれだけ罪深いのやら。
そんな目に幼い頃からあってれば、ジョセやんも歪もうというもの。
シャルロット姉妹やオルレアン婦人を許したのも、弟の被害者だからという理由だったことが判明。
半分泣いてるジョセやんが、あまりにも不憫すぎるのです。
で、ジョセやんとオルレアン婦人が共謀しているものと誤解したオルレアン卿の毒により婦人は心を壊され、そして兄に討たれた。

「我は、どうすればよかったのか、今、この瞬間も思い返さぬ時はない」

僕は思うのです。

「Ｙｅｓ，変態。Ｎｏ．タッチ。心の内にとどめている変態なら歓迎ですが、関わってきたときは反撃すべきなのです。ジョセやんは間違っていないのですよ」

声もなく泣き崩れるジョセやんをみないようにしながら僕は視線を外に向けたのでした。

そんなわけで、ＢＬ展開を期待した腐女子達よ、後悔しろ、なのです。

超重量級の話だったなぁ、と腕組みの俺は、風竜に頼んで元の場所まで送ってもらった。
風竜に乗っていたのは、俺とルイズさん、キュルケ、タバサ、あとはイザベラ様だった。
正直、この話を聞き耳立てていて全員が後悔した。

タバサは真っ青になってるし、イザベラ様も血の気の失せた顔をしている。
そりゃそうだ、自分の親が「女装男色近親相姦」なんて言われたら、もう逃げ場もない。
思わずタバサを引き寄せて抱きしめると、声もなく泣いていた。
こういう体温が「効く」事を知っている俺は、小さくなでながら心音を聞かせておいた。

「一つだけ、聞いてくれ」
「・・・」
「敵はもういない。真実は心を殺す刃になるかもしれねぇが、止めを刺されることはねぇ」

だから強く生きてほしい、そんな風に言うと、しばらく肩をふるわせていたタバサがつぶやくように言った。

「圭一、ソナタに感謝を」

うん、ネタに走れるぐらいは回復したってかな？
星○の紋章ならぬ「貴界の紋章」か。
結構面白いから、断章を俺が書くか？

いやいや、リカちゃんの分野だから避けておいて、別角度で切り込むか？

そういえば、リッシュなんとかという貴族が送ってきたファンレターで、そろそろ鬼畜ものやＳＭものを、という話があったので、Ｓの旦那とＭの女房の話を試作で書いたところ、神扱いされたっけ。

まぁ、官能小説でありがちなＳに溺れる旦那は良いとして、旦那の趣味にいち早く合わせて愛の独占を狙う肉食系Ｍ女房の話は、軽くホラーだと思っていたんだけど、貴族のハートを鷲掴みしたらしい。

このような理想の女性を捜しているとか、このような女性に出会いたいとか、リッシュなんとかのご友人の方々からもファンレターを貰ってしまった始末。

深く静かに広がっていつつも、ディープな趣味ってどこの世界にでもいるなぁ、とかおもっていたりする。

つまり、そういう方向の客層の掘り起こし、か。

出版社はワケたいな。

うん。

先日のコンサートを水の精霊も聞いていたらしく、かなり気に入ったそうだ。

というわけで、

「おねがい、フレデリカ！　コンサートを定期的にうちの領地でやって！！　契約に入れると通告されちゃったのぉ！！」

と、まぁ、めんどくさい話なのです。

教室で泣きつかれても、何ともいえないのですよ。

「モンモランシーが歌えばいいのですよ」

「・・・私、歌は、ちょっと・・・」

試しに歌わせてみたら、かなりの音痴と判明。

とはいえ、結構利権が絡むので定期公演は、ちょっと・・・・

「話は聞かせて貰いました！！・・・とぅ！！」

ずがしゃーーーん！！　という音と共に現れたのは「プリンセスミサイル一号」こと御花畑。

「って、姫様！　プリンセスミサイルは禁止でしょ！？」

タバサが二号を襲名して以来、貴族子女でプリンセスミサイルが横行して禁止令がでているのです。

「ルイズ、私は姫様なんかじゃないわ。プリンセスミサイル一号よ！！」

ばばーんと、ポーズを決める御花畑。

なんと、自称しやがったのです！

ティアラとドレスをそのままに、仮面舞踏会のマスクだけしてい

ますです。

これで名を偽るとは、原作ワルドを上回るアホさなのです。

第六十話　「三等兵の夢」がうまれて（後書き）

じつに不幸な話なのです。

変態は結構ですが、それをかぶせるのはだめなんですよ、ええ。

第六十一話「トリスティインの闇」が生まれて（前書き）

非常に長いことお待たせしました。

色々とございましたが、じっくり更新させていただきたいと思います。

以後も宜しくお願いいたします。

第六十一話「トリステインの闇」が生まれて

まぁ、トリステインとガリアの間をつなぐ通商演劇観光計画は、確かに僕がたてたものですが、それに加えて中継地点で歌唱ショウを、という流れらしいです。
基本案、アンリエッタ。
修正案、枢機卿。

舐め腐ってるのですよ、あの鳥の骨。
加えて、プリンセス仮面は、無休公務員ワルドの入れ知恵の様子。
あの腐れロリコン、泣かすのです。

が、すでに僕以外の関係部署に話がとおっているので、拒絶してもいいけど、割と洒落にならないペナルティーを支払わせられることになるそうです。

勝手に話を作っておいて。

とはいえ、引き受ければ、両国と水の精霊に恩が売れると言うことで、一応は了解したのです。

・・・が。

魅ぃ達にも手伝わせるのですよ、にぱぁ。

リカちゃんの提案は実にうまみのある話で、アル閣下からも協力せよと命令がきていた。
で、悟史と結婚を控える妹はさておいて、半ばトリステイン駐留外交官役ともなりつつある私が実務を行うことになったわけだけど、事前会議の参加者が、こう、どうも。

・プリンセスミサイル一号仮面
・プリンセスミサイル二号仮面
・青髪おやじ仮面
・魔法少女ドリルドリス

ねーねー、リカちゃん～、おじさん帰っていい？
と、いない人間に縋ることも出来ず、致し方なく（泣く？）議事を進めたんだけど、いやまぁ、なんというか、超次元プランが湯水のようにあふれでるのはおもしろいけど、そんな事させたら、リカちゃん逃げるよ？

「むぅ、しかし、リカちゃんには似合ってると思うぞ？」
「そうですわ、フレデリカには似合っているはずです！」
「・・・だからいやなんじゃないかしら？」

ドリルドリス、良いこと言った！
つまり、リカちゃんが歌いやすい環境にすれば、忍耐力も切れず、みんなもうれしいという事になるっしょ！

「ふむ、さすがリカちゃんの盟友、ザ・ペーパー」

青髪おやじ仮面、実にうれしそうにうなずく。
ザ・ペーパーというのは私のコードネーム。

てかさ、全員コードネームワレでしょ？
ミサイル一号二号は「アレ」だし、ドリルドリスって「アレ」でしょ？

そんな女の園にいる「おやじ」。
というか、このおやじ、誰よ？

・・・あれ？　もしかして、「あれ」？
うっわ・・・・、まじぃ、まじまじ？
そういえば「青髪」は血統だって言う話だったよねぇ？
うわぁ・・・。

ルイズがエレ姉様に拉致られ、心配になった圭一が学院の馬に乗ってアカデミーに行ったので、久しぶりに原作チェックをしてみたのです。
まず、国家間の話で言えば・・・
アルビオンフラグ無し。
続いてゲルマニア婚姻フラグ無し。
狂王フラグ無し。
アドバリンの指輪、変換済み。
くすぶっているのは「聖地侵攻」と「風石問題」だけなのです。
で、二つは密接にリンクしているので、風石をつぶせば聖地は侵攻できなくなるのです。
で、加えて、ガリアの代わりにＶ＆ａｍｐ；Ｒ社がエルフと交流しているので、結構まじめに意見交換できるのです。

・・・原作、影も形もありませんね。

個人間の問題は・・・

ルイズ・圭一召還、ルイズ自身ゼロとか言われていないので根性が真っ直ぐ。

すでに虚無に目覚めていて、「狙撃」の字が「穿滅」とかいう物騒なものに変わるほどの進化をしていたりする。

キュルケ、結構露出が少ない格好。ボーイフレンドより「始祖みて」仲間の方が多い。「微熱」の字は今では「必滅」とかいう恐ろしいものに。

タバサ、北花壇騎士団の番外。親戚のお姉さんに溺愛されている。字は「断滅」。

原作の欠片もない三人は、「学院の三滅魔女」として名高かったりします。

空恐ろしい字にかかわらず、三人とも人気が高く、始祖みてファンからすると、モデルになった三人ということになっているらしいです。

加えて、ギーシュもモンモランシーもマリコルヌもみんな原作からかけ離れていて、実にパーフェクトな異次元なのです。

「フレデリカ、暇？」

「カトレア姉様、一応、執筆中なのですよ？」

「だったらお茶にしない？」

そう、一番すごい原作剥離はカトレア姉様でしょう。

病気は治ったし、王宮の暗部で活躍して自分の都合の良い状況を作り上げたり、愚かな貴族もそうでない貴族も色々と派閥分けして裏から操るすごい人になってしまったのです。

それもこれも、「自分の病気を治した人間の元へ嫁にいく」こと

が目的だというのだから恐ろしすぎて声もないのです。
ここまで正面も裏面も固められると、貴族として逃げようがなくて困るのですよ。
そりゃ、僕もカトレア姉様を嫌いではないし、誰かを選ばなければならなければ、カトレア姉様を選ぶでしょう。
というか、その選択肢に「ルイズ＋タバサ」が入っているのが恐ろしいのですが。

「ねぇ、フレデリカ」
「なんですか？」
「こういう静かな時間もいいわね？」
「・・・ええ。落ち着いた時間に縁が遠かったので、結構うれしいですよ」
「でも、だめね」
「なにがですか？」
「フレデリカはいつも騒動の中心。寝ても覚めても大騒ぎの中にいるもの」
「・・・うれしくない話なのです」

もうすこし落ち着いた時間が過ごしたいのですよ、と苦笑いでいる僕の元に、騒乱の使者がやってきたのです。

「ふ、ふ、ふ、フレデリカぁ！！」

飛び込んできたのは沙都子と羽入。
けっこう二人が仲良しなので、うれしいのですよ。

「沙都子、淑女にあるまじき大騒ぎ、だめなのですよ？」
「なにを落ち着いてますの！　大変でございますのよ！！」

とりあえず、リカちゃんだけに任せると、絶対に切れると思うので、音楽祭という形にすることを提案したら、結構な賛成が得られた。

各国の王宮楽団や市政の楽曲家が参加したい素振りを見せているそうだから成功するだろう。

アル閣下からも「某貴族が声を披露したがっている」という話があるぐらいだから、それなりだろう。

というか、リカちゃんに緊急発注が行くんじゃないかな？

・・・どっちにしても苦労が絶えないよねぇ、リカちゃん。

「では、リカちゃんへの伝達は頼んだぞ、ザ・ペーパー」

「よろしく頼みましたわよ、、ザ・ペーパー」

「大いに期待、ザ・ペーパー」

「お願いしますね、ザ・ペーパー」

おじさんかよ！！

えー、この山のような依頼状は何なのですか？

カトレア姉様が色々と分類してくれた内容では、「ガリア」「ゲルマニア」「トリステイン」の特定貴族からの書状で、新しい曲を発注したい、金は思いのまま、締め切り厳守、歌手指導込み、そんな内容でした。

全部断りますが、一つだけＯＫなのです。

『私たち、結婚します』

詩ぃと悟史の結婚式への招待状だったのです。

参加に丸をしましたし、友人代表スピーチも引き受けるのです。

「・・・まぁ、すてきなお話ね？」

「僕には猶予期間があるのです」

「なにもそんな話はしていないのよ？」

にこにこ顔のカトレア姉様。

「・・・梨花、この全世界の女性を敵に回しそうな女性は誰ですの？」

「・・・ルイズの姉なのです」

「それは知ってますわ。聞きたいのは梨花とのご関係ですわ」

「・・・えっと・・・」

「フレデリカは私のとって、恩人で幼なじみで、とっても大切な男の娘で・・・」

なんでしょう、不穏な発音があった気がするのです。

「・・・将来を約束しようとしている関係ですよ？」

あ、割とフェアな物言いなのです。

「梨花・・・本当ですの？」

「・・・依然、カトレア姉様は、不治の難病にかかっていたのですが、僕とエレノオール姉様とみんなで助けたのです。その際の治療方確立の報奨ということで、婚約の話が持ち上がっているのですが・・・」

「・・・・」

「健康になった公爵次女との婚姻は、崖っぷち貴族にとって喉から手がでるほどほしいものなので、宮廷内が大騒乱になっていたのですが・・・」

「・・・・」

「・・・全部、カトレア姉様が黙らせたのです」

なにそれ、こわい。

そんな視線でこちらを見ないで欲しいのです、沙都子。

「・・・やだ、フレデリカ。私はお嫁さんが欲しい貴族の方々に、懇切丁寧に女性を紹介したりあてがったり押しつけたりしただけよ？」

「「（こわっ！）」」

思わず沙都子と抱き合ってしまったのでした。

リカちゃんの負担軽減のための音楽祭企画は、一応理解してもらえたらしい。

リカちゃんは「ステージをいくつか作るべきなのです」とロックフェスティバル形式を提案。

予算面でも可能なので、ガリアとトリステイン側に展開させ、双方を船でつなぐことにした。

空は低空遊覧する「船席」用にあけたため、道としては使えなくなってしまったからだ。

もちろん、出演者を高速移動させるための道でもあるんだけど。

各会場の席を占有する人間防止のために、人気歌手や人が集まることが予想される人々は会場の各ステージを飛び回ってもらうことにしている。

歌う内容に従ってアップ曲とスロー曲をステージ固有にしているのだ。

これにより、曲の好みでステージ定住することはあっても、歌手で固定することはなくなるわけだ。

一長一短アルだろうけど、第一回目はこうする、と決めた。

第六十一話「トリステインの闇」が生まれて（後書き）

今回の元ネタ
・ザ・ペーパー　・・・・・　言わずと知れた無駄巨乳臨時教師

１１／０７／２３　伯爵＞公爵

第六十二話「ヤバい夜」が生まれて（前書き）

挿話で大暴れしといてそれはないだろう、という話もありますが、
一応、この世界の梨花ちゃんは、ぎりぎりＯＫですｗ

第六十二話「ヤバい夜」が生まれて

歌だけではなんなので、トリステインの少女歌劇団とガリアの少年歌劇団の休憩組を引っ張り込むことを提案すると、両国のトップから「承認」の竜便がきた。

どれだけ入れ込んでんだ、なのですよ。

そんなわけで、湖面舞台用の脚本を書かざる得なくなり、結構忙しい僕なのですが、今は新たな戦力があるのです。

「圭一、期待してるのですよ！！」

「えーっと、どこまでＯＫ？」

うわーーー、この力強い台詞！！

痺れて憧れるのです！！

「とりあえず、異端審問はクリアーして欲しいのです」

「了～解」

というわけで、圭一は男子寮、僕は女子寮で執筆することになったのです。

梨花が楽しそうに生活しているのをみて、この世界にやってきてよかったと思ったのです。

僕にとって、古手梨花の成仏は、羽入の存在の終了と同等で、あとは今まで出来た欠片を組み合わせておしまい、そんな流れの筈だったのですが、なぜかある欠片が見あたらなくなっていました。

一生懸命さがして一生懸命さがして、やっと見つけてみたら、物語の範囲を飛び出した先に、それも全くわからない空間に浮かんでいました。

のぞき込んでみて驚いたのは、古手梨花の記憶と経験を詰め込まれた別人による新しい欠片。

それでも古手梨花であるおかげで僕も覗くことが出来るというおもしろい欠片。

そこでの梨花は、実に楽しそうに、実にうれしそうに（文字通り）四苦八苦して、今まで見返してきた欠片なんて色あせるような、そんな生活だったのです。

この梨花の生活をもっと近くでみたい。

僕の思いが通じたのでしょう、銀の扉が目の前に現れました。

僕は何の逡巡もなく飛び込んで、新しい梨花とともにこの世界で生活することになりました。

本人は偽装とか自虐してますが、僕にしてみれば可愛い梨花であることに変わりないのです。

本人がいうほどの違いがあるわけではありませんし、周りの人間、魅ぃや詩ぃなんか全く違いを感じていないほどなのです。

逆に召還された圭一の方が誤差がすごいのですよ。

だって、視認できるほとんどの世界の圭一の記憶が詰まっているのですから。

老衰で死んだ後の記憶まであるのって、絶対変なのですよ！

で、圭一が召還された瞬間は、たぶん、皆殺し編の最後でしょう。
その召還の衝撃で、魅ぃや詩ぃやレナ・沙都子が転生したと思います。
この世界に出そろったのも、ルイズの召還の余波なのは間違いないでしょう。
こんな、隔絶された世界に召還出来たかといえば、たぶん、皆殺し編の欠片が、この世界の欠片の近くに迷い込んで、融合してしまったんだろうと思うのです。
それ以外の理由はわかりませんし、それ以上の事情もわかりません。
でも、圭一が、魅ぃが、詩ぃが、沙都子が、レナが、梨花が、みんな楽しそうにしているこの世界を僕は愛おしく思うのです。
だから、僕は守るのです。
みんなの幸せを、みんなの生活を。

「・・・だから、梨花。僕がシュークリームを食べるのは、みんなの為なのですよ」
「もっとうまいいいわけを考えるのです」
「みぎゃーーーーー」

う、う、梅干しは禁止なのですよぉ～！！
いたいいたいたい～～～～～！

最近、フレデリカってば、私の扱いがぞんざいな気がするわ。
「虚無」の練習もあまりつきあってくれないし。

そりゃわかるわよ？　忙しいし。
その合間もぬって新作も書いてくれている。
感謝してるわ。

でも、ほら、幼なじみとして、いろいろと贔屓があっても良いと思うのよ。

「わかるでしょ、フレデリカ」
「・・・執筆の邪魔にきてる時点で、僕は怒っても良いと思うのですが、どう思います？」
「可愛い幼なじみが薄着で夜に訪問してきてるんだから、喜んでほしいぐらいなんだけど」
「・・・一昨日こいなのですよ」

結構ササクレ立ってるわね。
やっぱり癒しが足りないのかしら？

「・・・まぁ、用件は冗談だけど、結構精神状態がやばいんじゃないかと思って、添い寝にきたのよ」
「ありがたいのですが、流石に嫁入り前のルイズに頼める用件じゃないのですよ」

深いため息とともに苦笑いのフレデリカ。

「あのね、フレデリカ。無理が顔にでてるわよ？　メイドたちだって、新作よりも休みを取って欲しいって私に嘆願にきたぐらいなんだから」

そう、メイドやら厨房衆が挙って頭を下げにきたのよ、私のとこ

ろに。
ちいねえさまじゃなくて！
ちょっと自尊心がくすぐられたわ。
でも、それ以上にフレデリカの体調が心配すぎた。

「・・・心配かけてるのですね」
「心配かけないように、これから少し寝ること。監視は私・・・」
「・・・それと私」

って、タバサ、いつの間に！！

「私はフレデリカの陰」

・・・怖いわよ、タバサ。

「お姉さまからも「最近のフレデリカの激務はひどいので管理せよ」と指令がきてる」

・・・流石イザベラ姫様。
うちの御花畑とはひと味違うわ。
というか、うちの御花畑とトレードしてくれないかしら？
・・・だめだわ、どっちにしても私たちにかかる迷惑が予想できるし。

「・・・ありがとうございますなのです。後少し書き進めてから休むのですよ」
「「だめ！」」

私とタバサでむりやり別途に引っ張り込んだけど、少しの抵抗も出来ずに寝入ってしまったフレデリカ。

本当に倒れる寸前じゃないかしら？

「タバサ、このまま抱きついて寝ちゃいましょ？」

「ん」

ふふふ、この天国のような地獄の光景を見て、朝にあわててもらいましょう。

そんな風に思っている自分を呪い殺してやりたいと思った朝だった。

「・・・フレデリカ、すごい」

「・・・・・」

「・・・フレデリカ、堅い」

「・・・・・」

「・・・フレデリカ、あつい」

やばいわ、やばすぎるわ。

お父様とは全然違う。

「・・・ルイズ、これ、どうしよう？」

「・・・タバサ、豊富な知識の中に、これの対処法はないの？」

「（ふるふるふる）」

悲しげに首を横に振るタバサ。

私もそんな経験はない。

こんなにも苦しそうで、こんなにも辛そうな「フレデリカ」をほおっておけない。
だから私とタバサは、二人で抱きしめた。

これは慈愛の行為だったんだけど、いろいろあってフレデリカは、目を覚ましたとたん真っ赤になって部屋の恥まで飛びのいたのだった。

・・・そのぉ、これは、事故だから、うん、事故だということで気にしないわよ、ね？　タバサ。

「（こくこくこく）」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

ああ、なんというか、真っ赤になってボロボロ涙を流すフレデリカって、結構可愛いわ。

久しく、彼女の夢を見て、いろいろとしようと思ったところで「ヤバい」と思ったのです。
とびおきて正解でした。
何しろ、いろいろと手遅れになる寸前だったのです。

やばいやばい、ステイステイ。

意図的にいろいろと醒ましたのですが、目の前には真っ赤になり

つつも目をウルウルとさせた美少女二人。
ヤバい、本当にヤバいのですよ。
こっちとら禁欲生活を拾うと睡眠不足で相殺していたのに、ぐっすり寝たら出てきちゃいましたよ、いろいろと不足しているものが。
・・・勘弁して欲しいのです。

「そ、そのぉ、フレデリカが欲しいなら・・・いいのよ？」
「私はフレデリカのもの」

あーあー、もう、なんでこんな自重しないといけないですか！！

・・・いや、ちゃんと決めたのですよ。

そう、このハルケギニアでは「無茶」をしないと。

別れる際に白蓮と約束したのですから。

「ルイズ、タバサ。とってもうれしいのですが、そういうつまみ食いは、後の生活での刺激が薄れるのですよ？」

真っ赤になった二人は、どうにかそれで治まってくれたのでした。
僕の方は、その、いろいろと手が掛かる可能性が高いのですよ。
なんだかなぁ・・・。

第六十二話「ヤバい夜」が生まれて（後書き）

意外な話ですが、ハルケギニアでは今だ手を出してませんｗ

アウアウ、乙ｗ

第六十三話「自覚した苦しみ」が生まれて（前書き）

オリ主Ｔｕｅｅｅｅなフレデリカですが、中身がヘタレなので、ある方面での問題に対しては超しり込みです。
チキンなのですよｗ

第六十三話「自覚した苦しみ」が生まれて

あの朝から、ルイズとタバサどころかキュルケまで絡んでベットに潜り込んでくるようになったのです。

流石に理性の限界がきたので男子寮に逃げ込もうと思ったら、あっちはあっちで貞操の危機が発生しそうなので困った限りなのですが、ここで救世主！

「フレデリカ、私のところにくればいいのよ？」

・・・カトレア姉様、何の解決にもならないのです。

「梨花！　困ってるなら相談なさってくださいませ！　一番の親友のつもりなのは私だけですの？」

ああ、ベアトリス様！

沙都子、沙都子、かわいいよぉ～なのです。

そんなわけで、執筆後に沙都子の部屋に潜り込んだところ、何故か下級生の集団が待っていたのです。

「・・・さ・・・ベアトリス、これは？」

「え～っと、ご免なさい、フレデリカ様。フレデリカ様がお泊まりに来るのがバレてしまいましたの」

そんなわけで、下級生によるパジャマパーティーだそうなのですが・・・

実は、一度退校して出戻ってきた方々も多いので、こう、年齢的に、微妙なのです。
そう、体型とか、雰囲気とか、艶っぽい感じとか・・・。
くぅ、ダッシュで逃げては沙都子の立場もあるのですし・・・。

「あ、あの、フレデリカ様、ご迷惑でしょうか？」

こう聞かれて迷惑と答えられるほど空気が読めないわけじゃないのです。

そんなわけで、僕は泣く泣くパジャマパーティーに参加して、いつも以上の精神力を発揮せざる得なかったのはお約束なのです。

フレデリカが何に苦しんでいるかを理解してしまいましたわ。
何というか、こう、ご愁傷様ともうしますか。
男性になった記憶というものはございませんが、下手に女性であった意識があるので苦しいらしいのです。
加えて、周囲が男性扱いしない「純血」少女ばかりなもので、その醜い部分を隠さざる得ないというのが苦しいところなのでしょう。
逆に男子寮に行けばいいのかといえば、そうではありません。
男子寮には今のフレデリカの苦しみを越えたさらなる野獣が息づいているのです。
流石にあの容姿では出入りしたくないでしょう。

・・・ちょっと興味はありますけど。

それはさておき、この夜会は一度限りということにさせていただきました。

梨花に無理強いしてしまったこと自体を理解している人たちは納得して下しましたが、参加できなかったことが不満と感じている人々には理解できないようです。

遠回りに、はたまた直接的な文句がきていますが、梨花の苦しみを思えば何ということはありません。

ああ、出来れば直接その苦しみを何とかしてあげたいのですが・・・

それが出来ないからこそ苦しんでいる梨花には話せない内容ですわね。

梨花は私に対して「沙都子」を求めているのですから。

ベアトリスとしての立場では、梨花を救えない。

少し寂しいですけどね。

えーっと、ミスタ圭一に怒られました。

フレデリカのために、と思っていたんだけど、男の純情を弄ぶ行為だ、と大激怒。

あんなに紳士なミスタ圭一が怒るのだから、フレデリカもさぞ怒ってるだろうと思ってたけど、

「以後は自重して欲しいのですよ」

という決着をつけてくれた。

許された、と思っていたのはつかの間。

じつはすでにお母様に事の次第が報告されていたのだった。

「フ、フ、フレデリカァ、それはないんじゃないのぉ！？」

「ボクの苦しみを味わうがいい、のです」

・・・ことのほか怒ってました。

久しぶりのお母様の洗礼を受けて死ぬかと思ったけれど、最後にお母様が囁いてくださった。

「あまりフレデリカを追いつめず、包み込んであげなさい」

お母様、がんばります・・・。

一応、そんな騒ぎの中でも結構負荷が減ったらしく、かなりいつものフレデリカが戻ってきたのはうれしかった。

えー、前回のネタ「二人はフレデリカ」がプログラムに入っているという。

まぁ、なんというか、光栄？　かしら？

これを聞いたお父様は、お抱えの絵師を総動員して絵画に描かせると息巻いているという。
・・・正直に言おう、結構困ってる。

ルイズあたりは舞台度胸があるらしいけど、私は結構ダメだ。
というか、男女の一対一ならいいけど、無遠慮までな欲望の視線が幾万も集まってくるだなんて考えただけで恐ろしい。
以前は、そう、数人程度なら快感に感じていた。
でも、これはだめ。
まるで欲望の視線の暴力だもの。
ガリアで十分に感じたわ。
この上あの視線にさらされると思うと、自然に膝が笑う。
そんな私を包み込むように抱きしめるフレデリカ。

「大丈夫なのですよ、キュルケ」

優しく優しくなでるフレデリカ。
なんだか胸の内の不安が薄らいでいった。

「あそこで歌うのはキュルケじゃなくて、フレデリカ＝アウアウなのです」

・・・私の感動を返してよ、フレデリカ。

「そして、あそこで歌うのはボクではなく、フレデリカ＝ベルンなのです」

あー、もう、何でもよくなってきたかしら？
あはははははは。

「そうです、その意気なのです。キュルケも一緒に泥をかぶってもらうのですよ～」
「似合ってるのですよ、キュルケ」

フレデリカの使い魔「羽入」は、姿を消しつつ進行をする役目だ。
というか、先住魔法そのままなのに何で騒がれないのかしら？

・・・フレデリカだから、これしかないわよね。

もう何でもいいわ、うん。
こうなったらいろいろと演出もしましょうよ？
花火使ったり、光をチカチカさせて。
うん、それがいいわ！！

「吹っ切れたみたいでうれしいのですよ～」

にこやかに微笑むフレデリカの笑顔が黒く見えたのは気のせい、
気のせいにちがいない、うん。

第六十三話「自覚した苦しみ」が生まれて（後書き）

みんな色々と不幸、というか、日常に潜む問題って解決に向かう本人にとっては大問題だよねーという感じです。
他人から見れば簡単な解決法も、追い詰められた本人には難しかったりするわけで。

オリ主Ｔｕｅｅｅでも、心の問題は別。そんな感じで書いて見ました。

今回の元ネタ
ああ、ベアトリス様！　：　ああ、女神〇ま

第六十四話「湖歌謡際」が生まれて1（前書き）

お久しぶりのフレデリカさんです。

第六十四話「湖歌謡際」が生まれて1

ガリア、ゲルマニア、トリステイン、アルビオン、四国の歌自慢が集まった「湖歌謡祭」は、恐ろしいまでの集客効果を示したのです。

これにあわせて各国の主要港とラグドリアン湖の港を細かなダイヤの高速小型船でつないで、まるで旅客機か、というダイヤで運用してやったことにも原因を求められるのです。

アイデアは僕、ダイヤは圭一が引いたのです。

何気に万能なのですね、圭一。

今回開発した小型高速船は、翼の浮力を無視して翼の小さなスペースシャトル型を導入したところ、カーゴベイ部分に色々と細工ができるということで、この仕様のまま売って欲しいと各国から要望が山ほどなのです。

材質上軽いし、方向転換を翼で行えるのが好評ですが、推進を風石で無理矢理するのは評判が悪いのです。燃費的な意味で。

ともあれ、準備は万端ですし、船で移動するには近すぎる方々は、龍篭や馬車を仕立ててやってきているのですが、平民なんかも結構きていて大騒ぎなのでした。

「軽く、パニックだな」

「・・・すこし引くのです」

「・・・すこし？　あたしはドン引きよ」

バックステージで司会役の圭一と僕、そして相棒キュルケが冷や汗をかいていたのです。

今回企画は「ふたりはフレデリカ」がメインになるので、メインステージのスタートは僕たちが、という風に決められてしまったのです。

そんなわけで、物語ファンとかキュルケファンとかいろいろがワンサカワンサカワンサカワンサカ、イエーイイエーイな状態なのです。

「フ、フレデリカ、あれ・・・」
「げ」

気づけばステージ脇にテラテラ光る何か。
あれは、間違いなく・・・

「水の精霊なのです」
「かぶりつきかよ」

踊り子には触れちゃだめなんだぞ～とかつぶやいてる圭一、おいおい、どこのおっさんなのですか?

「けいちゃーん、そろそろお客の熱が溢れるよ～」
「おう、じゃ、いっぱつ開始だな!」
「「「「「おう!!」」」」」

スタッフとして猫の騎士団も準備万端。
さぁ、いくのですよ!!

メインステージのボルテージは鰻登り。
不審者監視のために動員された騎士団も役に立っていない様子だった。
とりあえず、私はタバサと共に遠隔からの狙撃をしてた。
まぁ、身内だし、そのへんはフォローしないとね。

「ルイズ、会場入り口、不審者」
「了解」

タバサをスポッターに、私は狙撃。
虚無の呪文を覚えてからは、コモンでの狙撃はできなくなったんだけど、系統魔術で何でも狙撃できた。
「練金」狙撃は、その精度、威力調整も完璧で「狙撃の錬金術師」とかいうアダナなまで付くほどだ。

「『練金』」

会場入り口で杖を構えたバカの「杖」を練金して爆破。
真っ黒になって立ちすくむ男を発見した騎士たちが「せっかくの歌のじゃまをしやがって」と不条理な怒りのリンチを加えていたりする。

「ねぇ、タバサ。なんでみんな仲良くって出来ないのかしらね？」
「・・・誰もが、誰よりもいい目にあいたい。そんな欲望がある限り、バカは減らない」

真理なんだけど、信じたくないわ。

というか、そういう人間って洗脳でもしない限り居なくならないっぽいわよね。

「それも真理。でも、極力そういう人間が住みにくい世界は作れる」

「んじゃま、フレデリカの地均しの足場作り、がんばりましょうか」

「ん」

全六曲を歌いきって、舞台を後にした。

程良い疲れを残すからだを、力強い拍手が覆い尽くす。

これは、そう、癖になりそう。

隣のフレデリカも疲労以外の上気で頬を赤くしている。

「で、どうだったですか？」

「・・・次もやれっていわれたら、断るのに困る感じ、かしら」

いえーいと私とフレデリカのハイタッチ。

「次のステージまで半日はあるですから、ゆっくり休憩するのです」

「あー、一応、ファーストステージ打ち上げを、お父様が企画してるのよ・・・来てくれる？」

「わかったのです、つきあうのですよ」

「助かるわ、フレデリカ」

苦笑いのフレデリカを抱きしめ、感謝感謝とギュウギュウにする。

「えーっと、キュルケ。僕は男の子なのですよ？」

「わかってるわよ？」

ふふふ、最近、こういう男の子の反応をしてくれるのが嬉しいわよね。

てっきりルイズやタバサみたいな「モノ」にしか反応しない趣味なのかと思ってたけど。

まさか、この私がツェルプストー企画の夜会に参加するとは思わなかったな。

妻も終始機嫌がいいし、どうにも調子が狂う。

「ラ・ヴァリエール、貴君の娘に感謝を。我が娘のファーストステージを守ったのは、確かに貴君の娘だった」

「感謝には及ばん、ツェルプストー。我が娘の行動は我が娘に帰属するものだ。我が家の指示ではない」

苦笑いの我々の握手で、会場がわっと沸いた。

まぁ、あの「ロミオとジュリエット」の原作名家の握手だ、しばらく夜会の語りぐさだろう。

「烈風姫のご来場も、深く歓迎させていただきますぞ」
「・・・ツェルプストー卿。さすがに年も年ですので「姫」はご勘弁ください」

苦々しい笑顔の妻であったが、このあとの原作書籍へのサイン攻勢は参ったらしい。

「烈風姫」だけならばまだしも「トリバラ」までサインを求められていたから。

烈風姫は、内々に我妻のことであると知られているが、トリバラこと「トリステインのバラ」は全キャスト匿名であったはずだ。

「つまり、ピエール。貴君がアンドレ、と？」
「勘弁してくれ、本気で」

ツエルプストーと共に、物語ファンに囲まれる我妻カリン見物をする私だった。

ああ、フレデリカ。もう、うちをネタにしないでくれよ？

そんな祈りは全く届かず、後日出版された「レアの日記」は爆発的ヒットとなり、長期の絶望的な療養生活というところから「カトレア」を題材としていることが割れてしまったのだった。

フレデリカァ～～～～

一応、打ち上げなので歌を求められることはなかったのですが、握手やサインがすごい量になったのです。
さすがにキュルケ中心でしたが、僕にも執筆本のサインを求められること多数で、昔を思い出したのです。
出版当初の「ラ・ヴァリエールとツェルプストー」を大量に抱えてキュルケがサインをねだりに着たのはよい思い出なのですよ。
あれの配布があって、ゲルマニアの物語熱が高まったのだと僕は思うのです。

「ご苦労様なのですよ、梨花」
「ありがとうなのです、羽入」

使い魔ということで、常時同行してる羽入は、なぜか完全に受け入れられていて、キュルケと僕の周りでくるくる舞ってたり、タンバリン片手に踊っていたりする姿が好評らしいです。
亜人であることは公表しているのですが、やはりロマリアが介在していないと、こういう時に差がでるのですね。
無論、根強い「亜人排斥」の意識はあるらしいのですが、それでも「かわいいは正義」という思想侵略が浸透している証拠だと思うのです。

「それにしても、ゲルマニアの甘いモノは大ざっぱなのです。あれではまるで戦中のアメリカみたいなのですよ」
「うわ、イメージできるわ」

テーブル周りをして一通り味見した羽入の意見に苦笑い。

「ここは一つ、リステナーデにこの人ありといわれた梨花に、一肌脱いでもらいたいのです！」
「つまり、ここの甘いものでは満足できないから、何とかしろってこと？」

うんうんうんと激しくヘッドバンキングの羽入。
まぁ、材料もあるみたいだし・・・

「ギーシュ、カモン！」
「・・・なにか用かな、団長」
「石窯を作るです」
「・・・なんかさ、僕って便利な奴って感じじゃないかい？」
「？　なにを当たり前なことをいってるのですか」

なぜか全力で涙を流すギーシュのつくった石窯を使って、僕は羽入のためのお菓子を作ることにしたのです。
今回お疲れなので、いたわるのですよ。

「ふ、ふぐっ！　り、梨花、なぜかこれ、辛いのです、すんごく辛いのです、目にシミるのですぅ、見た目はシューなのに地獄のような辛さなのですぅ！！！！」

ふふふ、遠く遠くから仕入れた「辛子」の大盤振る舞いなのですよ～。

第六十四話「湖歌謡際」が生まれて１（後書き）

今回の元ネタ
踊り子には触れちゃだめなんだぞ～　・・・　ストリ○プ劇場のお約束
「狙撃の錬金術師」・・・ご存知「鋼○錬金術師」。最近農業っぽいｗ
「レアの日記」・・・「アンネの日記」を闘病風に
「かわいいは正義」・・・世界の常識ｗ
あれではまるで戦中のアメリカみたいなのですよ　・・・　ぎぶみーちょこれーとやー
「ふ、ふぐっ！　り、梨花、なぜかこれ、辛いのです、すんごく辛いのです、目にシミるのですぅ、見た目はシューなのに地獄のような辛さなのですぅ！！！！」　・・・アップ寸前まで、羽入を労わって終わりのはずでした。なにがこうさせたのやら・・・ｗ

０９／１４　修正したのですよー
０９／１６　ネタを色々入れたのです

第六十五話「湖歌謡際」が生まれて２（前書き）

いやー、人が多い分、書く内容が多くてぇ・・・

けして文字数稼ぎじゃありませんｗ

第六十五話「湖歌謡際」が生まれて2

割とすごい人間が集まっていた。

四国合同とはいえ、お偉いさんが集まっている、というだけではなく、かなりの趣味人で、ステージにもこだわりいっぱいだった。

演出用のメイジを何人も抱えていて、マジですごかった。

そんなわけで、司会の俺も導入で「N○K」っぽい歌紹介やら歌手紹介をしたところ、大いに気に入られてしまい、各ステージで取り合いになってしまった。

「さっすが口先の魔術師だね、けいちゃん」

「圭一君、本当にすごいよねー」

一休み中の俺のところへ、魅音とレナがやってきた。

「おいおい、魅音。運営がふらふらしてていいのか？」

「一番恐ろしい「ふたりはフレデリカ」が終わったんだもん、休みぐらい取るって」

「ま、いいけどな～。で、レナは休暇か？」

「うん、かあいいものいっぱいで、こっちは楽しいよね～」

依然、ラ・ヴァリエールの地下倉庫にあったという拷問器具を「おもちかえり」しようとして、一族総出で止められたことは記憶に新しい。

「あ、そういえば、第三ステージに行けば、レナも熱狂の可愛さがみられるはずだぜ？」

「ほ、ほんとかな、かな？」

「なにせ、沙都子による「演歌」熱唱だからな」

・・・・あれ？

「レナならもう、ダッシュで向かったよ」

「あー、やっぱな」

思わず苦笑いの俺。

「さ、けいちゃん。そろそろ出番でしょ？」

「おう、じゃ、みててくれよ」

「うん！」

さ、頼りになる指揮官殿の見送りだ。

胸を張ってやりきるぜ！！

「あー、レナ。気を利かせてくれたのは嬉しいけど、邪推しすぎ」

「・・・あははは、ばればれだった？」

「バレバレ」

瞬時に姿を消したレナだったけど、先住魔法で姿を消しただけだった。

まるでこの場所からレナを押しやるかのようなけいちゃんの台詞に、レナが気を利かせてくれたんだけど、さすが鈍感王けいちゃん。

まったくそんな意志はなかったわけで。

本気でドキドキしたんだけどね、私は！

「ま、これで決まっちゃうほど、魅ぃちゃんと私たちの関係って簡単じゃないしね」
「そうだね、ほんと、何というか、すごく複雑」

いくつモノ世界を隔てて、生死を繰り返して、理すらも越えて再び出会った私たち。
本当に、本当に複雑。
その引き金を引いたのはルイズさん。
そして引き込まれたのはけいちゃん。
なんというか、本当にマンガみたいな男の子だと思う。
あの絶望を、あの運命を喰い破った運命の破壊者。
リカちゃんの話が本当ならば、その後の世界でもリカちゃんを救ったという。
本当にすごい男の子だよ、けいちゃん。

「ねぇ、魅ぃちゃん」
「ん？　なに、レナ」
「あのね、実はね、私の中にも、梨花ちゃんみたいな別の記憶があるんだ」

レナの語った別の記憶は、非常に救いのないものだった。
友達を仲間を信じられず、疑心暗鬼の中でもがき苦しみ狂ってゆくというモノ。
そんな中でもけいちゃんは、ただ唯一の道を、レナを救うという道を示し、そしてレナを救ったという。

「・・・はじめはね、単なる妄想だと思ってたの。でもね、たぶんこれはほんと。本当の記憶なんだ」
「そっか」

だから、とほほえむレナ。

「圭一君が幸せになってくれるなら、相手がだれでもいいんだ。レナを相手にしてくれるのが一番嬉しいけど、でも、圭一君の幸せがそこにあるなら、誰が相手でも、ね」

うっすらと浮かべた涙を私は拭う。

「レナ。立場的に応援できないけど、でも、あきらめちゃダメ。そう教わったんでしょ？」

「・・・ふふふ、そうだった」

きゅっとお互いを抱きしめ会った私達は、同時に離れた。

「正々堂々勝負だよ、魅ぃちゃん」

「正々堂々勝負だね、レナ」

ま、ライバルはもっと一杯居るけどね。

とはいえ、前世からの絆からってね。

武に長け、文を誇り、そして今、目の前のステージで軽やかな名

調子をみせていた。

圭一＝前原。

我が家の末妹が召還したという使い魔にして、私の婿候補だという。

なんというか、妹の愛を感じさせられる話だった。

いくら国内外の怪しげな求婚に辟易としているからって、異界から少年を召還するなんて荒技に頼らなくてもいいのに。

とはいえ、彼はフレデリカも認めるほどの人物であり、我が家最強の母ですら認める存在だった。

そう、私自身も彼の知識には「何か」を感じるモノがあった。

そんな彼が、なんというか、気高くもなにもない「司会」に興じている。

だけど、全く似合わないわけではなく、一歩引いて主役を立てる姿は、生まれついての従者のようにも感じる。

そう、彼が私の隣にたち、公爵夫人とその従者という姿も自然に感じてしまった。

立ち位置的にお父様とお母様みたいだ。

・・・どっちがどっちとはいわないけど。

「エレ姉様。そろそろ、ステージを移動しませんこと？」

末妹ルイズの言葉を聞き、私もうなずいた。

圭一＝前原と友好関係にある公国の姫気もがステージに立つという。

トリステインにも関わりの多い国の姫だけに見に行かねばならな

いだろう。

「姉様。義務だけで見に行くと面白くありませんわ。ベアトリス姫は、かなり「フレデリカ」してらっしゃいますわよ？」

それは、興味深いわね。

「・・・私も御一緒していいかしら？」

「ちいねえさま・・・」

最近、その存在感を恐ろしいモノにしている次女カトレアが現れる。

一応、私もまだフレデリカを諦めていないわよ？

最高だった。

本当に最高だった。

ロッテとともに鑑賞した「ふたりはフレデリカ」は最高だった。

あの感動を、あの衝撃を、永遠に味わいたいとすら思ったけど、簡単には手に入れられないからこその存在だともわかっていたので、逆に気持ちが高まった。

「ロッテ、来年も開催できるように頑張るわよ」
「・・・ん」

ぐっと拳を握るロッテ。
かなりやる気にあふれている雰囲気だ。

「で、次はどこに行くんだい？」
「ツェルプストーの打ち上げに呼ばれてる」
「ほほー、ゲルマニア貴族の顔つなぎかい」

ヴァリエール・ツェルプストーに加えてロッテの三人は「始祖みて」の三人だという扱いらしい。
真実は、まぁ、いろいろあるだろうけど、執筆当初の時期を考えれば、原作三人の一人は間違いなくルイズ殿がモデルだろう。
何かと符合する部分が多い。
逆に、スワティーカのモデルもラ・ヴァリエールの誰か、いえ、長女あたりなんじゃないかと私は考えている。
フレデリカの書く物語の方向性は、実は結構一定だったりする。
今までの物語に比べれば自由奔放だけれども、一つの整合性がある。
それは・・・

「姉様、そろそろ三等兵との合流時間」
「・・・わかったよ、ロッテ」

ま、こんな思索はいつでもできる。
今は、この時間と空間を楽しもう。
まったく、恐ろしいまでに楽しいじゃないか。
これなら父上も「退屈」だなんて思う暇はないね。

第六十五話「湖歌謡際」が生まれて2（後書き）

歌謡際はあと2～3話続く予定です

今回の元ネタ

口先の魔術師　・・・　圭一の二つ名。将来声優になるといい役がもらえると梨花御推薦。

スワティーカ　・・・　始祖みてのお姉さま。男嫌いで気位が高くて、ツンデレ。＞小笠原祥子（声：タイガー）

第六十六話「湖歌謡際」が生まれて３（前書き）

歌祭り三回目です。

なぜか書けましたｗ

第六十六話「湖歌謡際」が生まれて3

・・・ふぅ、どうにかこうにか撒くことができた。
さすがに「我がミューズ」とはいえ、ここまでは追ってこれまい。

大汗をかいた我は、湖畔の休憩所に紛れ込むことに成功した。
ここは、平民用の簡易休憩所で、ここを宿代わりにする者も少なくないと言う。
多少狭いが、それでも歌謡祭の熱気は休憩所全体を覆っている。
肌で直接感じることができる民草の熱気は、政治や戦争などのことではなく、歌の詩の内容や曲調の話がすべてで、税金だの貴族だのの話は上るはずもなかった。
そう、これこそが政治で見るべき者の姿なのだろう。
そしてこの姿を思いやりつつ施政を行う。
正しく王足る者の姿だろう。

「王、なにか何か感じましたか？」
「・・・ミューズ。おまえはなぜ私の居所が分かるのだ？」
「匂いを追っております」
「香水で紛らわせておるのだがな」
「愛しい者の香りは、世界を隔てても追いつきます」

・・・恐ろしい存在だな、我がミューズ。

「では、執務がお待ちですので、移動しますよ、王よ」
「それは終わっておろうが！？」
「いいえ、大切な使い魔を愛でるという重大任務が残っております。さぁ、存分に愛でなさい」
「すでに命令形か！？　我がミューズ！」

抵抗むなしく、我はミューズに首根っこを捕まれて連行された。
ああ、リカちゃんよ、助けておくれやリカちゃんよ。

「僕の歌をきけーーーーなのですぅ!!」

本日二回目のステージは、ロック調。
ファイヤーでボンバーな感じでガンガンいったところ、失神者続出になってしまったのです。
もちろん、吸血鬼がいるとか言う落ちじゃないですよ?
と言うか、視界の中に色々と亜人系の人たちもいるのですけど、違和感無く混じってるのです。

カオスなのですよ。

ボーカルチェンジでキュルケと変わったり、顔を真っ赤にして観客席で一緒に歌っていたアンリエッタを引っ張り込んだりして大騒ぎにして、熱狂の中で全10曲を歌いきったのです。
かなり好評で、熱狂で、猫の騎士団も警備そっちのけで大騒ぎし

てました。
うんうん、イケイケなのです。

どこで教わったのか、アンコールがコールされています。
どうしたもんかと、バックバンド状態の圭一に視線を送ると、彼はエレキギターをつま弾きます。

・・・これは「トライ・アゲイン」！

他の楽器隊もその演奏に合わせて準備完了。
ならば僕も合わせましょう。
歌い出しは静かに、ささやくように、絞り出すように・・・！

リフレインの部分の合唱を終え、再び楽器が絞られていきます。
枯れかけた声帯を一瞬にして回復させ、僕は歌いあげます。

その瞬間を、その思いを、その感情を。

そう、僕たちを遮る者は、何もないのだから!!

最後のアンコール。
手を止めてしまったのは警備ばかりじゃなかった。
襲撃者もまた歌に聞きほれ、そして手を止めてしまった。
周辺の観客を殺してパニックを起こそうとしたもの、魔法を爆発させて事故を起こそうとしたもの、観客の貴族の暗殺のきたもの、宗教を蔑ろにした扱いを糾弾にきたもの。
誰もが歌に引き込まれ、誰もが熱狂の一部になっていた。
最後には任務を忘れ、熱狂の一部として会場から移動した瞬間に我に帰れたというほどの忘我の時間だったのだ。

個々各々で心中が荒れる。
自責の念、自分への怒り、会場内の雰囲気の異常さへの恐怖・・・。
そして、再びあの時間を味わいたいと思う「渇望」。
そういう風に感じてしまっている自分への「疑念」。
まさか自分は洗脳されているのではないだろうかと、心底の恐怖を感じていた。
確かに彼らにとって、それは異教への洗礼であり、邪教への熱狂に思えるだろう。
事実彼らはそのように感じている。
それゆえに彼らは「それ」を認めることができなかった。
なにしろ、異教からの洗礼を「受け入れて」しまったということに相違無いのだから。
旧来の貴族一派関係は、その事実を受け入れれば「異端」であると自供しているようなものだ。故に「認めない」。
暗殺者たちは基本的に己の教義を持っている。ゆえに「邪教」を受け入れたことは「認められない」。
宗教家崩れのテロリストは、己の身の内に巌の如き「神」を宿す。
その存在が邪教に犯されたなど「あり得ない」ので、異教への熱狂

が存在したなど「認めることすらできない」。
そう、己の内の「熱狂」を、宗教に関わることなく、彼らは思考的に処理しなければならないのである。
ならば、とるべき手段は一つだろう。
いいや、一つの道しか許されていなかった。
ゆえに、その道を爆走する。

それは・・・・!!

「・・・いやー、フレデリカ様、さいこー」「もえるよなぁ、あれ」
「あれって、男の娘っていうんだっけ?」
「本人は嫌がってるらしいけどな」
「似合いすぎだろ、その表現」
「・・・男でもいいかもって気になるよな?」
「でもそれって、衆道的な意味じゃないんだよな~」
「「「「「そうそうそう」」」」」

すでに彼らの根本は砕かれている。
しかし、それを認めることができない彼らは、外部への接触インターフェイスまで砕かれた。
言葉、思考、表現、表情。
およそ、他人が他人を認識する際の指標の多くが、歌を聴く前と一転してしまったのだ。

これを見て、感じて、そして理解した人たちは、恐怖で身を震わせただろう。
しかし本人たちは「認められない」。

「いやー、毎日これやってくれんかなぁ・・・・・」
「「「「同意、同意」」」」」

知るものが見れば、こう感じただろう。

「転んだばかりの『オタク』集団」と。

近い意味では、お気に入りの繁華街で屯して、なにをすることもなくダベるのが楽しいという女子高生というのも近似表現であると思う。

双方からは「あいつらと一緒にするな」という見解もあるだろうが、固有結界を展開しつつ自分たちの世界に溺れている姿は、同一と言わないまでも近似形状であると・・・

閑話休題

そんな「転びたて」な様子は、湖歌謡祭会場の随所に見受けられる姿で、それを普通に認められるような雰囲気のせいで会場自体が異世界のようになっていた。

それはまるで、魔法学校の「学園祭」みたいな盛り上がりにも思えたとか。

平民も貴族も亜人も関係なしで、大好きな歌い手や初めて知った歌自慢の貴族や王族の声を賛否したり、歌詞の内容が難しいとか楽しいとか意見を交わしたり。

フレデリカ＝ベルンカステル＝ド＝リステナーデがハルケギニア

にまき散らした物語の中のような、まさに、ファンタジーの出来事であった。

第六十六話「湖歌謡際」が生まれて３（後書き）

演歌はサトコに譲ったため、リカちゃんはエレキ中心になりました。

※今回の元ネタ

「僕の歌をきけーーーーなのですぅ！！」・・・熱気なバサラな人

ファイヤーでボンバー　・・・　マクロスで七なバンド

ボーカルチェンジでキュルケと変わったり　・・・　キュルケはミ

レ○ヌということで

トライ・アゲイン　・・・　セブンＴＶの最終話で流れた曲

第六十七話　『聖人（セイント）ビシャーズの生涯』が生まれて（前書き）

りかちゃま以外が大暴れ、な回です

第六十七話　『聖人（セイント）ビシャーズの生涯』が生まれて

ラストステージを終え、我が子フレデリカは泥のように眠っている。

何事も全力という姿は微笑ましいが、「フレデリカ＝ベルンカステル」の名前にふさわしいかといえば疑問がないわけでもない。

我が子、フレデリカの名は、祖母「ナンナ＝アリステア」が自称していた名前からとられたものだった。

我が祖母、アンナ＝アリステアは、生まれたときは私と同じ髪と目の色だったそうだが、魔法が使えるようになったその日から自分の見た目を変えたそうだ。

腰まで届く黒髪と、光すら吸い込むような黒い瞳に。

そして、こう宣言した。

「私の名は『フレデリカ＝ベルンカステル』大ベルンカステル卿と呼ぶように」

祖母は表だった活躍はしなかったことになっている。

ただ、何かと無謀な侵略をしようとする貴族が一晩のうちにいな

くなったり、リステナーデの平民に無体を行う貴族がその日のうちに消えたり・・・実に立証不能な怪事を起こしていると見られていることから、魔女と呼ばれていた。
そんな祖母に弟子入りした数少ない貴族の一人が「カリーヌ」。
我が師匠だ。

今でも当時を思い出すと震えが来るという特訓を繰り返し、ハルケギニア1といわれる攻撃的魔法使いになった。

そんな祖母も我が息子が生まれる数年前に息を引き取った。
そのとき、こんなことをいった。

「いずれ、私の名と力を継ぐものが現れる。そのときに我が名を名付けよ」

まさか自分の息子が祖母にそっくりで生まれるとは思わなかったけど。
とはいえ、幼い頃の我が息子は愛らしく、美しかった。
何度も去勢しようかと思ったけど、そのたびに気配を察知して逃げ出す姿もかわいかった。
このままではいずれ「やって」しまうと思った私は、最後の手段として師匠に預けたのだけれども、これがまた成功なのか失敗なのか。
恐ろしいまでに祖母に似た我が子を、愛憎半分で叩きのめす師匠

は、家族から見ても常軌を逸している様子だったとか。
とまれ、その狂気のおかげで息子は信じられないほどの実力者となったのだから、なにが幸いするかわからないものだ。

「・・・奥様、今、数年ぶりの好機では？」
「むりむり、そういう風に思うと・・・」

気づけば気配が代わって寝たままの息子。
たぶん、偏在と入れ替わったのでしょう。

「というわけで、着替えには関係ないわよね？偏在でも」
「・・・卓越でございます、奥様」

・・・あ、偏在消えた。

あー、あぶねーなのです！
やっぱ、母上は、去勢の機会を虎視眈々と寝らっていたのですね。
まったく、恐ろしいのです。

ヴァリエールに行くまでに、散々たくまれていたと盲信していましたが、マジだったとは。
恐ろしい話なのです。

「なにがそんなに恐ろしいの？」

逃げ込んだ部屋にいたルイズに経緯を話すと、結構呆れ顔。
実の親がそんな事するワケないじゃない、という顔ですが、うちの母上をなめてはいけないのです。
予想の斜め上をいく母、それこそ母上なのです。
というか、お宅の母親も大概なのですよ？

「・・・悪かったわ、フレデリカ。たしかに斜め上ね」

うんうん、ルイズなら納得してくれると思っていたのです。

「でさ、そろそろトリの時間よ？」
「うえぇ、まだ歌わされるんですか？」
「ド演歌でいってほしいって」

曲目を見て、思わず苦笑い。

「演歌はトリステイン心って、圭一さんは言ってたけど？」
「何でもありですね、圭一」

カーテンコール。
三日間にわたった歌謡祭は、今終わろうとしてる。
司会役の圭ちゃんが牽引して、参加歌手全員で合唱して、そして会場すべてに視覚を共有して感動を盛り上げる。
つうか、圭ちゃん。

ＳＡＲＡＩはやめとけ、ねらいすぎだから。

「楽しかった時間はもう過ぎ去ったのです」

梨花ちゃんの台詞に悲鳴っぽい声が響く。

「でも、また、季節が巡れば、また、時が巡れば、また平和な時間にやってくるのです！！」

わーーーー！と歓声が響きわたる。

「まってろ、水の精霊、待ってろ、ラグドリアン湖、まってろ、みんなーーーー！！！」

もう、音の衝撃が周辺から押し寄せる。

「帰ってくるのです！！」

ばーん、と腕を振りあげた梨花ちゃんにあわせて、盛大な花火が打ち上げられる。

いや、花火のような効果の魔法が打ち上げられた。

無駄に高性能よね、猫の騎士団。

バックスタッフも歌手も伴奏もみんなで腕を振りあげる。

あわせて拍手が津波のように押し寄せた。

ああ、これで終わってしまう。

ああ、でも、また始めることが出来る。

そう、私たちには遮るものなどないのだから。

視線を圭ちゃんに送ると、すでにギターを構えている。
伴奏者のみなさんも、ルイズさんも、タバサさんも準備完了。
流れるような、絞り出すようなギターを感じて、梨花ちゃんもマイクを手に取った。
トライアゲイン。
また始めよう。

収益を確認してみたけど、恐ろしい事がわかった。
黒字なんて言葉が似合わないほどの収益だった。
どのぐらいスゴいかと言えば、うちの国、ガリアの国家予算の半分を叩き出した。
純利益で、だ。
どこからそんな金が集まったんだ、と背筋が寒くなったものだった。
もちろん、関係者割り当てやら、会場設営費などもスゴい金額になったし、期間限定の航空交通機関の出費も恐ろしいものだったけど、恐ろしいものだったけど、でも、黒字。
泣けるほどの、黒字。
モンモランシ家では、たぶん、数年分の収益があっただろう事は間違いないだろう。
リステナーデもスゴかろうと思ったんだけど、実は平民用施設や

ら低収入者用の炊き出しに出費していて収益はトントンだったそうだ。

まったく、そんなの総合予算でやればいいものを、と文句を言ったんだけど・・・

「これは趣味なのです。趣味には出費がつきものなのですよ？　イザベラ様」

はぁ、お人好しだよ、ほんと。

まぁ、そんな所も好ましいんだけどね。

そんなわけで、リステナーデ支援は私の趣味だ。文句は言わせないからね？

しかし、このガリア割り当てはどうしたものかね？

正直に公表すれば、ロマリアが沸いてくるだろうし。

つうか、トリステイン目指して、ロマリア外交官やら司教やらが大挙で移動しているらしい。

どうやら、今回の収益で王家の持つ借金を返済したことが知られたため、これ幸いとおこぼれに預かろうという集団らしい。

ガリアは国境を接している関係で軍事的な溝が深い。

だから、さすがにウチにはきてないけど、よほど嘗められてるみたいね、トリステイン。

というか、こんなの周りの貴族が許すはずないでしょうに。

本気でなに考えてるのかしら、ロマリア。

湖畔歌謡祭も終わって、一月もした頃、母上から抗議の竜便が届いたのです。
わざわざ手紙を竜便で。
ドンだけ緊急なんだろうと思ったら、中身を読んで倒れたのです。

「どうした、梨花ちゃん」

藤子不二夫状態で執筆を分担する最強の男、前原圭一の目の前に手紙を見せると、圭一もガックリです。

学院敷地内に共同執筆用に新しく建設したV&R出版寮の一室は、僕と圭一の仕事場になっているのですが、ほかの部屋は周囲の女性たちに確保されてしまったのです。
というか女子率高過ぎなのです。

それはさておき、問題の手紙の前でガックリしている男二人をみて、ルイズ・キュルケ・タバサの三人が寄ってきました。
なんじゃろべ、と読む三人でしたが、読み切ったところでルイズが手紙を窓から捨てて、キュルケが燃やし、タバサが灰を風で散らしたのです。
気持ちは分かるのですが。

「まったく、ロマリア、やっぱ潰すべきじゃないかしら?」
「賛成〜、つうか、坊主皆殺しね」
「・・・非生産階級でもっともいらない存在」

過激な三魔女はおいといて、確かにムカつくのですよ。
なにしろ、

『もうかってんだろ?金よこせよ。　断ったら異端審問だぜ?』

という意味の手紙で僕の部屋が埋まったそうです。
早く処理しなさい、臭くてたまらないという母上からの抗議なのでした。
加えて、先日王宮からも

『「乞食坊主が来週にやってきます。対応の最前線にたちなさい」』

という有り難くない手紙が御師匠様の署名できたのですから。
正直に言えばですね、そのまま潰すことが可能なのですよ、ロマリアなんて国は。
でも、圭一の言うとおり、生活と精神に根ざした宗教を駆逐することは自殺行為なのです。
だから潰すことは不可能。
でも、目障りすぎるのですよ。

「どうするの、フレデリカ。追い返すことは可能だけど、全軍で追い立てながら帰した方がいいわよ?」

実に戦略的に正しい発言なのです、キュルケ。

「ジョセやんに密使を送れば、ほぼ一年以内に潰せる。来年の湖畔祭りに間に合う」

・・・動機が不純なのですよ、タバサ。

「とりあえず、姫様は事を構えるつもりはないんでしょ?」

いいところに目を付けました、ルイズ。
そうなのです、はじめっから潰すつもりならば、御師匠様を使者

に立たせるのです。
逆に僕を立たせるという事は、猫の騎士団を前面に押し出したという事に相違無いのです。

うんうん、ルイズは成長したのですねぇ。

「で、梨花ちゃん。結局どうする？」
「とりあえず、夢も希望もない現代劇で歓迎するのです」

おおざっぱな脚本を説明すると、配役は速攻で決まった。

『聖人（セイント）ビシャーズの生涯』

完全創作のそれは、二つの場面が切り替えられて進む。
一つは、ビシャーズが泥をすすりながらも貴族に打ち叩かれながらも、ぼろを引きずってでも寄付を募り、そして恵まれない人々のために生かそうと活躍する内容。
そしてもう一つは、ただひたすらに贅沢な服ときつつ贅沢な食事をし、そして酒を煽る男を演じ続けている。
物語の佳境で、ビシャーズは打ち叩かれたけがの後遺症で立ち上がることすら出来なくなってしまった。
涙ながらに彼は神に祈り謝罪しする。

己のふがいなさ、己の不出来さを。

最後に集めた銀貨を、かれは教会に寄付するところで、息を引き取る。

そして場面は入れ替わる。

ひたすら食べていた男が一つの報告を受けた。

そして眉をひそめて言う。

「ビシャーズ、そこそこ使えたが死んだか。不信心ものめ」

ぺっと唾を吐き、男は壁に掛けてあった司教服を着て舞台から消えた。

怒号というか、怒声が会場に響いた。

舞台をみていたロマリア関係者ではなく、トリステイン市民たちの声であった。

なんてあり得ない姿！　ロマリアはそんな存在じゃない！　彼らは清貧であるから、そんなわけないじゃないか！！　と恐ろしい勢いだった。

もちろん、役者たちは涙目、なわけがない。

これはフィクションで、こんな宗教関係者がいるわけがない、ブラックジョークであることを宣言し、脚本を書いた僕が、舞台中央

で謝った。
これは、司教服というシンボルを使っていますが、支配する側の横暴を描いたものです、と。
どうにか納得した市民たちのまえで、ロマリア関係者は内心涙目だった。
そりゃそうだ。
この段階で「お布施」をセビることなどできるはずがないのだから。
恰幅のいいからだ、豪華な司教服、どれも食事をし続けた役者よりも「上」だったから。
フレデリカ＝ベルンカステル＝ド＝リステナーデからの正式な謝罪を受け、謝罪文まで引き出せたが、それを盾にすることは生涯出来ないだろう。
その気を起こせば、ふたたびこの演目が上映されるのだ。
恐ろしくも悔しい事実であった。
こと、こうなっては演技を誉めるほか無い。
そして、何の成果も無く、彼らは引き上げるほか無いのだ。
血の涙を流しつつトリステインを後にするロマリア使節団であったが、帰国して再びどん底に落とされた。
なにしろ架空の聖人ビシャーズが、偉大なる存在として教会が認めたからだ。
加え、『聖人（セイント）ビシャーズの生涯』が出版されることとなり、その上映をみたという事で教皇に召集され、事細かに状況を聴取され・・・

一月後には全員自殺していた。

あまりのことにロマリア国内でも騒然とした空気になったが、司教や異端審問官たちは背筋を寒くした。

トリステインとリステナーデに手を出すな。

しばらくの標語になるだろう。

おまけ

「ちなみに、聖人（セイント）ビシャーズって誰がモデルなのかな、かな？」

「・・・秘密なのですよ、ニパー」

答え　劇場で見ていたところ、今の境遇とあまりにも重なり、号泣で前が見えない某エルフ男性

第六十七話　『聖人（セイント）ビシャーズの生涯』が生まれて（後書き）

えー、祖母は何者か、なんていう話が盛り上がる前に・・・

転生者かもしれませんし、ほんものかもしれません。

えへへｗ

第六十八話　「最大の危機」が生まれて（前書き）

割と、まじで危機だと感じているフレデリカなのです

第六十八話　「最大の危機」が生まれて

母上の不機嫌の正体判明なのです。

なんと、母上、妊娠していて情緒不安定なのでした。

「梨花の妹ですかぁ、たのしみなのですぅ！」

ひょいひょい飛び回る羽入だったけど、父上め、よくぞやってくれやがったのです。

母上妊娠の報を聞き、御師匠様が三日に一度は魔法探査にやって来るというのですよ。

その際には「男子になれ～男子になれ～」とか呟いているらしいのです。

・・・もしやのエンドフラグなのですかぁ！？

「梨花ちゃん、がんば」

「そこは助けにくるところなのですよ、圭一！！」

「いやー、ほら、どんな子供が産まれても、ラ・ヴァリエールフラグは折れないんだろ？」

圭一の一言で、視界のはじっこで手招きをしてるカトレア姉様とルイズが見えるのに気づいたのです。

なぜでしょう、背筋が寒すぎです。

「大丈夫よ、フレデリカ。おなかの子供の性別は、竜便で私たちのところにくる話になってるから」
「そうよ、フレデリカ。ちーねえさまと私とタバサでいやしてあげるわよ？」
「決定事項、運命決定」

って、さすがタバサ、さっきまで影も形もなかったくせに！！

「面白そうだから私もセットにしない？」

キュルケ、黙るのです。

「というか、なんでそんなに男の子が欲しいの、カリーヌ様って」
「魅ぃちゃん。あのね、リカちゃん以外の男子が生まれれば、リステナーデの跡取りにもできるから、ラ・ヴァリエールにゲットスルーするていう目的なんだよ、だよ」
「うっわー、あの伝説を越えた反則に目を付けられてんだ、リカちゃん」
「すでに予約にいってるみたい」
「へぇ・・・・」

って、今更の話をしてますね、魅ぃ、レナ。

「・・・あれ？　羽入ちゃん」
「なんですか、圭一」
「さっき、妹って言ってなかった？」
「はい、妹って言っていたのですよ」

は、はにゅーーーーーー！

「どういうことなのですか、それ！？」
「はいなのです。梨花の次に生まれるのは妹なのです。これは神の決定なのですよ」

・・・まじ？
まじセーフ？

「妹が何故セーフなのかは知らないですが、妹なのは決定なのですよ？」

やったーーーー！！！
これで入り婿コースが消えたぁ！

思わず汗だくになった自分の体を抱きしめてしまったのです。

「へぇ、そういうのって解るの？　羽入」
「もちろんなのですよ、ルイズ」
「じゃぁ、私とフレデリカの子供は？」
「カトレアと梨花の第一子は男の子なのです。あとは三人まで女の子なのです」

ぶーーーーー。
思わず、吹いてしまったのです。

「じゃ、じゃぁ、わたしとフレデリカは！？」
「ルイズとは初めは女の子で、あとはずっと男の子なのです」

羽入ぅぅぅぅぅ！！

思わずジャンピングヒールキックをかまして、ストンピング連打

で黙らせたのです。

「恥ずかしい質問禁止なのです！！」

「・・・私との子供は？」

「・・・ふ、双子が二連続なのです・・・」

「まだ言うかぁ！！！！！」

最終手段の調教キムチを流し込んだところで、やっと悶絶した。

このぉ、手こずらせおって、なのです。

「あーあ、おじさんと圭ちゃんのも聞きたかったのに」

「梨花ちゃーん、羽入ちゃん復活したら、レナたちも聞きたいから息の根止めないでね？」

・・・僕のことは喋らせないですよ？

「「うんうん、わかってるぅ～」」

にっこり微笑む二人は、羽入を引きずって消えていったのです。

いやー、さすが梨花ちゃんの使い魔。

斜め上に行くね。

復活した羽入ちゃんを懐柔して、乙女占いと称した小屋を造った

ら、その明確な答えに大人気。
気になる男性との結婚は上手くいくか、子供はどんな風に生まれるかなんかを「ズバズバ」教えてくれるものだから、長蛇の列になってしまった。
ちなみに悟史と妹は、男子・男子・女子双子、だそうだ。

その話は竜便で手紙にしたので、反応はそのうち届くだろう。

お布施は甘いお菓子でＯＫ、とされているので、本当に山のようなお菓子が集まっている。

この占いの妙は、結婚する目がない場合は「出産０」で答えられるところ。
まぁ、結婚しても出産０ならやめた方がいいし。

つまり、そういう縁も見られるということらしい。
で、目の前のモンモランシーさん。
ギーシュ殿あいてだと、最大出産人数が２０人。梨花ちゃん相手だと０人。
なんだか可哀想になってきた。

「貧乏人の子沢山なのです」
「うわーーーーーん！！」

泣きながら駆けていくのだった。
羽入ちゃん、正直すぎ。

まぁ、圭ちゃんとの可能性があるからおじさんもレナも冷静なんだろうけど。
沙都子は圭ちゃんと出産関係にはなれなかった模様。

逆に梨花ちゃんとの縁があるみたい。
むー、どう判断したらいいんだろう。

「やっぱり、あれかな、かな？」
「前の世界の同棲生活の影響だと思うのです」

ワクテカしてるレナと羽入ちゃんはさておき、まぁ、それもありかな、とは思う。
梨花ちゃんは、爵位は男爵継承者だけど、階位は上がることが決定しているし、王宮でも国政に関わることが望まれているわけで。
というか、梨花ちゃんが摂政でいいじゃん、と言ったら、その瞬間に窓からお姫様が飛び込んできて大騒ぎになったもんなぁ。

あのダイブがあったら、姫の行幸と聞いて窓に身構える気持ちが分かるよ、ほんと。

で

「実際のところさ、年齢的にもつきあい的にも梨花ちゃんとルイズちゃんはわかるけど、あのカトレアさん、マジなの？」
「マジもマジ。おおまじなのです」

羽入ちゃん曰く、カトレアさんにとって、病気療養生活の中で唯一の灯火ともいえる存在が梨花ちゃんであり、病気を治したのも、その後の面倒を見てくれたのも梨花ちゃん。
家族の受けもいいし、気むずかしい母親をも翻弄できる有望な貴族。
健康になったからと言うことですり寄ってきた貴族（バカ）なんか比べられないほどの存在だって。

「んー、そりゃ、仕方ないかな、かな」
「あー、まじ、白馬の王子様じゃん」
「そうなのです。だから逆に梨花もその流れは仕方ないと思っているみたいなのです」

でも、入り婿はいや、と？

「ほら、ラ・ヴァリエール本宅に引っ張られると、朝な昼な夕な夜な夜なで大修行の日々になること請け合いなのです」
「あー、そりゃ、いやかも」

あの対軍兵器実験が毎日？
無理無理無理。

うちの領地まであの訓練の噂は聞こえてきてたし。
というか、本気で兵器実験だと思ってたし。
うちのアル閣下も、実験詳細の情報を集めて「特訓」だって聞いても、欺瞞情報だって確信してたし。

てかさ

「梨花ちゃんって、カリーヌ様超えてない？」

あんだけチートな実力だ。
ふつうのスクエアじゃ太刀打ちできないっしょ、ふつう。

「実力は超えてるのです。でも、戦略で一歩及ばないのです」
「カリーヌ様って、どんだけよ」
「想像の及ばぬ、なのです」

そんな存在と毎日寝起きは、さすがにいやだよねぇ・・・・。

「あのね、羽入ちゃん」
「なんですか、レナ」

「梨花ちゃんとこの第三子って・・・・・」
「聞かないことが肝要なのです」

第六十八話　「最大の危機」が生まれて（後書き）

羽生に無駄能力判明！

でも、貴族社会でお見合いなんて話になったら、本気で引っ張りだこな能力だったりします。

第一子が男子、もしくは、二子以降に必ず男子が生まれると解れば、お嫁さんの責任も軽いですし。

リステナーデ家の第二子は女子で決定ですが、どんな子かは不明。
たのしみなのですよ～ｗ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2300r/

フレデリカとゼロ魔

2011年11月6日02時03分発行